

2019 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—



2020 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

本報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した令和元年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果を取りまとめたものです。この調査は、関西大学総合情報学部で開講している「社会調査実習」(2019 年度)の授業の一環として行われているもので、当授業の受講生が、調査票の設計からデータの入力作業まで、調査全体に大きく関わっています。たとえば、春学期には、受講生に各自の関心から調査テーマを設定してもらった上で、受講生の手で調査票の設計を進めます。また、秋学期には、返送された調査票のデータの入力とその分析、そして最終報告書の執筆まで行ってもらうことで、一年を通じて社会調査の一連の過程を経験することになります。

このような背景から、例年、この調査では、大学生らしい独創的な調査テーマが選ばれる特長があります。今回の調査でも、災害に対する備え、キャッシュレス決済、高齢運転者による事故、高齢者雇用、結婚観の変化といった社会的に注目の集まっているものから、お祭り、ご近所づきあい、家族・友人の環境行動、幼少期の父親の家事参加といった身の回りの体験に根差したものまで、若者たちの鋭敏な問題関心を映し出したテーマが並びました。これらの調査結果は、単に一地域の市民調査という枠を超えて、学術的にも興味深い知見を提供してくれるものと言えます。ぜひ、広く読者の皆様の目に触れることを願っております。

本調査の実施は今回で 9 回目を数えます。過去の 8 回の調査では、調査票の回収率が 60% 前後を推移しているところですが、今回も関係各位の皆さまのご協力の下で、58.6%という非常に高い水準の回収率を達成できました。まず、関西大学総合情報学部の松本渉先生には、調査の準備から報告書の取りまとめの段階まで、的確で細かなご助言によって常にプロジェクトを正しい方向に導いて頂きました。本調査を無事に終えることができたのは、松本先生のご尽力によるものに他なりません。また、ティーチング・アシスタントの高橋えりさん、山本明さんには、特に受講生に寄り添った立場から、授業の円滑な進行を助けて頂きました。

「社会調査実習」の講義の内容は、調査票の設計技術から、サンプリングの方法、調査データの管理と分析手法まで、多岐に渡ります。また、実際に大規模な郵送調査を実施する都合上、決められた期間内に、調査に伴う膨大な作業に取り組んでもらう必要があります。受講生の皆さんには、このような途方もない課題に対して、最後まで粘り強く取り組んでもらいました。この報告書は、受講生の皆さんの努力によって上梓されるものです。

最後に、本調査の実施にあたっては、高槻市市民生活部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さまに多大なご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。また何より、本調査にご協力頂きました高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2020 年 3 月

関西大学総合情報学部 准教授 築山 宏樹

目次

はじめに		i
第 1 章	調査の概要	築山宏樹・松本渉 1
第 2 章	調査結果の概要	高橋えり・山本明 8
第 3 章	地域の祭りへの参加の要因	中島 由乃 157
第 4 章	ご近所づきあいの程度と定住意識の関連	中尾 幸平 162
第 5 章	リサイクルと周囲の人の環境行動の関連性	森井 健斗 168
第 6 章	災害に対する備えを行う要因	下道 未羽 173
第 7 章	結婚観と未婚率の関連	関根 夏月 182
第 8 章	娯楽を行う頻度と精神的ストレスの関係性	藤川 皓一朗 188
第 9 章	キャッシュレス決済の利用率	世古 麻鈴 194
第 10 章	高齢者雇用に関する意識	三浦 千聖 198
第 11 章	職業別による生活満足度の違いについて	松本 集 203
第 12 章	幼少期の父親の家事参加と性別役割分業意識の関連	三山 叡央 208
第 13 章	幼少期の選挙の記憶と投票参加の関連性	田所 紋佳 213
第 14 章	選挙カーとの接触頻度が有権者の投票意識に与える 影響について	谷 千尋 217
第 15 章	運転免許返納に対する意見はメディアの発信に影響 されるのか	成田 慎吾 222
第 16 章	死刑制度に対する賛否の要因	久保 紗也花 228
資料		233
予告はがき		235
調査票		237

第 1 章 調査の概要

築山 宏樹・松本 渉

1. 調査の概要とスケジュール

高槻市と関西大学による市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」は、2019(令和元)年 8 月から 9 月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、前期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、後期にはデータの打ち込み、データ作成、分析等が行われた(表 1)。

表 1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
前期	4/8	「社会調査実習」前期授業開講	高槻市と関西大学の 打ち合わせ(随時)
	4/15	基礎的・応用的な分析方法の習得	
	4/22～7/8	調査票の作成	
夏休み	7/31	調査票発送準備作業	サンプリング
	7/31～8/7		調査票印刷
	8/8		予告はがき発送
	8/26		
	8/29		調査票発送
	9/13		返送締切日
後期	9/23	「社会調査実習」後期授業開講	データクリーニング
	9/23～12/2	データの打ち込み・読み合わせ	
	12/3～12/8		
	12/9～12/23	応用的な分析方法の習得	速報版報告書執筆
	1/4	中間レポートの提出	
	1/20	最終授業(最終レポートの提出)	
	1/21～2/29		
			報告書執筆
			報告書編集

2. サンプリング

調査対象者：18歳以上85歳未満の高槻市民(1934年8月1日～2001年7月31日出生)

抽出名簿：住民基本台帳(2019(令和元)年7月31日現在)

標本抽出法：層化抽出法

(具体的な手順)

1. 2019(令和元)年6月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された12の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本2,000を各層に割り当てる(表2)。

表2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	令和元年6月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
18・19歳	3,583	3,328	6,911	25	24	49
20代	16,177	16,547	32,724	114	117	231
30代	18,986	19,292	38,278	134	136	270
40代	27,392	27,951	55,343	193	198	391
50代	21,769	22,455	44,224	154	158	312
60代	18,878	21,951	40,829	133	155	288
70代以上	28,936	36,178	65,114	204	255	459
合計	135,721	147,702	283,423	957	1,043	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の3日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限(「近日中に大きな茶封筒(ボールペン入り)が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の2点)にとどめた。今回は8月26日(月)に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、お盆が終わってから最初の木曜日である 2019(令和元)年 8 月 29 日(木)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、ラベンダー色(なお前年はもえぎ色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状(なし)

催促状の送付は行っていない。

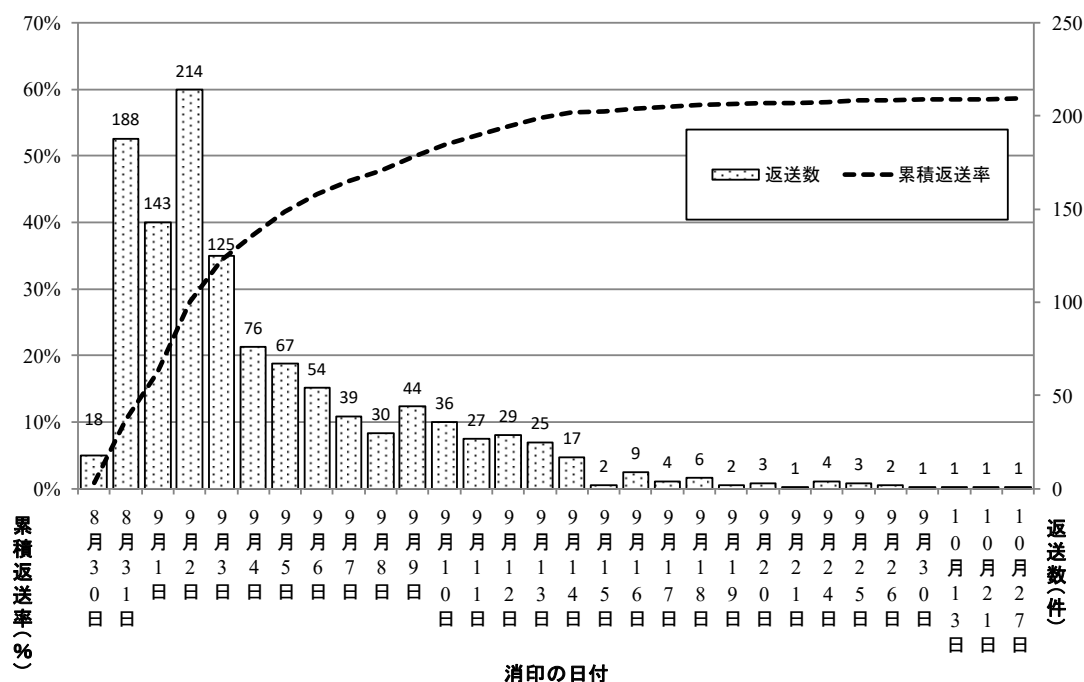
4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。

最も早い消印は翌 30 日(金)である。例年の調査と同様に、返送日の山が二つみられる。第 1 の山は、返送数 188 となった 8 月 31 日(土)であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第 2 の山は、返送数 214 という最大の返送数を記録した 9 月 2 日(月)である。調査票受領後にすぐにおとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえる。これに続く山は、2 回目の月曜日である 9 月 9 日(月)の返送数 44 であり、これは土日を利用した記入・返送によるものと考えられる。この返送のパターンはおおむね例年の調査と同様といえる。

累積返送率については、例年と同じく、調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 50% 台後半に達している。累積返送率のグラフ(図 1)が示しているように、回収期間後半に入ってもなおだらかに上昇を続け、受け取り締切日頃には返送率が 60% 弱を推移する結果になった。



(注1) 返送数とは、回答票の返送日ごとの件数(日付は消印による)

(注2) 累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値。

図 1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2. 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月13日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、10月27日(日)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,173件であったが、1件については記入状況から無効と判断し、最終的に有効な回答票数を1,172件、回収率を58.6%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	12	(0.6%)
	未返送	815	(40.8%)
	無効調査票	1	(0.1%)
	計	828	(41.4%)
2. 有効回答票		1,172	(58.6%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	100.0%

4.3. 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性50.6%、女性64.1%となり、女性の方が13%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で76.3%、60代で71.5%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代で35.1%、18・19歳で28.6%まで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

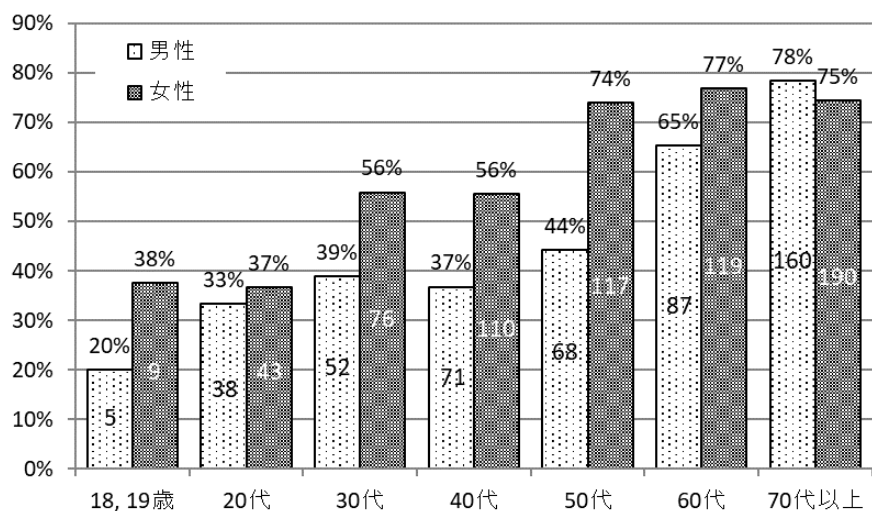
	男性	女性	不明	合計
回収標本	484	669	19	1,172
計画標本	957	1,043	—	2,000
回収率(%)	50.6%	64.1%	—	58.6%

(注)男女別の回収率の計算には、不明分19が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	18, 19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	14	81	130	181	185	206	350	25	1,172
計画標本	49	231	270	391	312	288	459	—	2,000
回収率(%)	28.6%	35.1%	48.1%	46.3%	59.3%	71.5%	76.3%	—	58.6%

(注)年齢別の回収率の計算には、不明分25が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。

(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代から40代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、60代以上の男性、女性といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布にあてはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、2019(令和元)年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。dfは、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。pは、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度dfから計算されている。

表6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	R1年 6月末人口	%
男性	18, 19歳	5	0.4%	3,583	1.3%
男性	20代	38	3.3%	16,177	5.7%
男性	30代	52	4.5%	18,986	6.7%
男性	40代	71	6.2%	27,392	9.7%
男性	50代	68	5.9%	21,769	7.7%
男性	60代	87	7.6%	18,878	6.7%
男性	70～84歳	160	14.0%	28,936	10.2%
女性	18, 19歳	9	0.8%	3,328	1.2%
女性	20代	43	3.8%	16,547	5.8%
女性	30代	76	6.6%	19,292	6.8%
女性	40代	110	9.6%	27,951	9.9%
女性	50代	117	10.2%	22,455	7.9%
女性	60代	119	10.4%	21,951	7.7%
女性	70～84歳	190	16.6%	36,178	12.8%
合計		1,145	100.0%	283,423	100.0%

(注1) 表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分27件が含まれていない。

(注2) 表右側のR1年6月末人口は、高槻市全体の人口である

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/m/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_r1/1562571862415.html) 参照。

(適合度検定) $\chi^2=102.9822$ 、 $df=13$ 、 $p=0.0000$

表7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	R1年6月末 世帯人員数別人口	%
1人	112	9.6%	59,471	16.9%
2人	394	33.6%	93,902	26.7%
3人	260	22.2%	79,242	22.5%
4人	238	20.3%	85,360	24.3%
5人	79	6.7%	27,530	7.8%
6人	19	1.6%	4,734	1.3%
7人	4	0.3%	1,092	0.3%
8人	1	0.1%	304	0.1%
9人	0	0.0%	63	0.0%
10人	0	0.0%	30	0.0%
11人以上	0	0.0%	33	0.0%
無回答	65	5.5%	—	—
合計	1,172	100.0%	351,761	100.0%

(注1) 表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/m/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_r1/1562571862415.html) から算出した。ただし、回収標本が18～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2=69.2435$ 、 $df=10$ 、 $p=0.0000$

第2章 調査結果の概要

高橋 えり・山本 明

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。回答者の性別は男性が484人で女性が669人であり女性の方が多い(図1)。年齢は70代が2割以上と多く、18歳、19歳と20代は1割未満と少ない(図2)。男女別に年齢を確認しても同様の傾向が見られる(図3)。

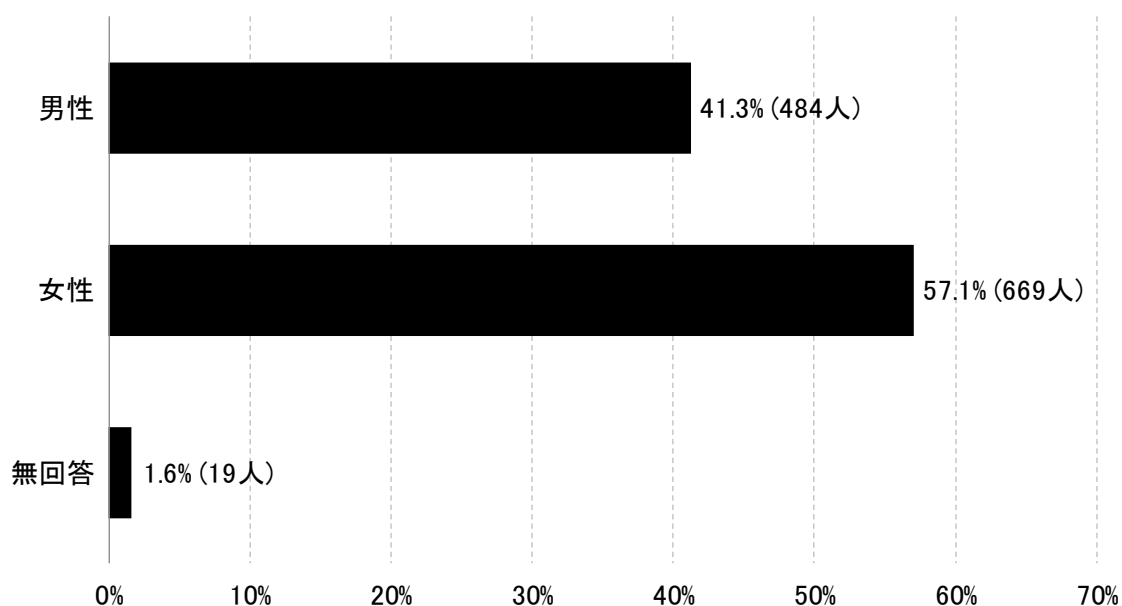


図1 Q55 性別

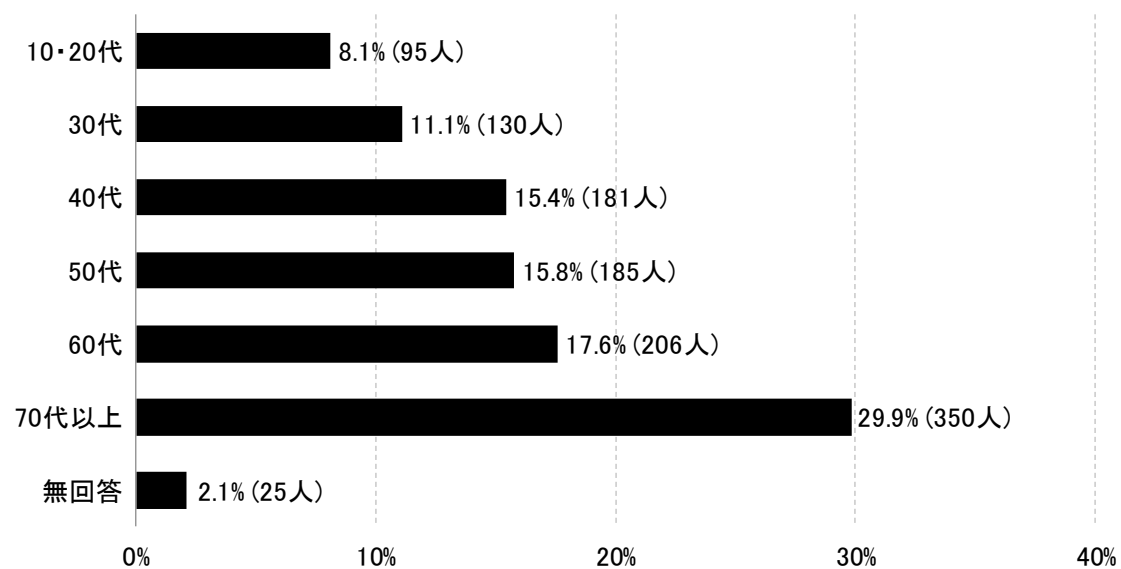


図 2 Q56 年齢

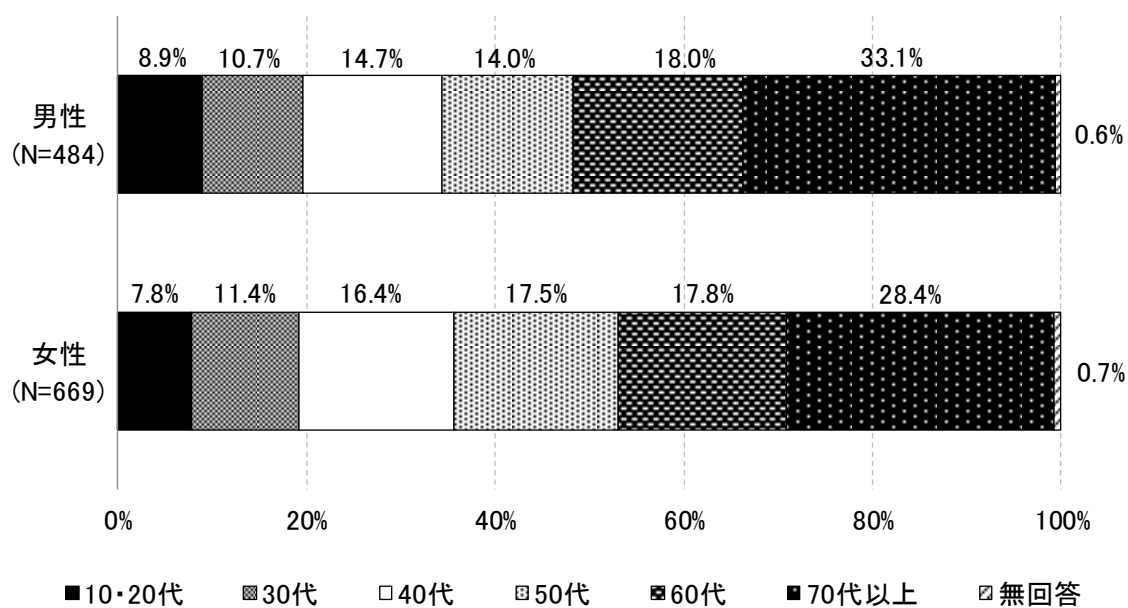


図 3 性別×年齢

以降、基本的には全ての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は 1,172 人である。性別・年齢の内訳については図 1 と図 2 を参照のこと。また、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧については本章の最後を参照のこと。

職業は、合計を見ると常時雇用者が 28.1%と最も多く、次いで無職が多い。男女別で見ると、男性は常時雇用者が 38.2%と最も多く、女性は臨時雇用、パート、アルバイトが 23.6%と最も多い。年代別で見ると、60代・70代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職が大きく増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、40代から 60代が 2割以上となっている（表 1）。

表 1 Q57 職業

		(%)									
		常時雇用 の勤め人	臨時雇用、 パート、 アルバイト	自営業主	自営業の 家族従業 者	経営者、 役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
男女別	合計 (N=1172)	28.1	16.8	3.8	1.4	2.7	13.1	3.2	27.4	0.4	3.1
	男性 (N=486)	38.2	8.1	6.8	1.2	4.8	0.0	3.9	35.3	0.2	1.4
	女性 (N=669)	21.1	23.6	1.6	1.5	1.3	22.9	2.7	22.4	0.6	2.2
年代別	10・20代 (N=95)	37.9	9.5	1.1	1.1	0.0	3.2	37.9	8.4	0.0	1.1
	30代 (N=130)	59.2	16.2	5.4	0.0	1.5	10.0	0.0	4.6	0.8	2.3
	40代 (N=181)	51.9	29.3	4.4	1.1	2.2	6.6	0.0	4.4	0.0	0.0
	50代 (N=185)	45.4	26.5	2.2	2.2	5.4	11.9	0.0	4.3	0.5	1.6
	60代 (N=206)	14.6	20.9	4.4	1.0	4.4	21.4	0.5	29.1	1.0	2.9
	70代以上 (N=350)	1.7	6.3	4.3	2.0	2.0	16.3	0.0	65.7	0.3	1.4

最終学歴は、男女別で見ると、男性が「大学（旧高専）・大学院」が 42.8%と最も多いのに対し、女性が 24.7%と男性よりも少ない。女性で最も多いのは「高校（または旧制中学など）」であり、32.6%である。また、「短大・高専（5年制）」は男性が 2.5%と最も少ないのに対して、女性が 19.3%と「高校（または旧制中学など）」や「大学（旧高専）・大学院」に次いで 3 番目の多さである。年代別で見ると、10・20代が「大学（旧高専）・大学院」が 60.0%であるが、年代が上がるごとに減少し、70代以上が 13.4%である。反対に、10・20代が「中学（旧小学校など）」と「高校（または旧制中学など）」の合計が 14.8%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上が 70.9%となっている（図 4）。

居住地域については昨年のおおり、単純集計のみを提示する。ここでの地区とは小学校の校区を参考にしている。各地区と該当小学校区は、檜田地区（檜田小学校）、高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校）、高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）、五領地区（五領・上牧小学校）、高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）、如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）、三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）である（図 5）。

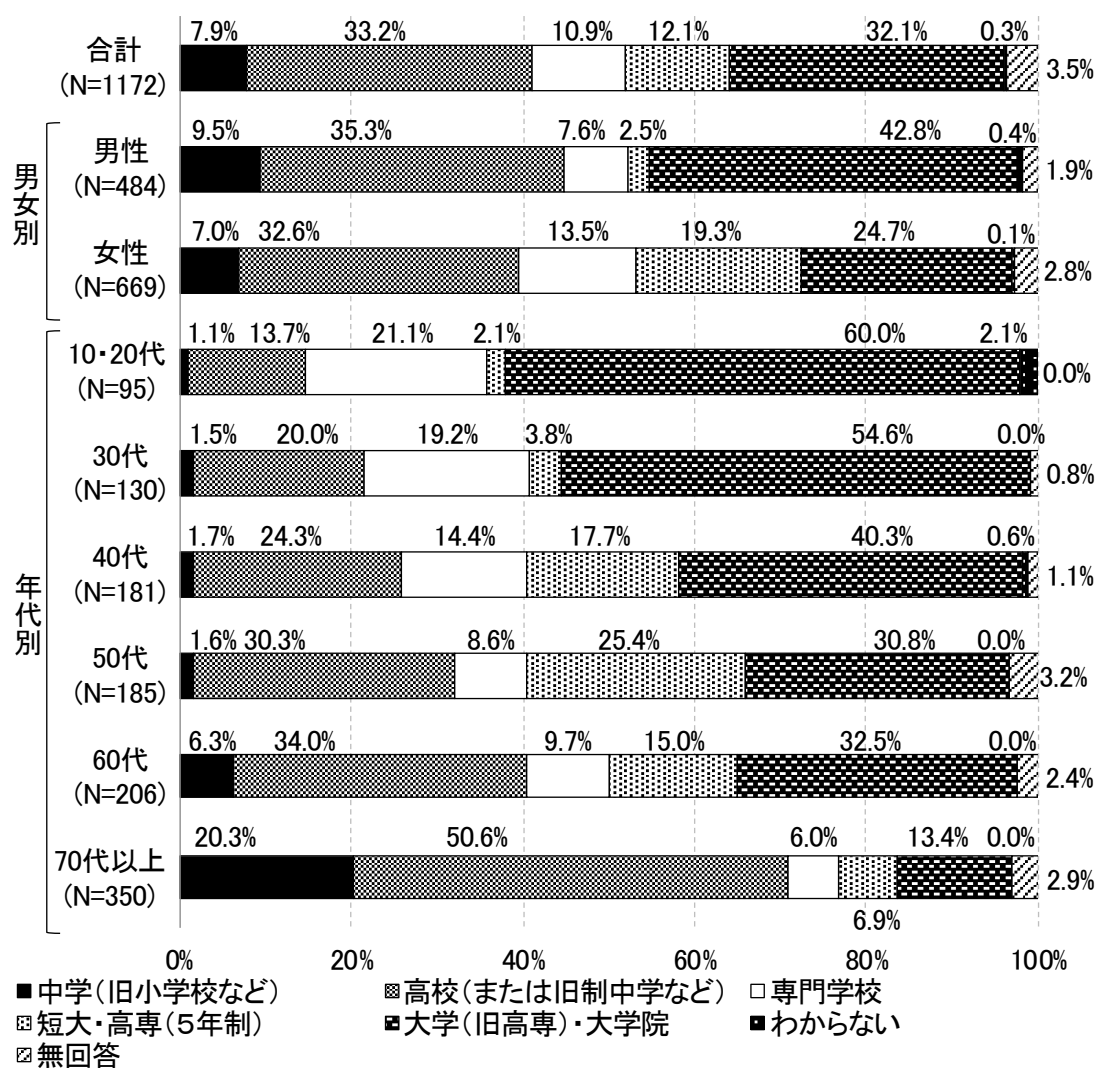


図 4 Q58 最終学歴

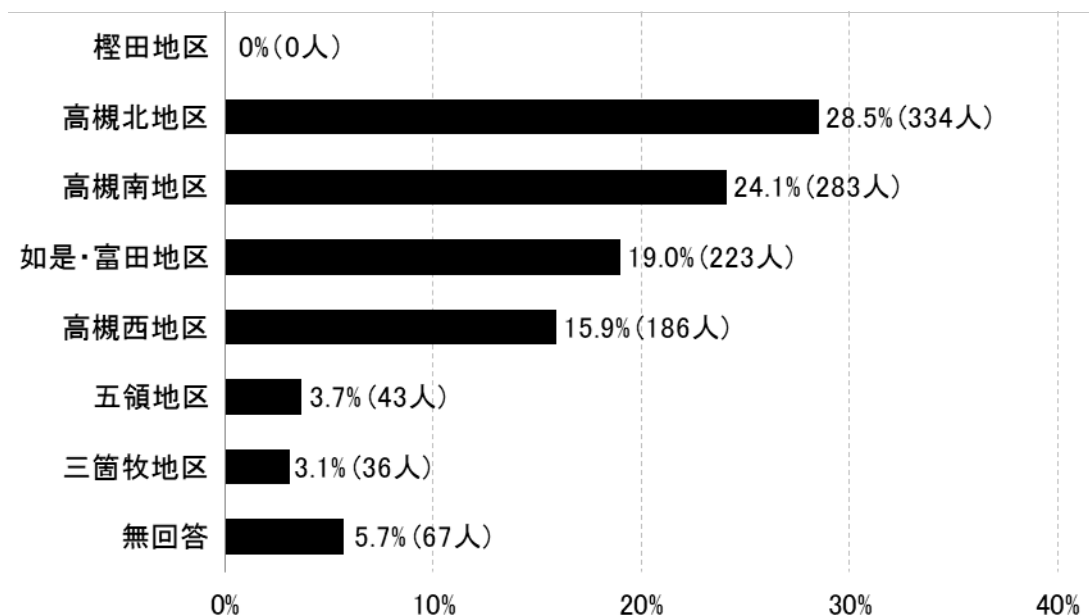


図 5 Q59 居住地域

高槻市内での居住年数に関して、全体の 8 割以上が 10 年以上市内に居住していることが分かる。年代別で見ると、10・20 代が「20 年以上 30 年未満」が 46.3%と最も多く、子どもころから市内に居住していることが分かる。70 代以上が「40 年以上 50 年未満」が 40.3%と最も多い。なお、大きな男女差は見られない（表 2）。

表 2 Q60 市内居住年数

		(%)									
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上	無回答
男女別	合計 (N=1172)	1.2	4.0	2.6	4.9	14.1	16	18.6	22.7	13.7	2.2
	男性 (N=484)	1.2	3.3	2.5	5.4	12.0	16.1	18.8	22.5	16.7	1.4
	女性 (N=669)	1.2	4.5	2.8	4.6	15.8	16.3	18.8	23.0	11.8	1.0
年代別	10・20代 (N=95)	4.2	12.6	7.4	3.2	25.3	46.3	0.0	0.0	0.0	1.1
	30代 (N=130)	4.6	10.0	9.2	12.3	15.4	14.6	33.1	0.0	0.0	0.8
	40代 (N=181)	1.1	5.5	3.3	9.9	28.7	14.4	13.3	22.1	0.6	1.1
	50代 (N=185)	0.0	3.2	1.6	3.8	18.4	25.9	14.6	11.9	18.9	1.6
	60代 (N=206)	0.5	1.5	0.5	4.4	7.3	11.2	29.1	27.2	17.0	1.5
	70代以上 (N=350)	0.3	0.9	0.6	1.1	5.4	7.7	17.7	40.3	25.4	0.6

市民の住居は、男女別・年代別のすべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅」よりも高い割合である。年代別で見ると、「一戸建て」の割合は、10・20代と30代が6割未満であるが、40代以上が6割以上である（図 6）。

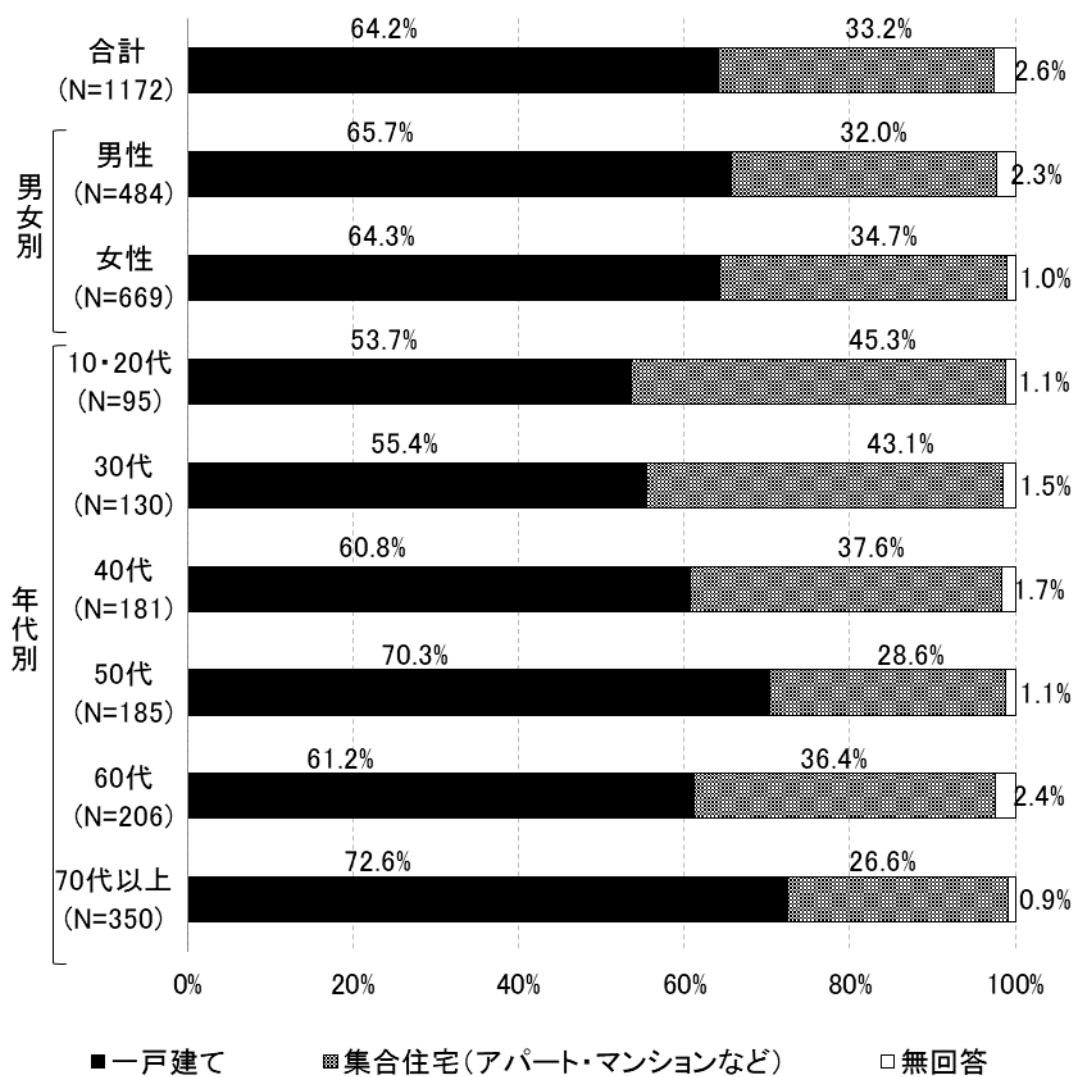


図 6 Q61 住居

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」が 6 割以上と最も高い割合である。50 代以上は 8 割以上が「持ち家」である。「民間の賃貸住宅」では、10・20 代が 29.5%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少しており、70 代以上で 5.7%になる。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」の割合は、70 代以上が 11.4%と最も高く、次いで 60 代の 7.3%である（図 7）。

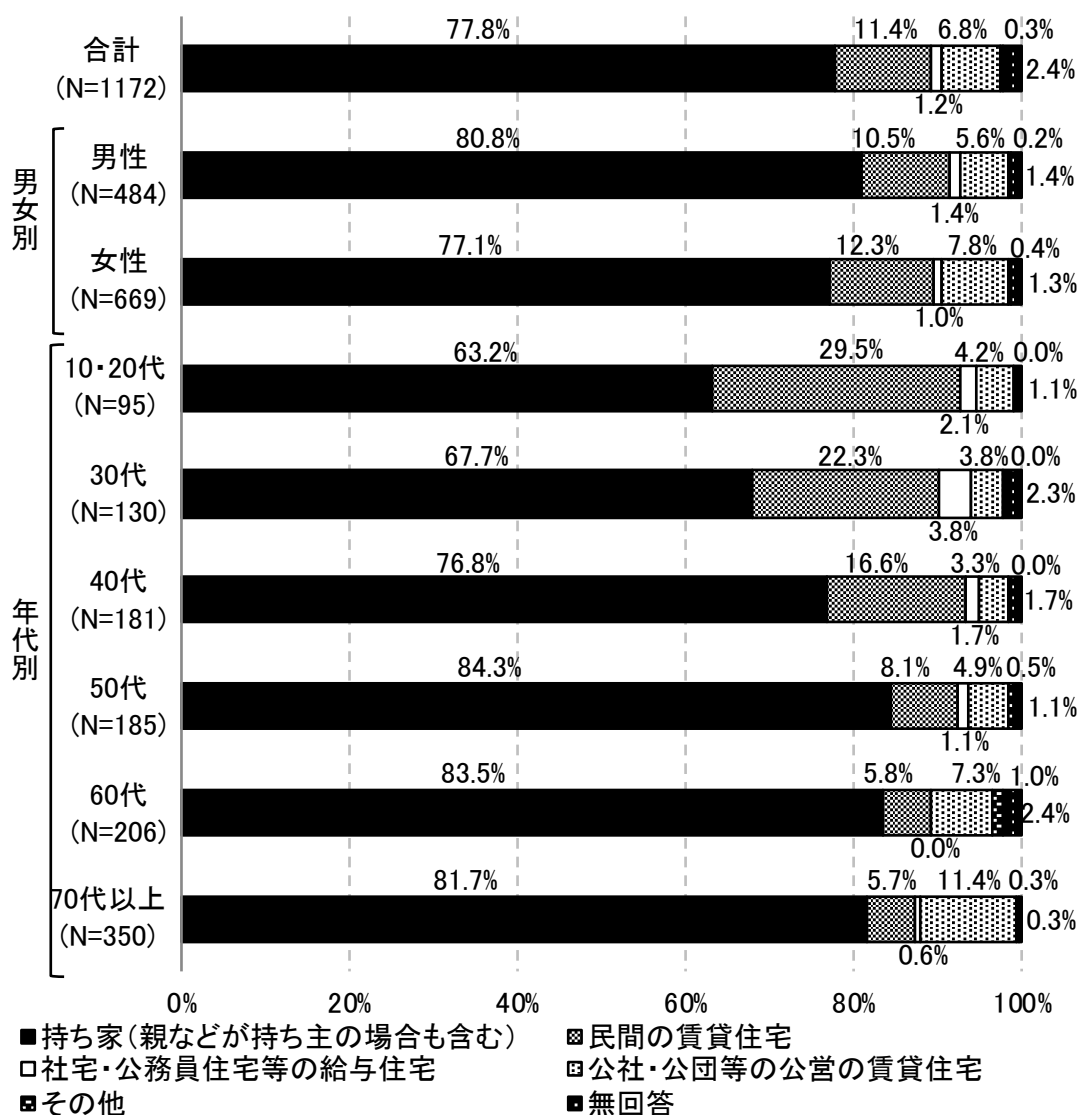


図 7 Q62 居住形態

婚姻状況に関して、男女別・年代別の30代以上の層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合を占める。10・20代は「未婚」の割合が7割以上である。男女別で見ると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で6.4%、女性で17.5%と、女性の方が11.1ポイント高い（図8）。

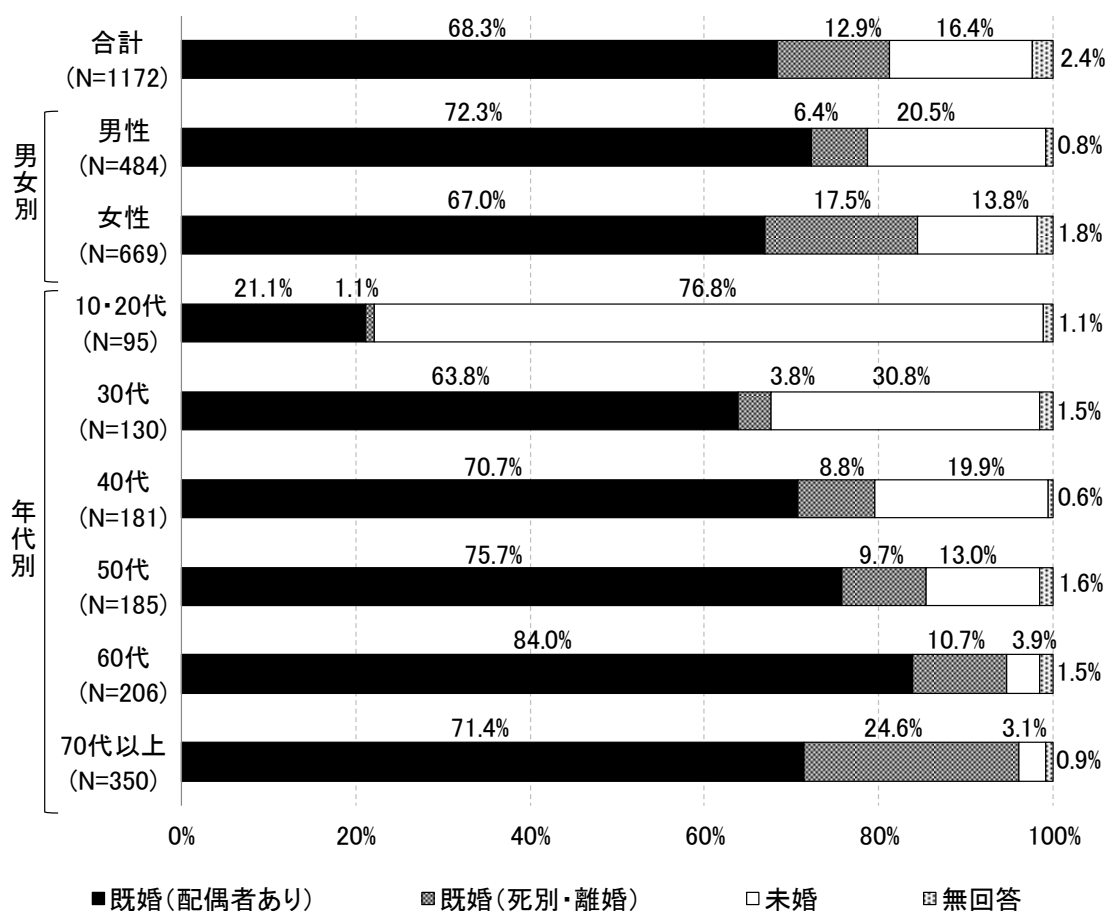


図8 Q63 婚姻状況

子どもの有無に関して、男女別の各層・年代別の30代以上の層で、「いる」と回答した人の割合が「いない」と回答した人の割合より高い。10・20代は「いない」割合が8割以上である。なお、女性の方が男性よりも8.2ポイント高い（図9）。

世帯人数に関して、その多くは2～4人世帯である。年代別で見ると、30代は4人世帯が最も多い。一方で10・20代と50代は3人世帯が最も多い。また、60代以上は2人世帯が5割以上を占めている（表3）。

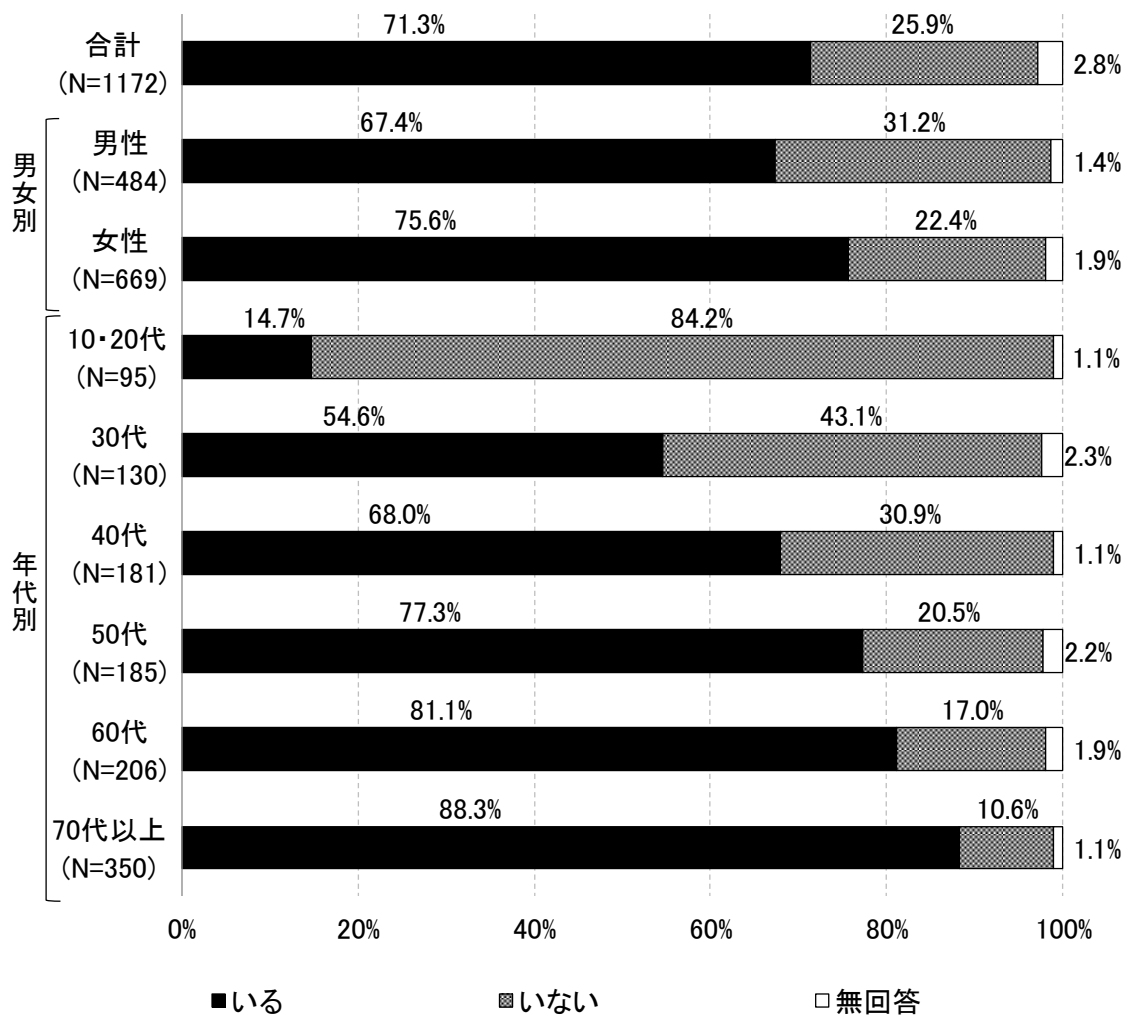


図9 Q64 子どもの有無

表 3 Q65 世帯人数

		(%)								
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	無回答
男女別	合計 (N=1172)	9.6	33.6	22.2	20.3	6.7	1.6	0.3	0.1	5.5
	男性 (N=484)	7.4	35.5	22.5	20.7	7.6	2.3	0.6	0.0	3.3
	女性 (N=669)	11.1	32.9	22.6	20.6	6.1	1.2	0.1	0.1	5.2
	10・20代 (N=95)	7.4	9.5	30.5	29.5	16.8	1.1	1.1	0.0	4.2
年代別	30代 (N=130)	6.9	13.8	24.6	36.9	10.8	0.8	0.0	0.0	6.2
	40代 (N=181)	5.5	19.9	22.7	35.9	6.6	3.3	0.6	0.0	5.5
	50代 (N=185)	3.2	23.8	31.9	25.4	7.0	3.2	0.0	0.0	5.4
	60代 (N=206)	9.2	47.1	21.4	12.6	4.9	0.5	0.5	0.0	3.9
	70代以上 (N=350)	16.9	53.4	15.4	6.9	3.7	1.1	0.3	0.3	2.0

世帯年収は、合計および男性・女性が「200～400 万円未満」が最も多い。年代別で見ると、「わからない」を除いて割合が最も高いのは、10・20 代が「200 万円～400 万円未満」、30 代と 40 代が「600 万円～800 万円未満」と、年代が上がるごとに年収が高額になっている。ただし 50 代が「200 万円～400 万円未満」と「800 万円～1000 万円未満」が同程度の割合を占めており、60 代と 70 代以上は「200 万円～400 万円未満」の割合が最も高い（表 4）。

表 4 Q66 世帯年収

		(%)								
		100万円 未満	100万円～ 200万円 未満	200万円～ 400万円 未満	400万円～ 600万円 未満	600万円～ 800万円 未満	800万円～ 1000万円 未満	1000万円～ 1500万円 未満	1500万円 以上	わからない 無回答
男女別	合計 (N=1172)	5.6	9.6	28.0	14.3	9.8	7.8	5.6	2.0	7.1 10.2
	男性 (N=484)	4.5	8.9	32.0	14.3	11.2	8.5	6.0	2.1	5.0 7.6
男女別	女性 (N=669)	6.6	10.2	25.9	14.8	9.1	7.5	5.4	1.9	8.7 10.0
	10・20代 (N=95)	16.8	6.3	20.0	9.5	4.2	7.4	5.3	0.0	26.3 4.2
年代別	30代 (N=130)	4.6	6.2	13.8	20.0	23.1	9.2	6.9	0.8	7.7 7.7
	40代 (N=181)	3.9	5.5	16.6	17.1	18.2	14.4	9.9	2.8	4.4 7.2
	50代 (N=185)	2.7	1.6	17.3	14.6	13.5	16.8	13.0	4.3	4.3 11.9
	60代 (N=206)	3.9	12.1	34.0	15.0	5.8	4.9	2.9	2.9	5.8 12.6
	70代以上 (N=350)	6.9	16.9	45.4	12.6	2.9	1.7	0.9	0.9	5.1 6.9

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけでなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については、図 1 と図 2 を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを表示している。よって合計%は 100.0%になるとは限らない。

Q1 の生活満足度に関して、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「満足」もしくは「やや満足」と回答している。年代別で見ると、「満足」もしくは「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 66.4%と最も高く、反対に 50 代が 57.3%と最も低い（図 10）。

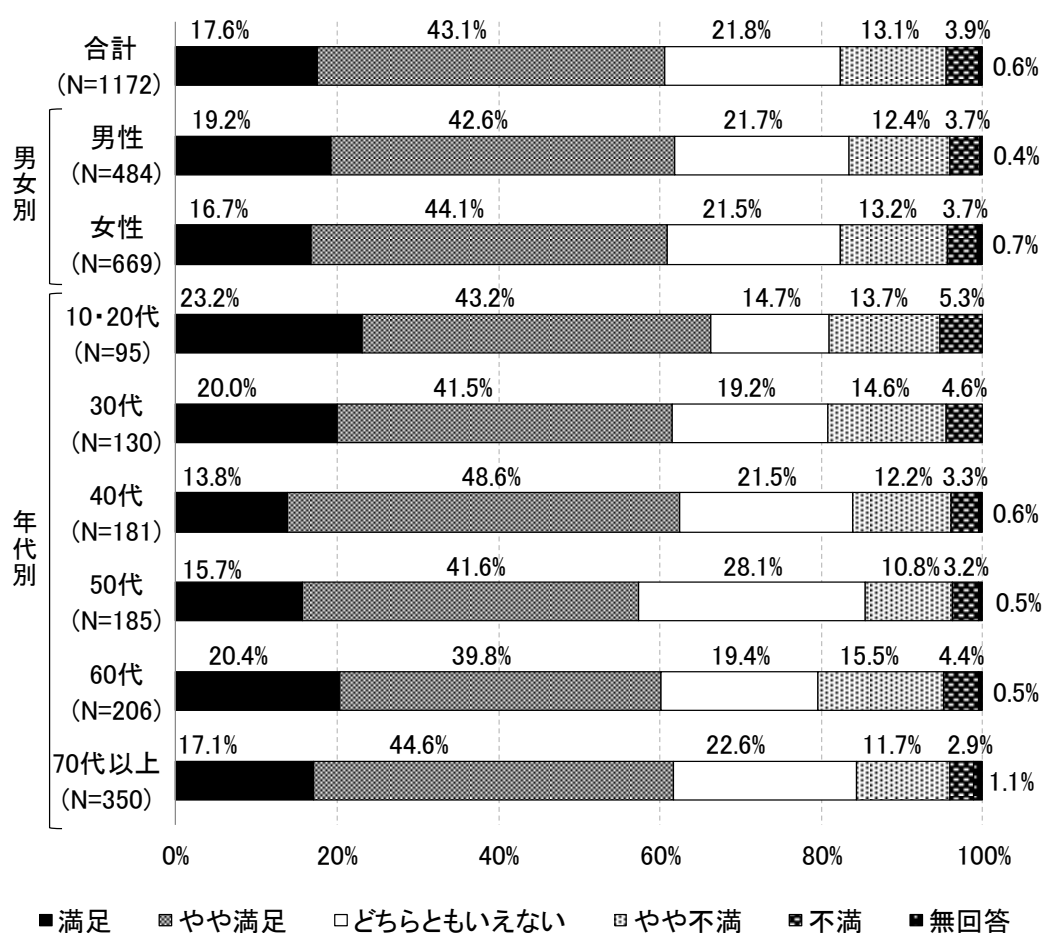


図 10 Q1 生活満足度

Q2 の経済面での満足度に関して、男女別で見ると、男女ともに「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 4 割程度である。年代別で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上が 52.3%と最も高く、反対に 30 代が 31.5%と最も低い(図 11)。

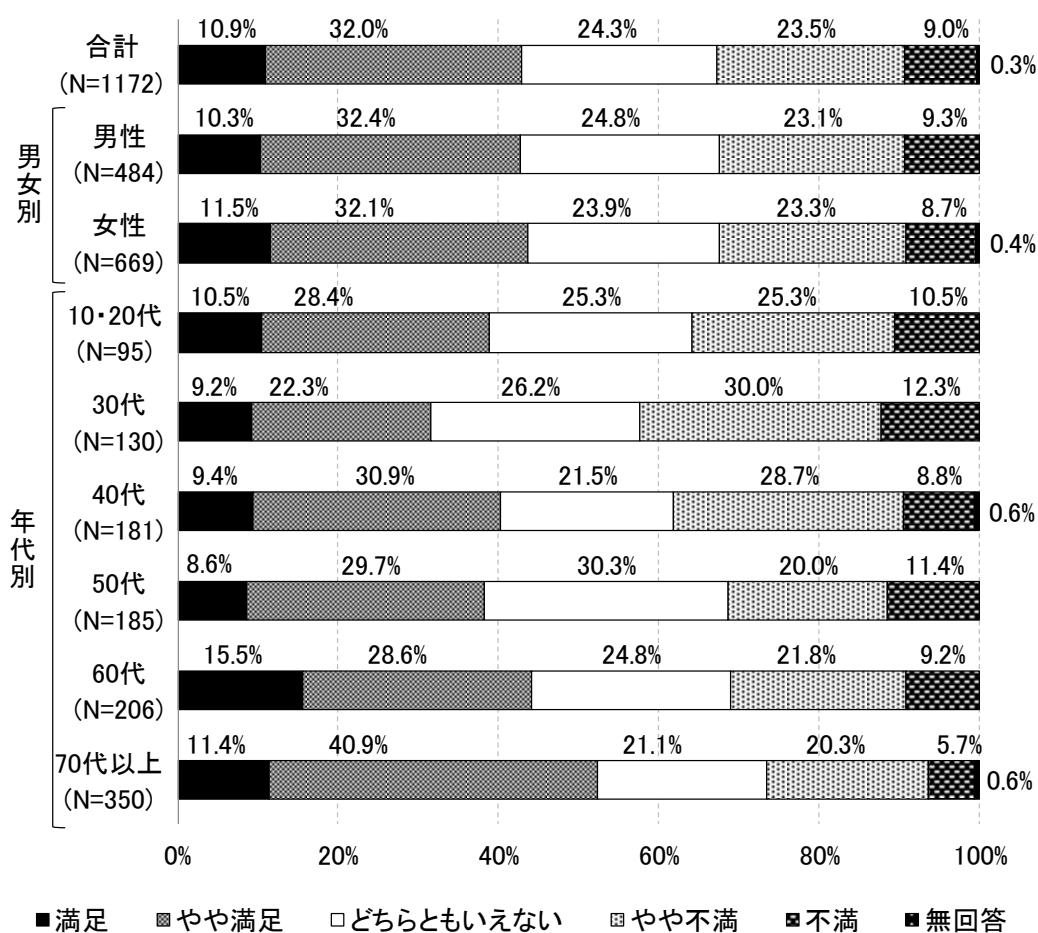


図 11 Q2 経済面での満足度

Q3 の余暇面での満足度に関して、男女別・年代別のすべての層で 3 割以上が「満足」または「やや満足」と回答している。年代別で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 57.9%と最も高く、反対に 50 代が 35.6%と最も低い（図 12）。

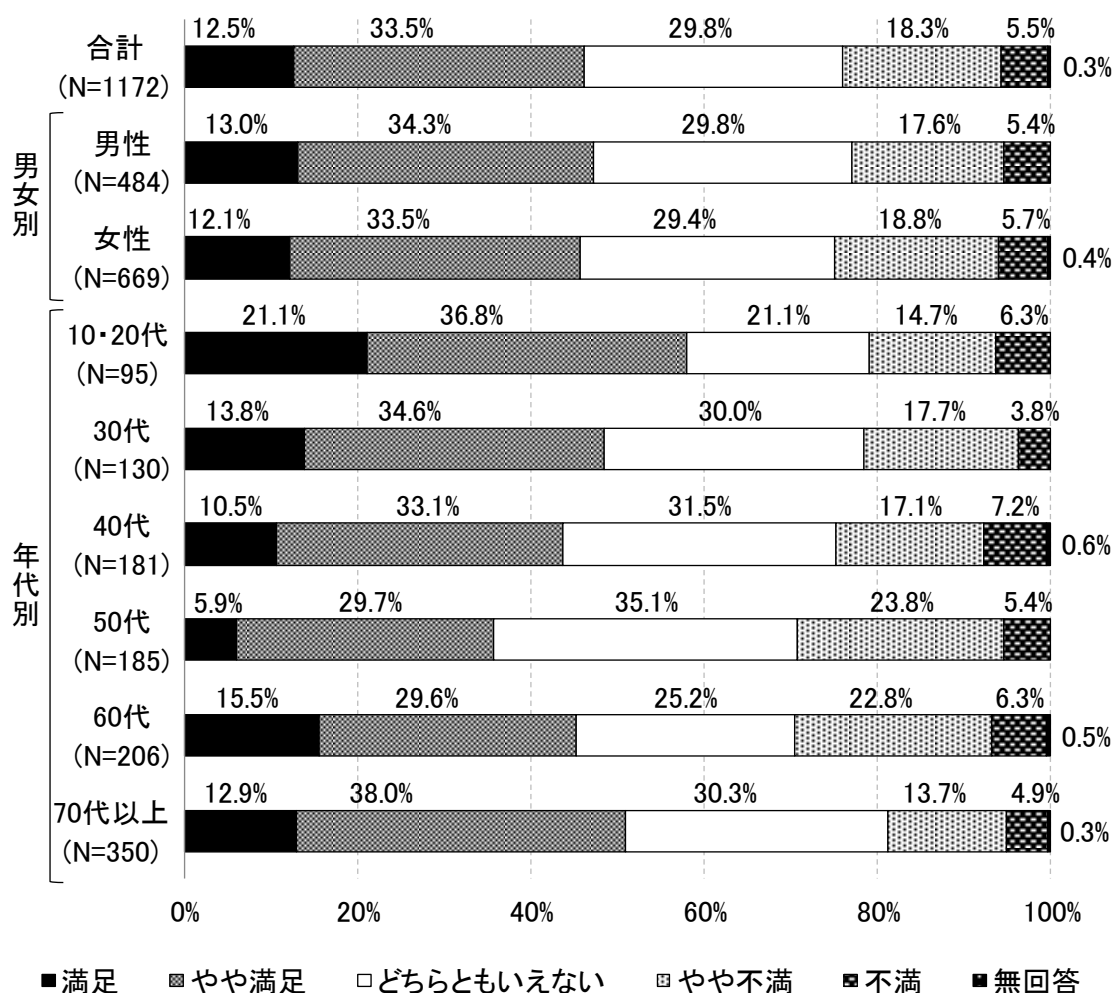


図 12 Q3 余暇面での満足度

Q4 の居住地域は暮らしやすいかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は30代が82.3%と最も高い。反対に、40代および70代以上は76.8%と最も低い（図13）。

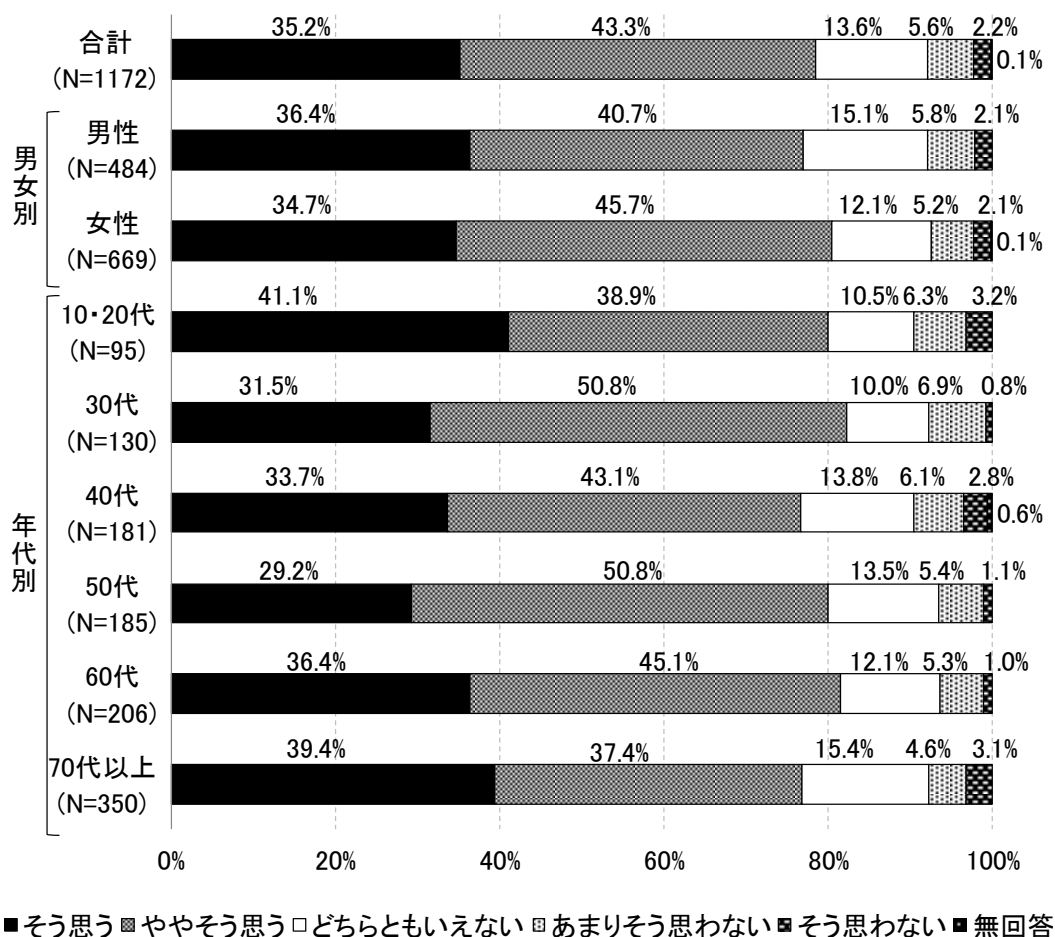


図13 Q4 居住地域は暮らしやすいか

Q5 の地域に住み続けたいかに関して、男女別・年代別のすべての層で「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答した人の割合が 5 割以上である。年代別で見ると、「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答した人の割合は 70 代以上が 64.6%と最も高い。反対に、30 代は 50.0%と最も低い（図 14）。

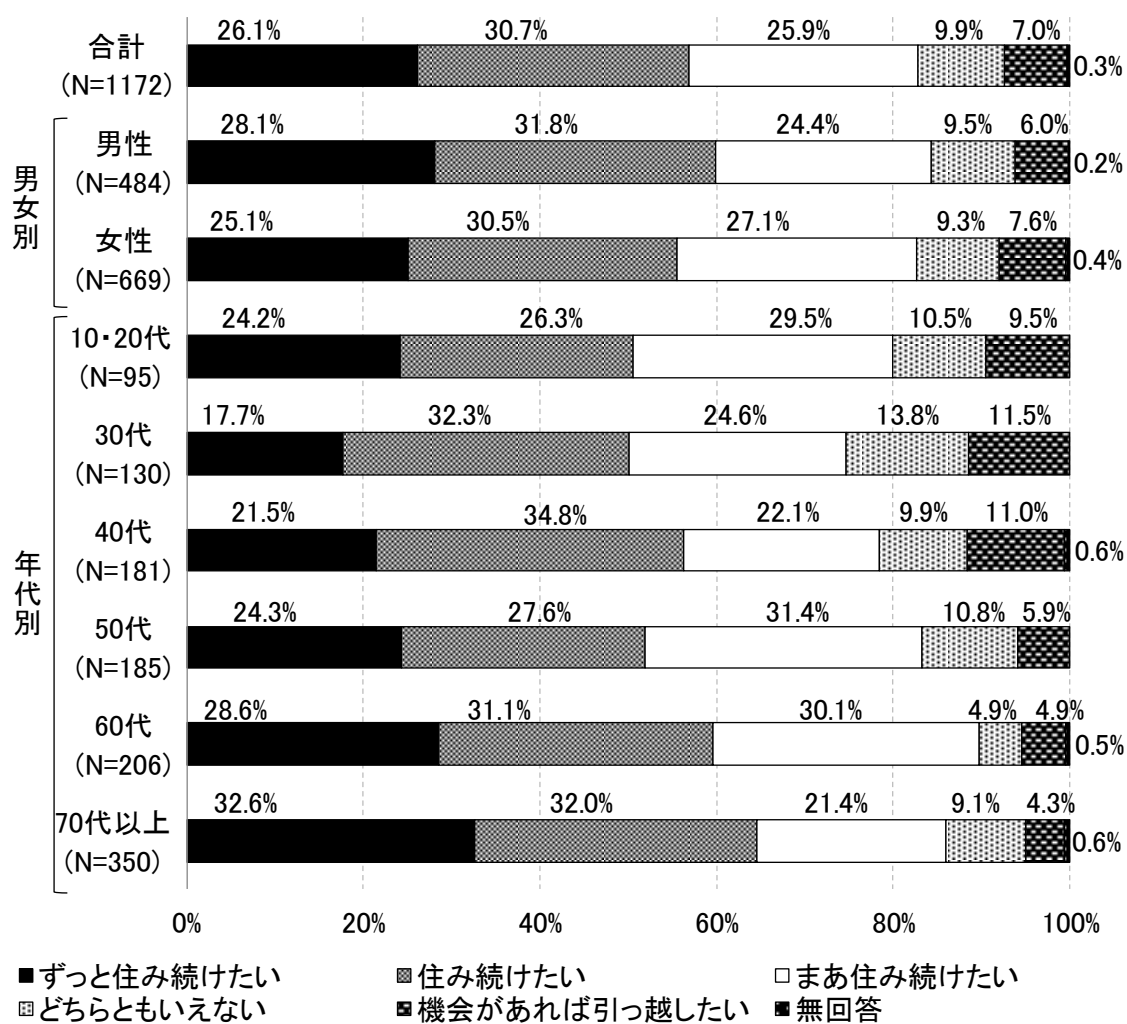


図 14 Q5 居住地域に住み続けたいか

Q6 の地域の役に立ちたいかに関して、年代別で見ると、10・20 代および 30 代を除く全年代が、5 割以上が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。なお、大きな男女差は見られない（図 15）。

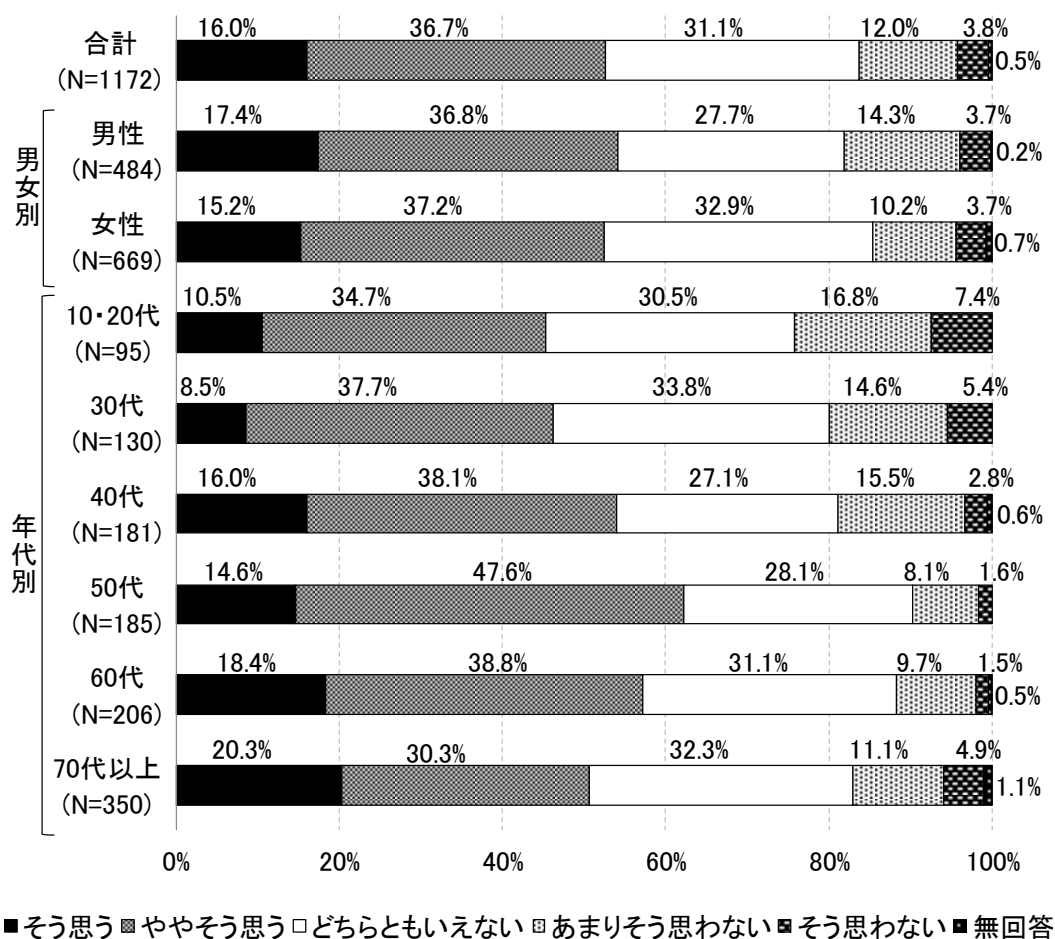


図 15 Q6 地域の役に立ちたいか

Q7 の地域に愛着を感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「感じる」または「やや感じる」と回答した人が 7 割以上である。年代別で見ると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 70 代が 82.0%と最も高く、反対に 30 代が 70.8%と最も低い（図 16）。

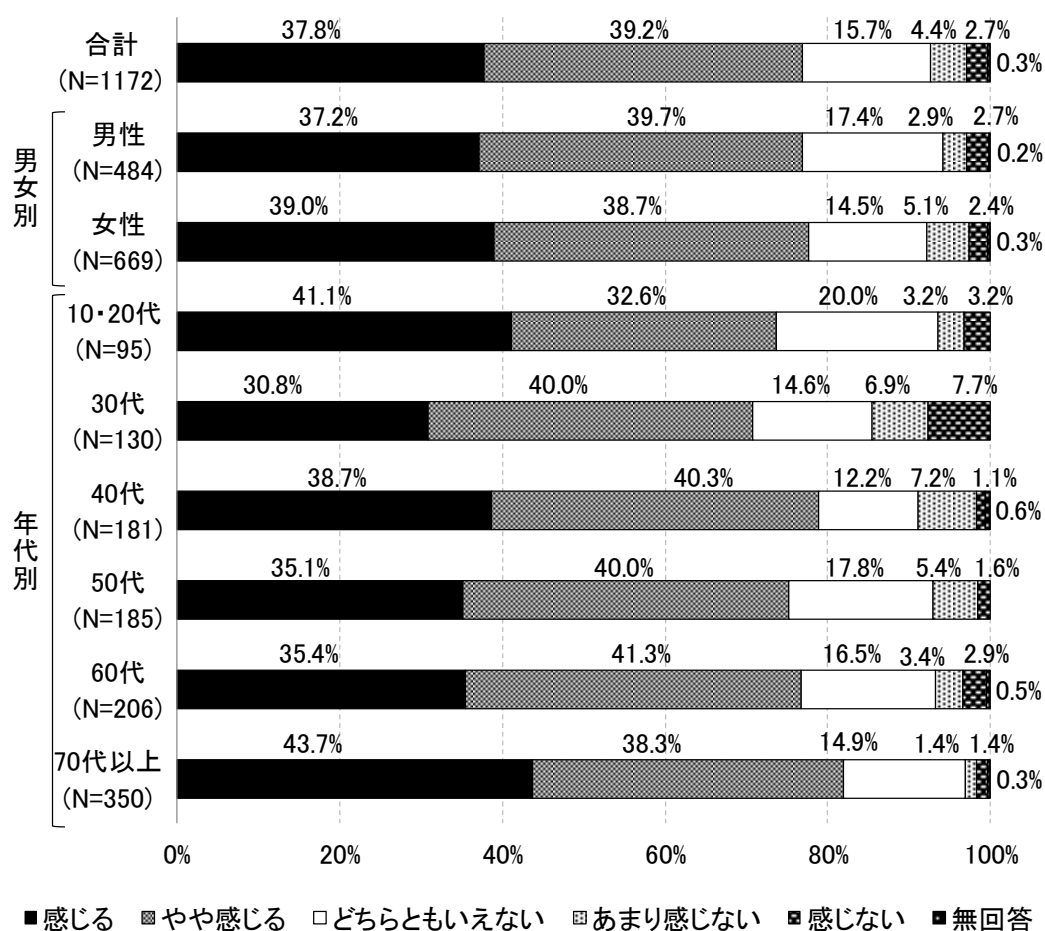


図 16 Q7 地域に愛着を感じるか

Q8A の徒歩における歩道の整備の状況の満足度に関して、年代別で見ると、10 代・20 代および 70 代以上では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は 30 代が 46.1%と最も高い。反対に、10・20 代は 28.4%と最も低い（図 17）。

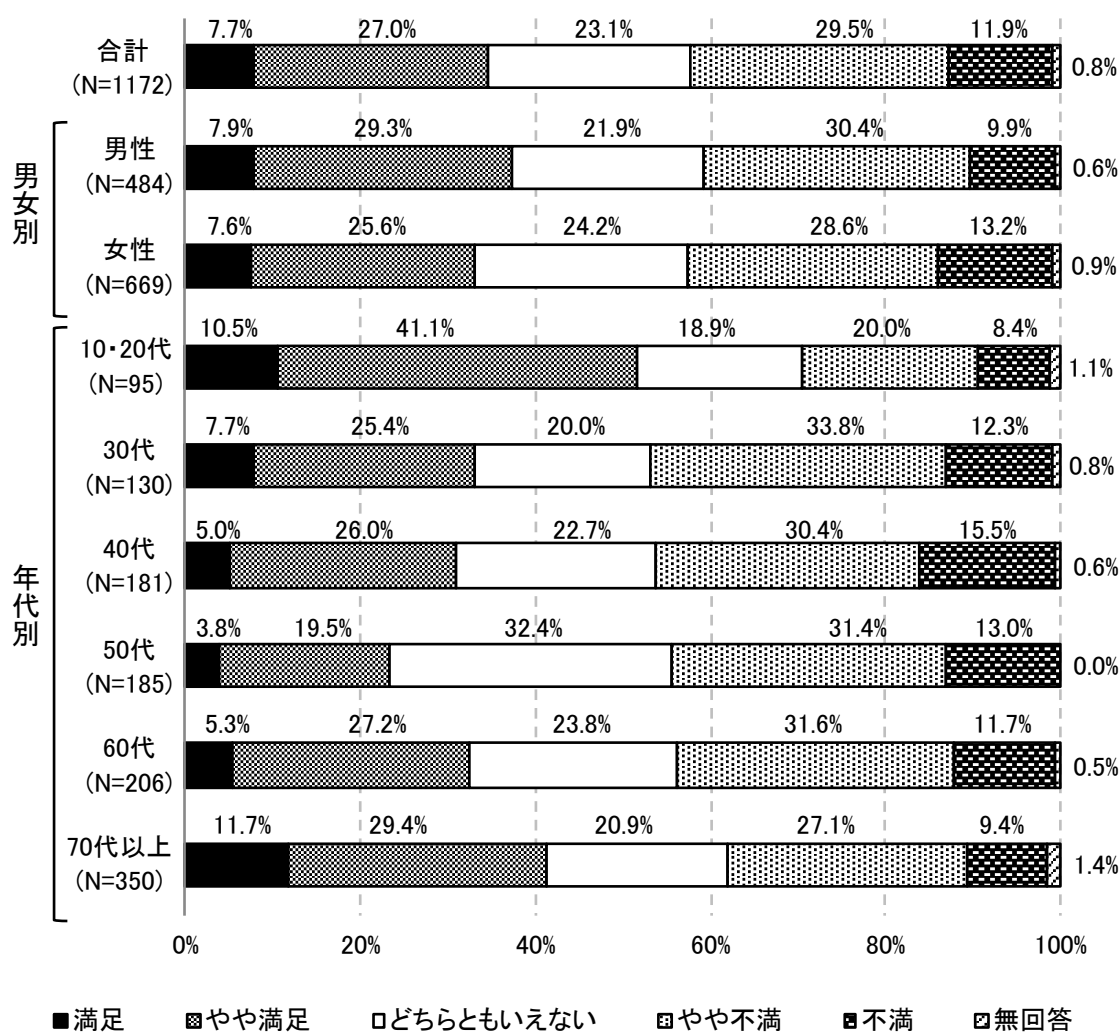


図 17 Q8A 交通手段満足度 徒歩：歩道の整備の状況

Q8B の徒歩におけるバリアフリー化の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上が最も高い（図 18）。

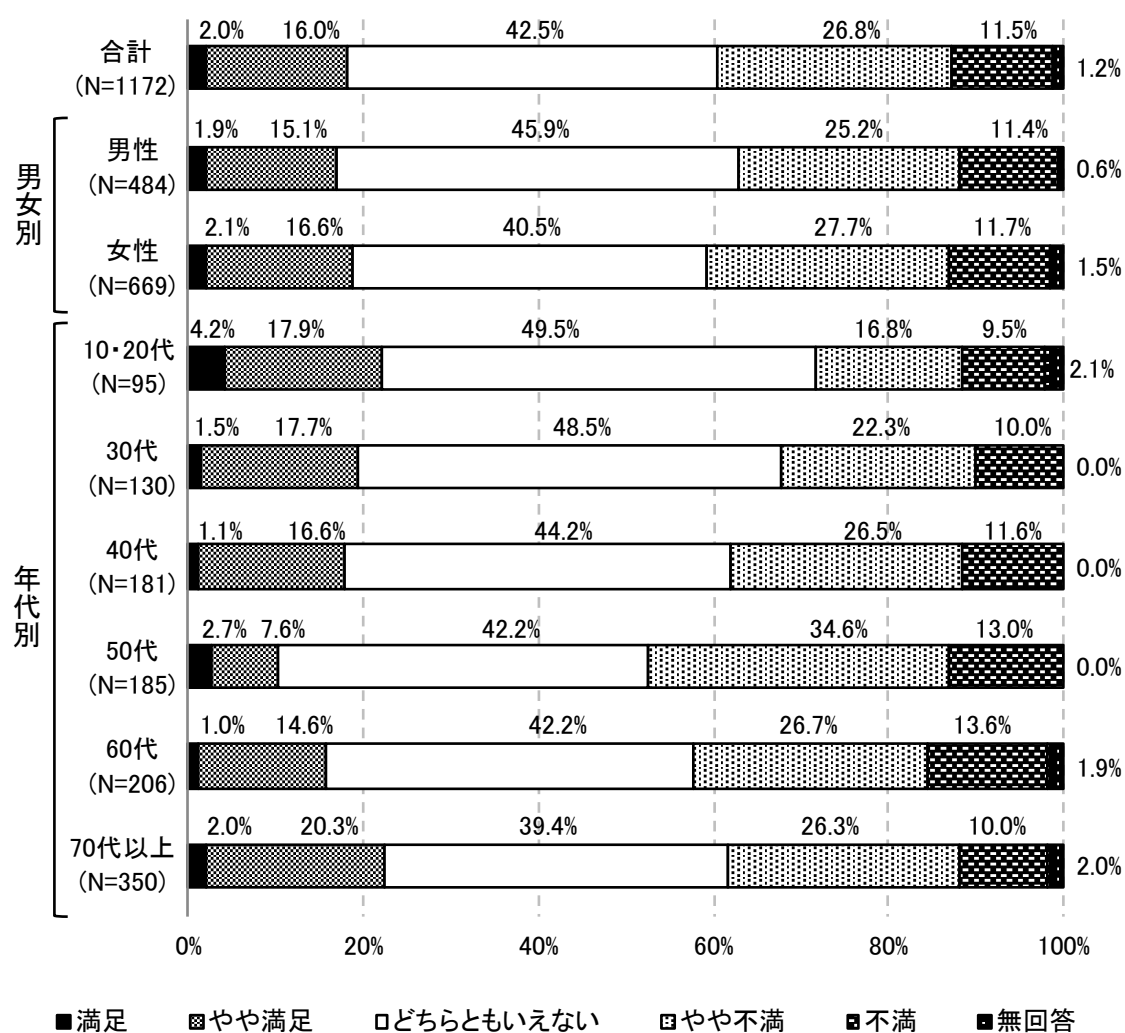


図 18 Q8B 交通手段満足度 徒歩：バリアフリー化

Q8C の自転車が通行するために必要なスペースの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は 50 代が 68.7%と最も高い。反対に、70 代以上は 49.1%と最も低い（図 19）。

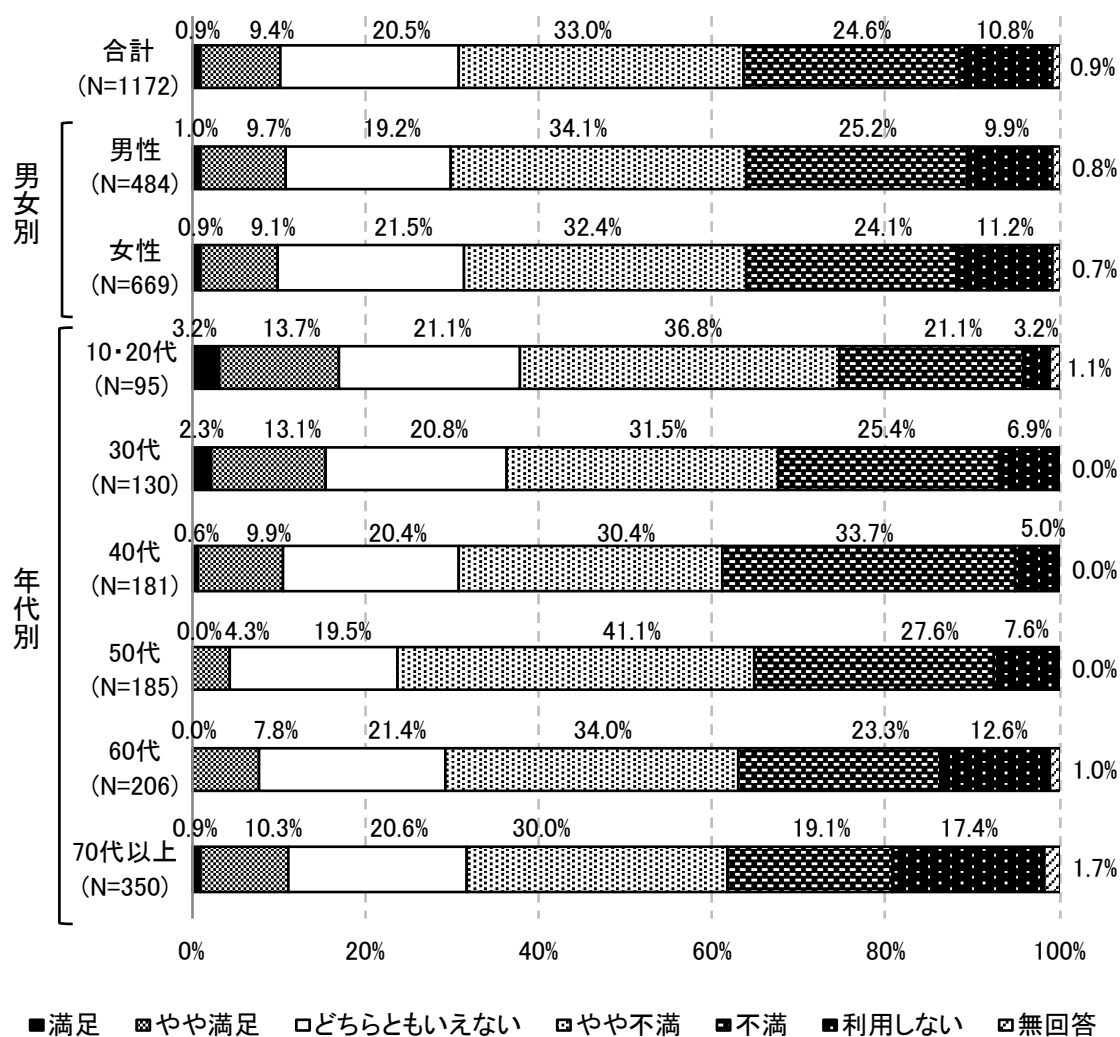


図 19 Q8C 交通手段満足度 自転車：通行するために必要なスペース

Q8D の自転車の駐輪場の満足度に関して、年代別で見ると、10・20代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合より高い。それ以外の年代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が41.1%と最も高い。反対に、50代は13.5%と最も低い（図20）。

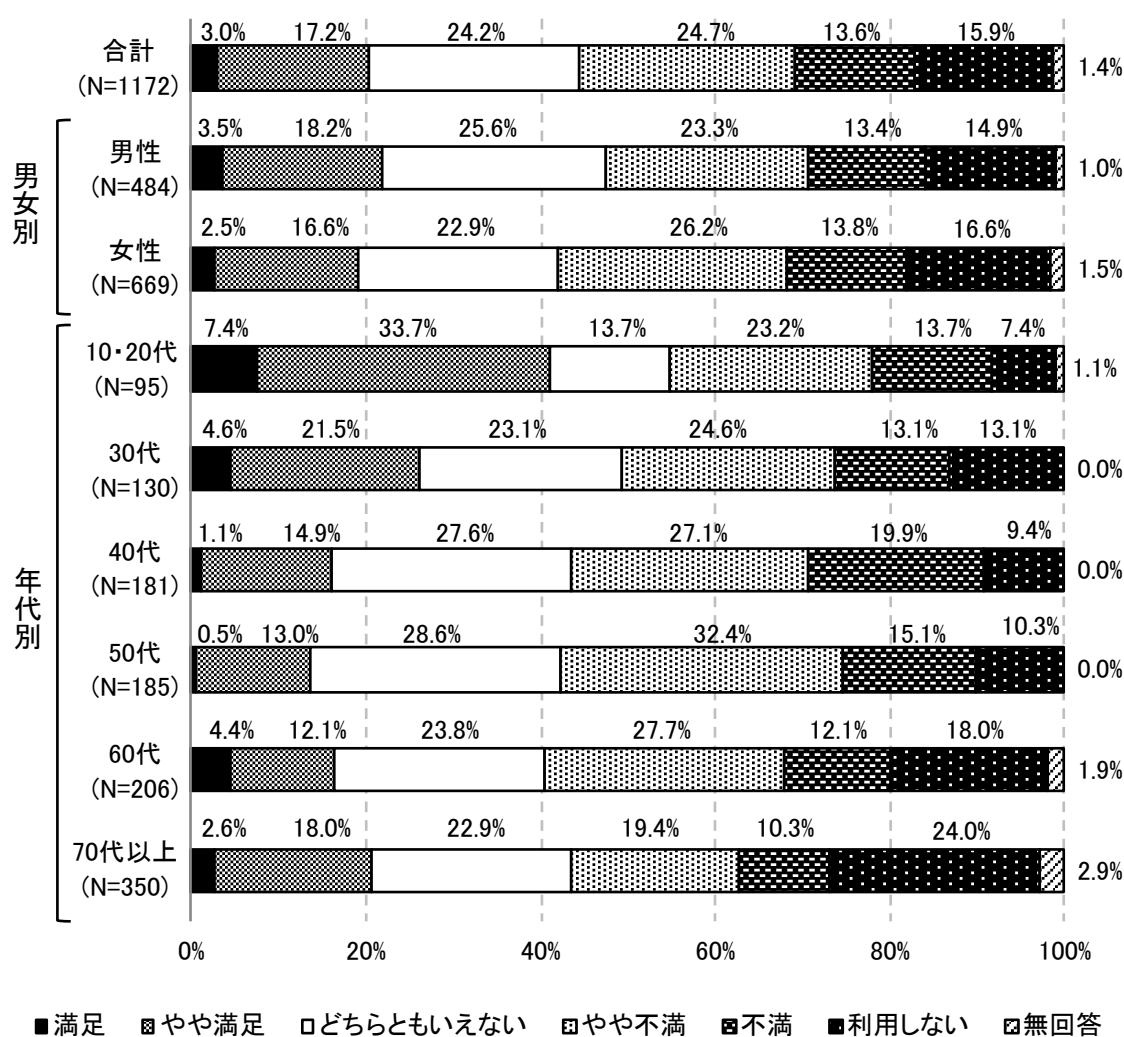


図 20 Q8D 交通手段満足度 自転車：駐輪場

Q8E の自転車に乗っている人々のマナーの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は 60 代が 70.4%と最も高い。反対に 10・20 代が、48.4%と最も低い（図 21）。

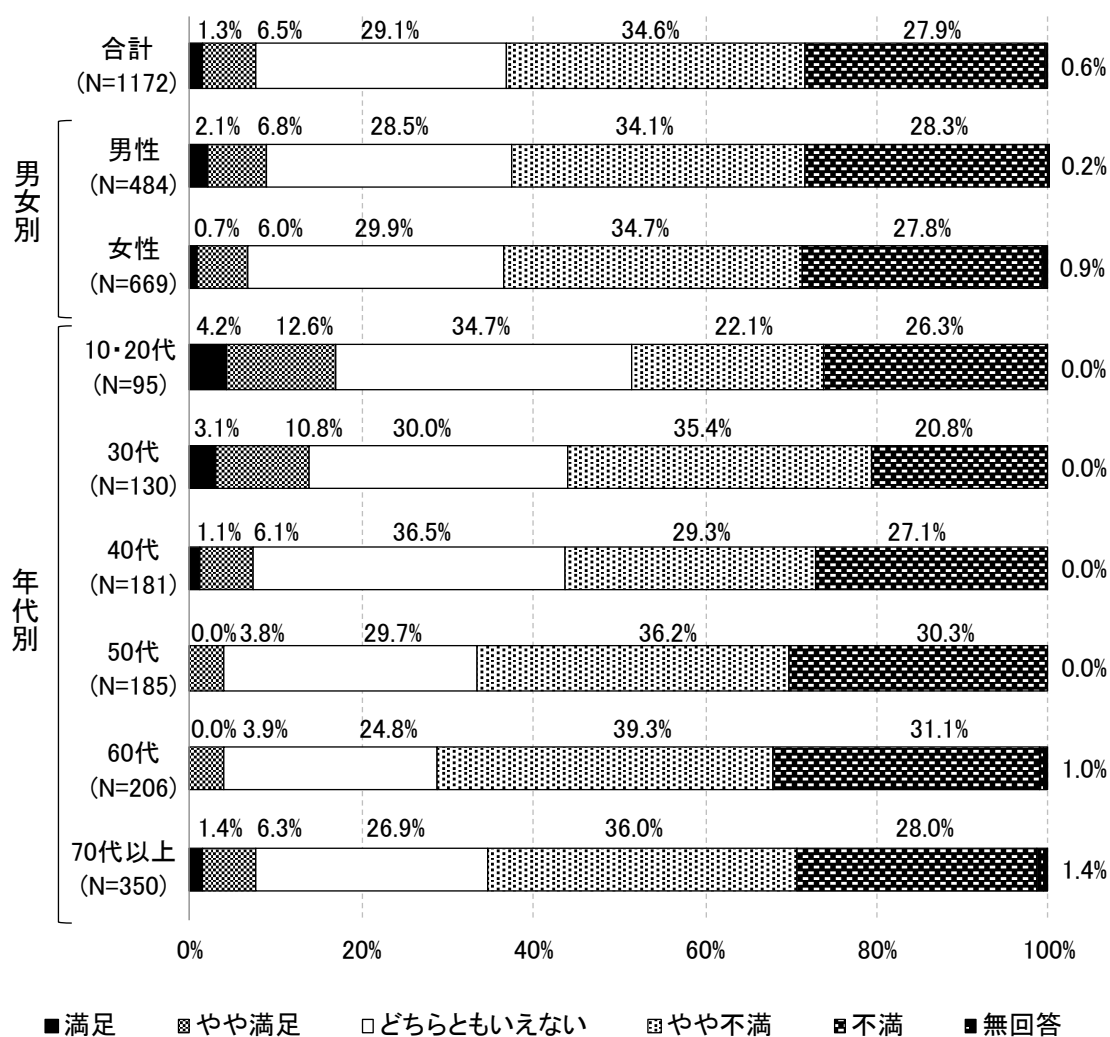


図 21 Q8E 交通手段満足度 自転車：乗っている人々のマナー

Q8F のバイクが通行するために必要なスペースの満足度に関して、年代別で見ると、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 15.8% と最も高い。反対に 60 代および 70 代以上が、3.4% と最も低い（図 22）。

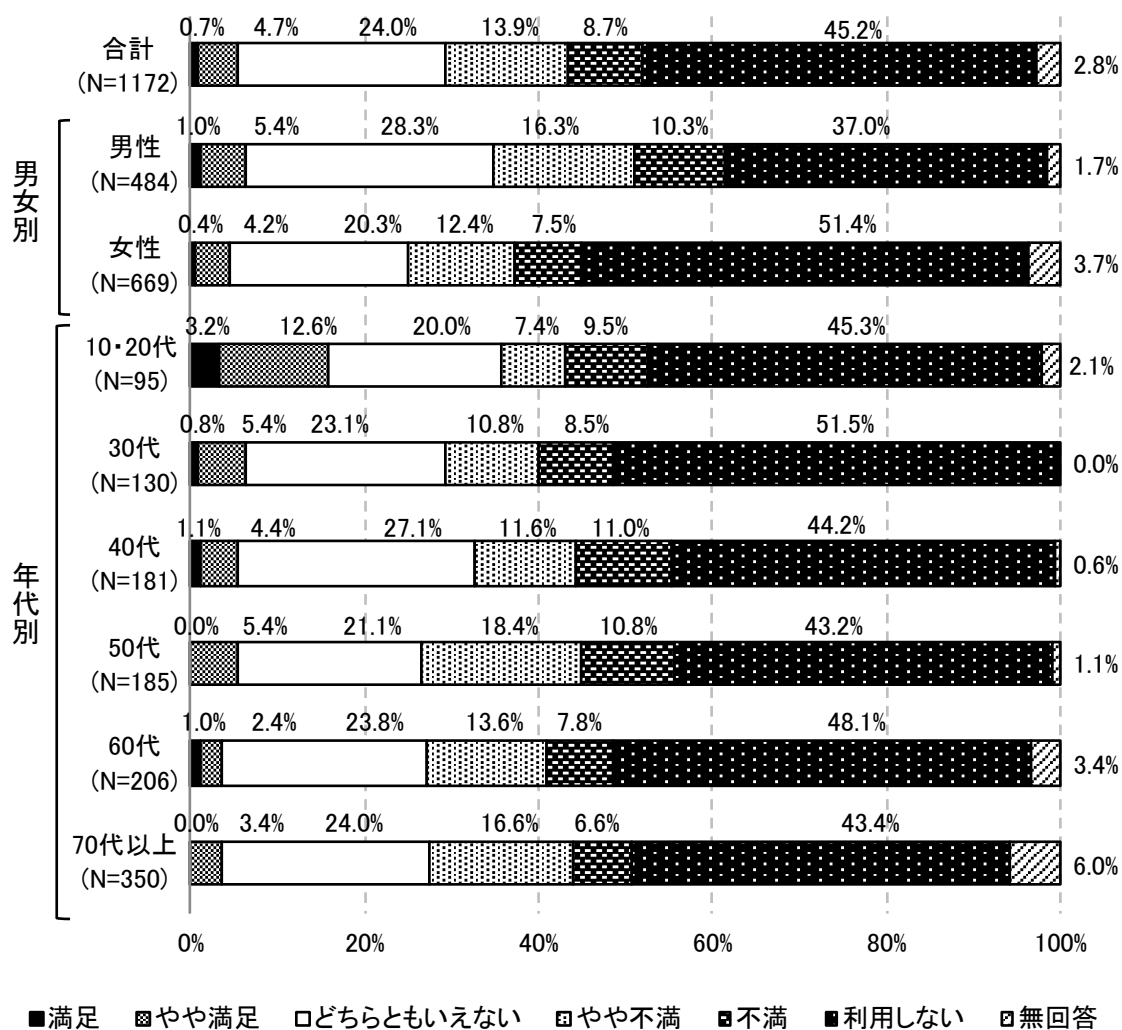


図 22 Q8F 交通手段満足度 バイク：通行するために必要なスペース

Q8G のバイクの駐車場の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 11.6%と最も高い。反対に 60 代が、2.9%と最も低い（図 23）。

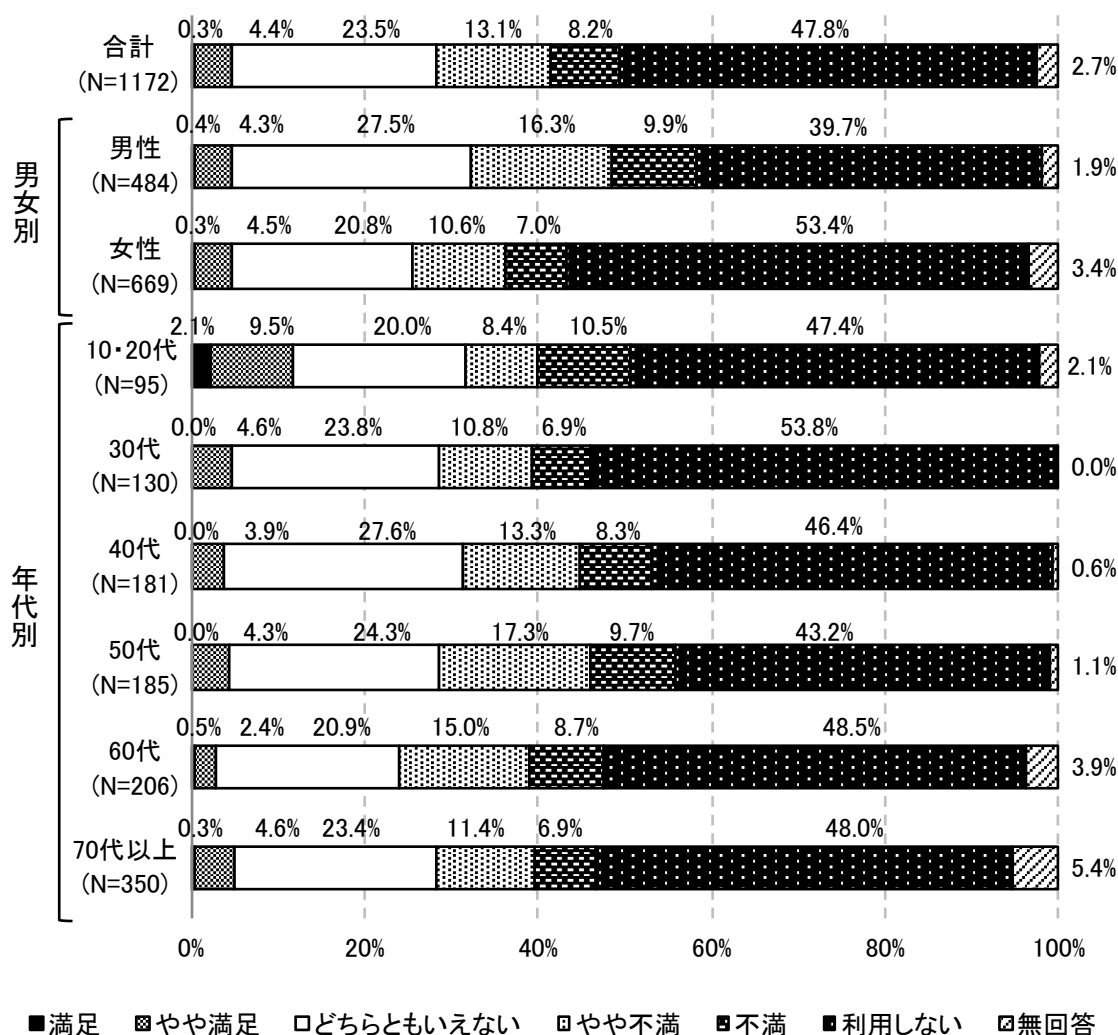


図 23 Q8G 交通手段満足度 バイク：駐車場

Q8H のバイクに乗っている人々のマナーの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 22.1%と最も高い。反対に 50 代が、3.2%と最も低い（図 24）。

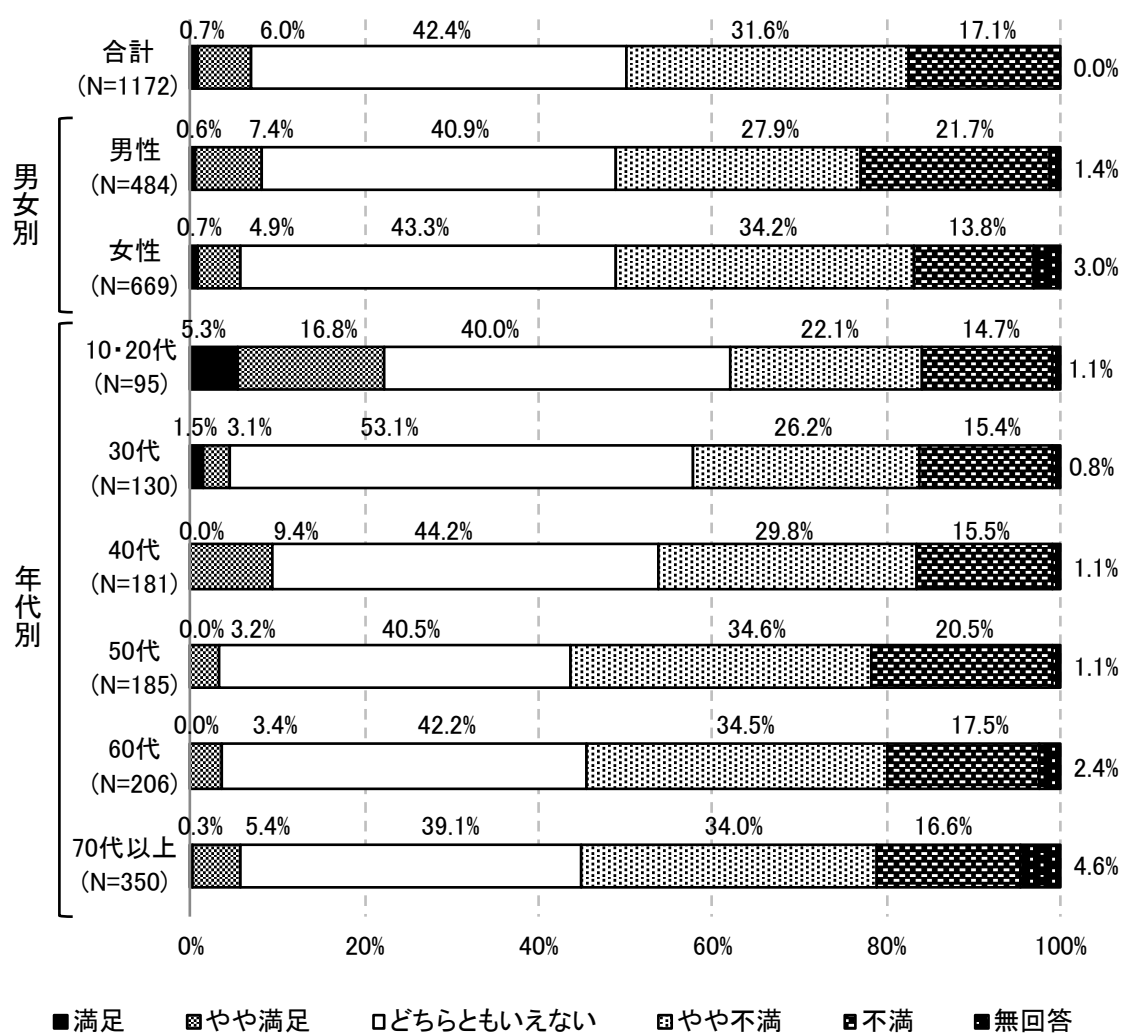


図 24 Q8H 交通手段満足度 バイク：乗っている人々のマナー

Q8I のバスの路線・系統の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上で 52.9%と最も高い。反対に 50 代が 30.2%と最も低い（図 25）。

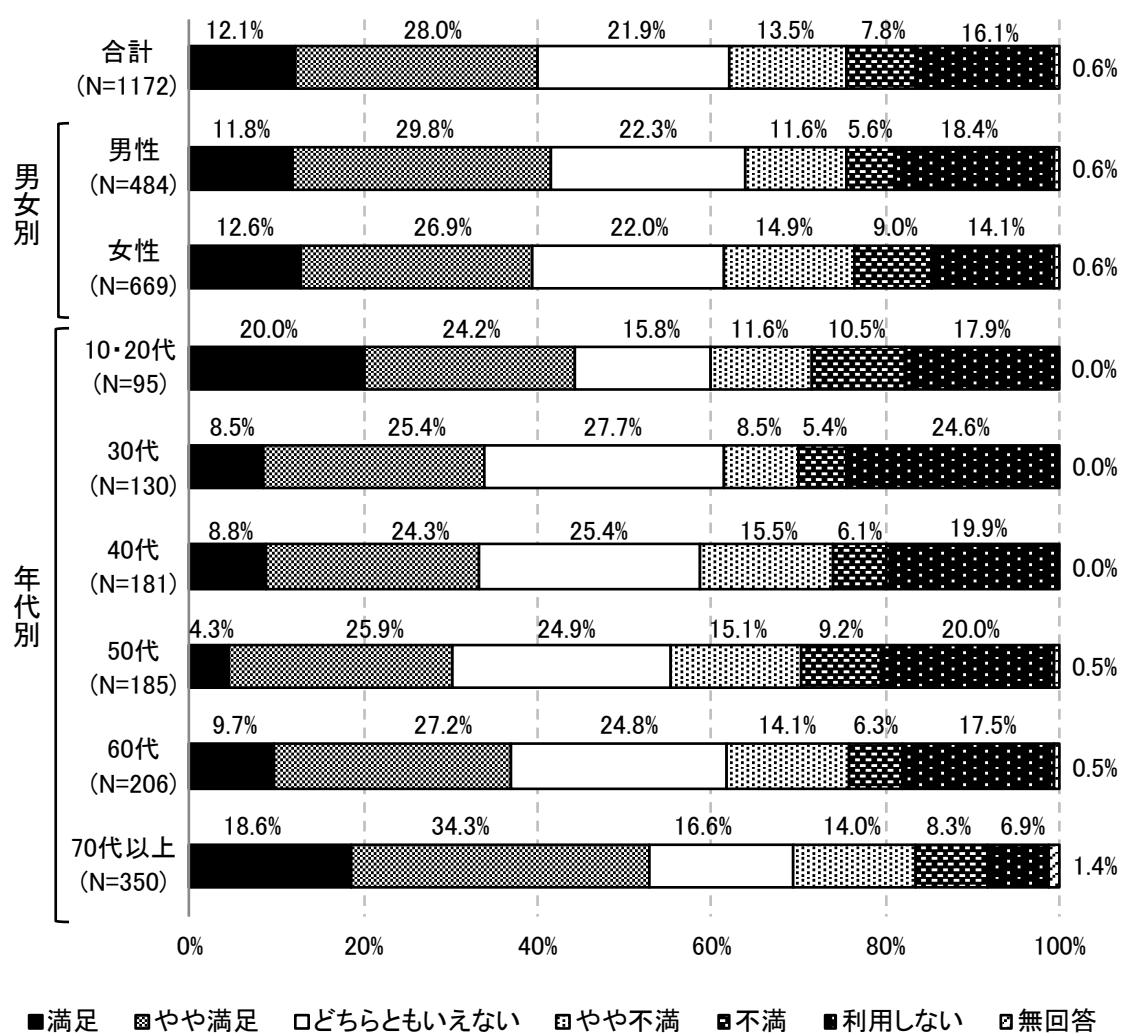


図 25 Q8I 交通手段満足度 バス：路線・系統

Q8J のバスのダイヤの満足度に関して、年代別で見ると、50代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は70代以上で45.1%と最も高い。反対に、50代が23.8%と最も低い（図26）。

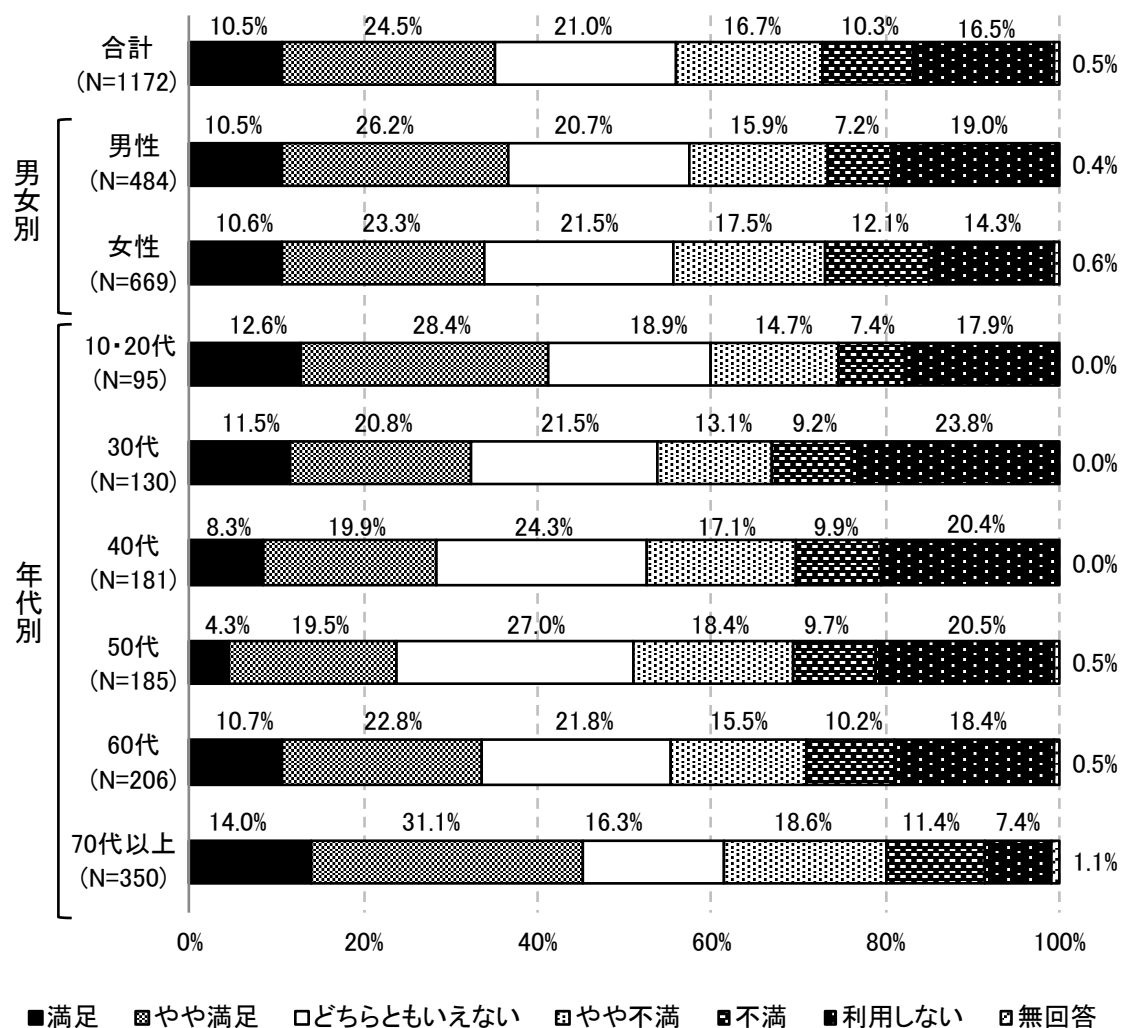


図 26 Q8J 交通手段満足度 バス：ダイヤ

Q8K のバス停の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。

「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 52.6%と最も高い。反対に 50 代が 30.8%と最も低い（図 27）。

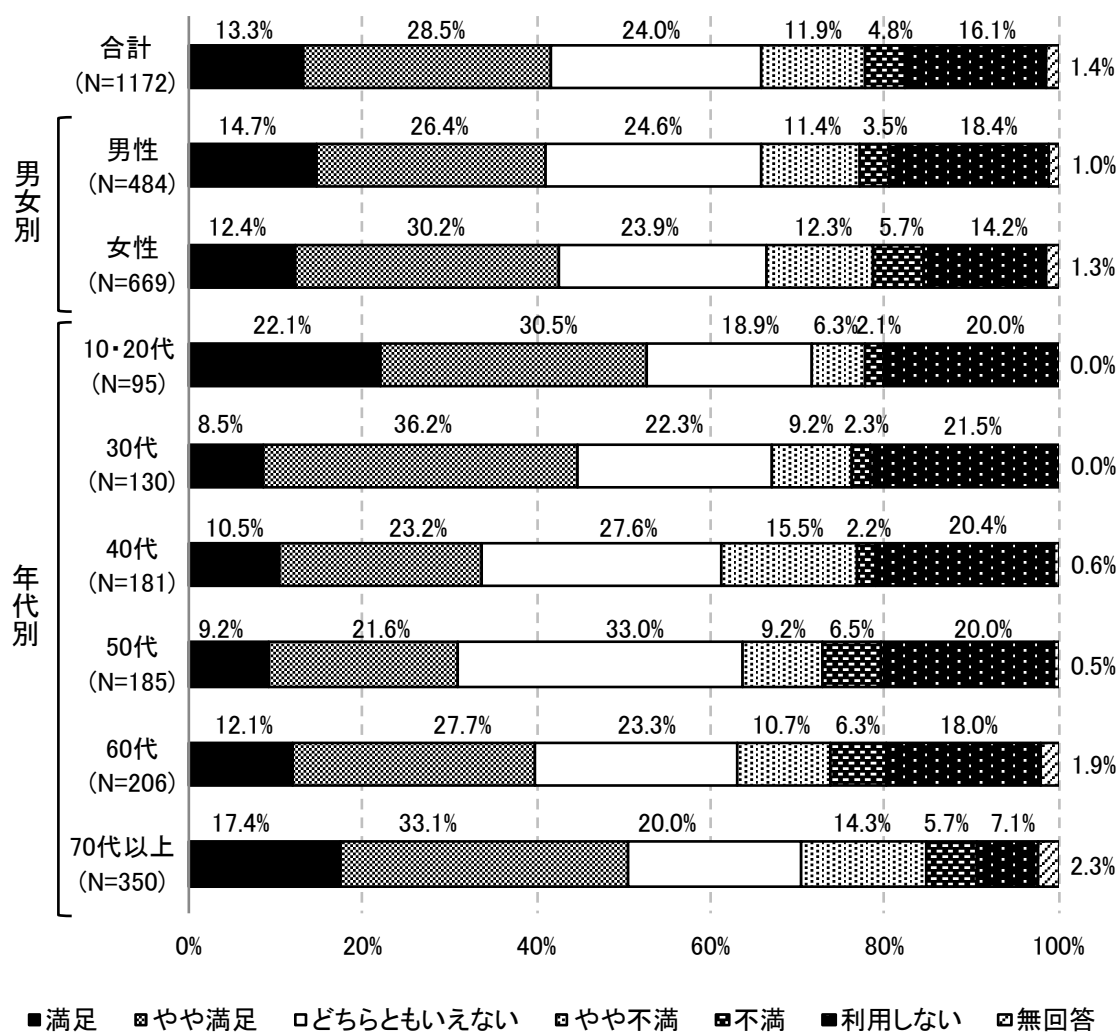


図 27 Q8K 交通手段満足度 バス：バス停

Q8L のバスの乗り方の分かりやすさの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上で 53.7%と最も高い。反対に、50 代が 29.2%と最も低い（図 28）。

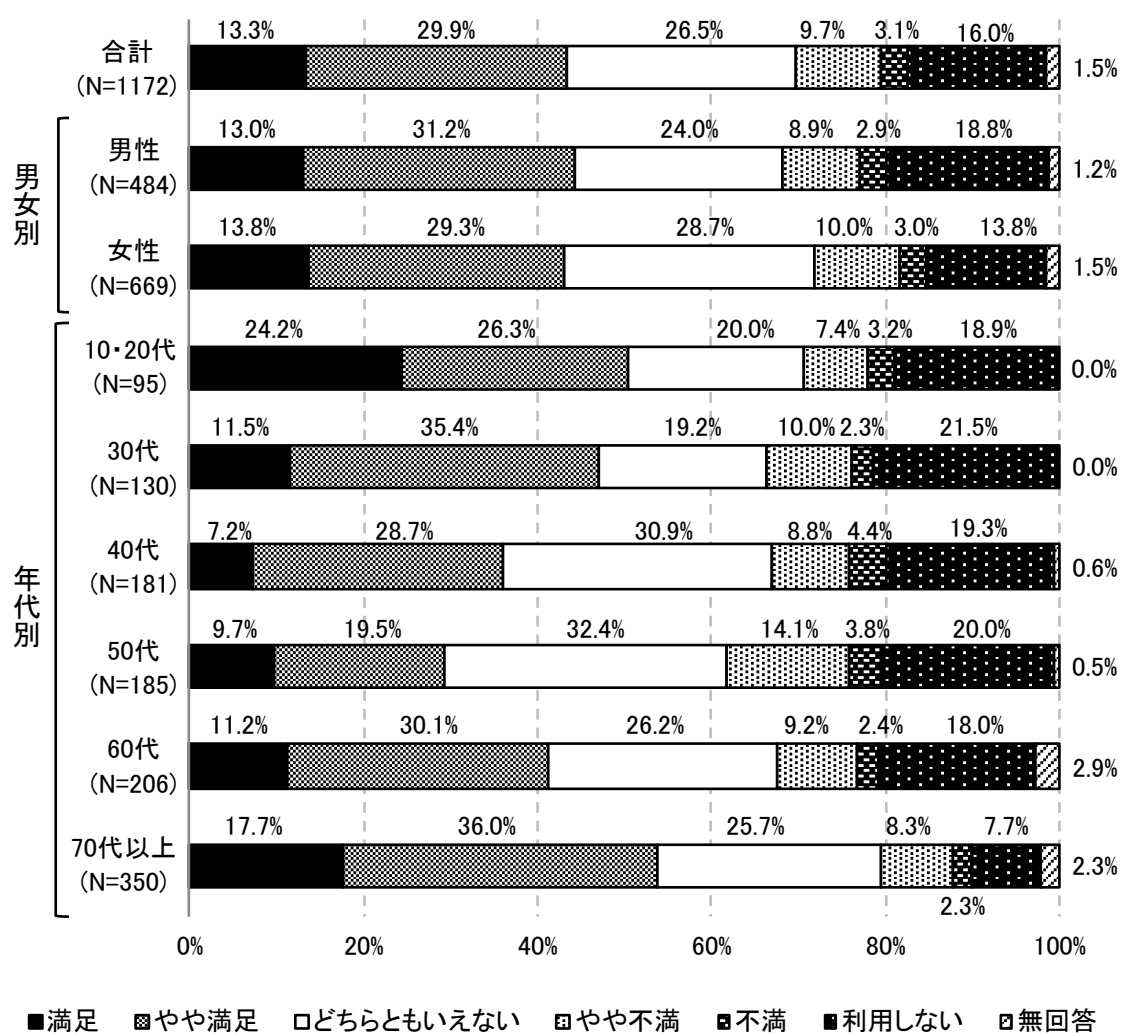


図 28 Q8L 交通手段満足度 バス 乗り方の分かりやすさ

Q8M の鉄道の駅の使いやすさの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 83.1%と最も高い。反対に 70 代以上が 63.1%と最も低い（図 29）。

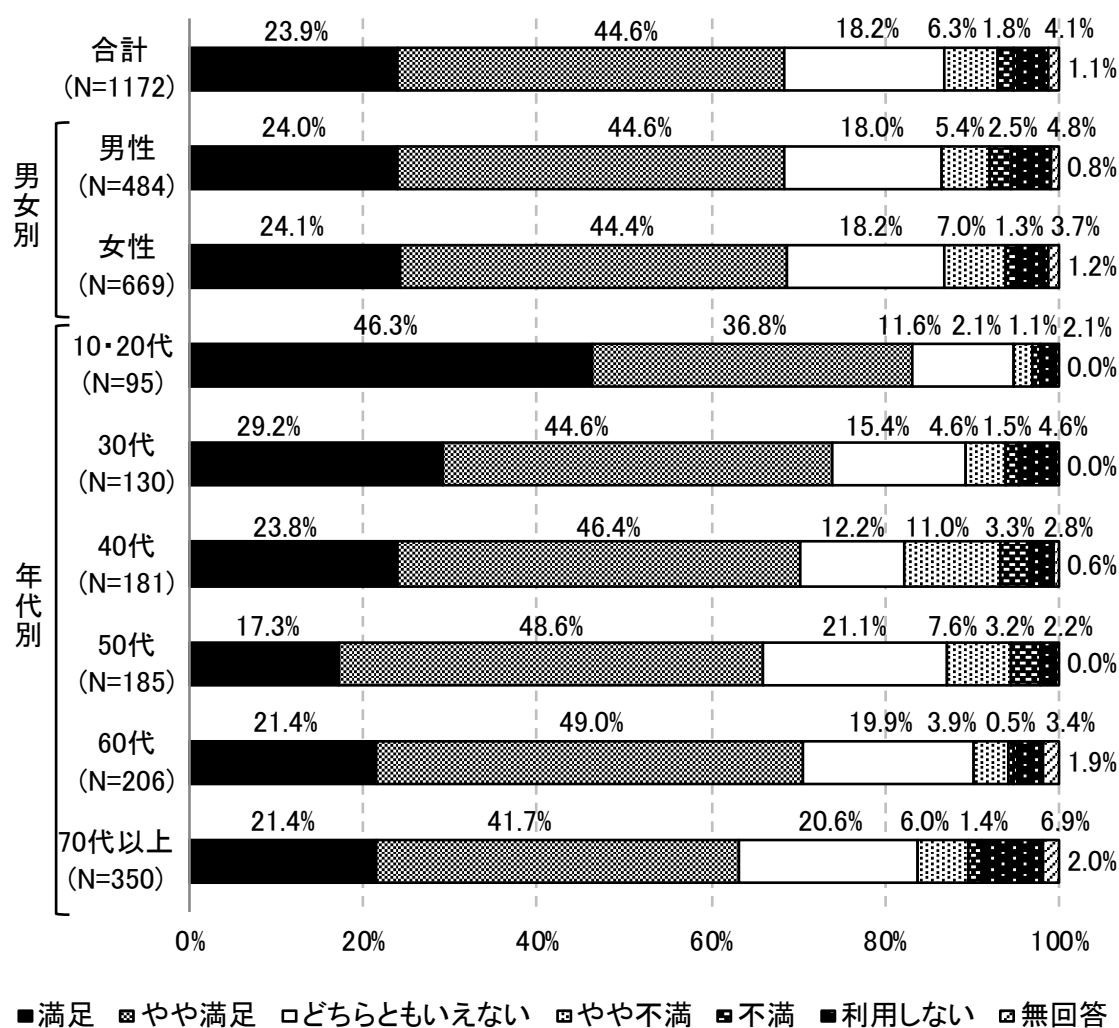


図 29 Q8M 交通手段満足度 鉄道：駅の使いやすさ

Q8N の鉄道の列車ダイヤの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 81.1%と最も高い。反対に、70 代以上が 61.4%と最も低い（図 30）。

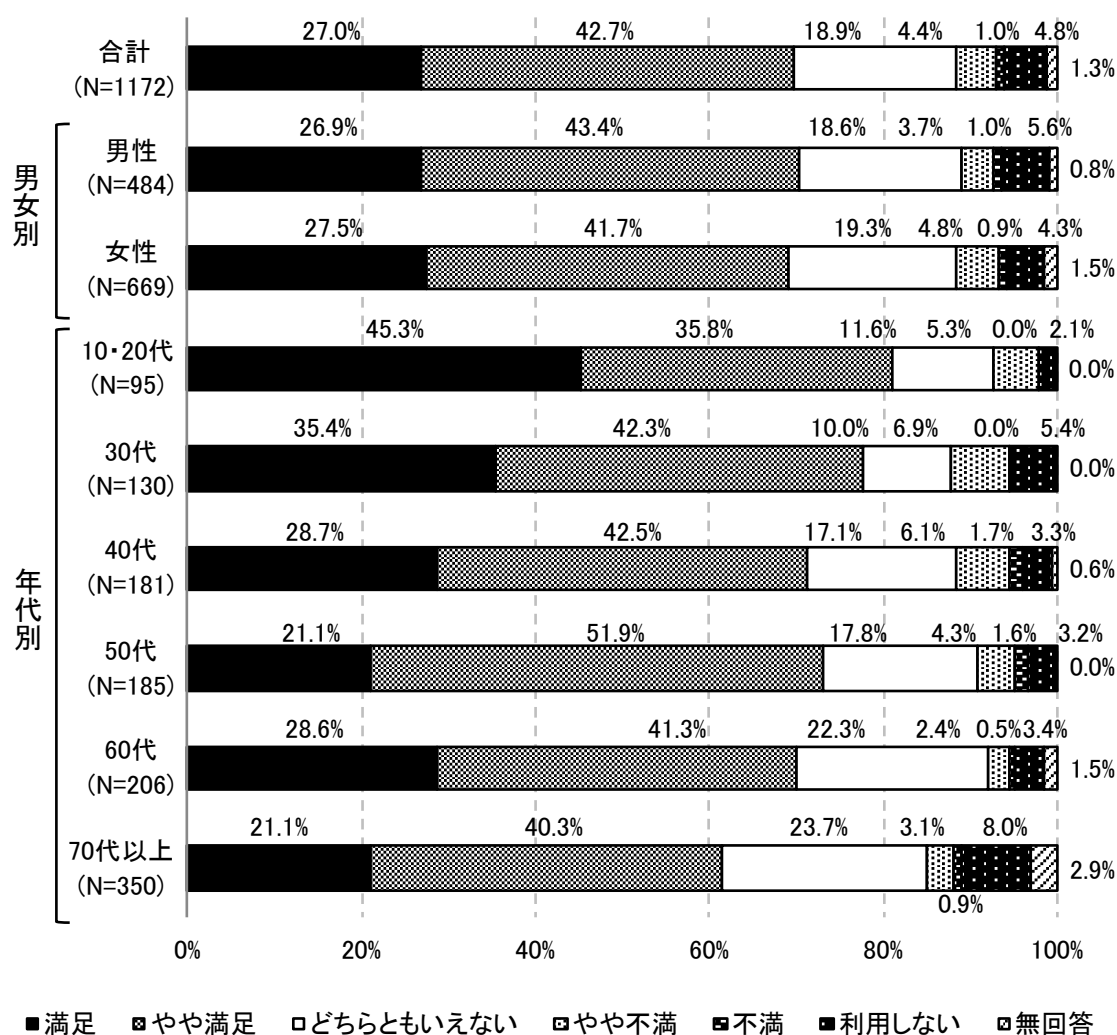


図 30 Q8N 交通手段満足度 鉄道：列車ダイヤ

Q80 の自動車が行き通る道路の整備状況の満足度に関して、年代別で見ると、10・20 代および 30 代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。40 代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が変わらない。50 代以上では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 34.8%と最も高い。反対に、70 代以上が 22.6%と最も低い（図 31）。

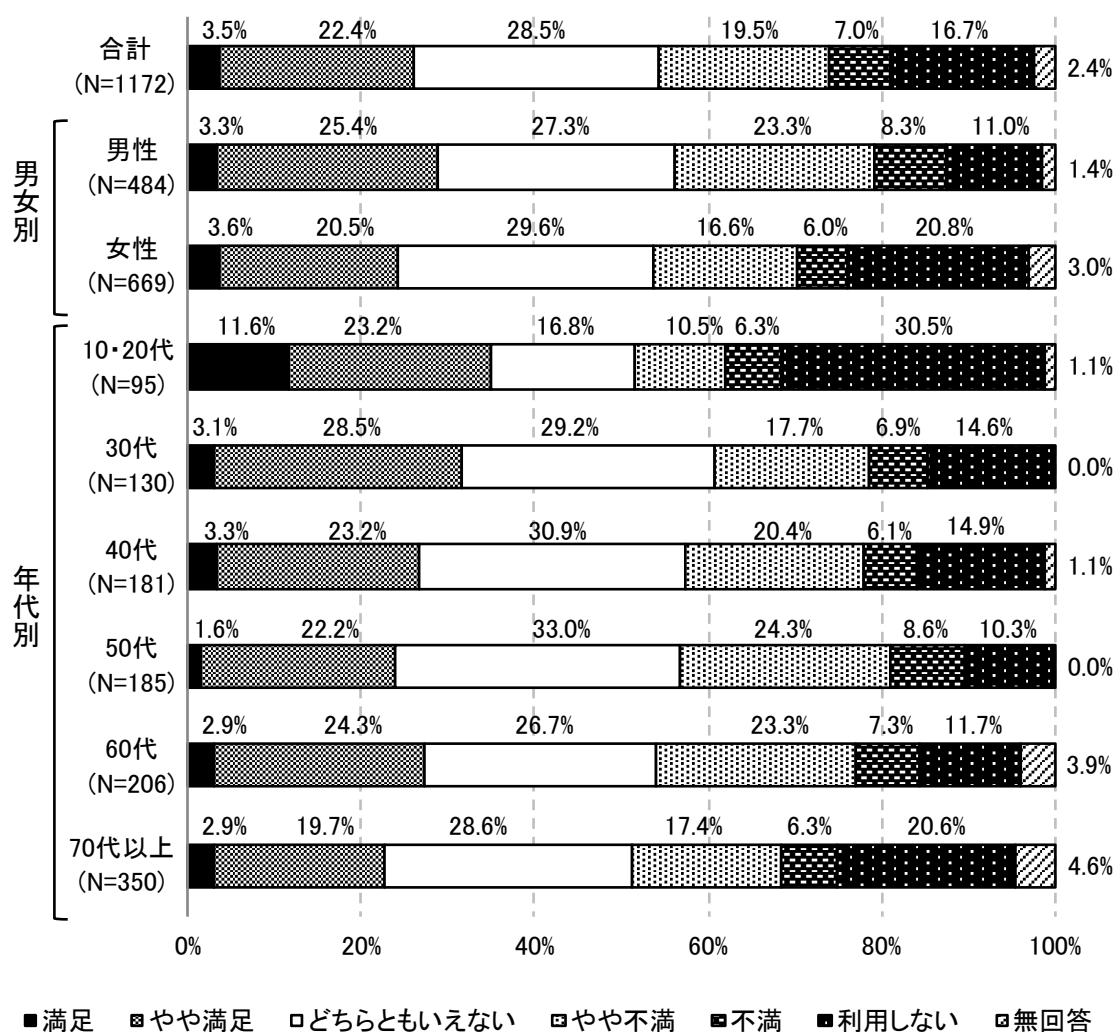


図 31 Q80 交通手段満足度 自動車：道路の整備の状況

Q8Pの自動車の駐車場の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は50代が35.1%と最も高い。反対に、10・20代が24.2%と最も低い(図32)。

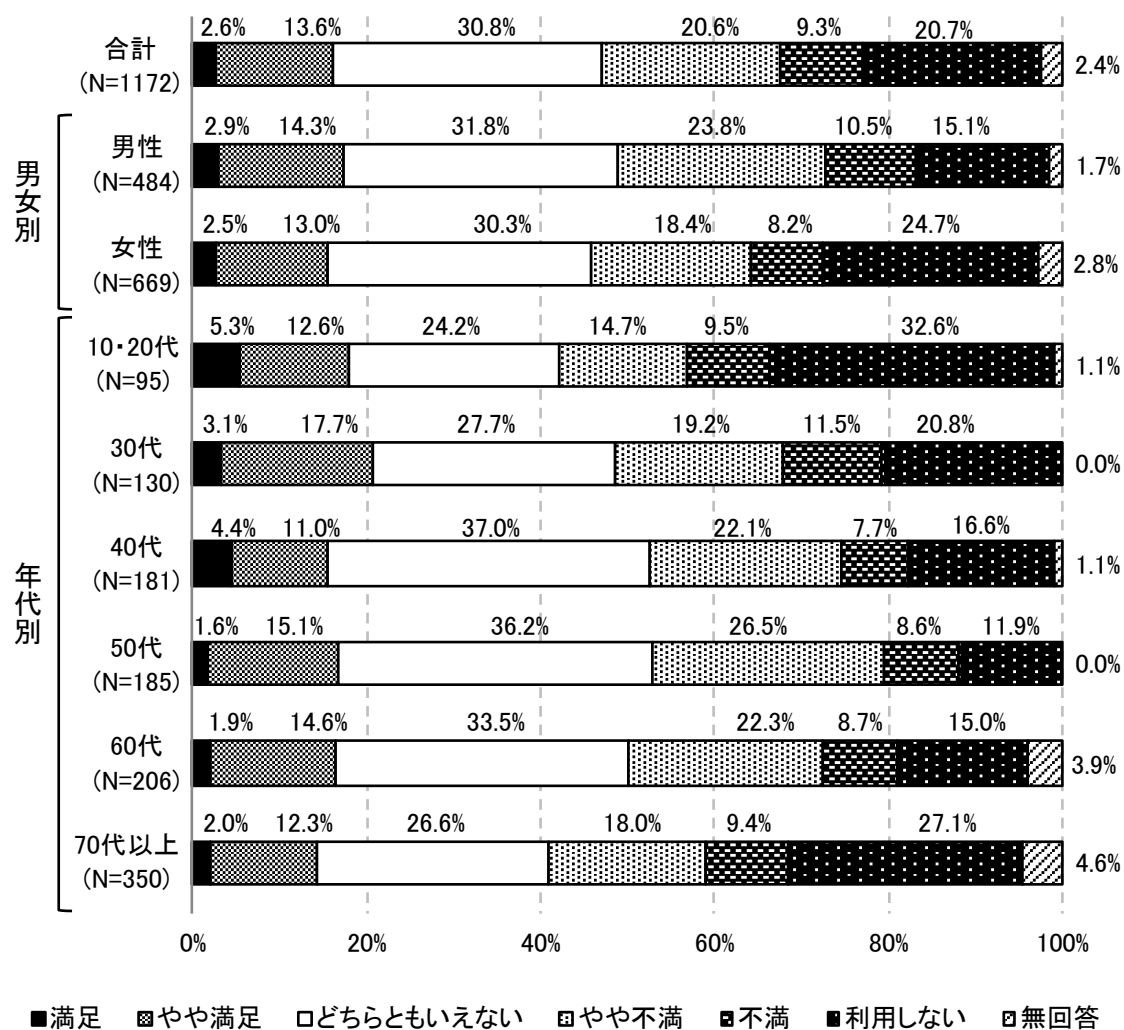


図 32 Q8P 交通手段満足度 自動車：駐車場

Q8Q のタクシーの利用しやすさの満足度に関して、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。

「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上で 36.5%と最も高い。反対に 40 代が 22.7%と最も低い（図 33）。

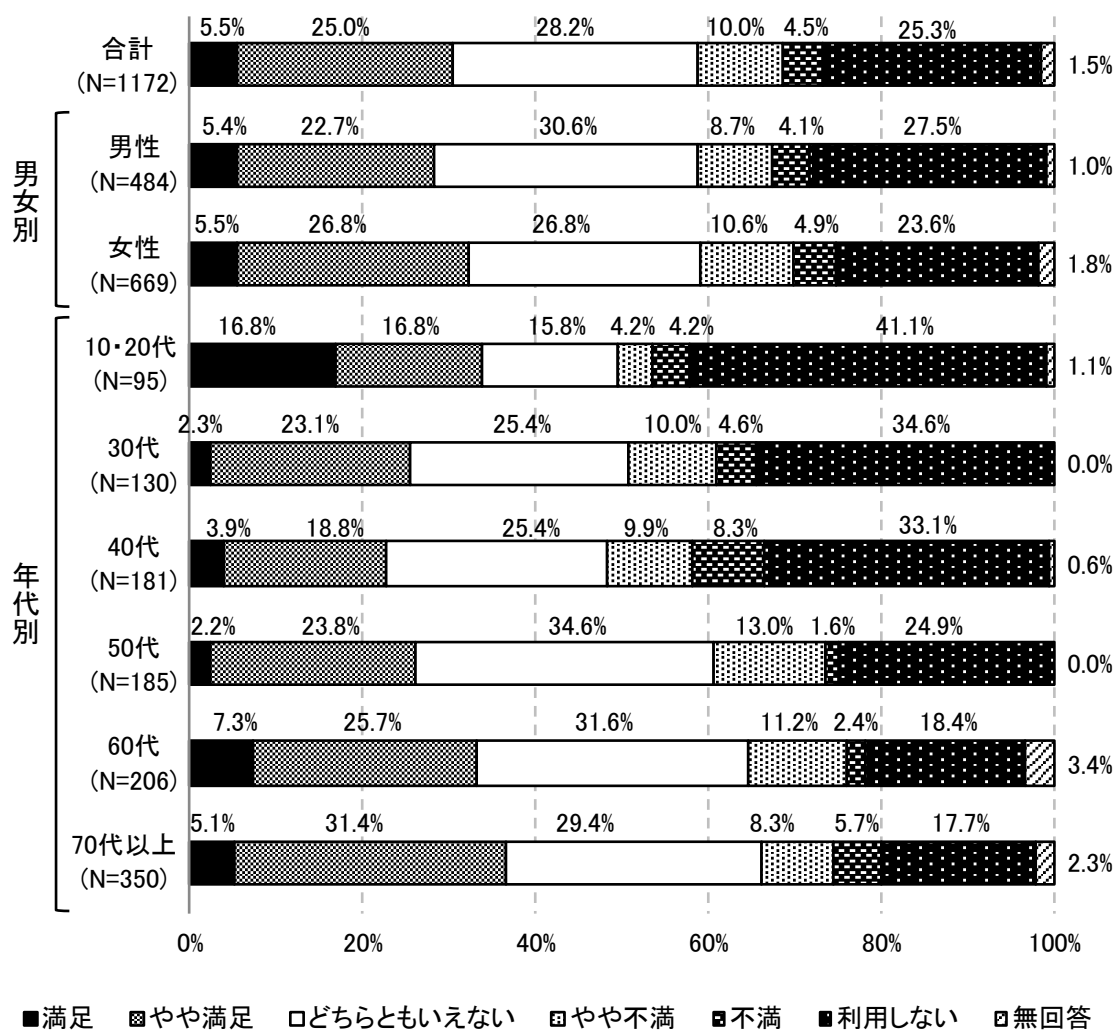


図 33 Q8Q 交通手段満足度 タクシー：利用しやすさ

Q8R の駅前広場の満足度に関して、年代別で見ると、50 代および 60 代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 35.8%と最も高い。反対に 50 代が 17.8%と最も低い（図 34）。

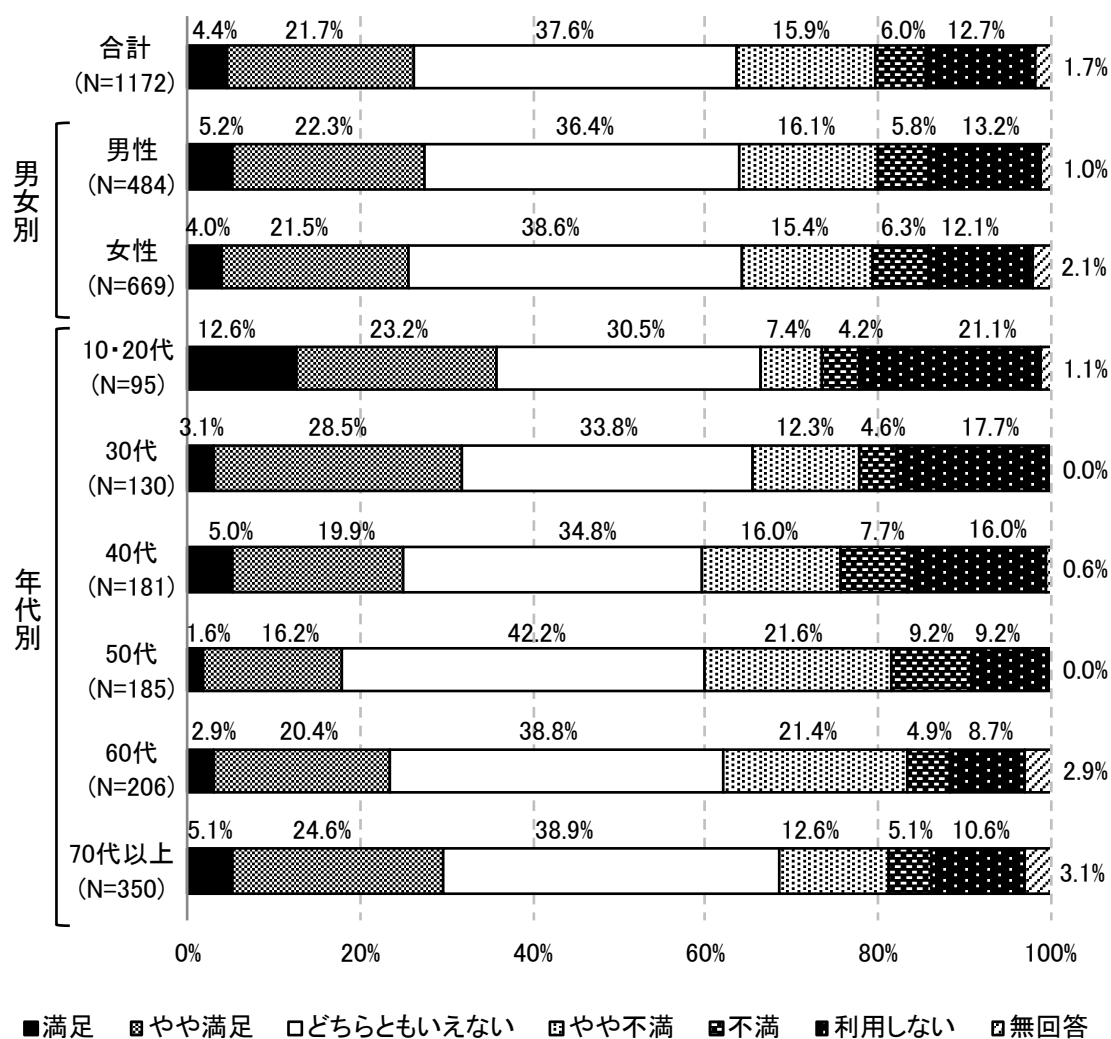
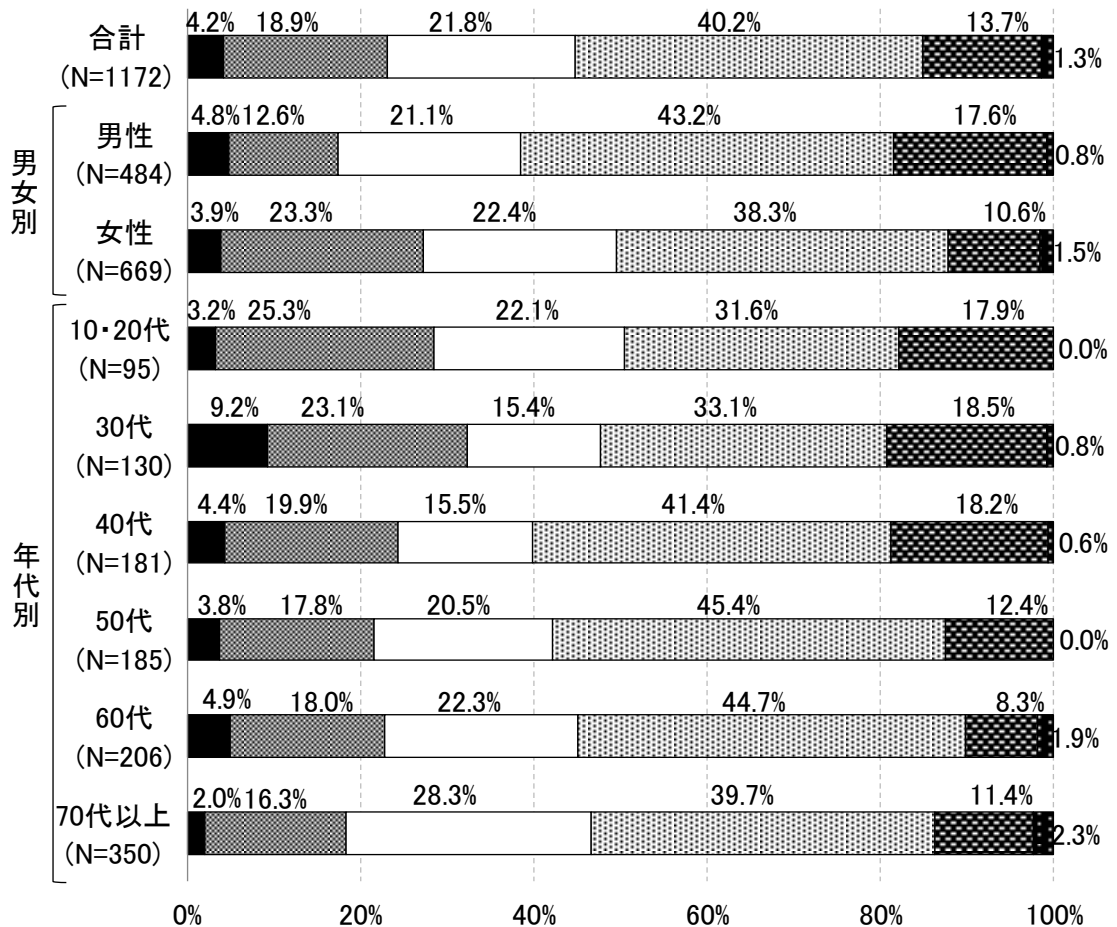


図 34 Q8R 交通手段満足度 その他：駅前広場

Q9 の高槻市に地域ブランドがあると思うかに関して、男女別で見ると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合が男性で 60.8%、女性が 48.9%であり、男性の方が 10 ポイントほど高い。年代別で見ると、すべての年代で、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合の方が「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合よりも高い（図 35）。



■ そう思う ■ ややそう思う □ どちらともいえない ▨ あまりそう思わない ▩ そう思わない ■ 無回答

図 35 Q9 高槻市に地域ブランドがあると思うか

Q10 の中心市街地に行く頻度が 3 年前と比べて増加したかに関して、年代別で見ると、70 代以上では、「減少した」または「少し減少した」と回答した人の割合の方が「増加した」または「少し増加した」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「増加した」または「少し増加した」と回答した人の割合が「減少した」または「少し減少した」と回答した人の割合よりも高い。10・20 代は「増加した」と回答した人の割合が 27.4%と最も高い。反対に、50 代が 4.9%と最も低い（図 36）。

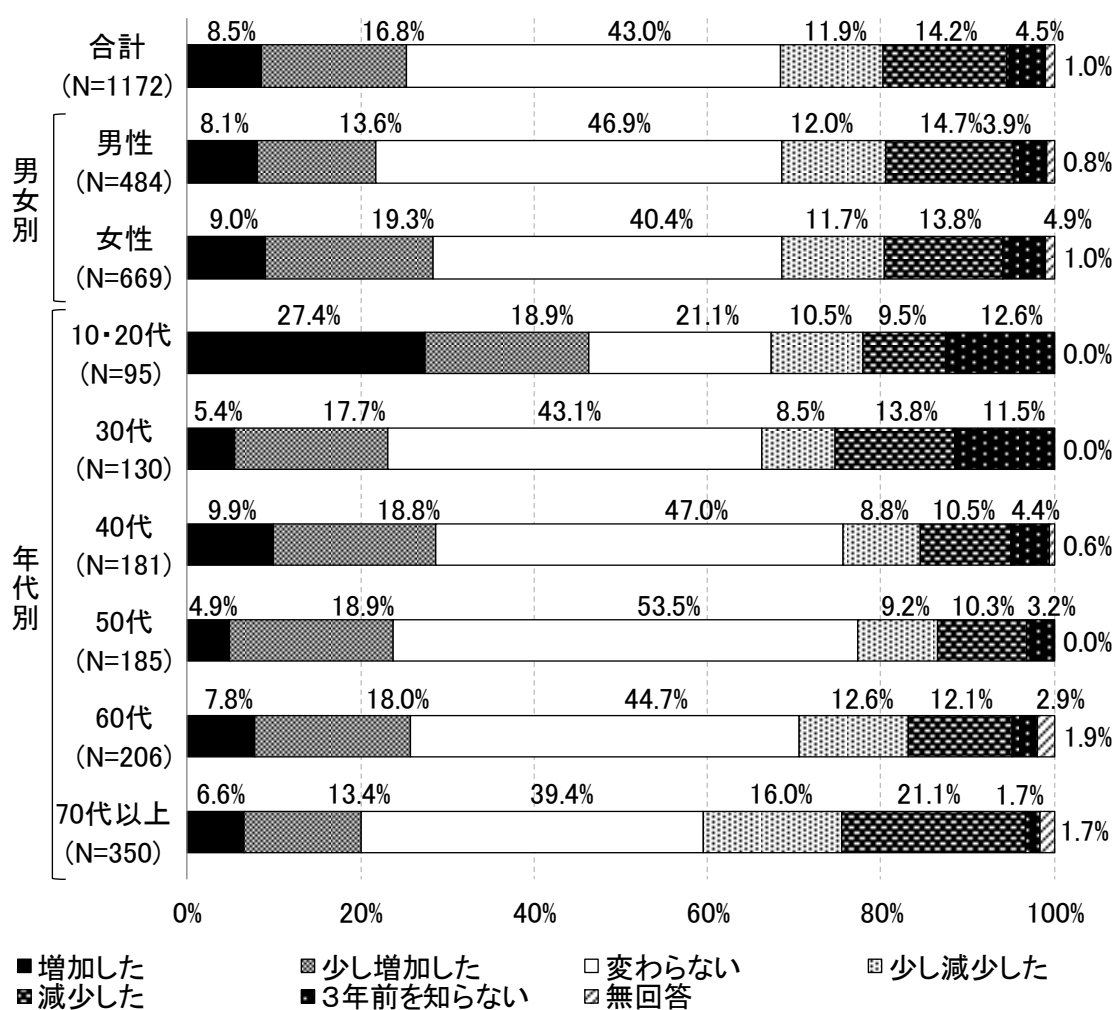


図 36 Q10 の中心市街地に行く頻度が 3 年前と比べて増加したか

Q11A の 3 年前と比べた場合の中心市街地の防災面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が 1 割以下である。さらに「向上した」の割合を年代別で見ると、40 代が 2 割未満であるが、それ以外の年代が 2 割以上である。(図 37)。

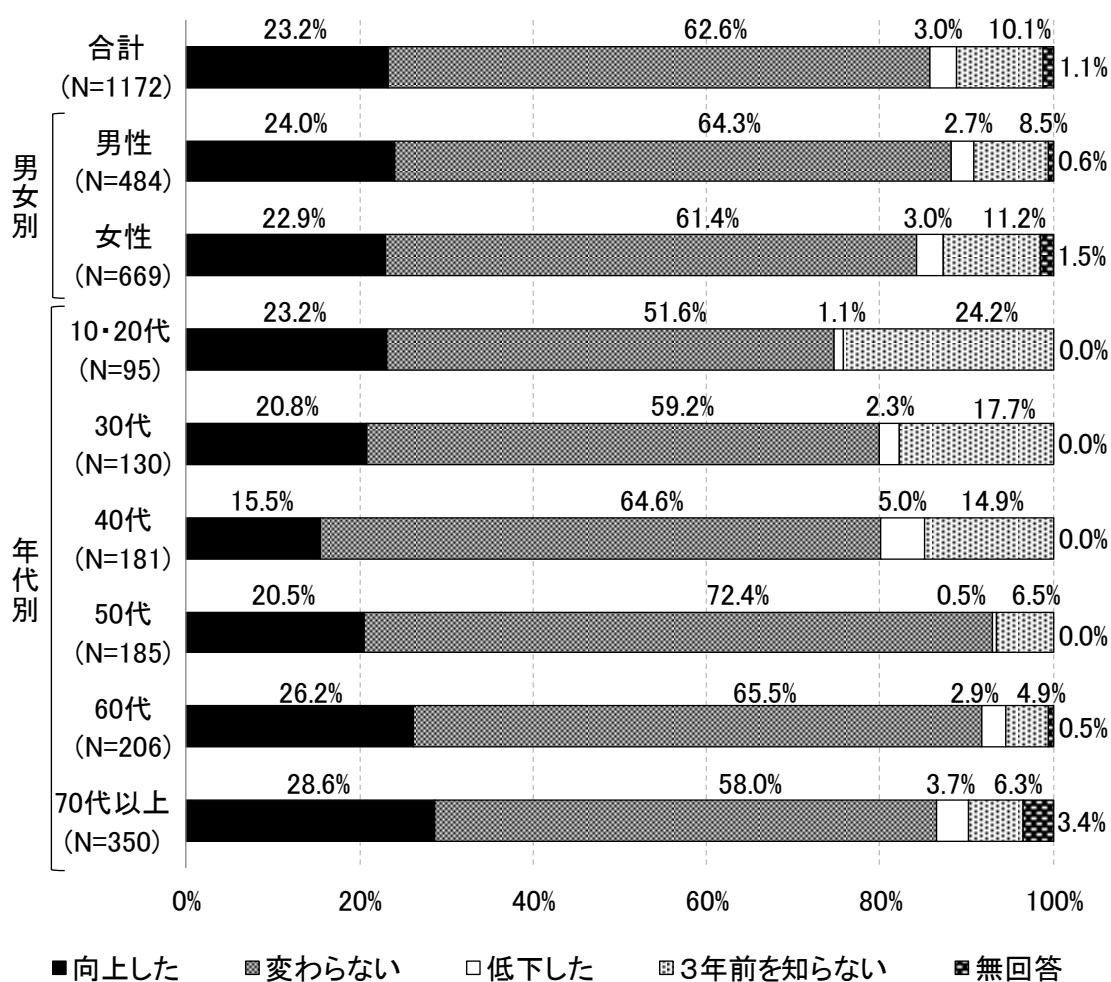


図 37 Q11A 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 防災面での安全性や快適性

Q11B の 3 年前と比べた場合の中心市街地の防犯面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合を年代別で見ると、10・20 代が 21.1%であるが、それ以外の年代が 2 割未満である(図 38)。

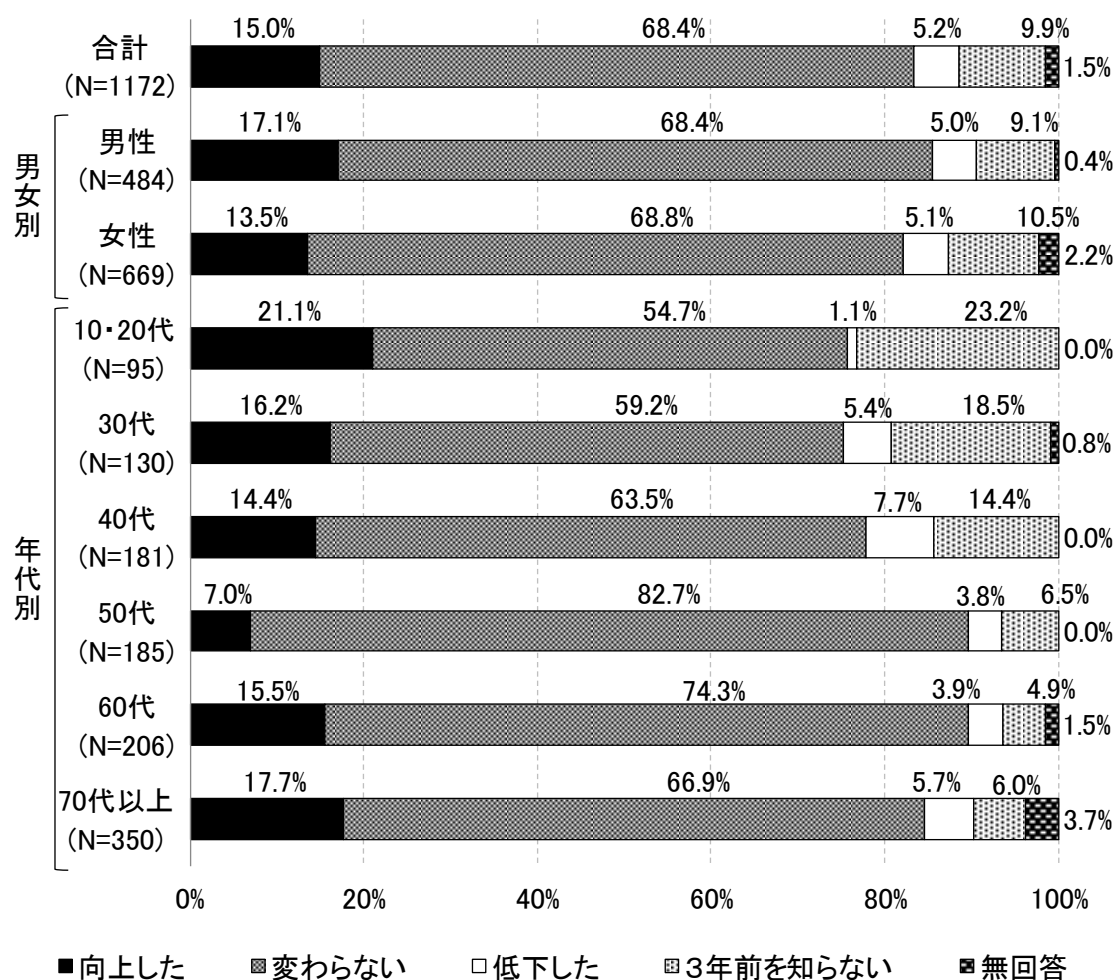


図 38 Q11B 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 防犯面での安全性や快適性

Q11C の 3 年前と比べた場合の中心市街地の居住環境に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が 1 割以下である。「向上した」の割合を年代別で見ると、70 代以上を除くすべての層で約 2 割である。70 代以上は 14.9%である（図 39）。

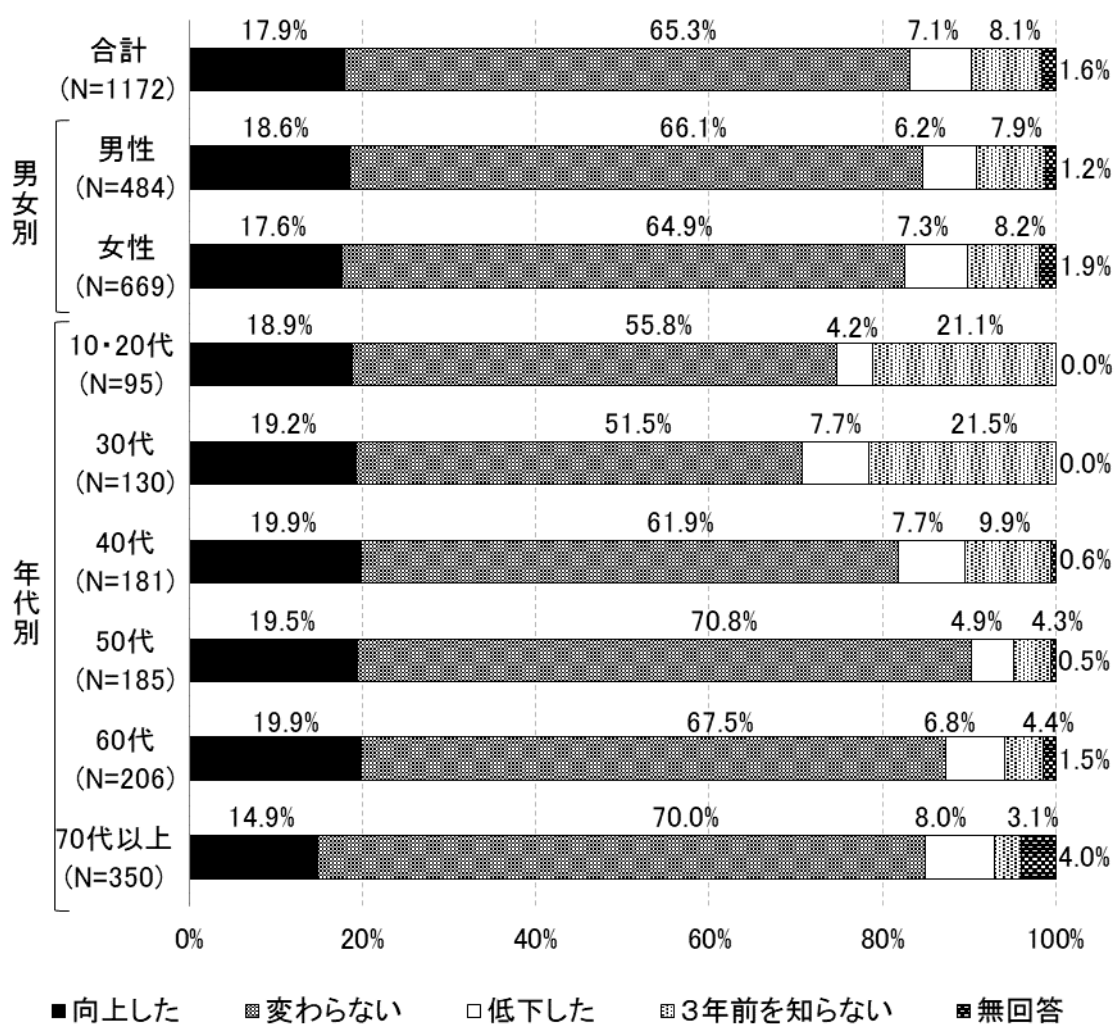


図 39 Q11C 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 居住環境

Q11D の 3 年前と比べた場合の中心市街地の公共交通機関の利便性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合は、男女ともに 2 割以上である。年代別で見ると、「向上した」の割合は、40 代と 50 代を除くすべての年代が 2 割以上であり、10・20 代が 30.5%と最も高く、反対に 40 代が 17.1%と最も低い（図 40）。

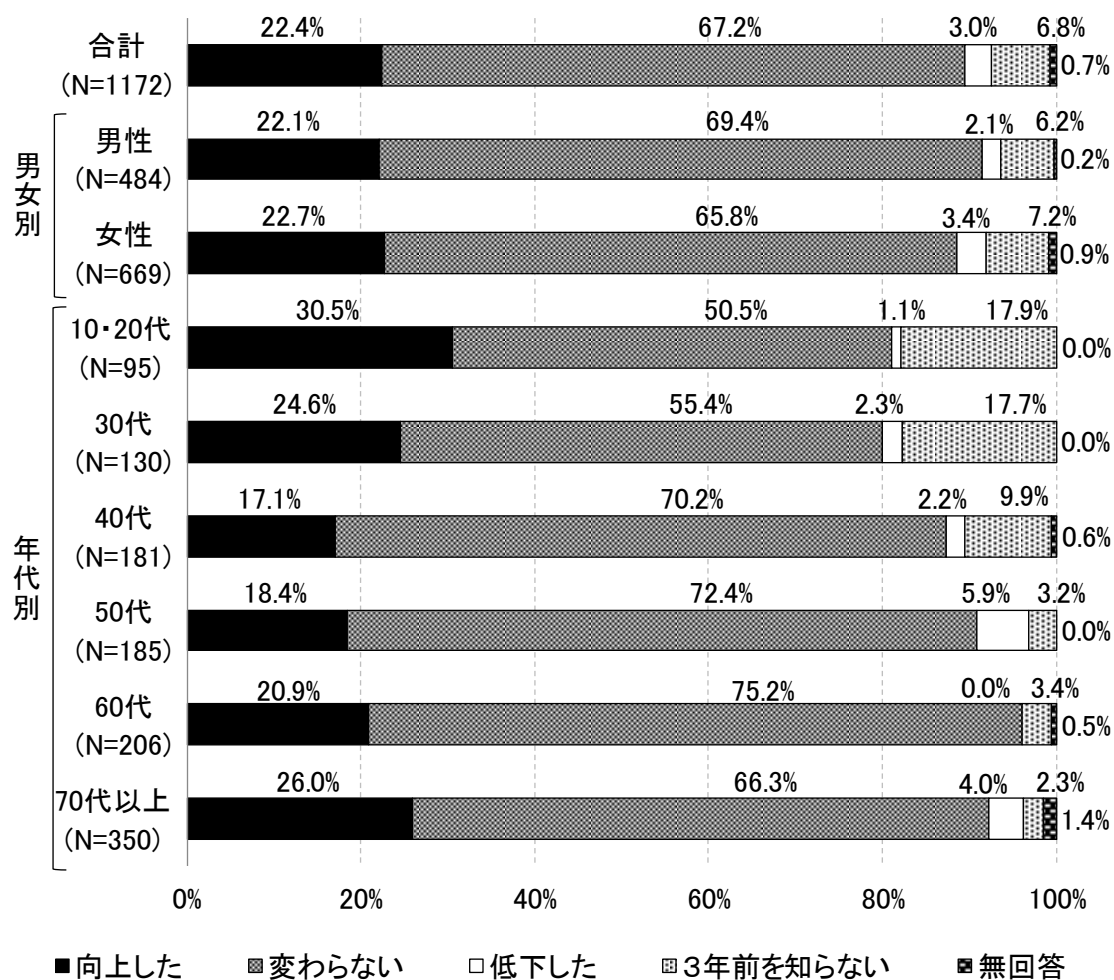


図 40 Q11D 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 公共交通機関の利便性

Q11E の 3 年前と比べた場合の中心市街地の歩行者にとっての歩きやすさに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1 割以上である。年代別で見ると、「向上した」の割合は、10・20 代が 26.3%と最も高い。反対に 50 代が、11.9%と最も低い（図 41）。

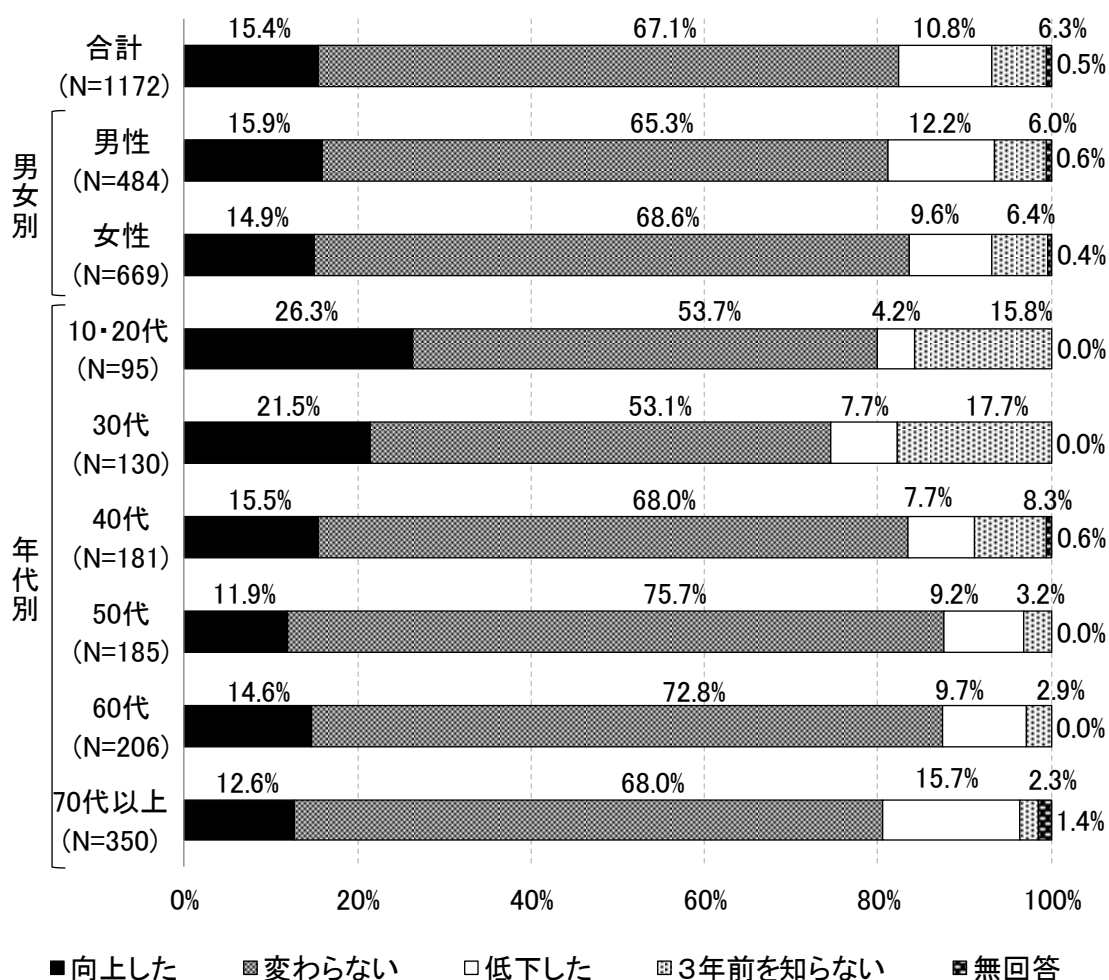


図 41 Q11E 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 歩行者にとっての歩きやすさ

Q11Fの3年前と比べた場合の中心市街地の風紀や治安に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」「低下した」の割合は、すべての層で1割程度となっている。年代別で見ると「向上した」の割合は、10・20代と30代が1割以上である。(図 42)。

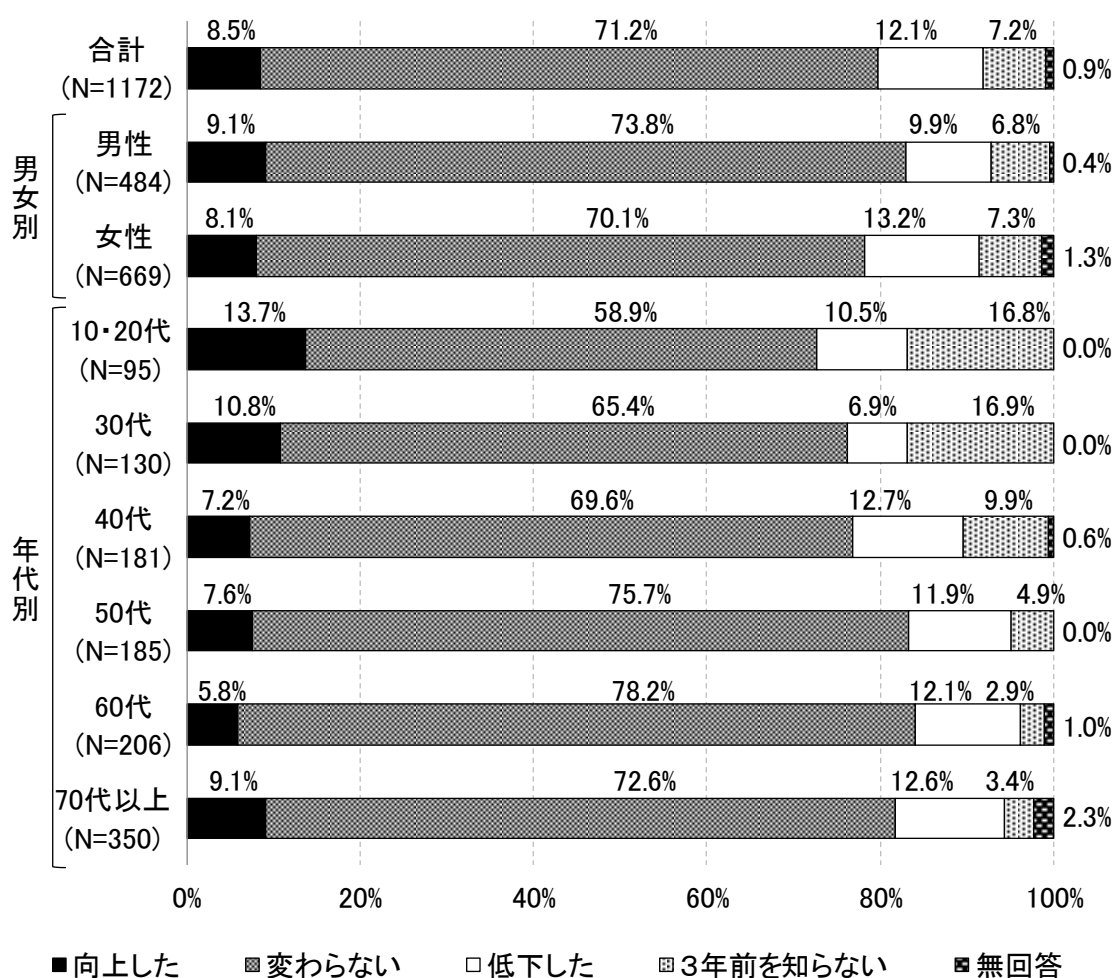


図 42 Q11F 中心市街地で3年前と比べて向上したか 風紀や治安

Q12A～Q12K が、中心市街地において、それぞれが 3 年前と比べて増加したか減少したかを質問している。なお、Q12A～Q12K のいずれにおいても、10・20 代が「3 年前を知らない」の割合がきわめて高くなっていることに注意が必要である。

Q12A の文化活動に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、10・20 代を除くすべての年代が 2 割以上である。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1 割に満たない（図 43）。

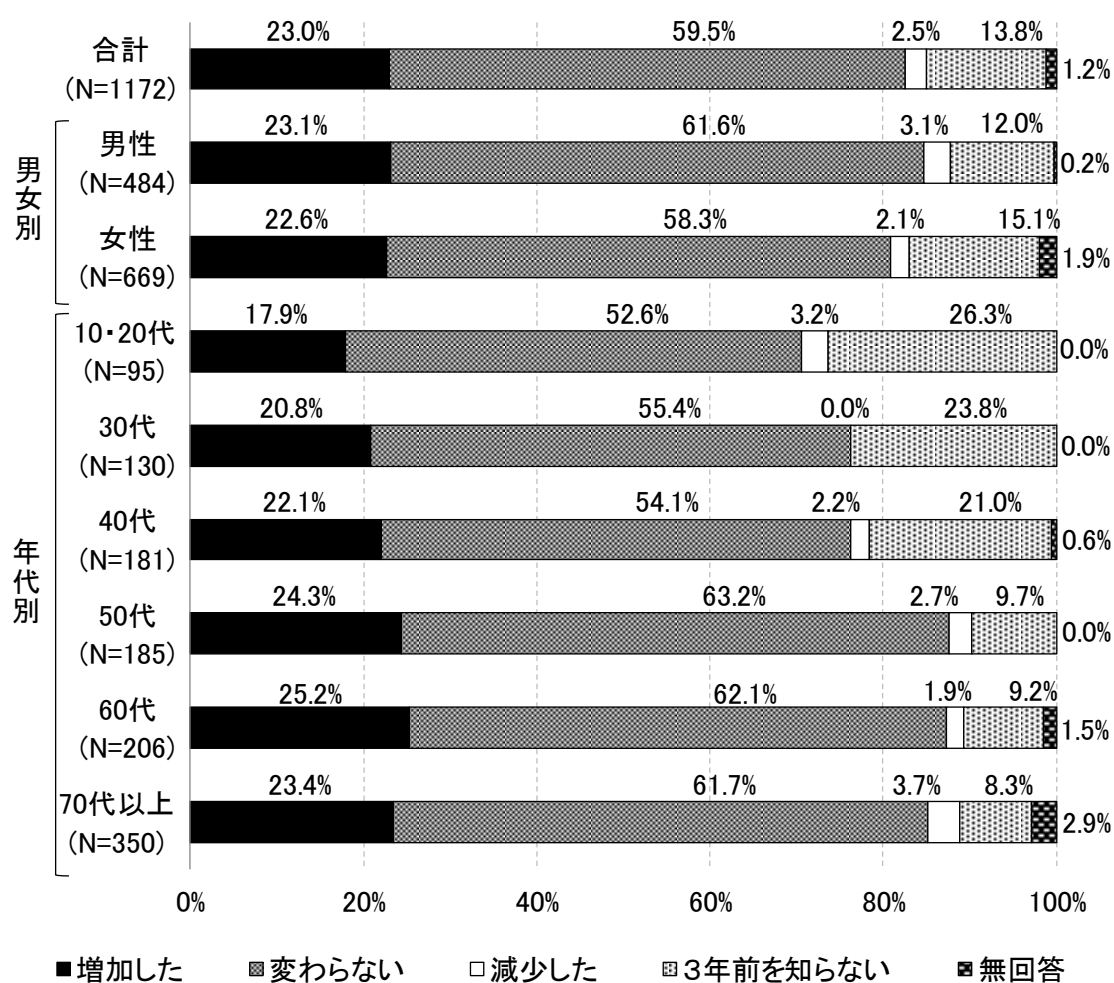


図 43 Q12A 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか 文化活動

Q12B のコミュニティ活動に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、すべての年代の中で 70 代以上のみが 2 割以上である。「減少した」の割合は、すべての層で 1 割未満である（図 44）。

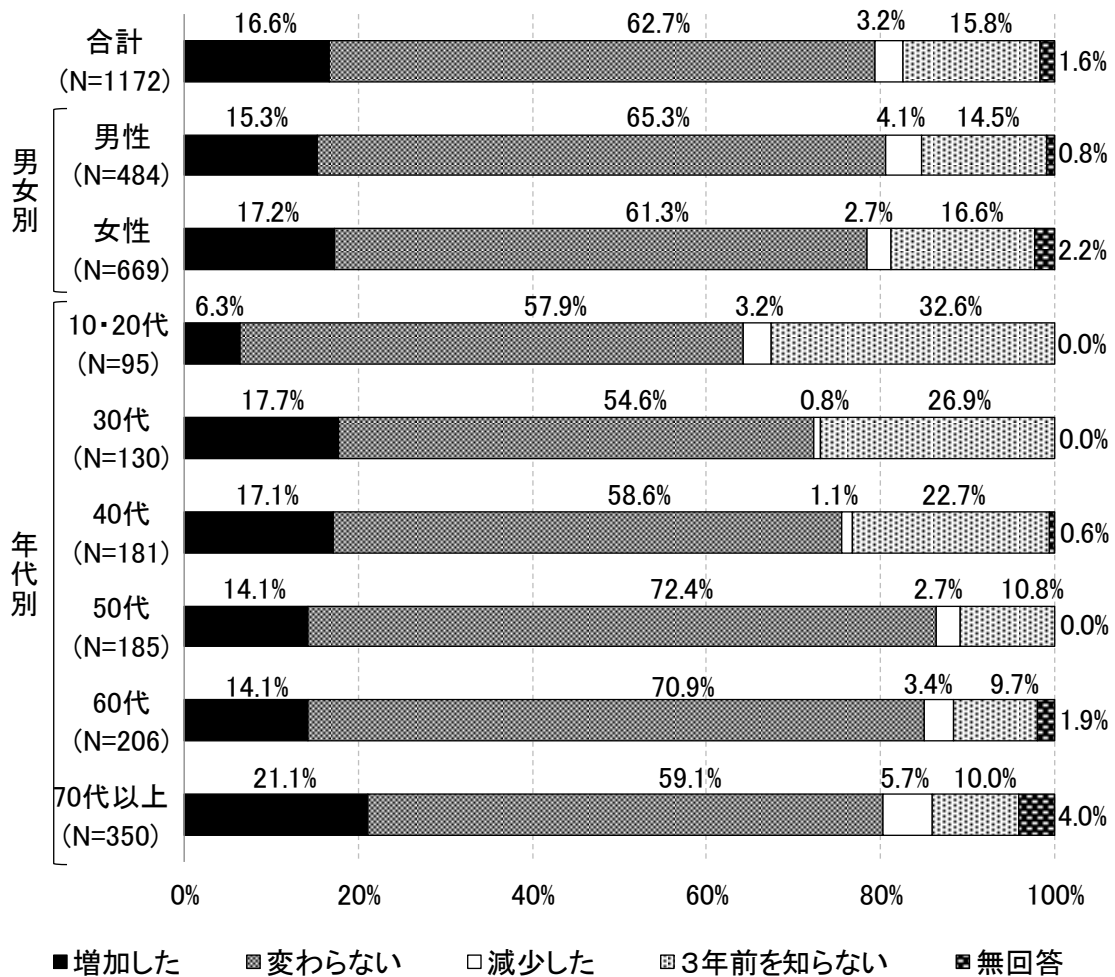


図 44 Q12B 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか コミュニティ活動

Q12C の商店街の魅力に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 2 割未満である。「減少した」の割合は、すべての年代が 1 割から 2 割程度である（図 45）。

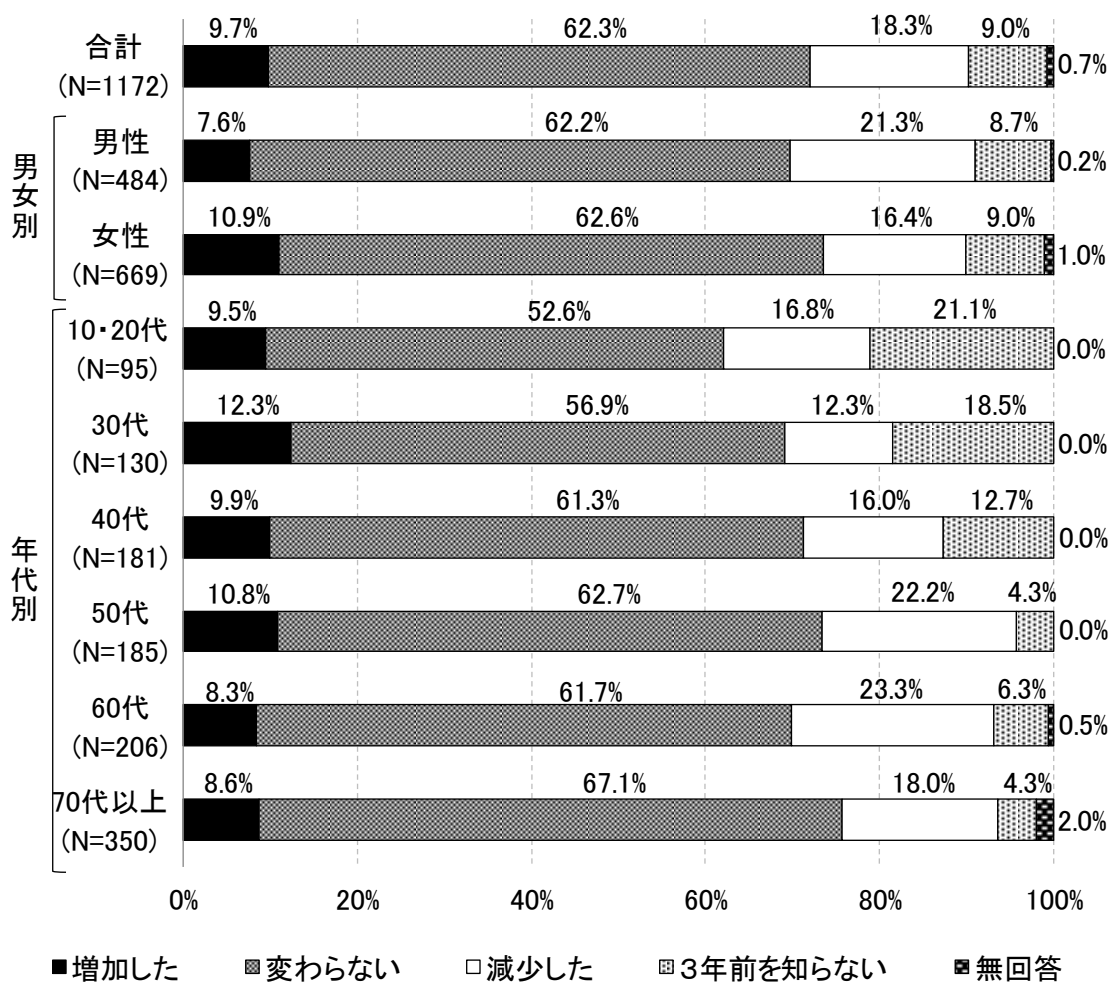


図 45 Q12C 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか 商店街の魅力

Q12D の百貨店などの大型店の魅力に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、10・20代と30代を除くすべての年代が10%未満である。「減少した」の割合は、すべての年代が1割から2割程度である(図46)。

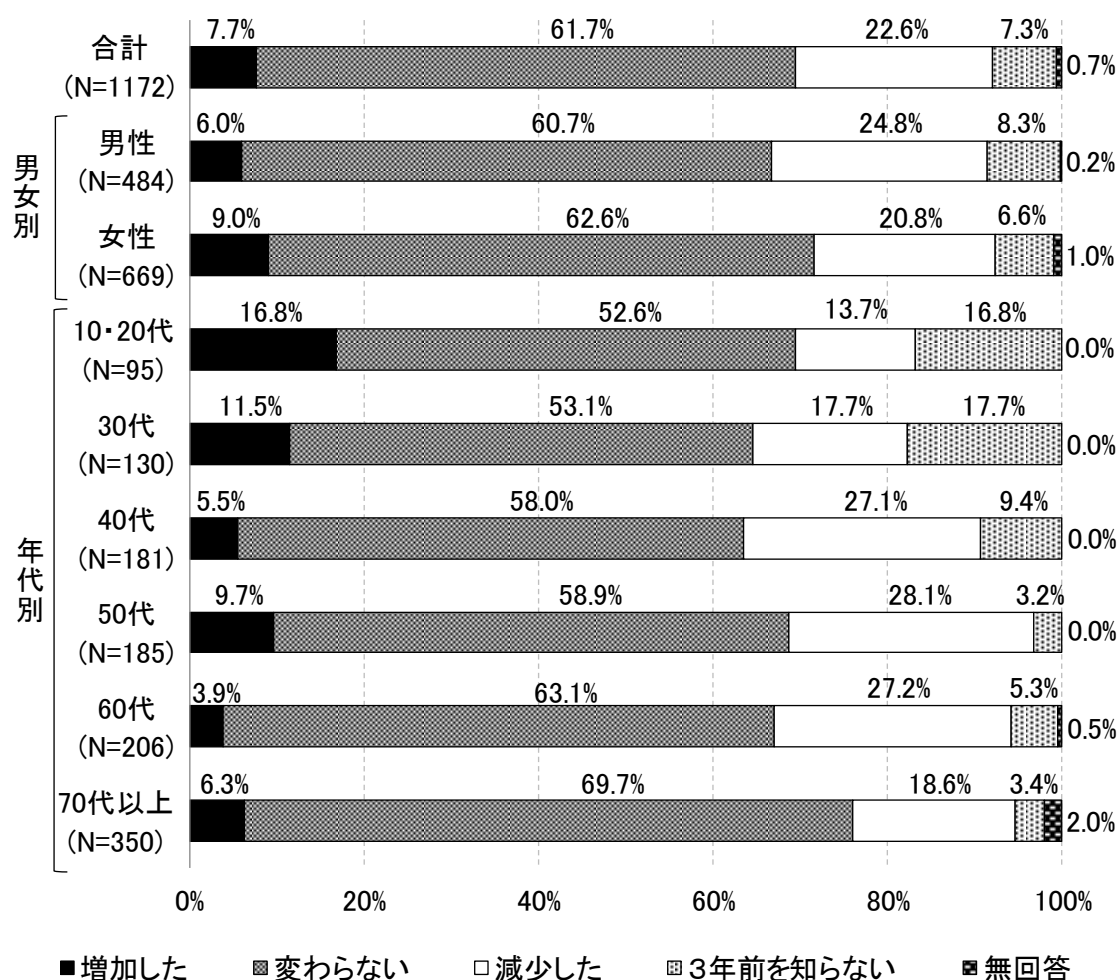


図 46 Q12D 中心市街地で3年前と比べて増加したか 百貨店などの大型店の魅力

Q12E の買い物やイベントでのにぎわいに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、60代と70代以上を除くすべての年代が2割以上である。「減少した」の割合は、30代と40代を除くすべての年代が1割から2割程度である（図 47）。

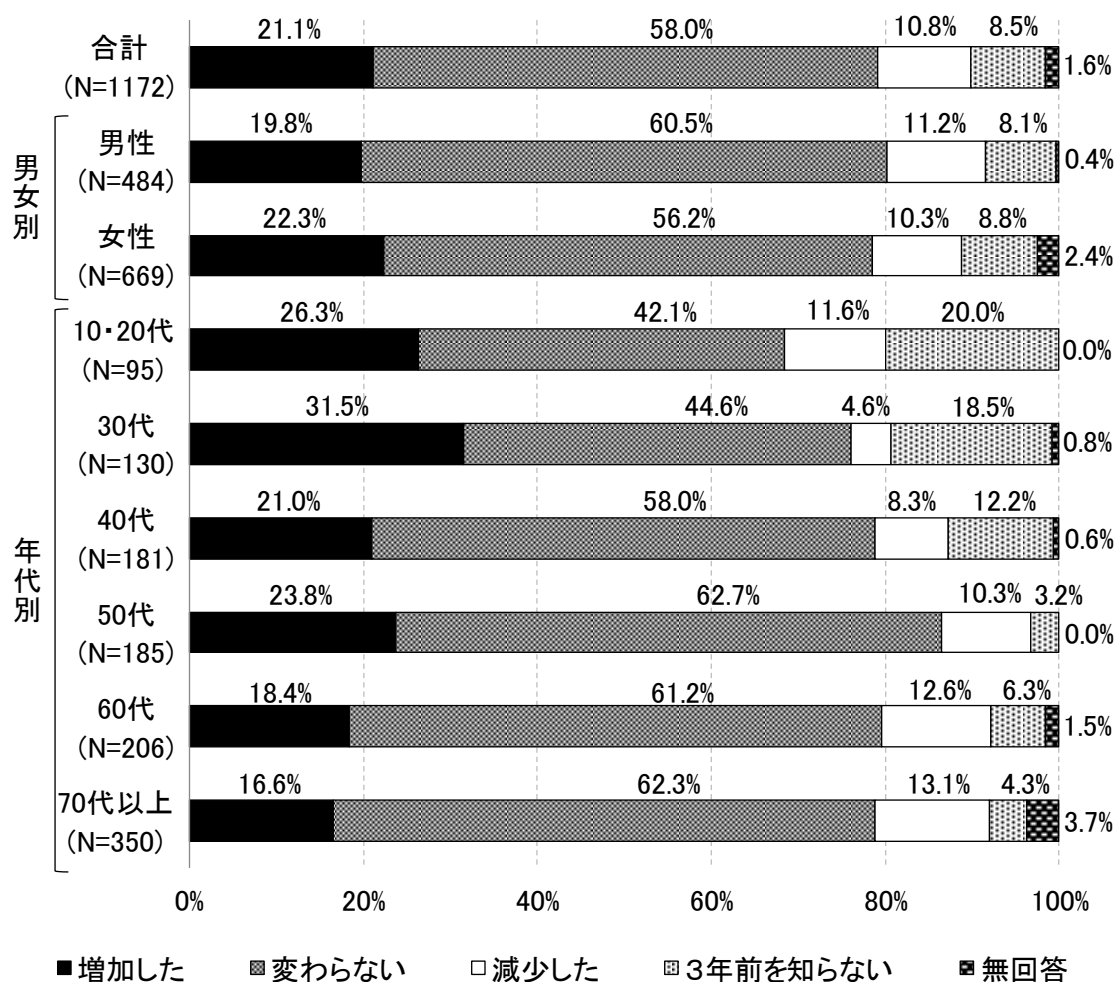


図 47 Q12E 中心市街地で3年前と比べて増加したか 買い物やイベントでのにぎわい

Q12F の魅力的な飲食店に関して、年代別で見ると、「増加した」の割合は、10・20 代が 48.4%と最も高く、反対に 70 代以上で 18.6%と最も低い。「変わらない」の割合は、70 代以上が 55.4%と最も高く、反対に 10・20 代で 29.5%と最も低い（図 48）。

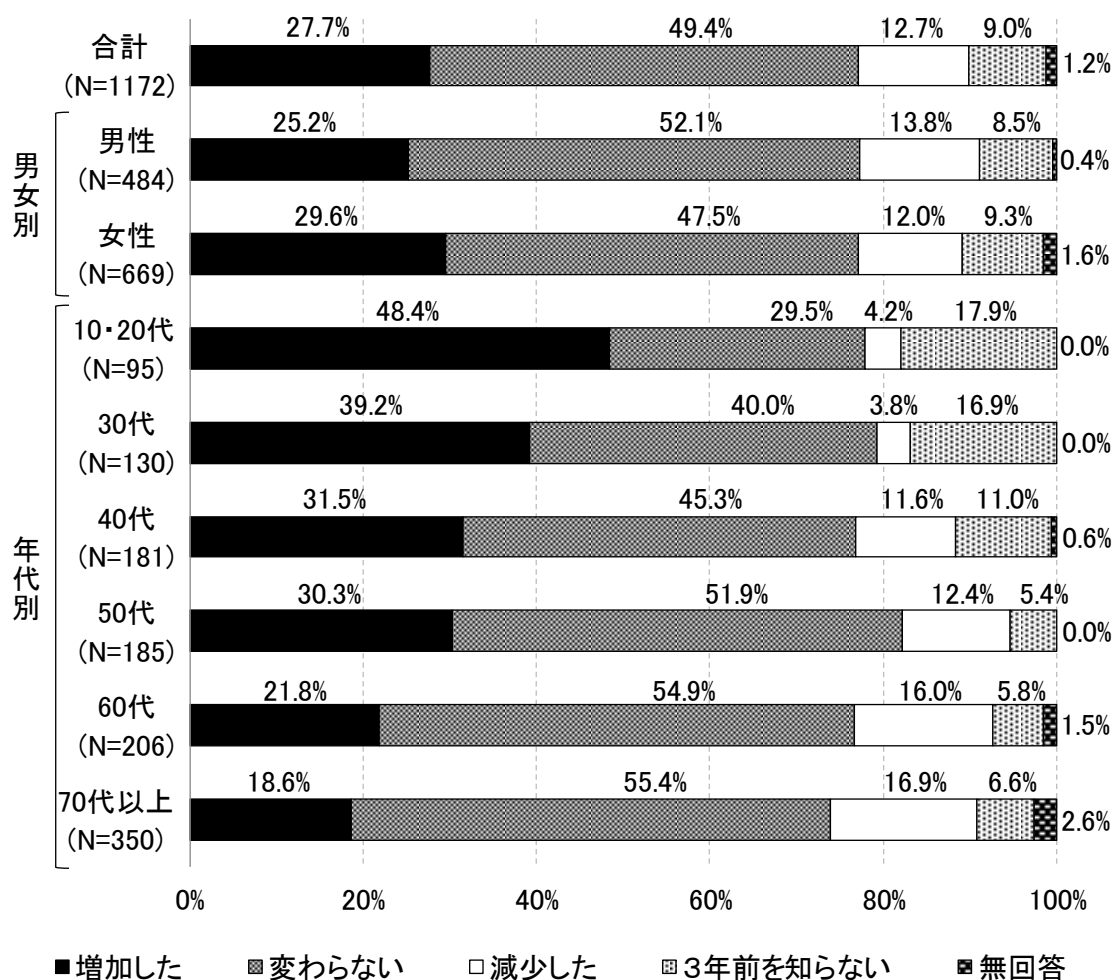


図 48 Q12F 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか 魅力的な飲食店

Q12G のオフィスなどの業務施設に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、男女別・年代別のすべての層で「増加した」と「減少した」の割合はいずれも 1 割未満である（図 49）。

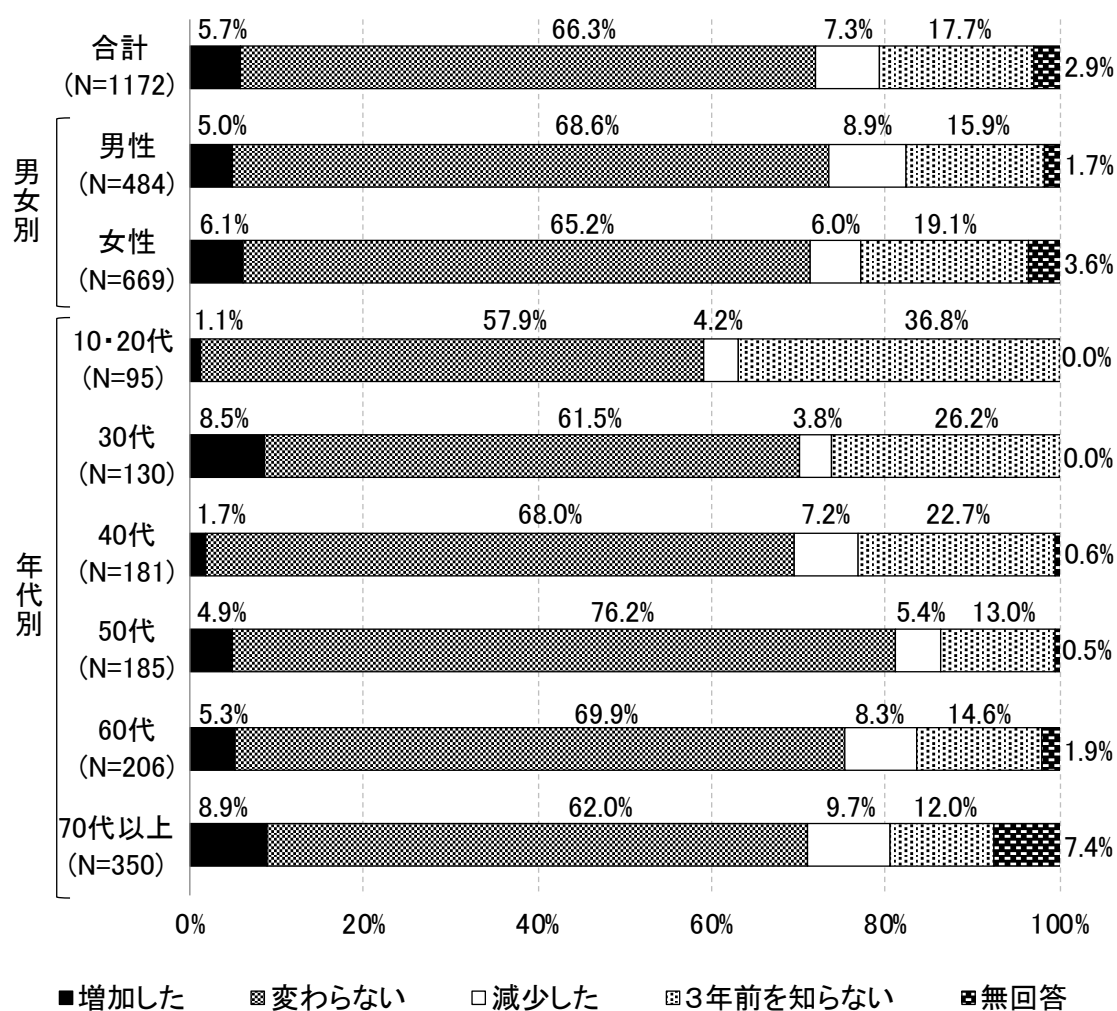


図 49 Q12G 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか オフィスなど業務施設

Q12H の病院などの医療機関に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、年代別で見ると、「増加した」の割合は 30 代、50 代、70 代以上は 3 割を超えているが、40 代は 21.0%と最も低い。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1 割未満である（図 50）。

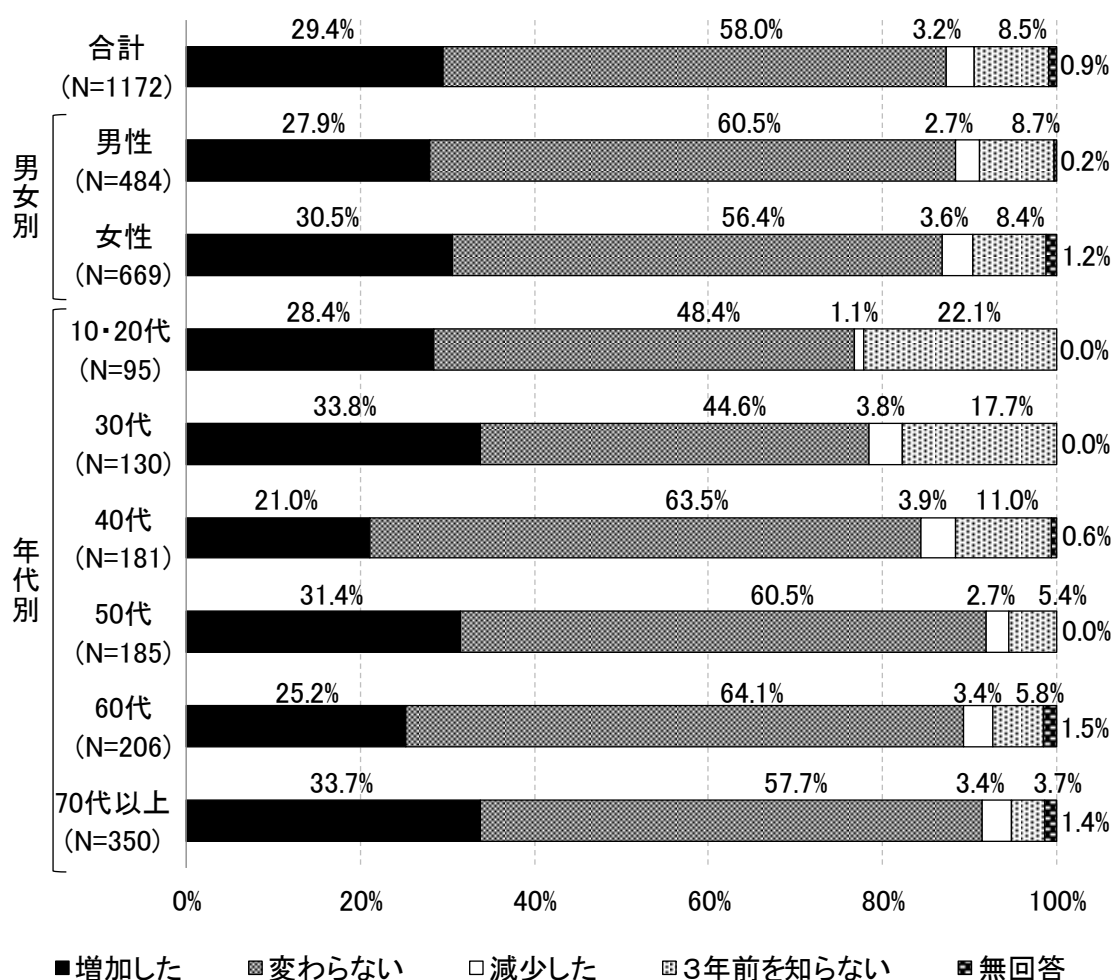


図 50 Q12H 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか 病院などの医療機関

Q12I の道路の渋滞に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は 30 代を除き、すべての年代が 2 割以上である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 2 割未満である（図 51）。

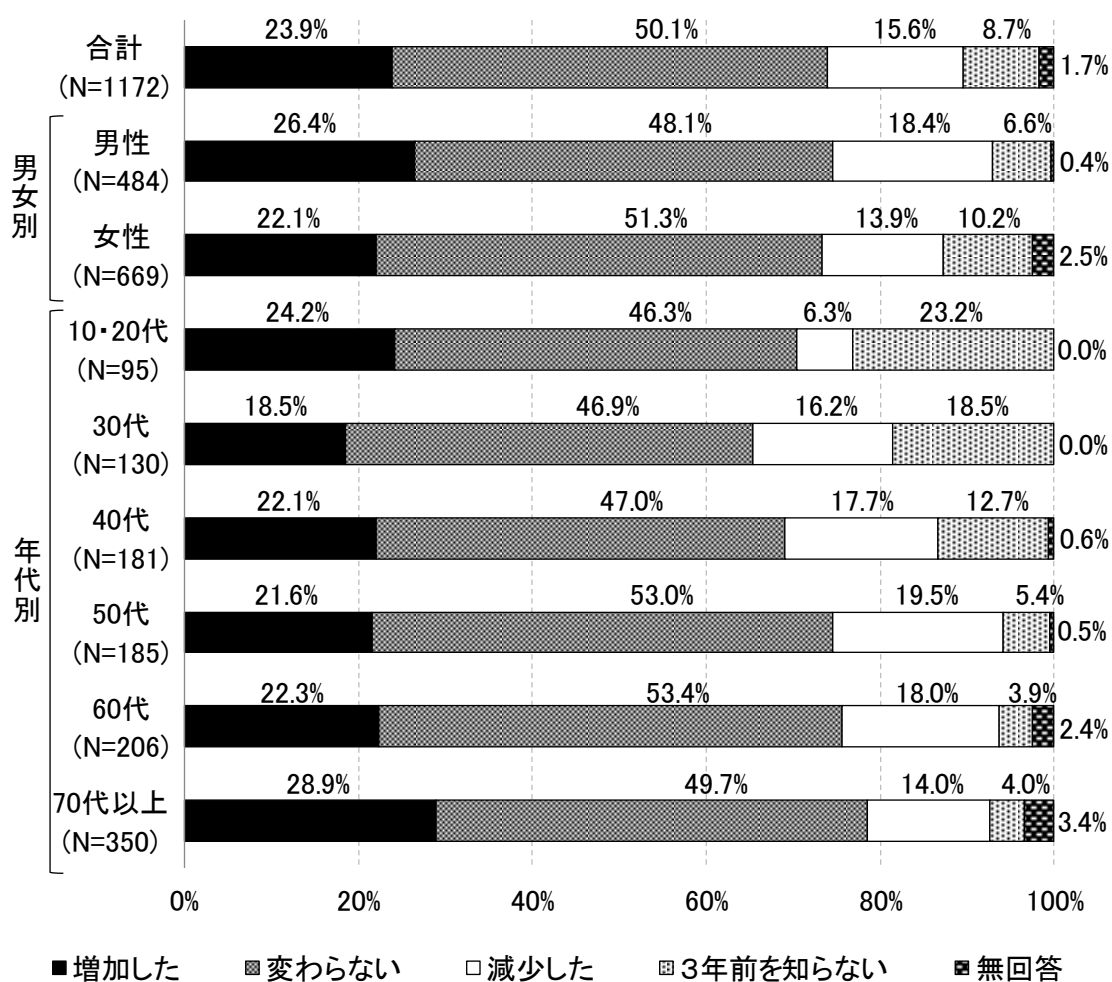


図 51 Q12I 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか 道路の渋滞

Q12Jの駐輪場に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、30代が20.8%と最も高く、反対に40代が14.4%と最も低い。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である（図52）。

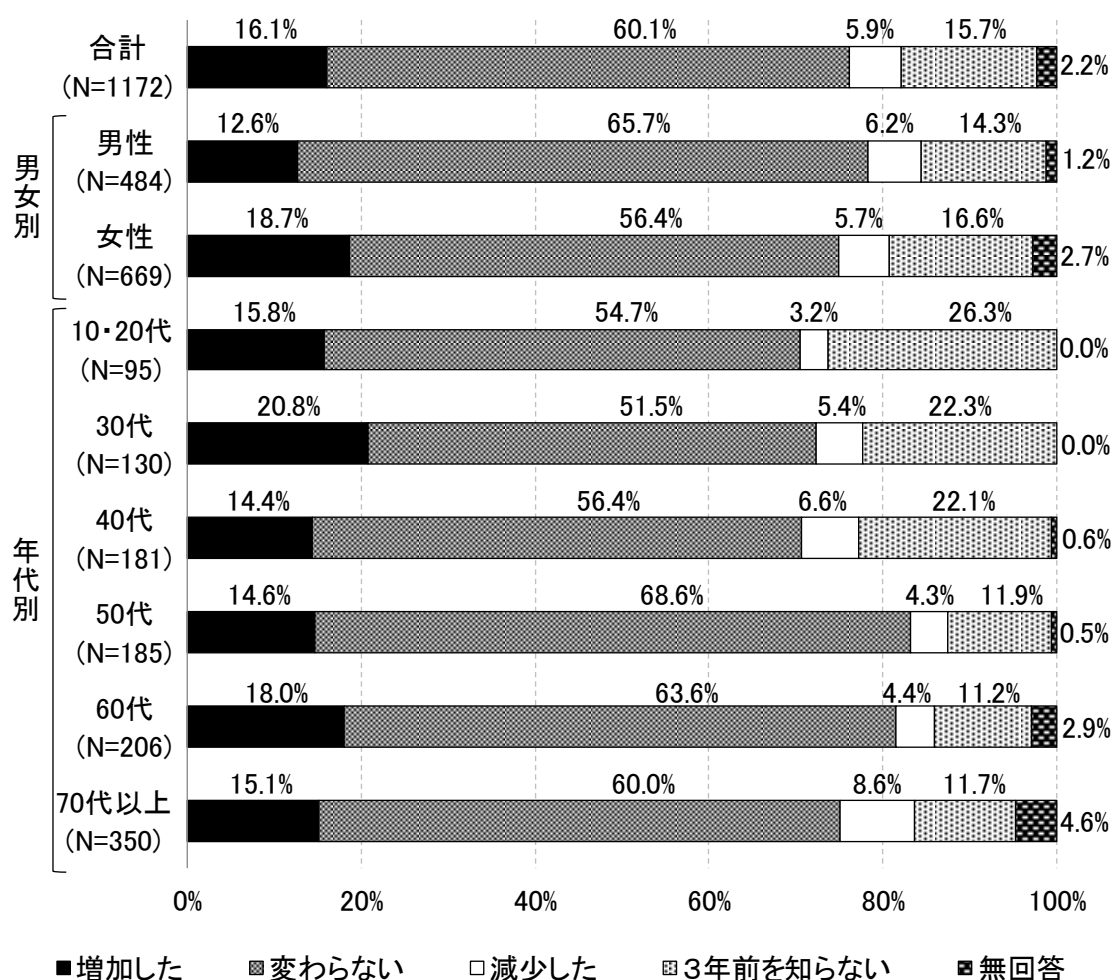


図 52 Q12J 中心市街地で3年前と比べて増加したか 駐輪場

Q12K の街なかの緑や潤いに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。「増加した」の割合は、10・20代が16.8%と最も高く、50代が5.9%と最も低い。年代別で見ると、「減少した」の割合は、すべての年代が1割から2割程度である（図 53）。

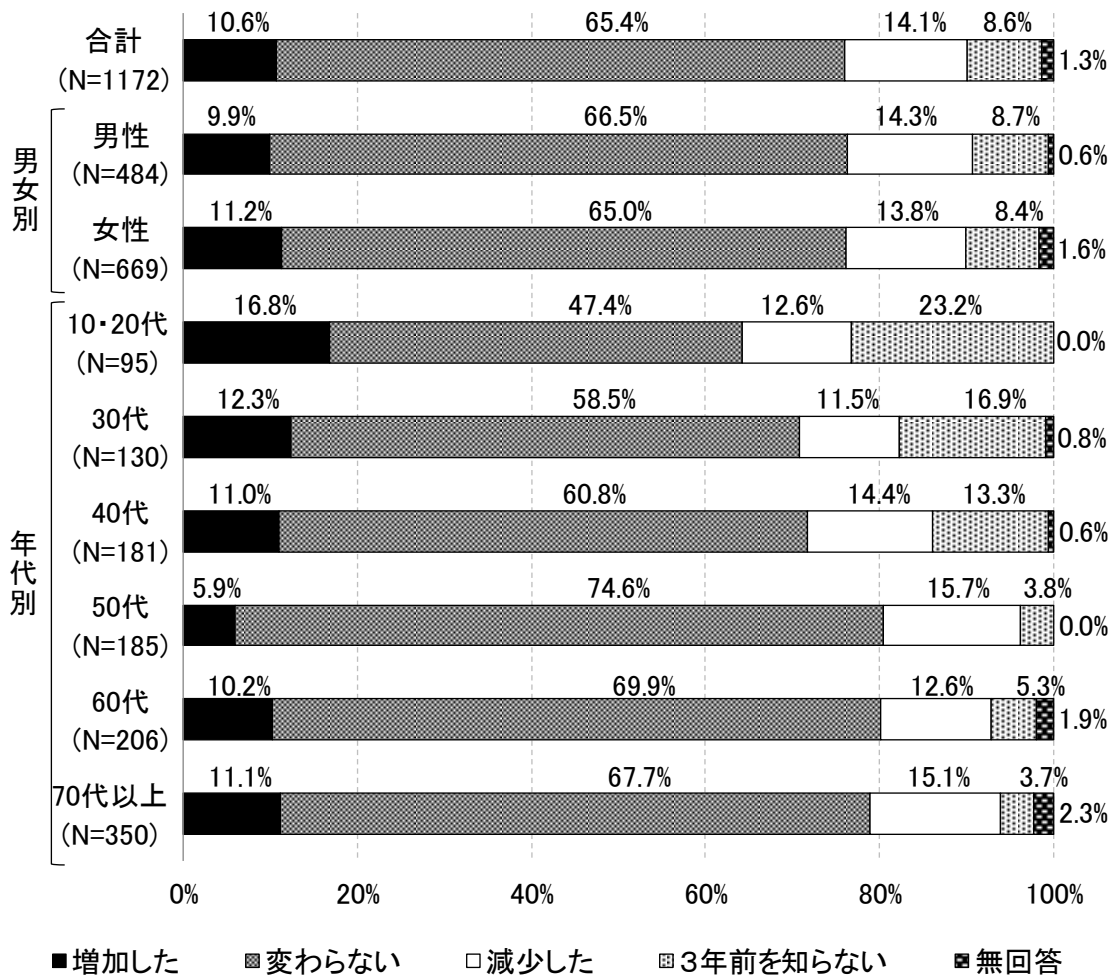


図 53 Q12K 中心市街地で3年前と比べて増加したか 街なかの緑や潤い

Q13 の中心市街地を住み良い街にするための取り組みに関して、「治安・防犯の向上」が 59.1%と最も高く、「医療機能の充実」が 50.8%と続く（図 54）。

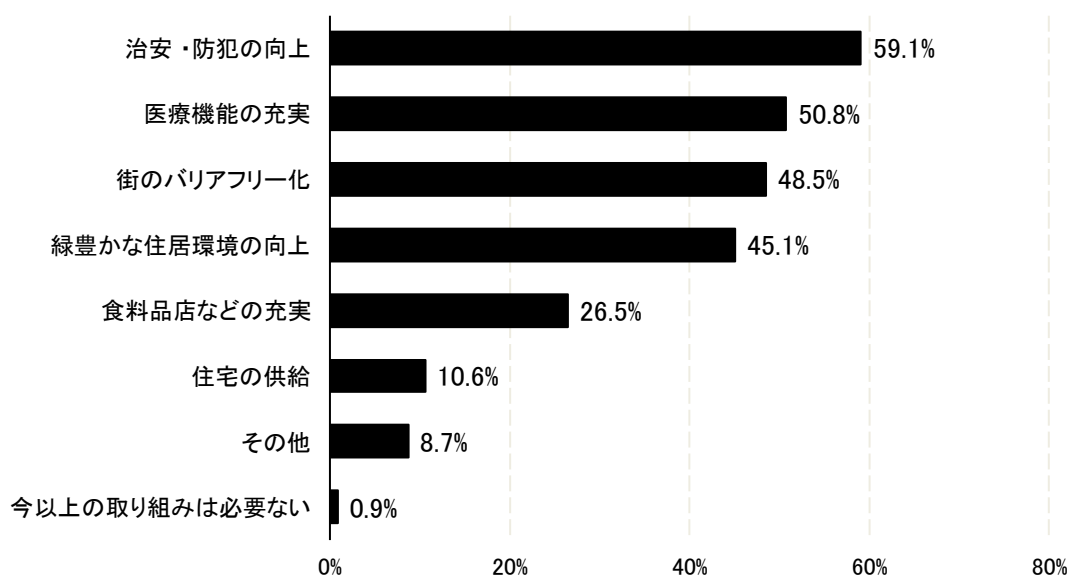


図 54 Q13 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・全体 N=1172）

Q13 の中心市街地を住み良い街にするための取り組みを男女別で見ると、「医療機能の充実」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 5.6 ポイント高い（図 55）。

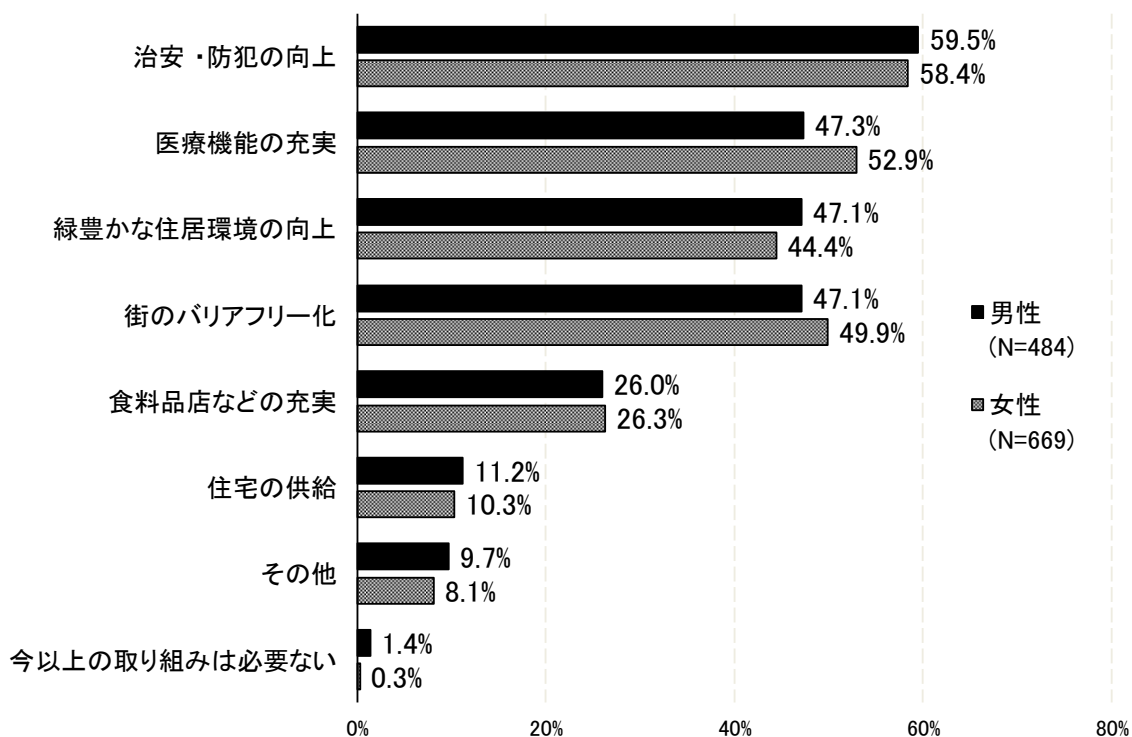


図 55 Q13 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・男女別）

Q13 の中心市街地を住み良い街にするための取り組みを年代別で見ると、「医療機能の充実」は年代で差があり、70 代以上が 59.7%と最も高い。反対に 30 代は 33.1%と最も低い（図 56）。

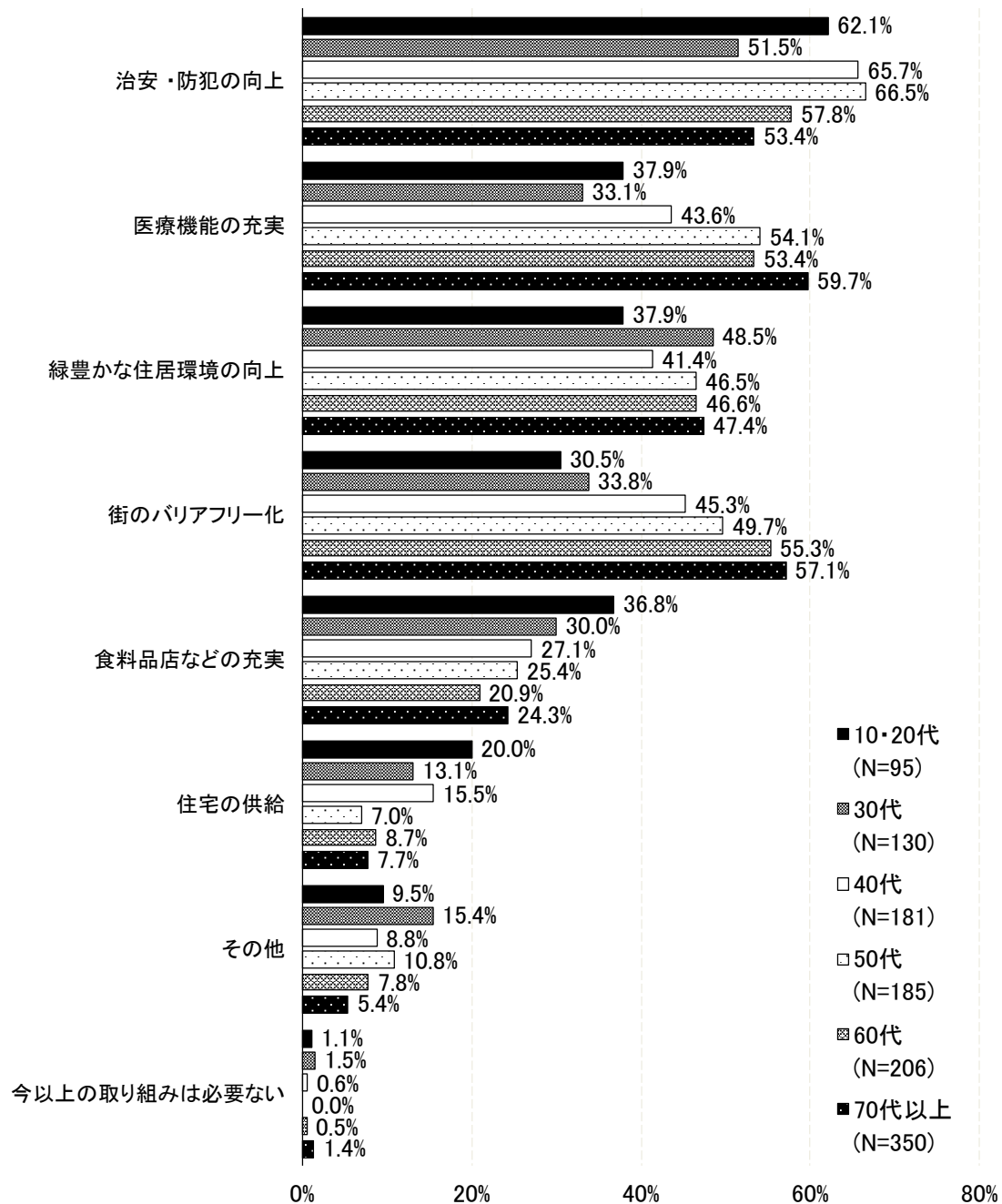


図 56 Q13 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・年代別）

Q14 の環境に関する問題への関心度に関して、「異常気象」が 55.6%と最も高く、「地球温暖化」が 45.6%と続く（図 57）。

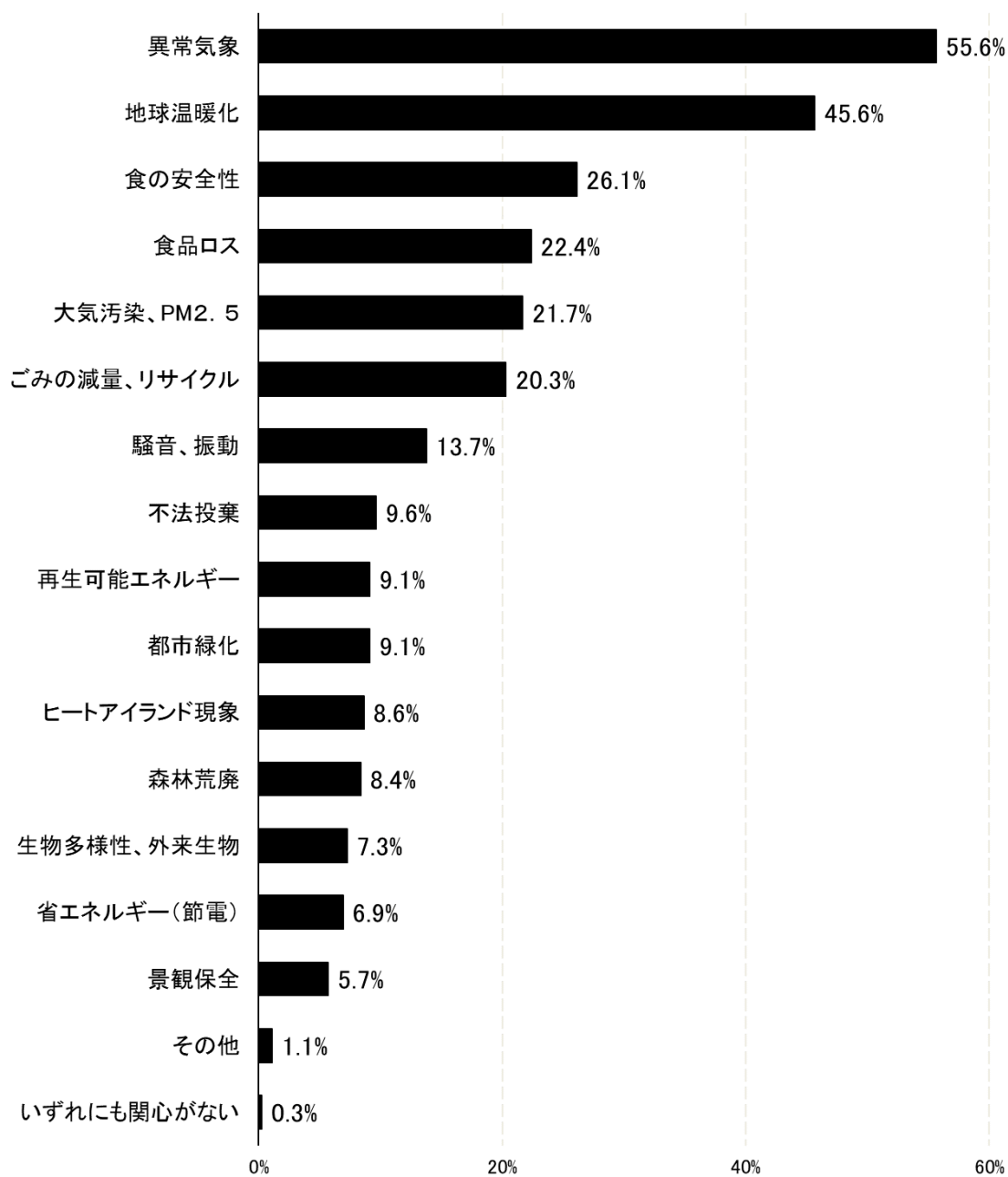


図 57 Q14 環境に関する問題への関心度（複数回答・全体 N=1172）

Q14 の環境に関する問題への関心度を男女別で見ると、「食の安全性」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 12.3 ポイント高い（図 58）。

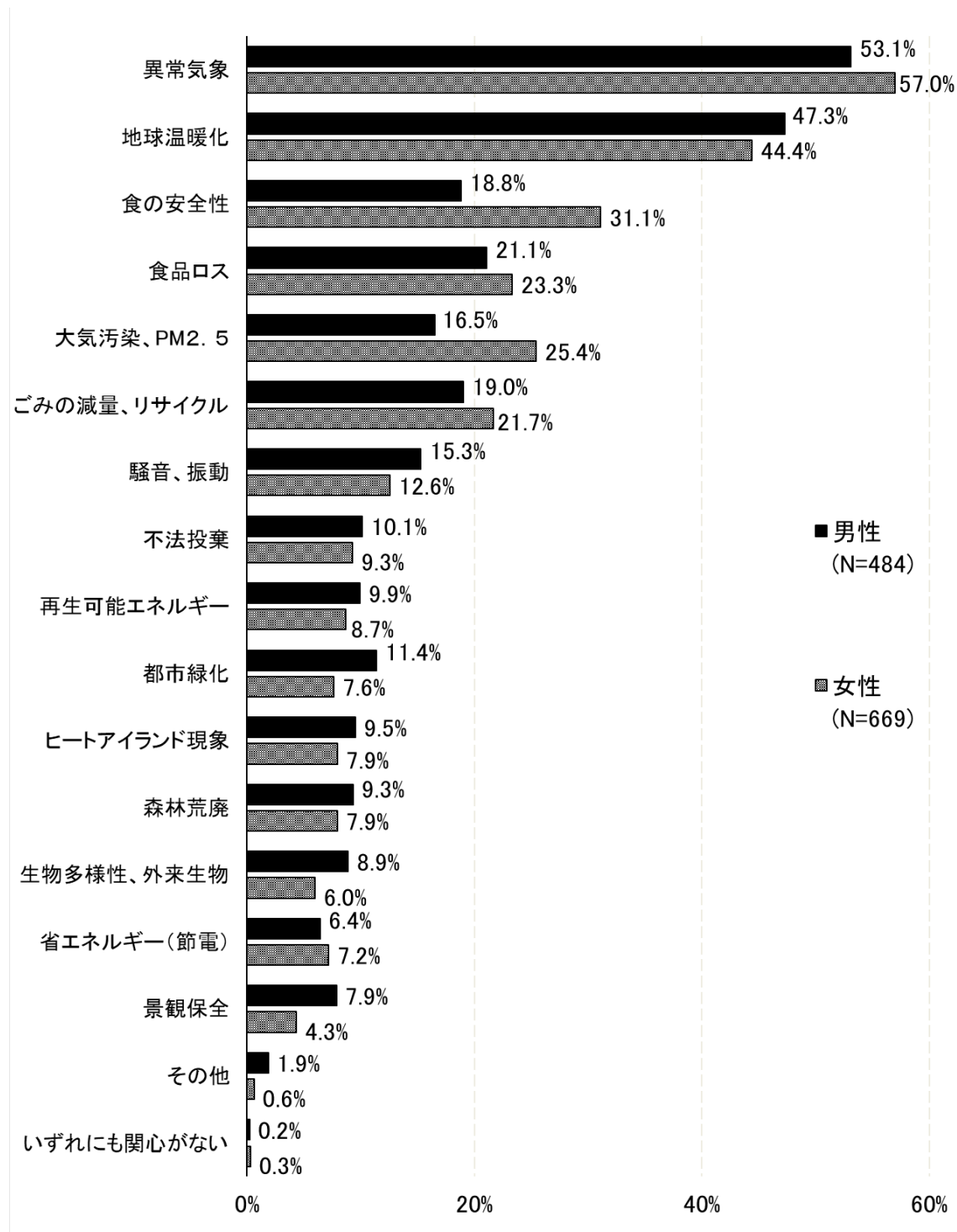
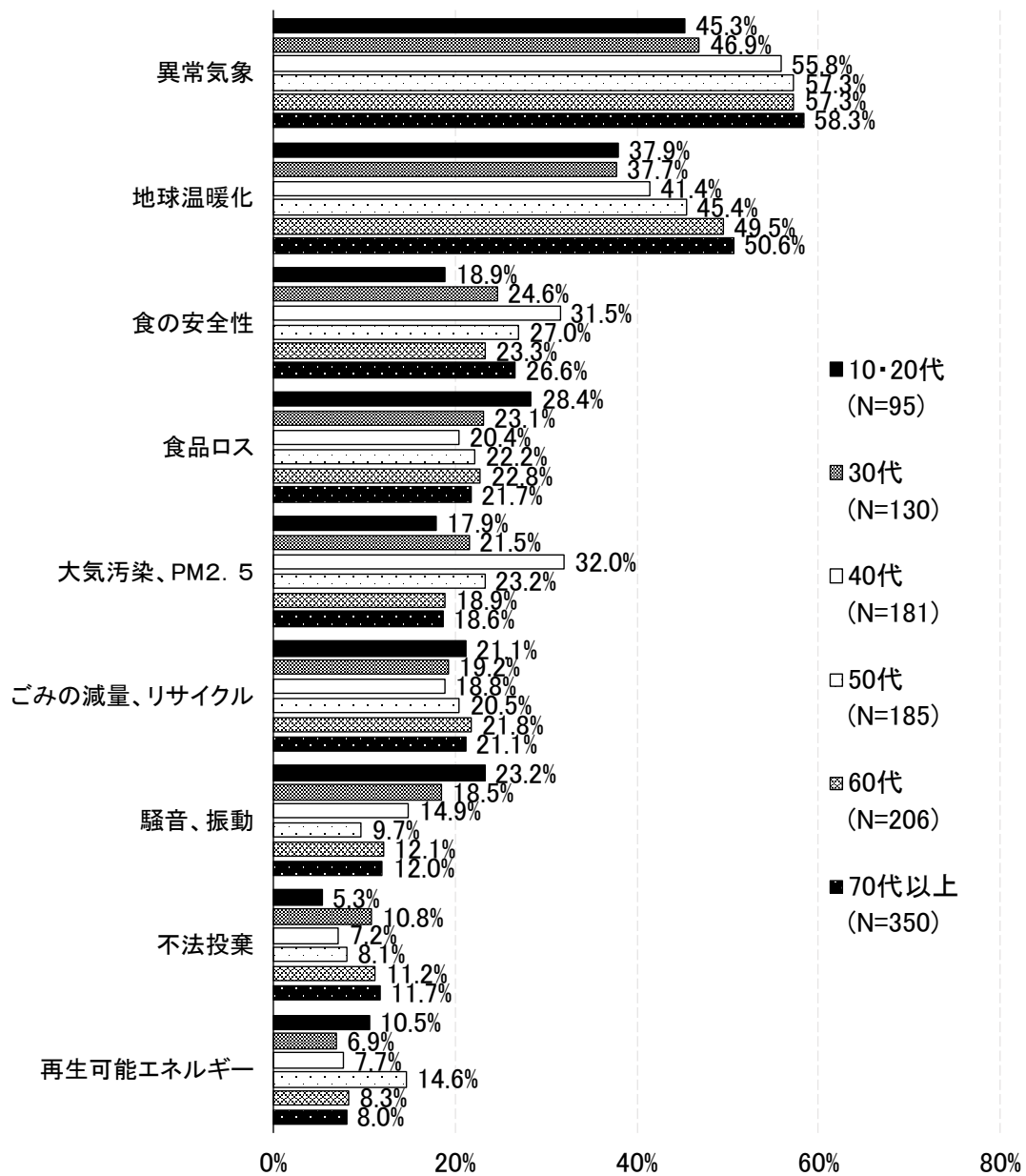


図 58 Q14 環境に関する問題への関心度（複数回答・男女別）

Q14 の環境に関する問題への関心度を年代別で見ると、「異常気象」は 70 代以上が 58.3%と最も高い。反対に 10・20 代は 45.3%と最も低い（図 59）。



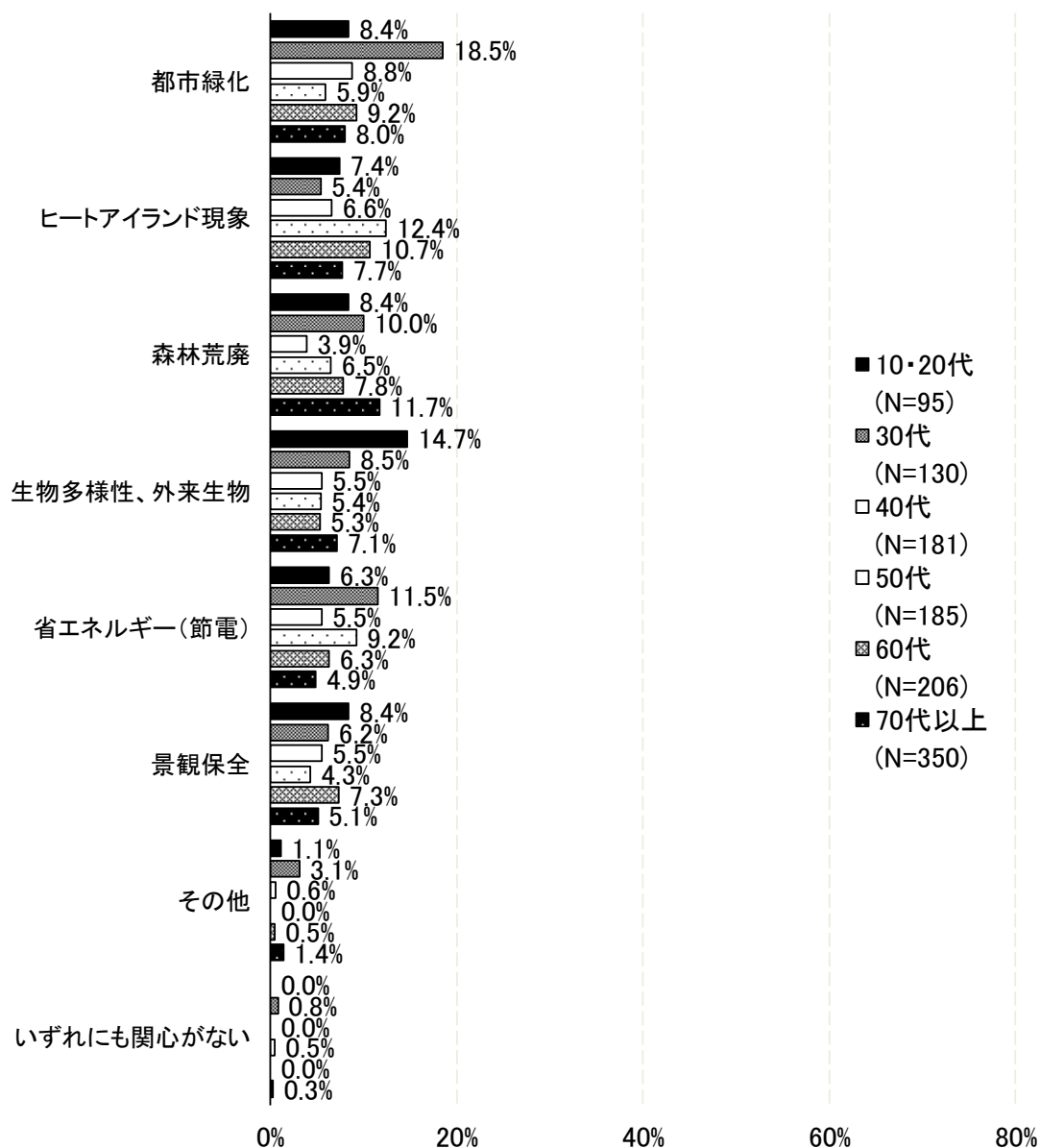


図 59 Q14 環境に関する問題への関心度（複数回答・年代別）

Q15A の補助制度の対象機器の認知度に関して、「太陽光発電システム」が 47.8%と最も高く、「1 つもない」が 36.9%、「エコキュート」が 22.9%と続く（図 60）。

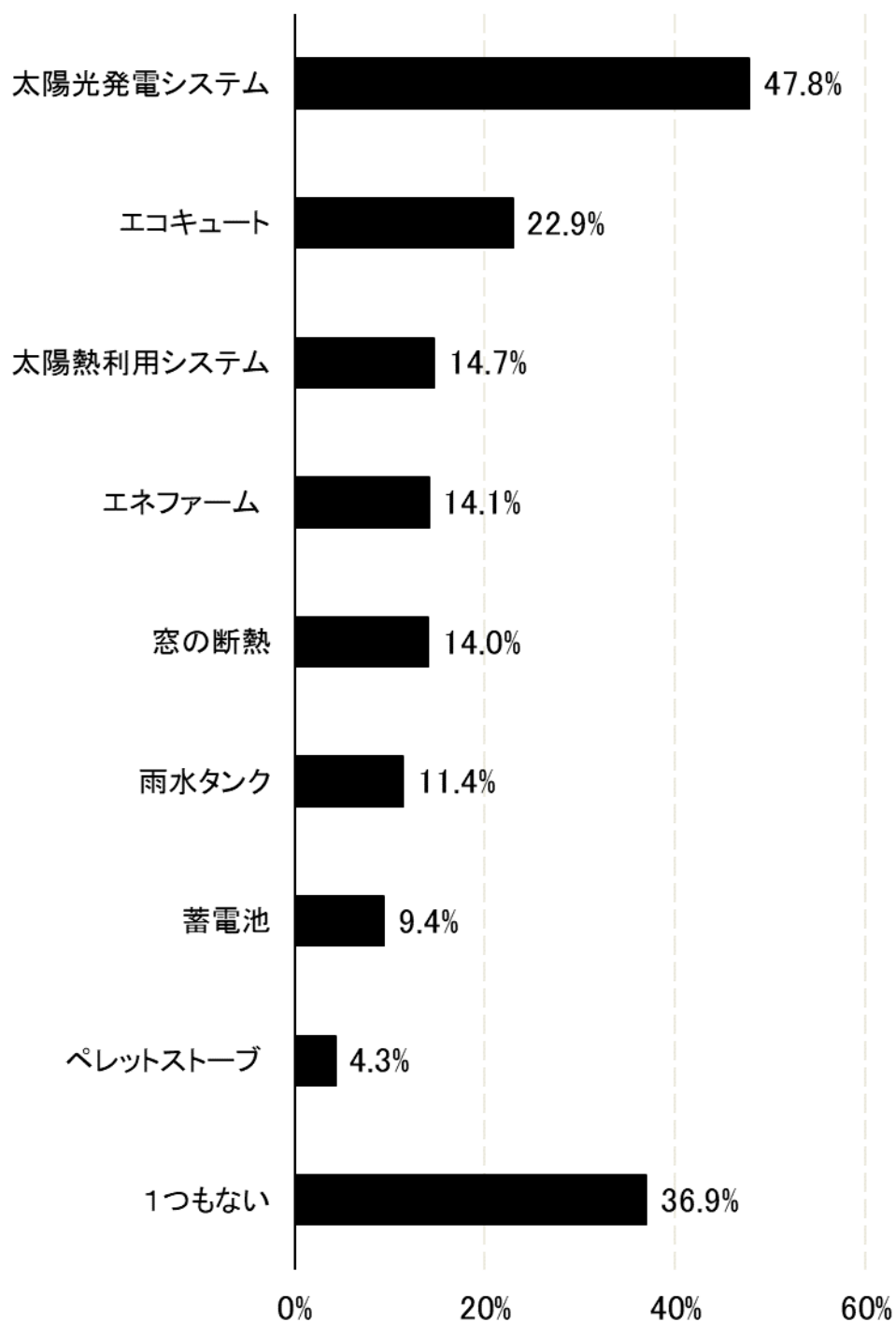


図 60 Q15A 補助制度の対象機器の認知度（複数回答・全体 N=1172）

Q15A の補助制度の対象機器の認知度を男女別で見ると、「エコキュート」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 4 ポイント高い（図 61）。

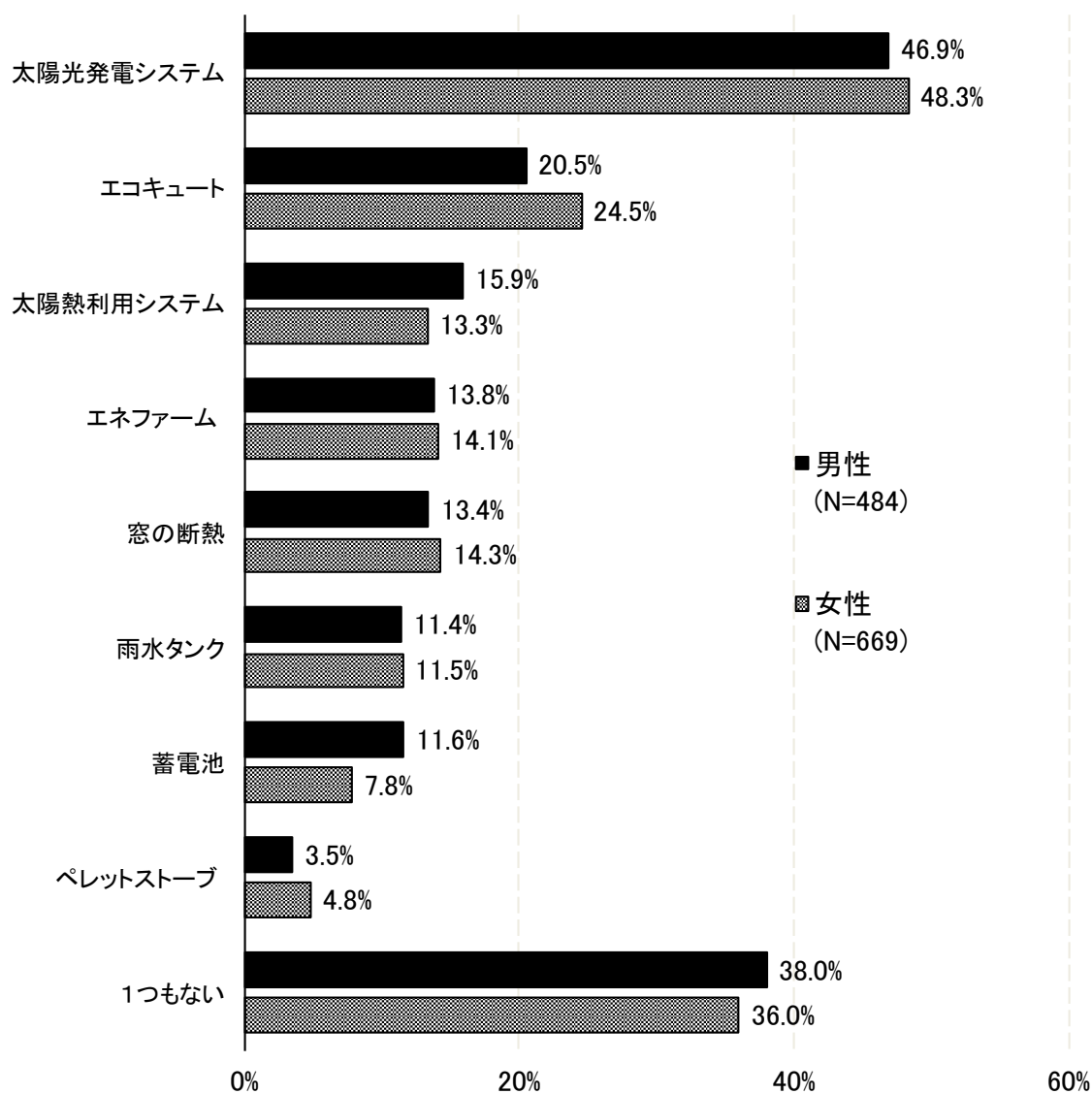


図 61 Q15A 補助制度の対象機器の認知度（複数回答・男女別）

Q15A の補助制度の対象機器の認知度を年代別で見ると、「太陽光発電システム」は 60 代が 51.9%と最も高い。反対に 10・20 代は 30.5%と最も低い（図 62）。

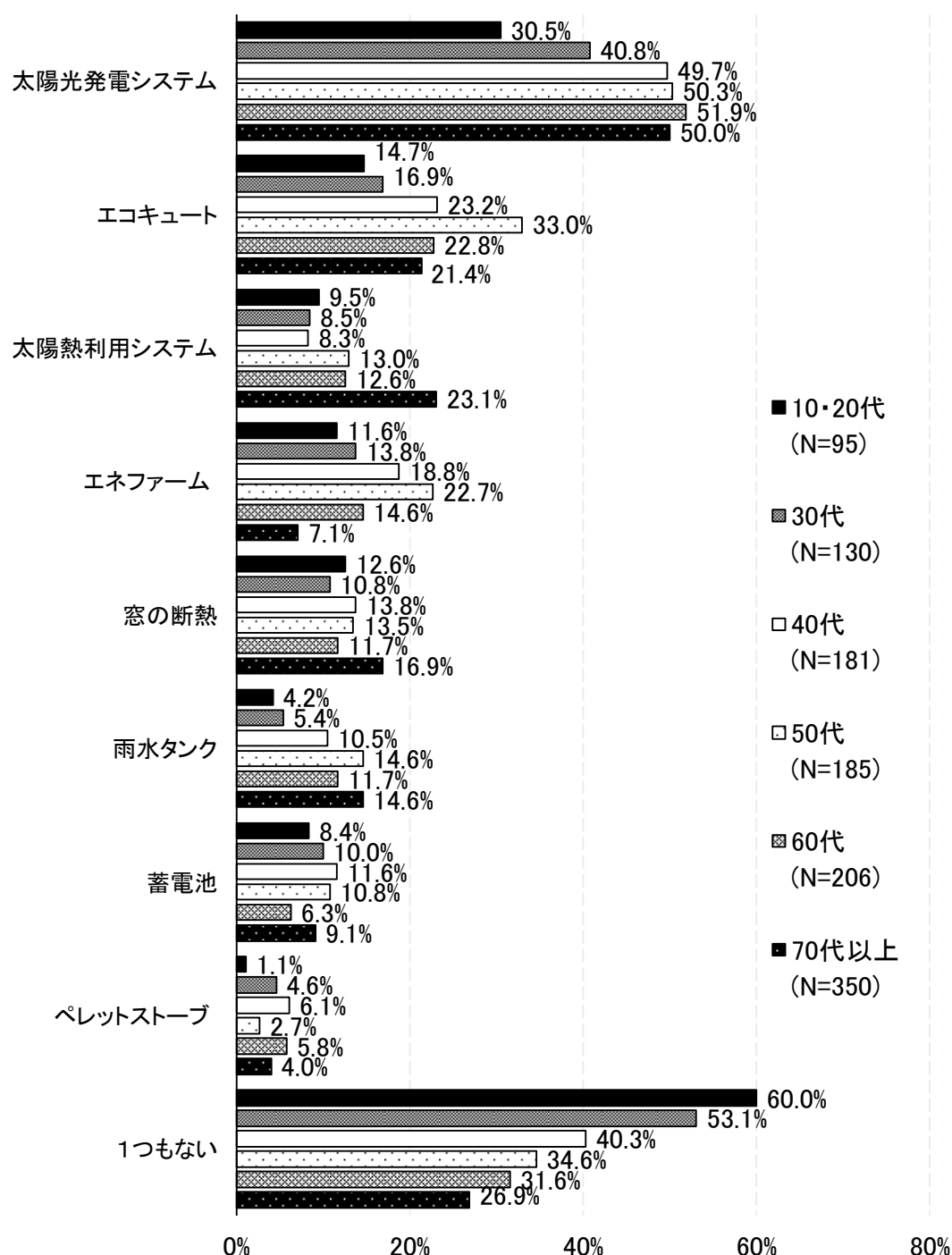


図 62 Q15A 補助制度の対象機器の認知度（複数回答・年代別）

Q15B の補助制度の対象機器の導入希望状況に関して、「窓の断熱」が 32.7%と最も高く、「1 つもない」が 31.3%、「太陽光システム」が 20.2%と続く（図 63）。

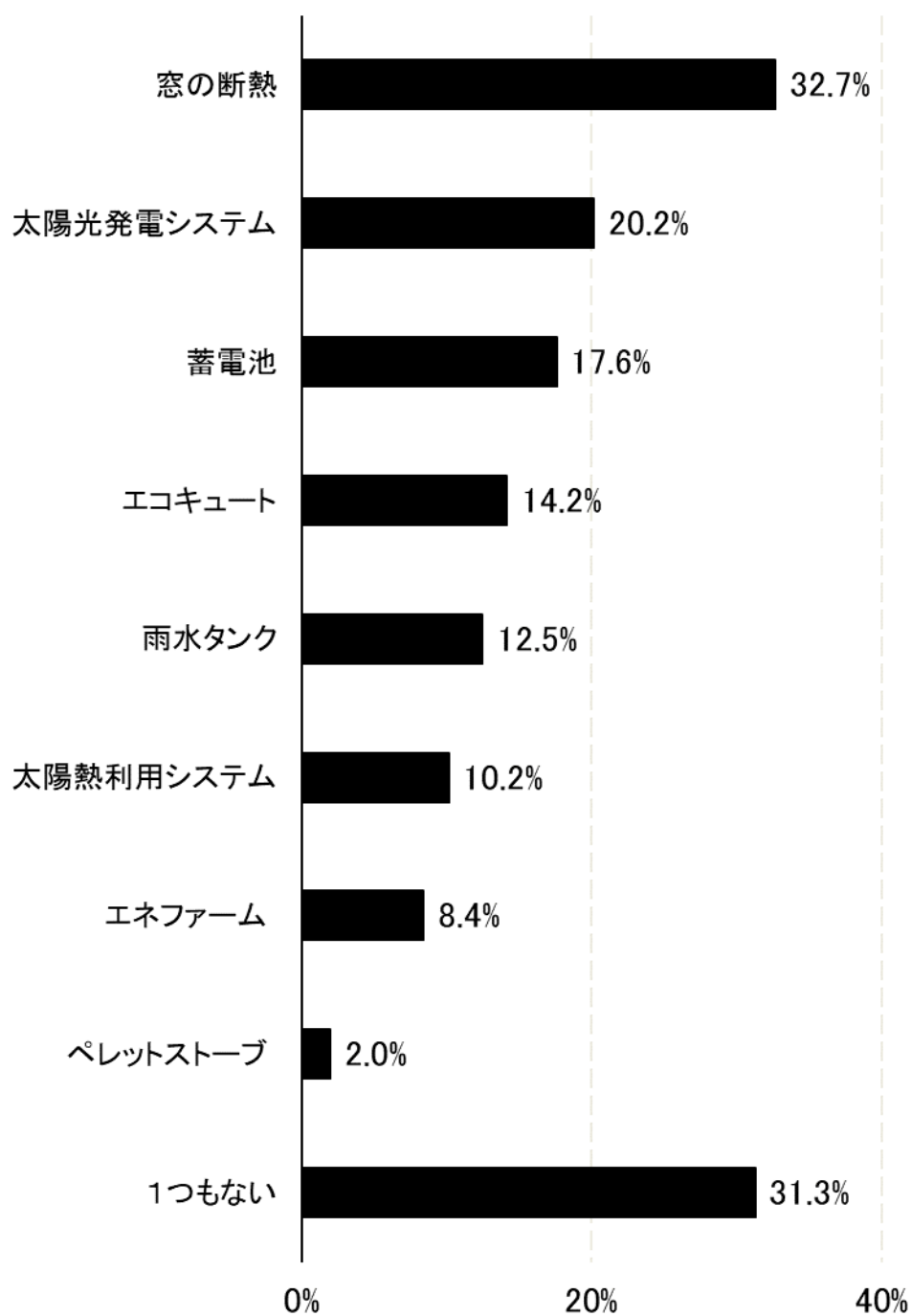


図 63 Q15B 補助制度の対象機器の導入希望状況（複数回答・全体 N=1172）

Q15B の補助制度の対象機器の導入希望状況を男女別で見ると、「窓の断熱」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 7.4 ポイント高い（図 64）。

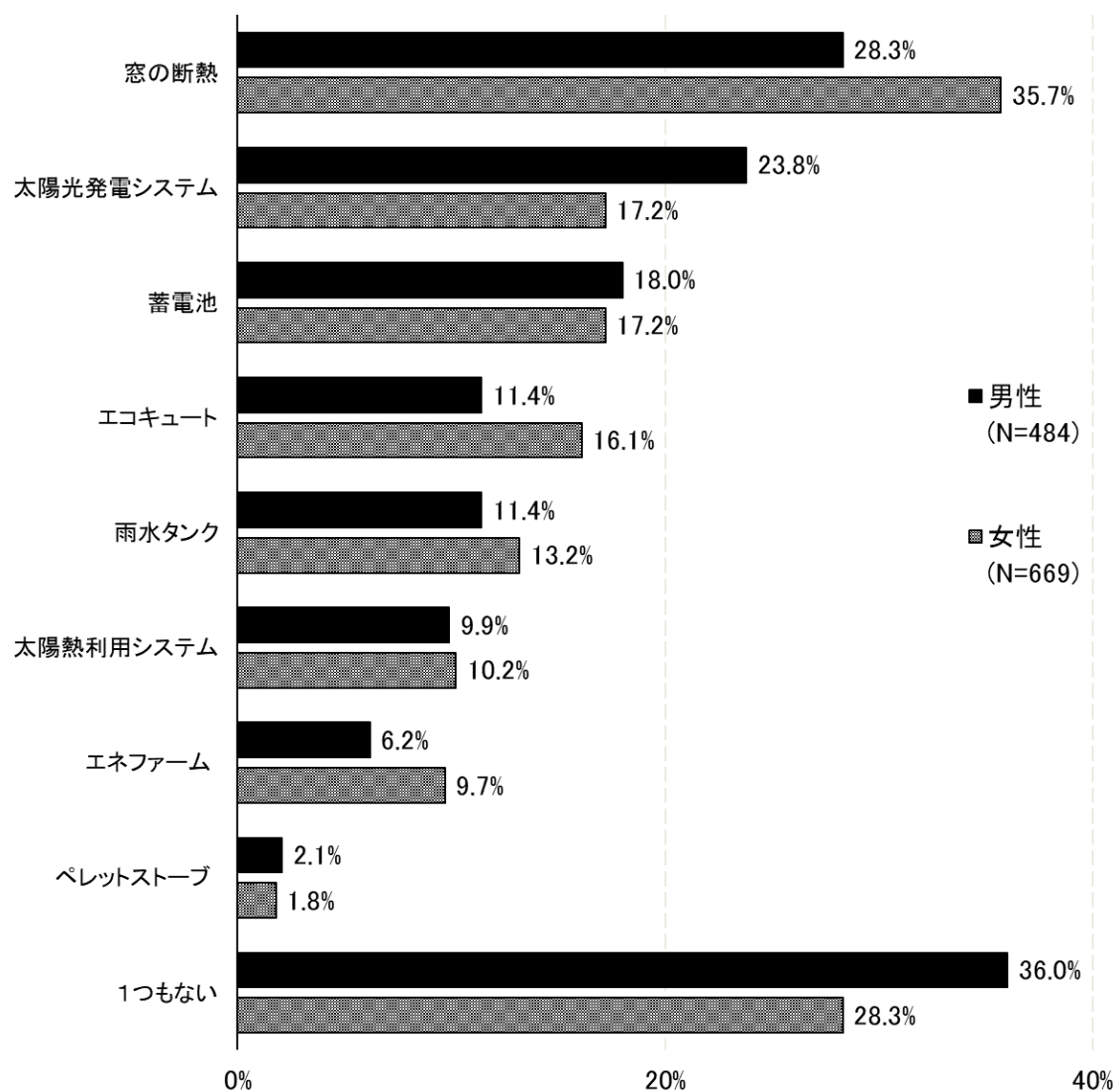


図 64 Q15B 補助制度の対象機器の導入希望状況（複数回答・男女別）

Q15B の補助制度の対象機器の導入希望状況を年代別で見ると、「窓の断熱」は 30 代が 44.6%と最も高い。反対に 70 代以上は 28.3%と最も低い（図 65）。

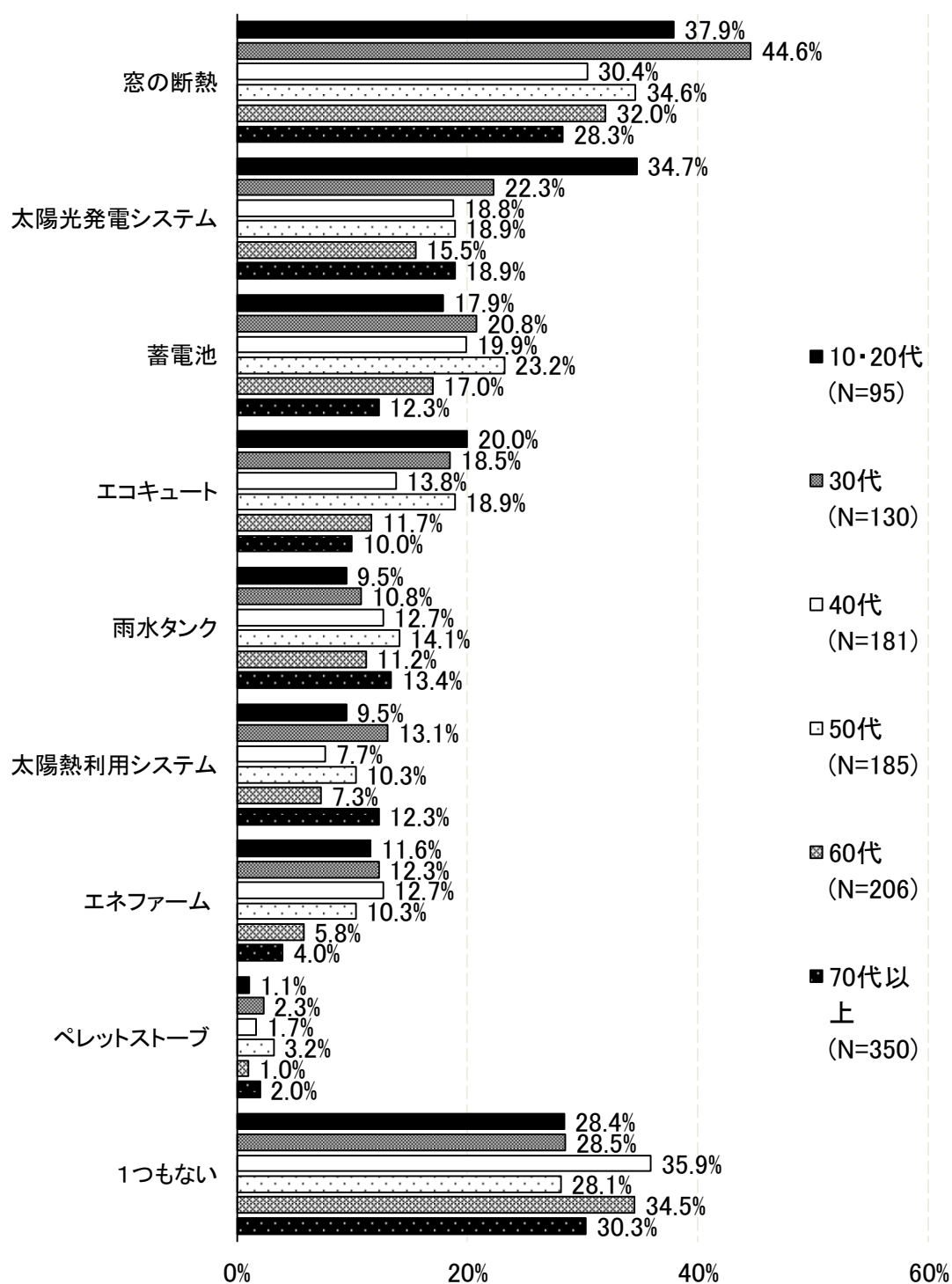


図 65 Q15B 補助制度の対象機器の導入希望状況（複数回答・年代別）

Q16 の園芸活動の頻度に関して、「日常的に行っている」または「まれに行っている」と回答した人の割合は、年齢が上がるにつれて多くなる傾向があり、10・20代が19.0%であるのに対し、70代以上が74.8%にのぼる（図 66）。

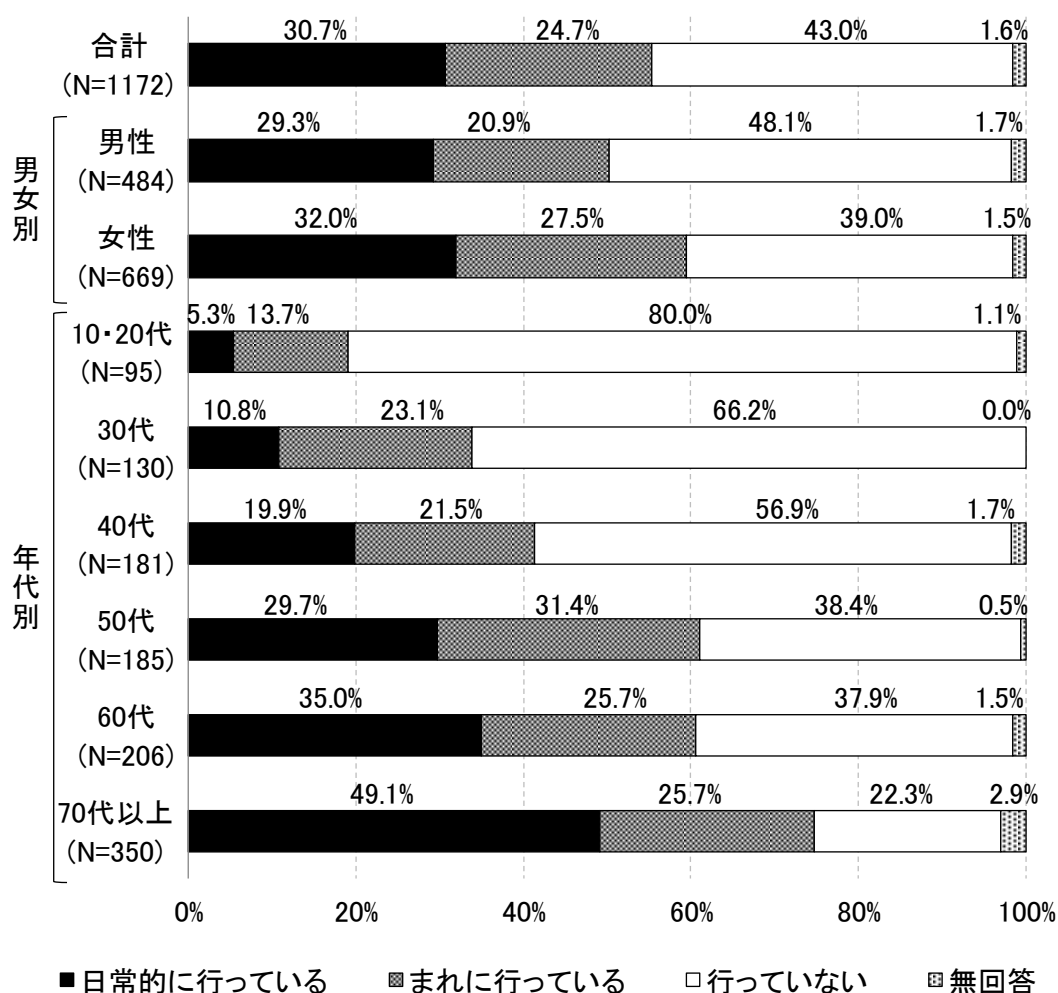


図 66 Q16 園芸活動の頻度

Q17A の緑化または自然保護に関するイベントに関して、1年以内に参加したと回答した人の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満となっている。年代別で見ると、10・20代が1.1%と最も低い。反対に70代以上が8.6%と最も高い（図 67）。

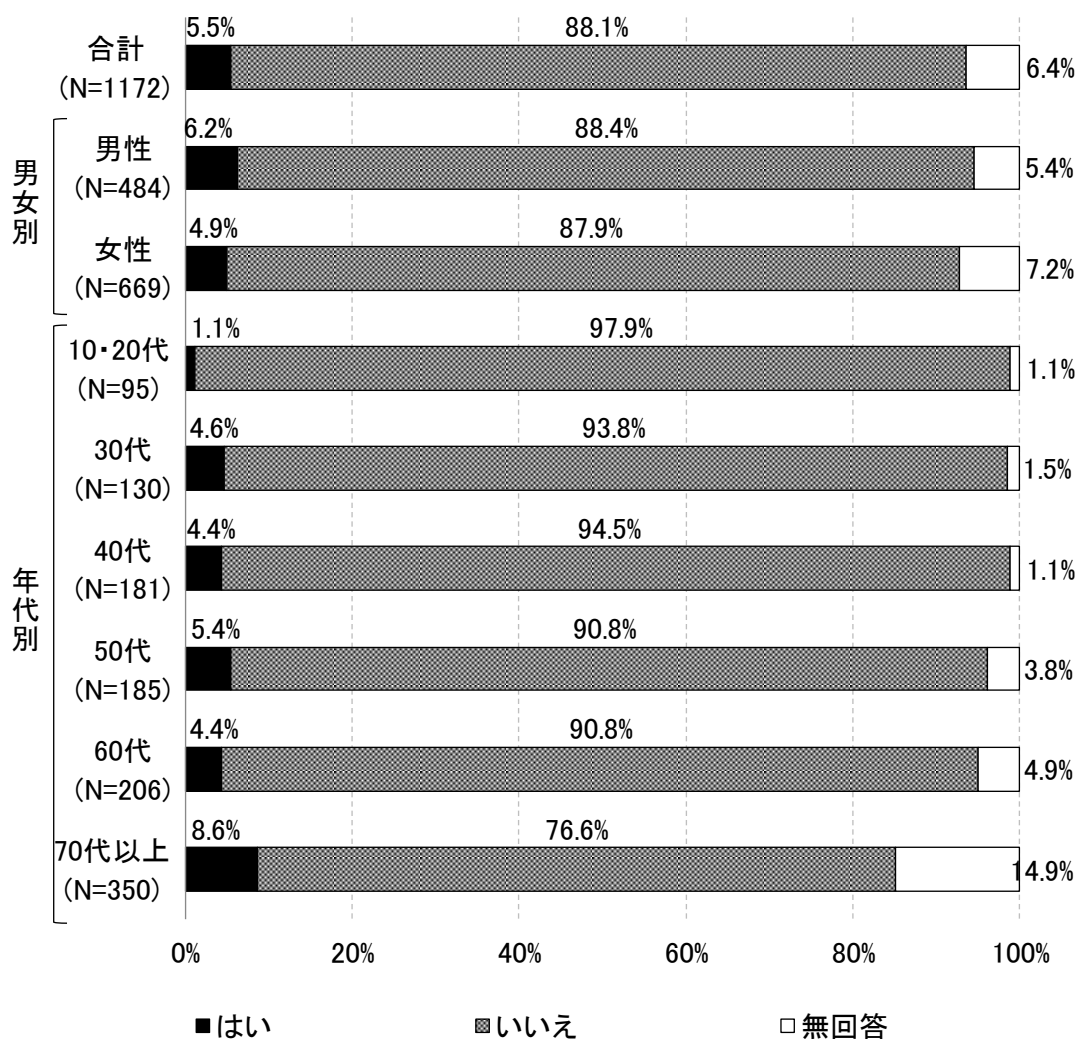


図 67 Q17A 行事・活動参加：緑化または自然保護に関するイベント

Q17Bの自治会などで行う清掃活動に関して、1年以内に参加したと回答した人の割合は、男女別で見ると、女性の方が男性よりも8.4ポイント高い。年代別で見ると、年齢が上がるにつれて多くなっており、10・20代が11.6%であるが、40代が33.1%、70代以上が63.1%となっている（図68）。

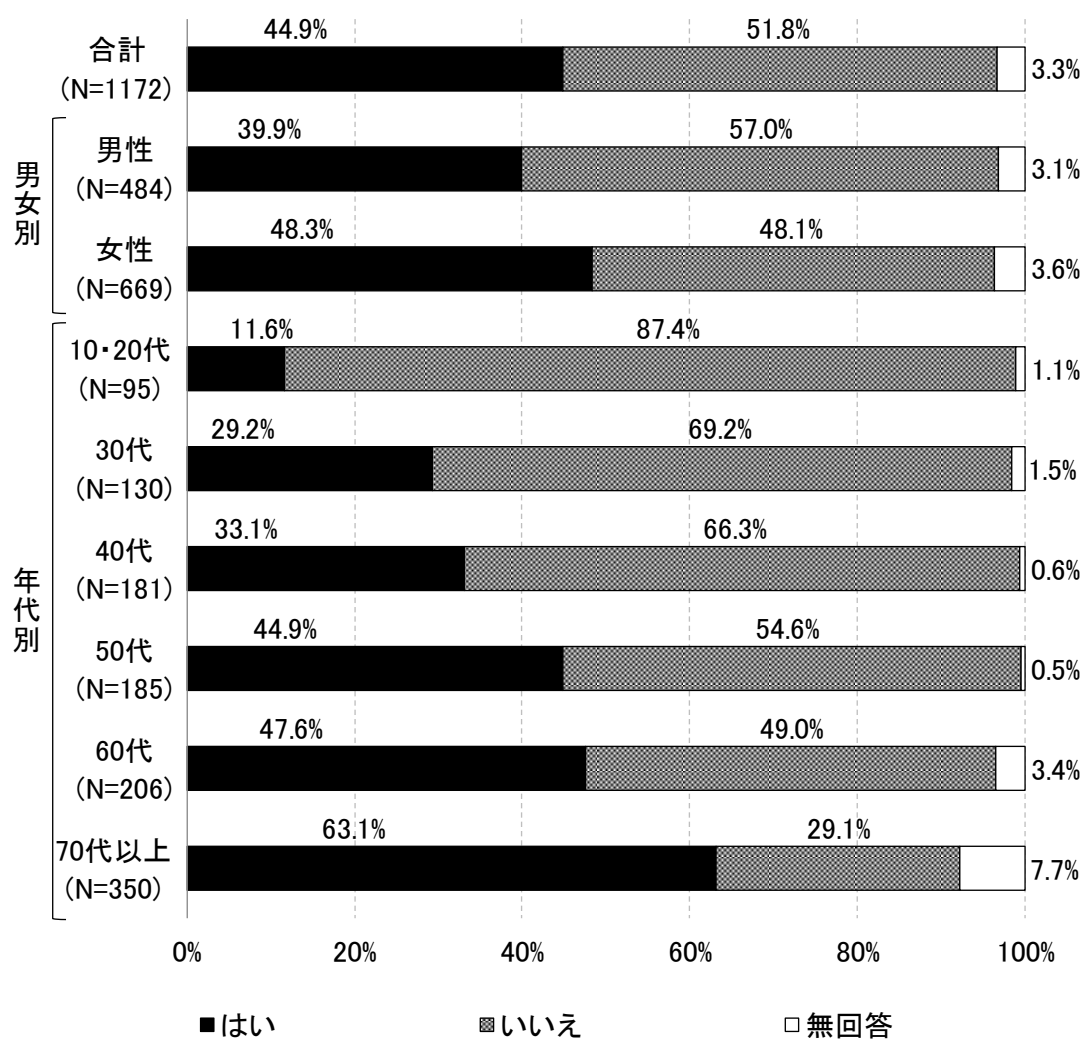


図 68 Q17B 行事・活動参加：自治会などで行う清掃活動

Q17C の市内一斉清掃に関して、1 年以内に参加したと回答した人の割合は、60 代を除き年齢が上がるにつれて多くなっており、10・20 代が 2.1%であるが、40 代が 12.2%、70 代以上が 26.9%となっている（図 69）。

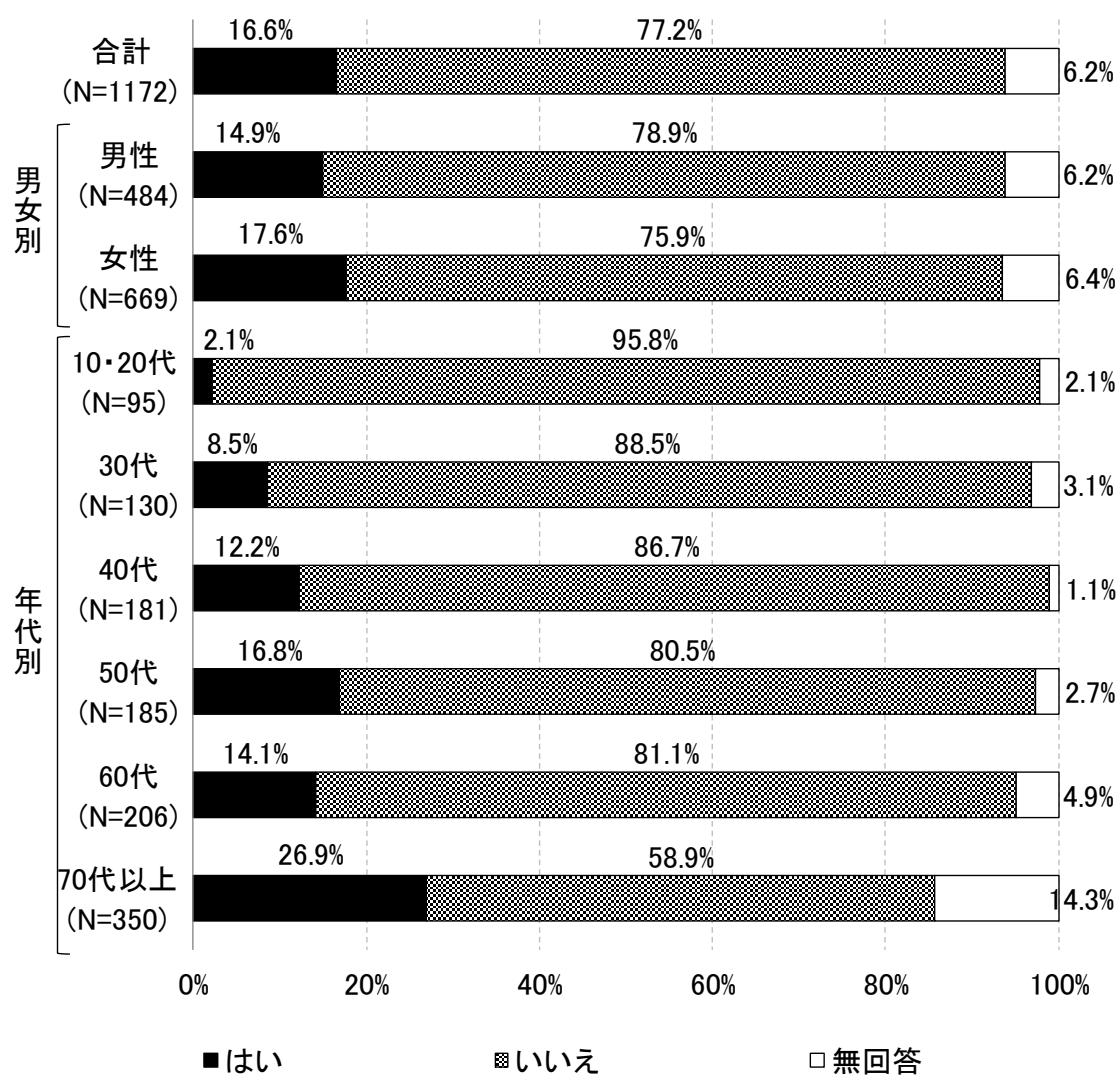


図 69 Q17C 行事・活動参加：市内一斉清掃

Q17D のリサイクル品の集団回収に関して、1 年以内に参加したと回答した人の割合は、年齢が上がるにつれて多くなる傾向にあり、10・20 代が 12.6%であるが、40 代が 37.6%、70 代以上が 58.9%となっている（図 70）。

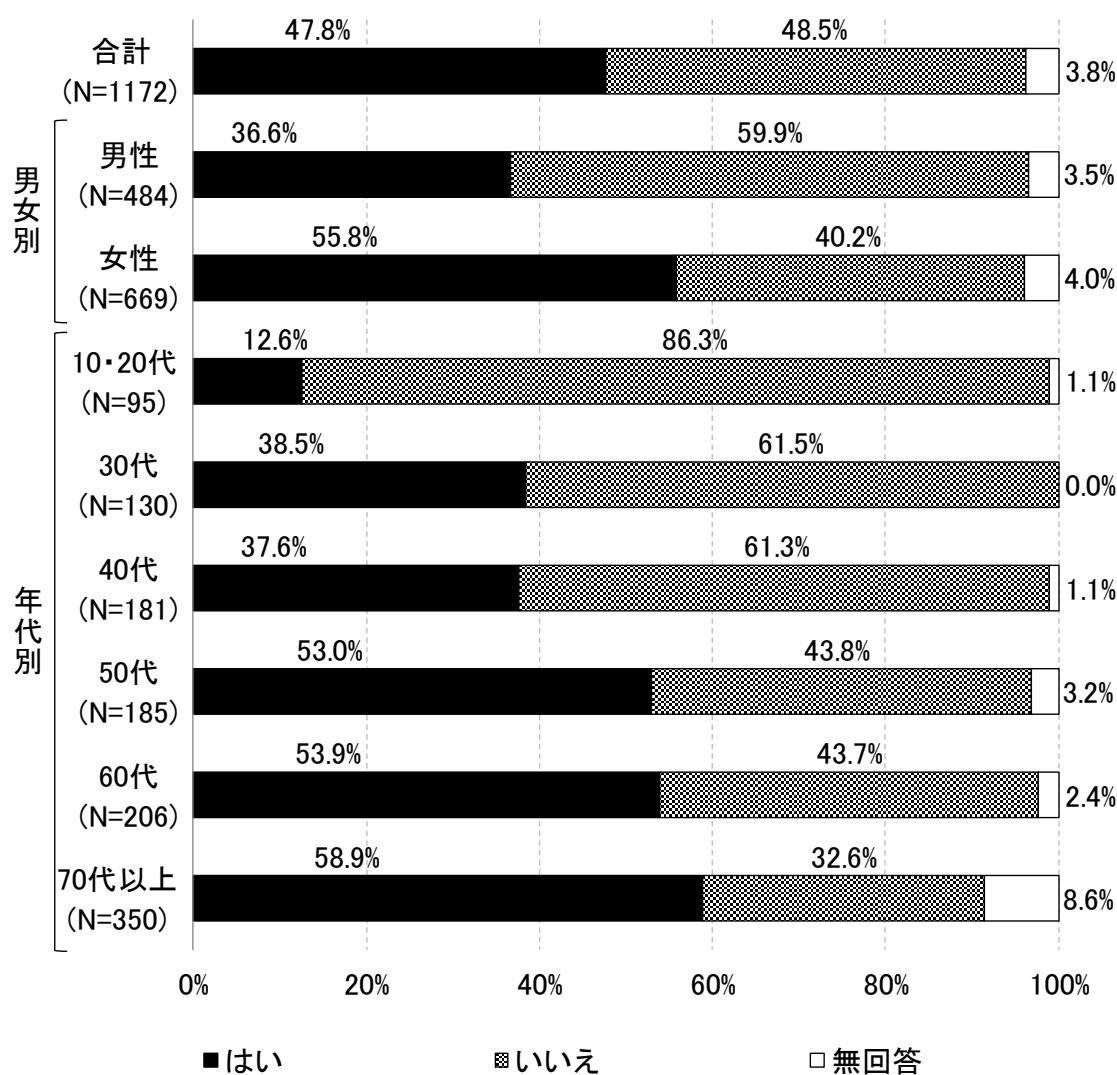


図 70 Q17D 行事・活動参加：リサイクル品の集団回収

Q18A の身近な自然環境とのふれあいがあるかに関して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、すべての年代が 6 割以上となっている（図 71）。

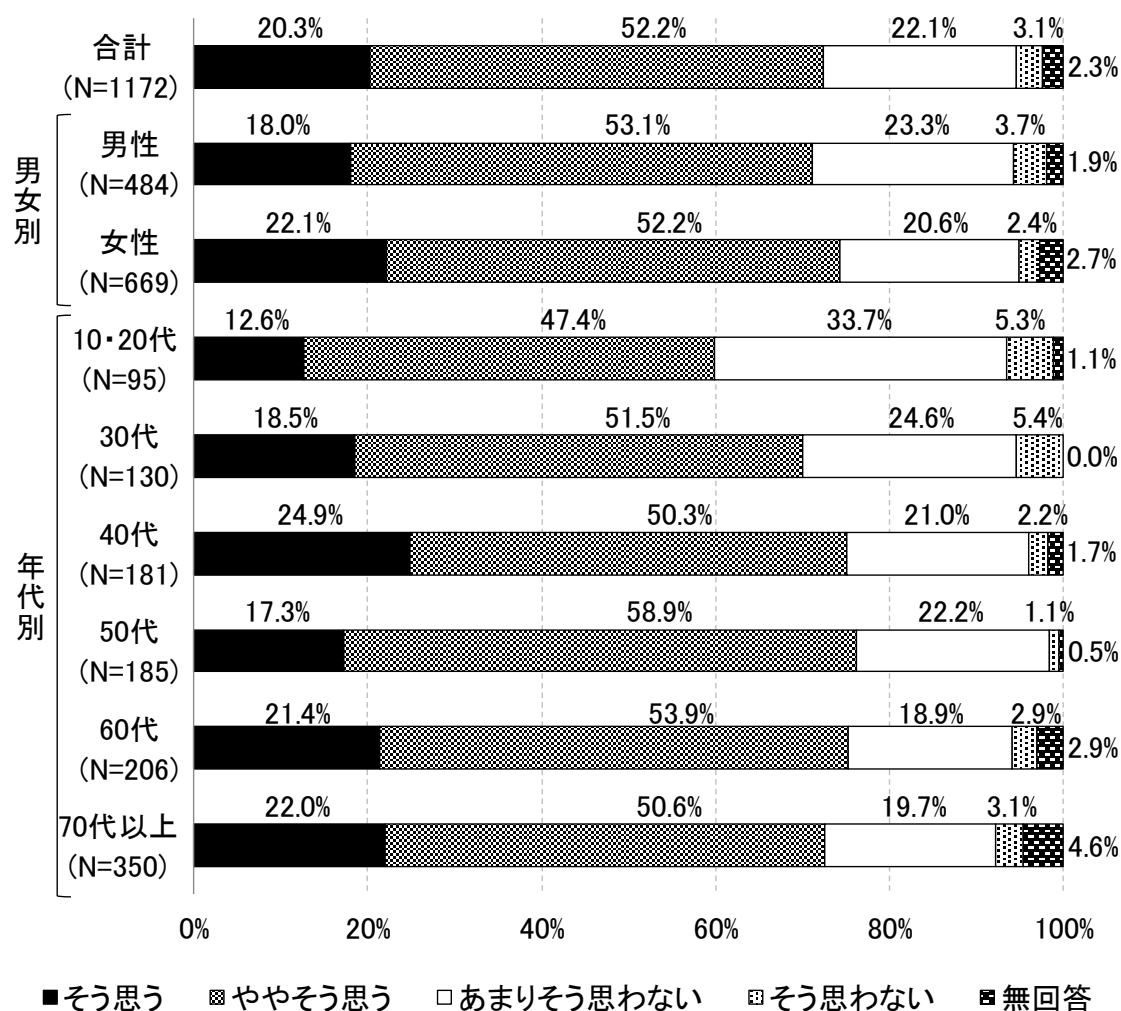


図 71 Q18A 高槻市の環境：身近な環境とのふれあいがあるか

Q18B の不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちかに関して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、60代が 56.8%と最も高く、反対に 50代が 43.8%と最も低い（図 72）。

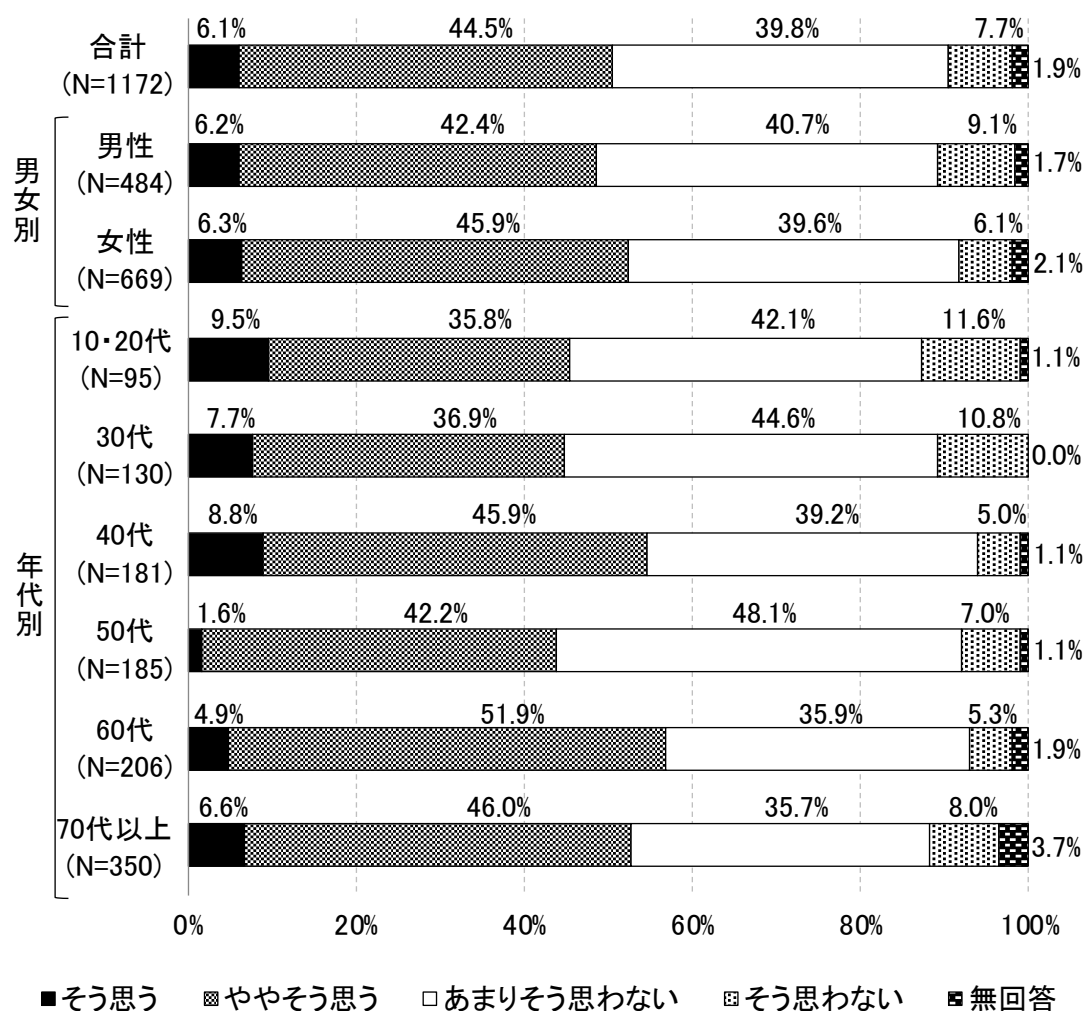


図 72 Q18B 高槻市の環境：不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか

Q18C の良好な環境づくりを目指した活動が豊富かに関して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、40 代が 48.6%と最も高く、60 代が 39.3%と最も低い（図 73）。

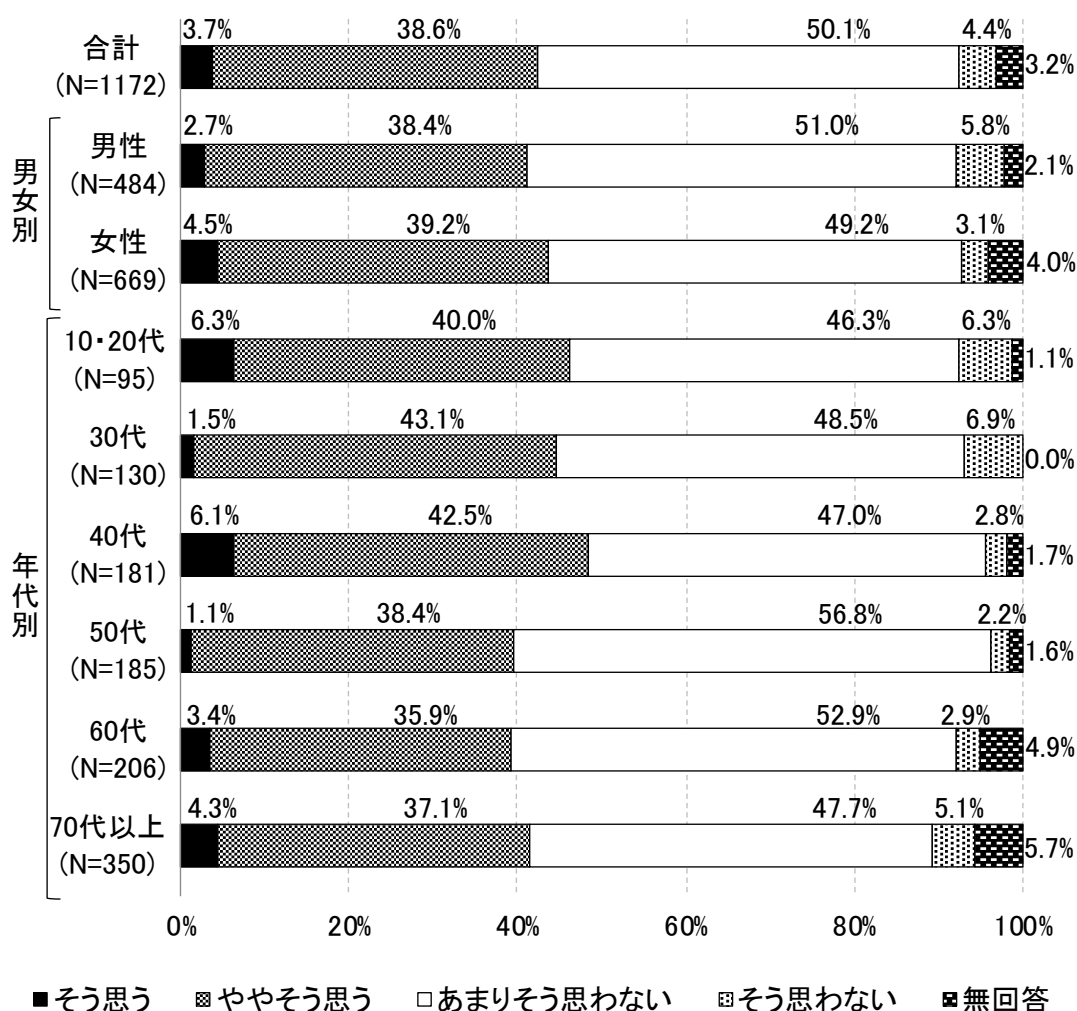


図 73 Q18C 高槻市の環境：良好な環境づくりを目指した活動が豊富か

Q18D の環境活動に関する情報や呼びかけが十分かに関して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、70代以上で31.5%と最も高く、30代が19.3%と最も低くなっている（図 74）。

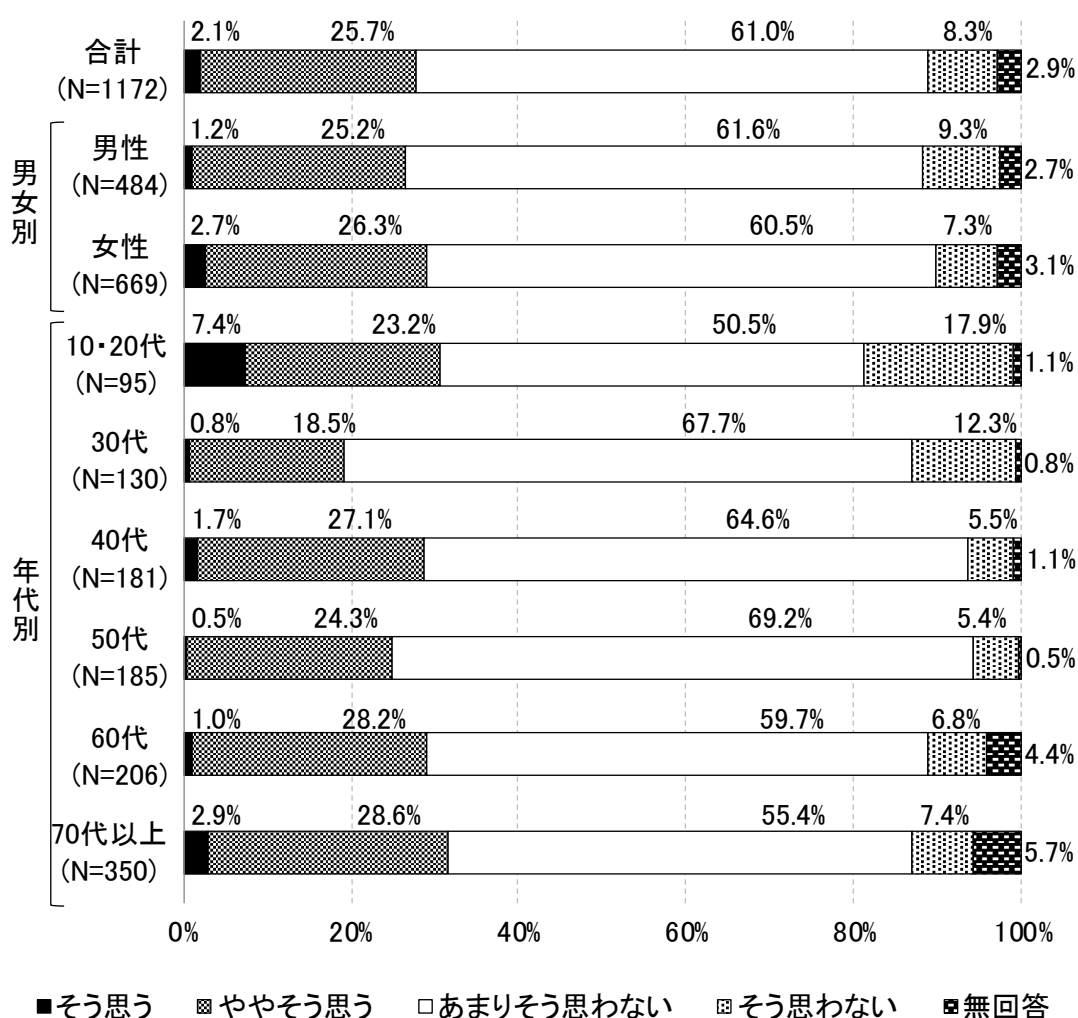


図 74 Q18D 高槻市の環境：環境活動に関する情報や呼びかけが十分か

Q18E の身近な生活環境に水やみどりの潤いがあるかに関して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、年代別で見ると、すべての年代が 6 割以上となっており、そのうち、50 代が 67.6%と最も高い（図 75）。

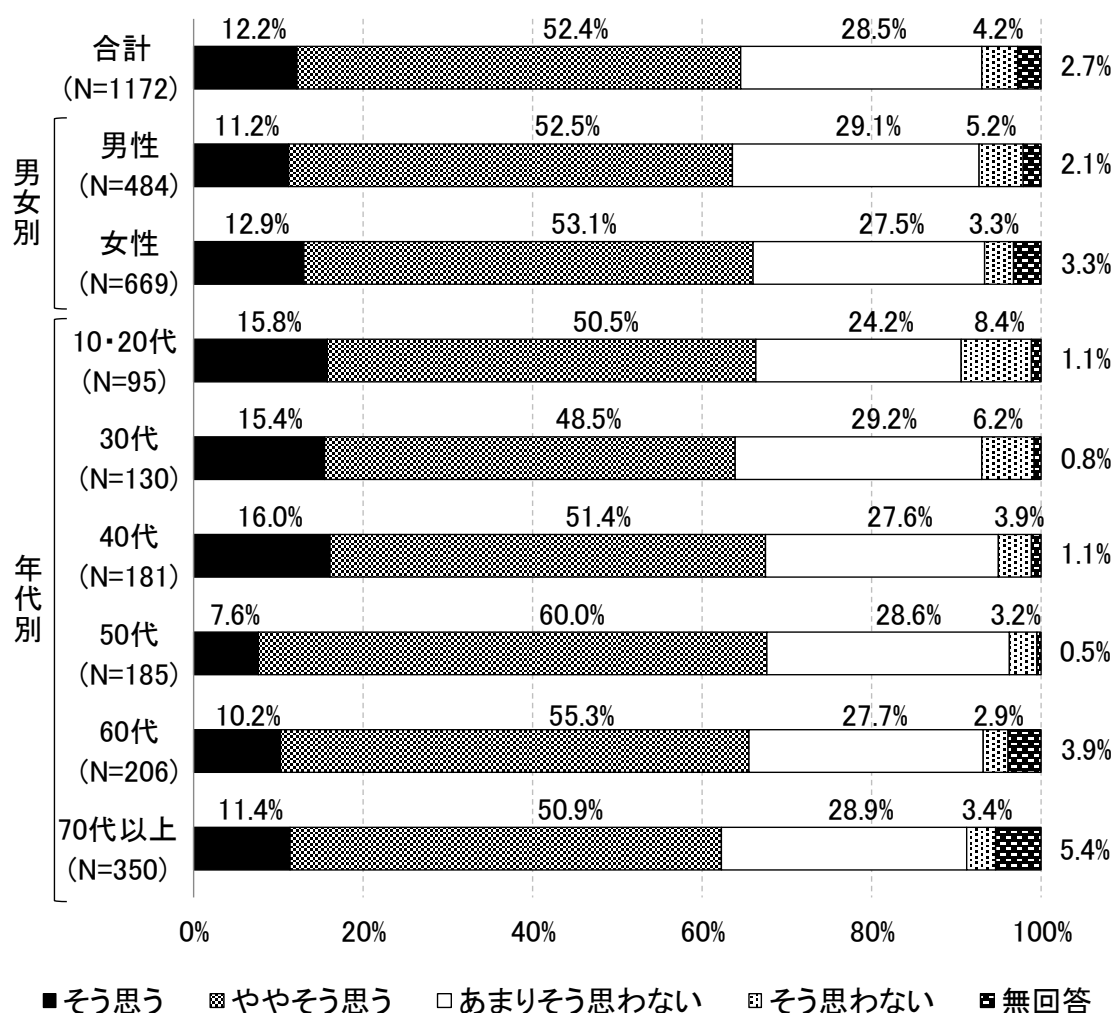


図 75 Q18E 高槻市の環境：身近な生活環境に水やみどりの潤いがあるか

Q19 の身の回りの方のごみの削減・分別・リサイクルに対する取り組みに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合が7割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は60代と70代以上で85.5%と最も高い。反対に、30代以上が70.7%と最も低い（図76）。

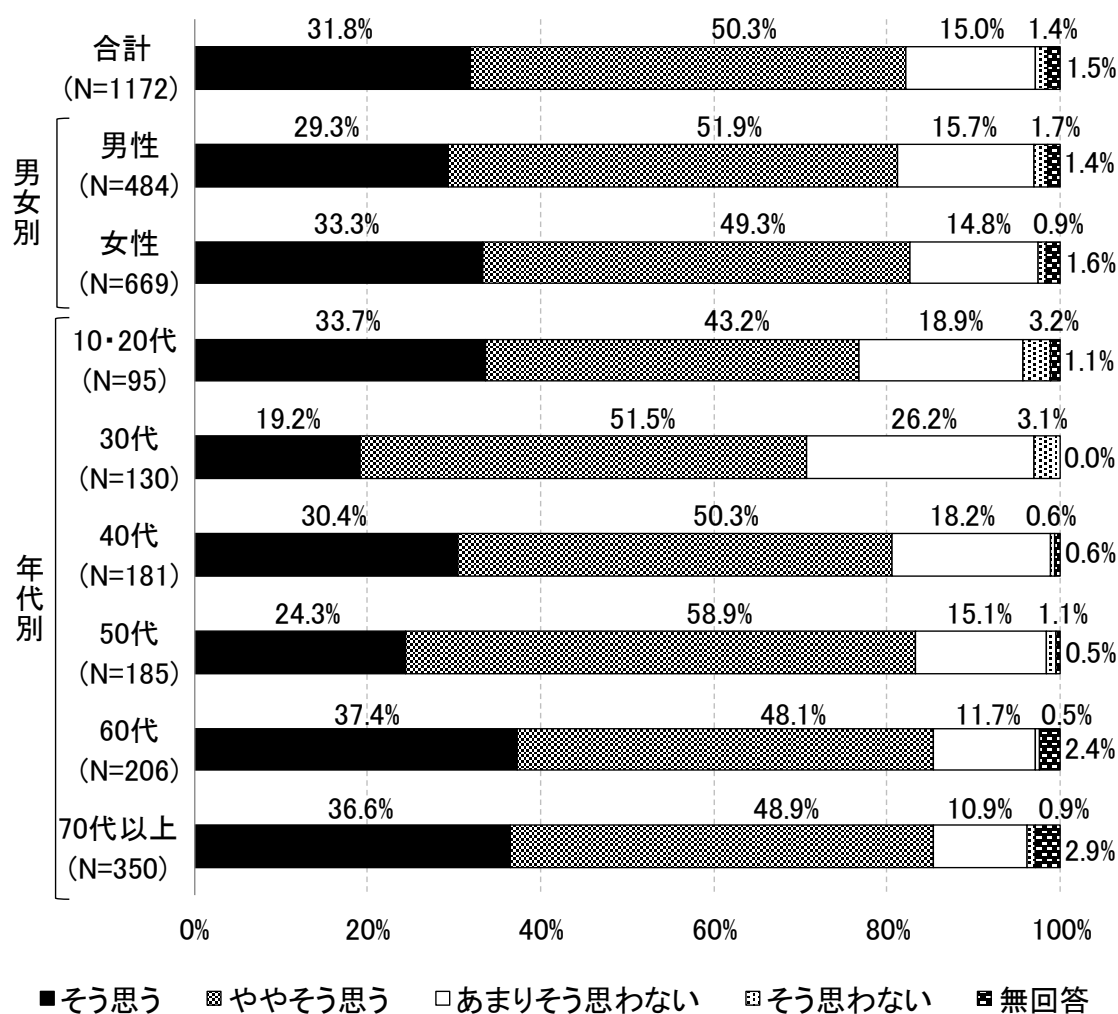


図76 Q19 身の回りの方のごみの削減・分別・リサイクルに対する取り組み

Q20 の親しい近所付き合いの数に関して、70 代以上を除くすべての層で「少ない」または「やや少ない」と回答した人の割合が 7 割以上である。年代別で見ると「少ない」または「やや少ない」と回答した人の割合は 30 代が 76.9%と最も高い。反対に 70 代以上が 56.9%と最も低い。また「多い」または「やや多い」と回答した人の割合は 70 代以上が 40.2%と最も高い（図 77）。

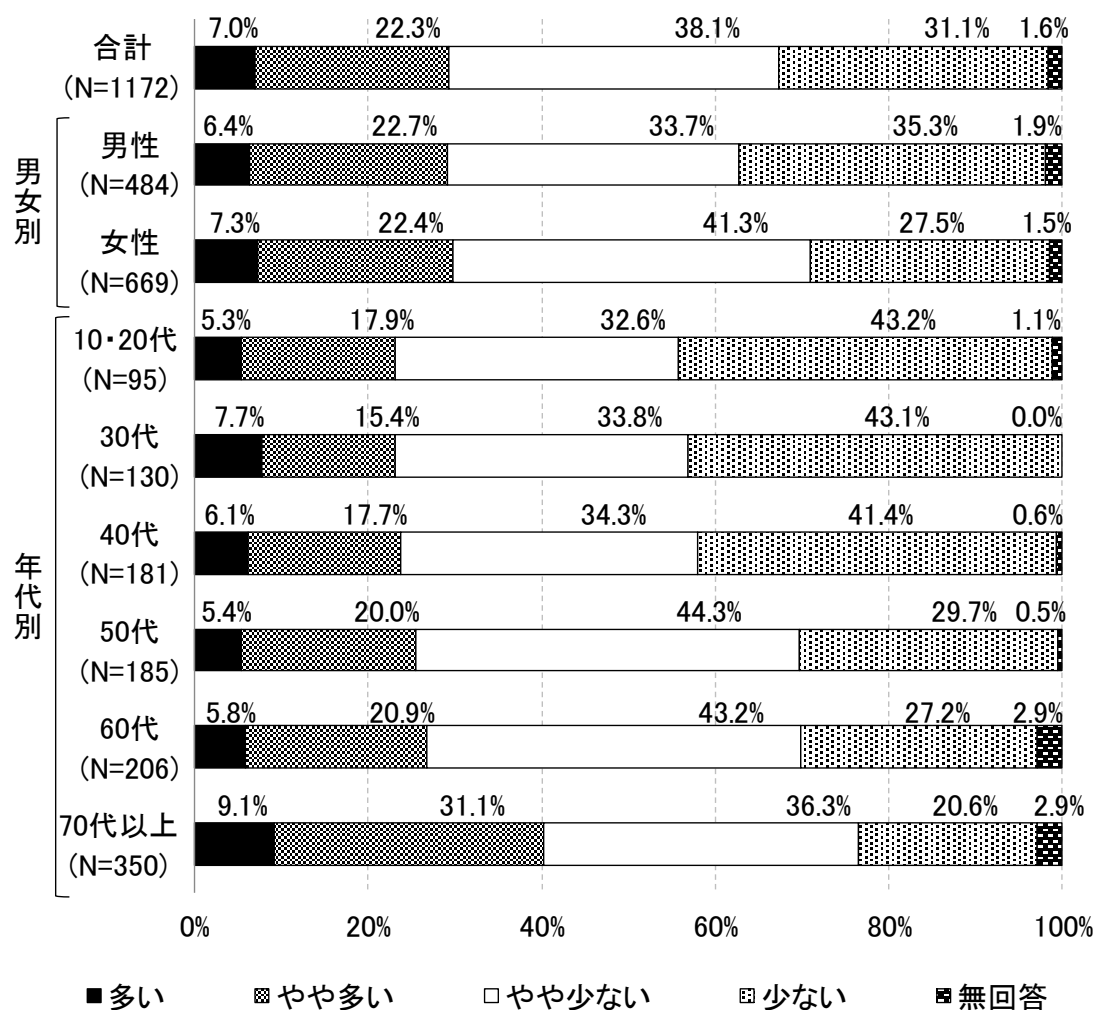


図 77 Q20 親しい近所付き合いの数

Q21 の地域のお祭りへの参加頻度に関して、男女別・年代別のすべての層で「まったく参加しない」または「ほとんど参加しない」と回答した人の割合が4割以上である。年代別で見ると「まったく参加しない」または「ほとんど参加しない」と回答した人の割合は60代が66.5%と最も高い。反対に30代が42.3%と最も低い（図 78）。

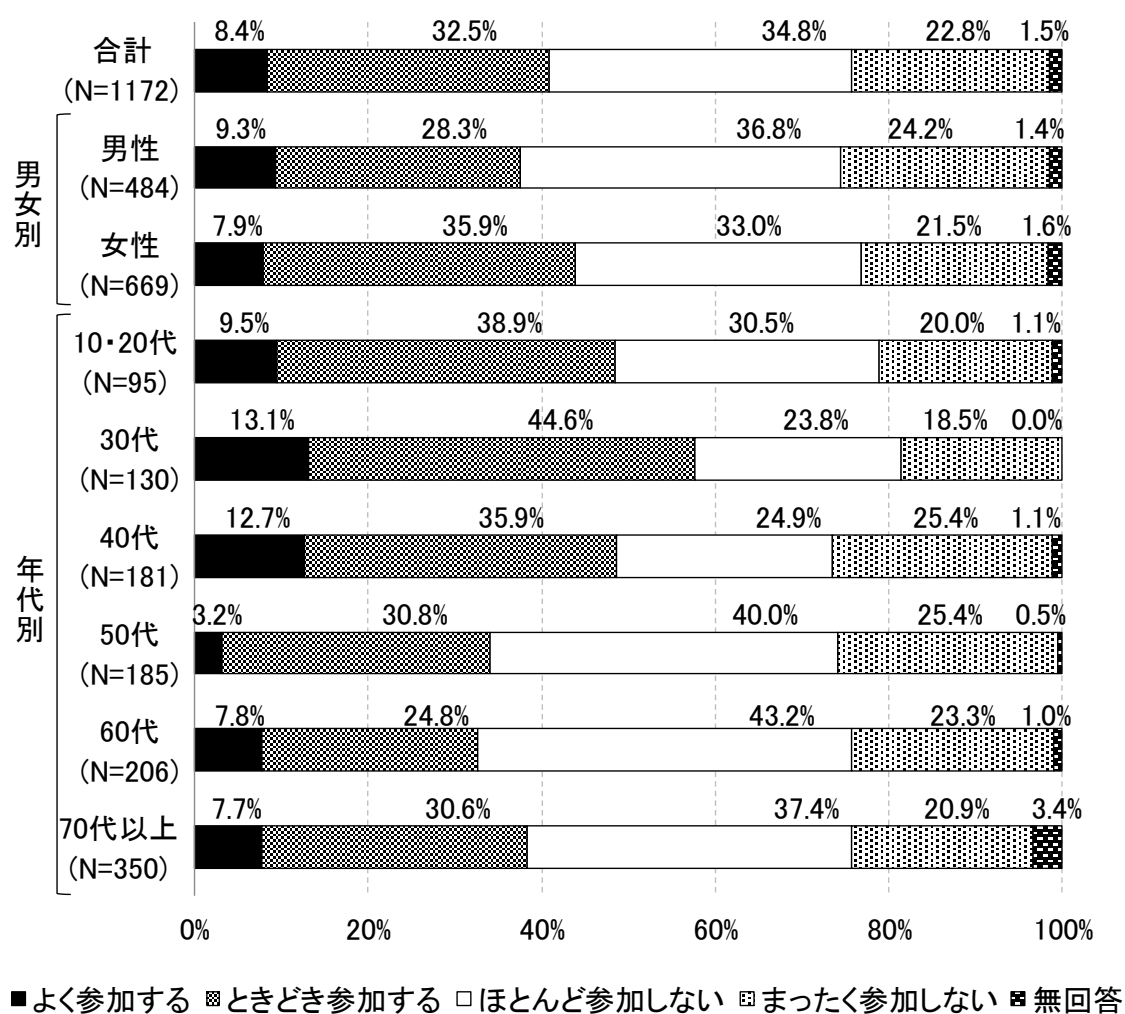


図 78 Q21 地域のお祭りへの参加頻度

Q22 の大阪北部地震の被害の大きさに関して、男女別・年代別のすべての層で「小さかった」または「やや小さかった」と回答した人の割合が 10・20 代を除き 5 割以上である。年代別で見ると「小さかった」または「やや小さかった」と回答した人の割合は 40 代が 64.1%と最も高い。反対に 10・20 代が 45.3%と最も低い（図 79）。

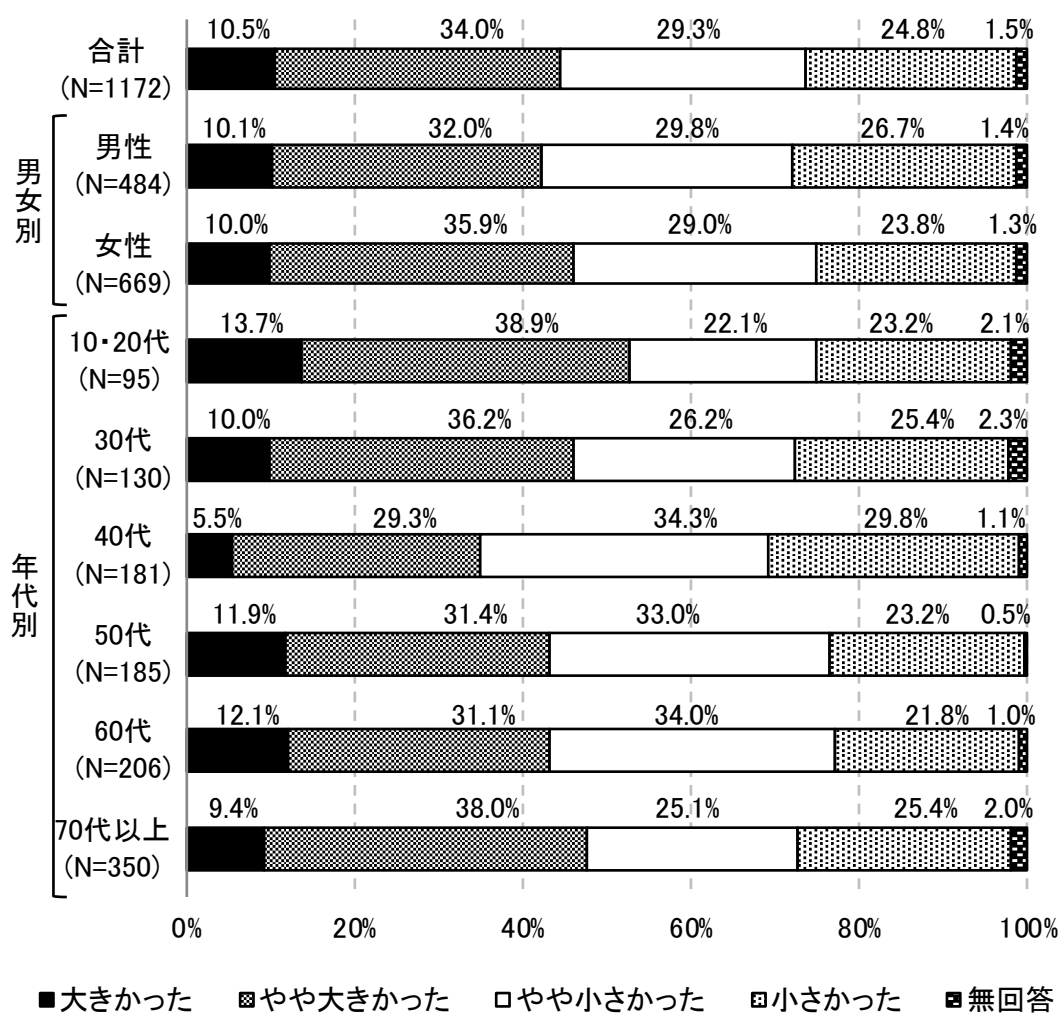


図 79 Q22 大阪北部地震の被害の大きさ

Q23 の災害の蓄えに関して、「非常持出品の用意」、「家具の固定」と回答した人の割合が約 4 割以上である（図 80）。

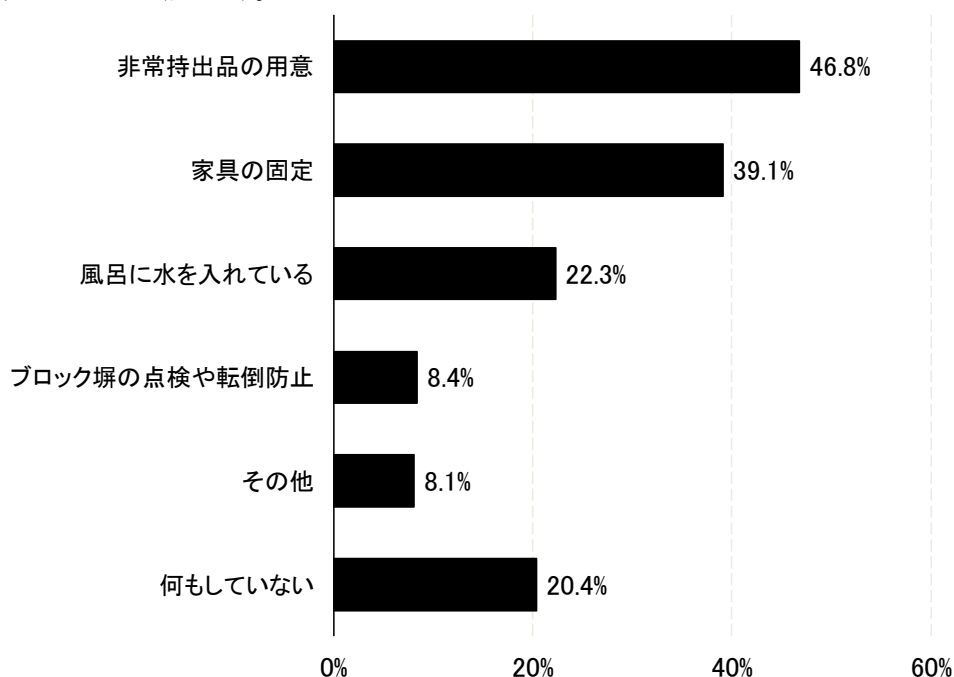


図 80 Q23 災害の備え（複数回答・全体 N=1172）

Q23 の災害の備えを男女別で見ると、「非常時持ち出し品の用意」、「風呂に水を入れている」は男女で差があり、男性よりも女性の方がこれらの災害の備えを行っていたことがわかる（図 81）。

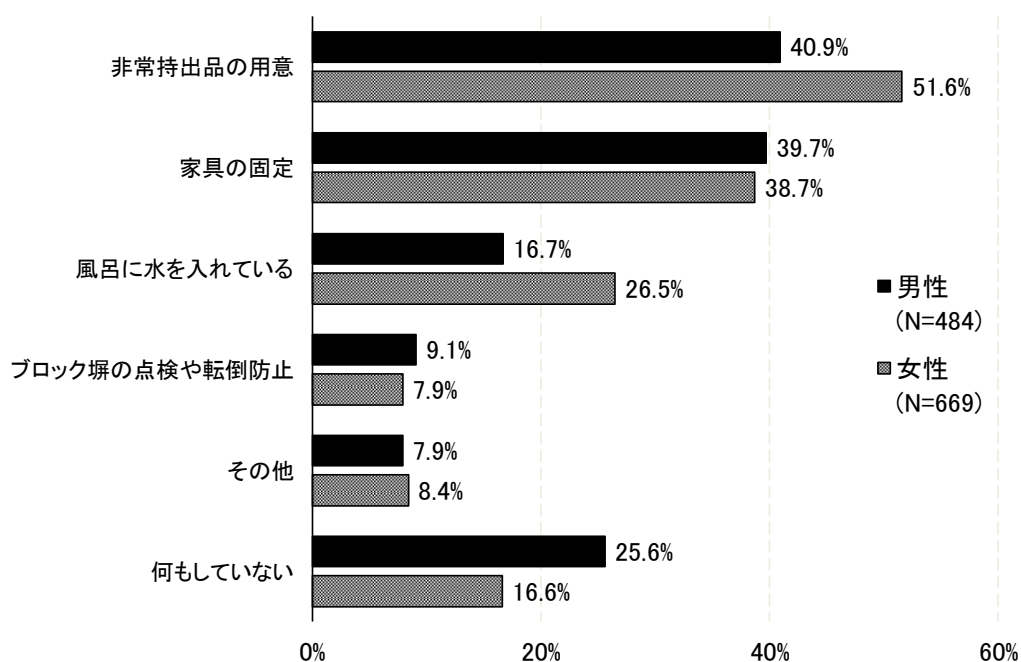


図 81 Q23 災害の備え（複数回答・男女別）

Q23 の災害の備えを年代別で見ると、「非常持出品の用意」に関して、30 代が 57.7%と他の年代よりも備えをしていた人の割合が高い。一方で、「家具の固定」に関して、60 代が 48.1%となっている（図 82）。

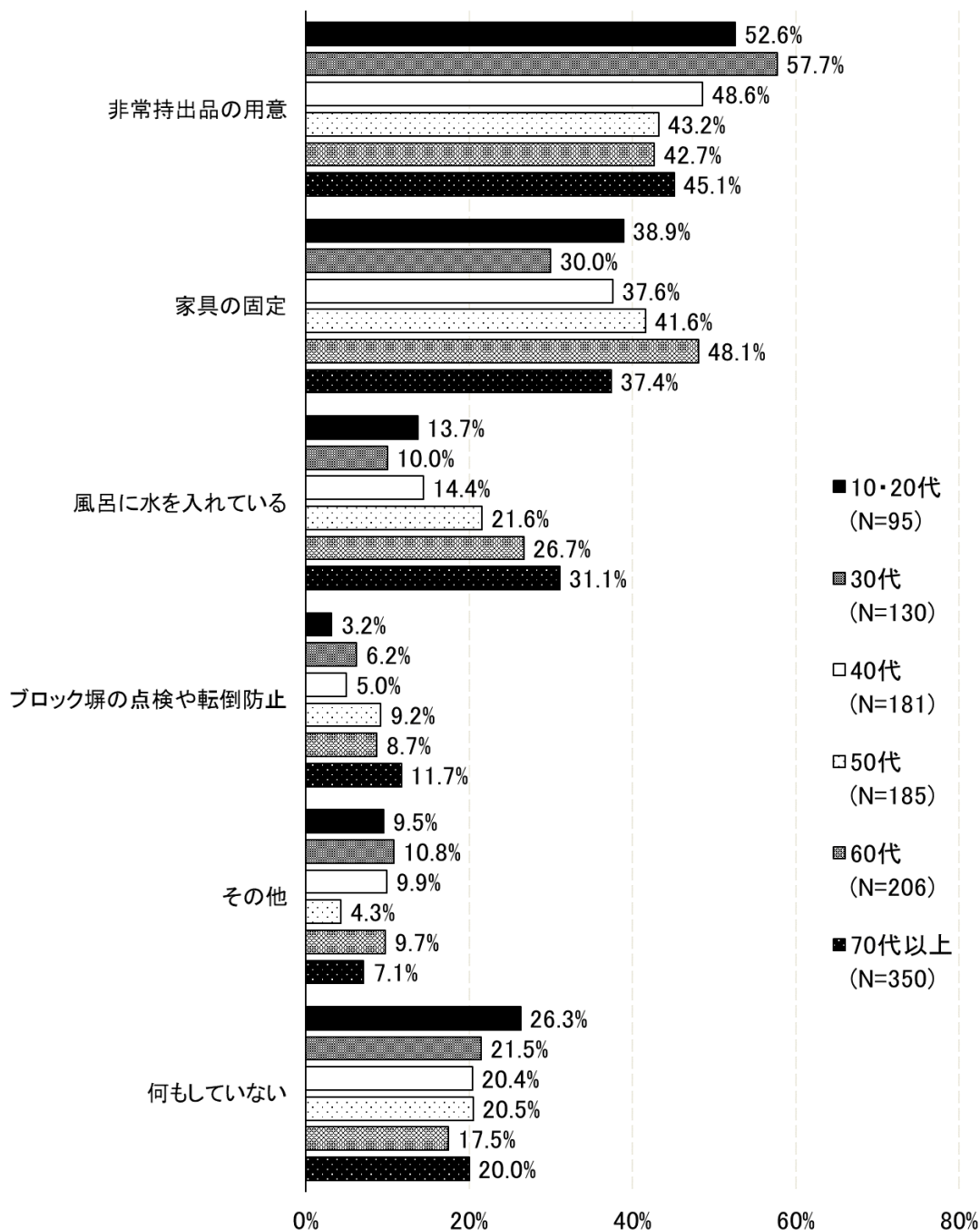


図 82 Q23 災害の備え（複数回答・年代別）

Q24A の肉体的疲労をどのくらい感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合が 6 割以上である。年代別で見ると「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 40 代が 76.8%と最も高い。反対に、10・20 代が 64.2%と最も低い（図 83）。

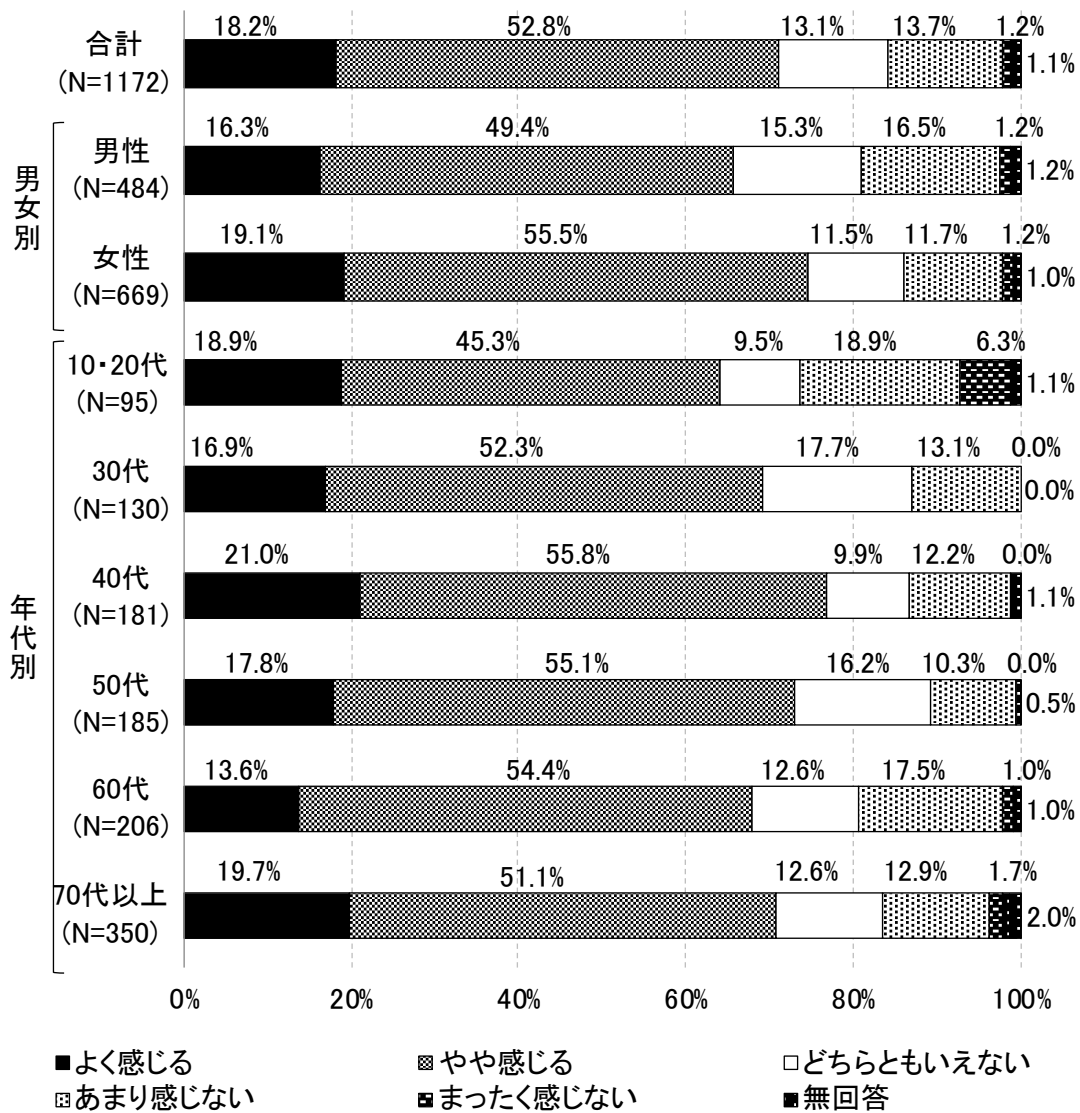


図 83 Q24A どのくらい感じるか：肉体的疲労

Q24B の精神的なストレスをどのくらい感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合が 5 割以上である。年代別で見ると「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 30 代が 72.3%と最も高い。反対に、70 代以上で 50.2%と最も低い（図 84）。

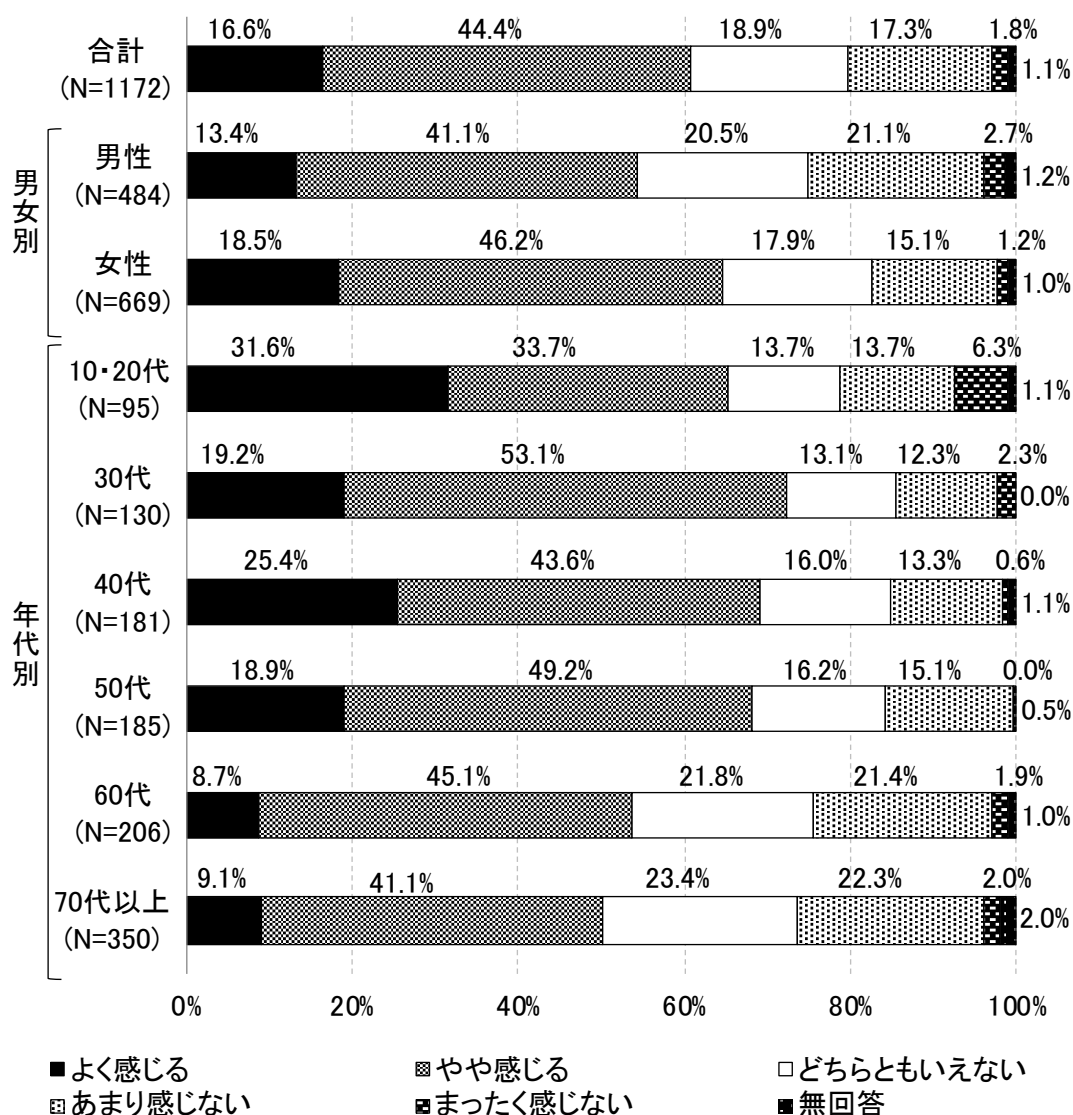


図 84 Q24B どのくらい感じるか：精神的なストレス

Q24C の体力の衰えをどのくらい感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合が 6 割以上である。年代別で見ると「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は、50 代以上で 87.0%と最も高い。反対に、10・20 代が 61.0%と最も低い（図 85）。

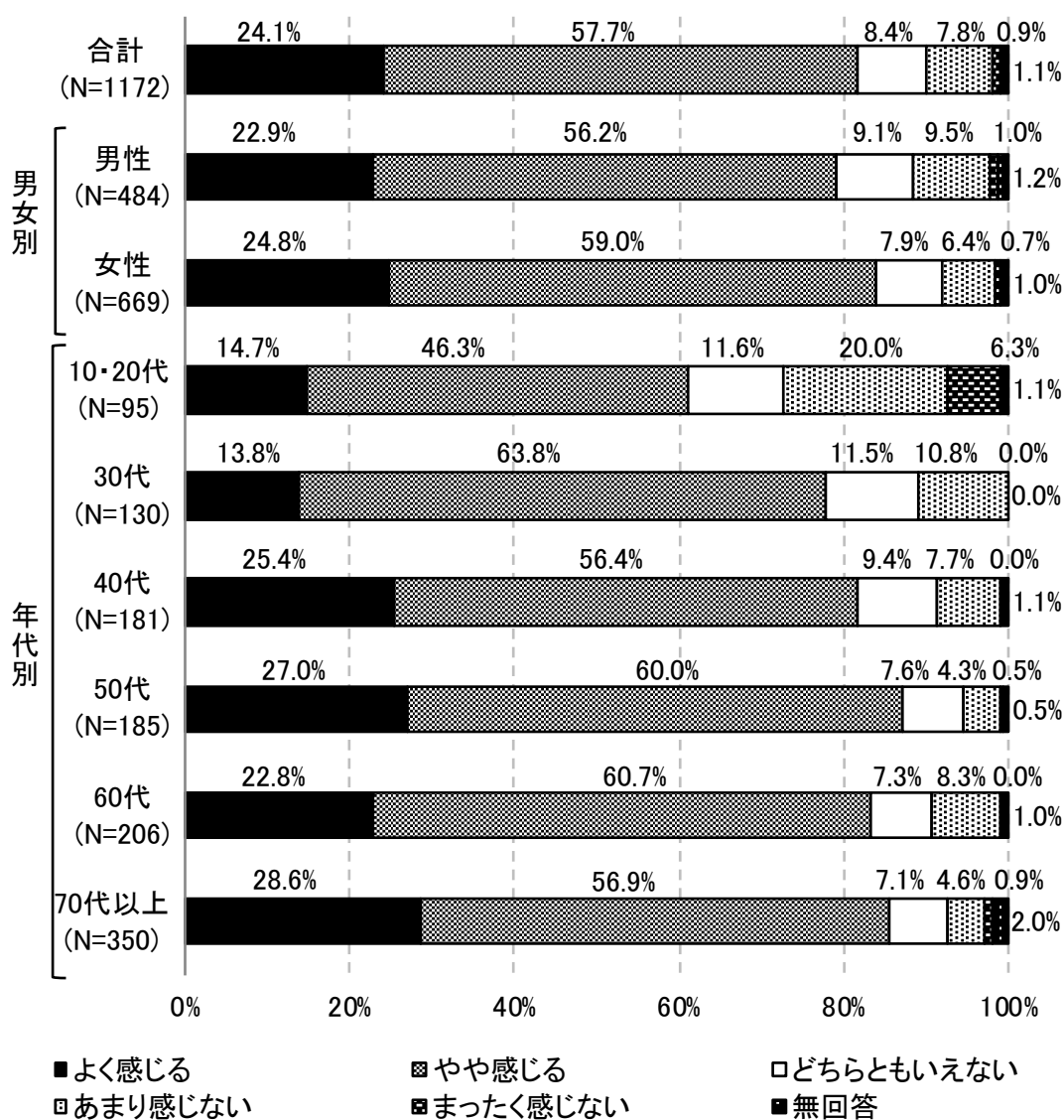


図 85 Q24C どのくらい感じるか：体力の衰え

Q24D の運動不足をどのくらい感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合が 6 割以上である。年代別で見ると「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は、30 代以上で 83.1%と最も高い。反対に、70 代以上で 67.2%と最も低い（図 86）。

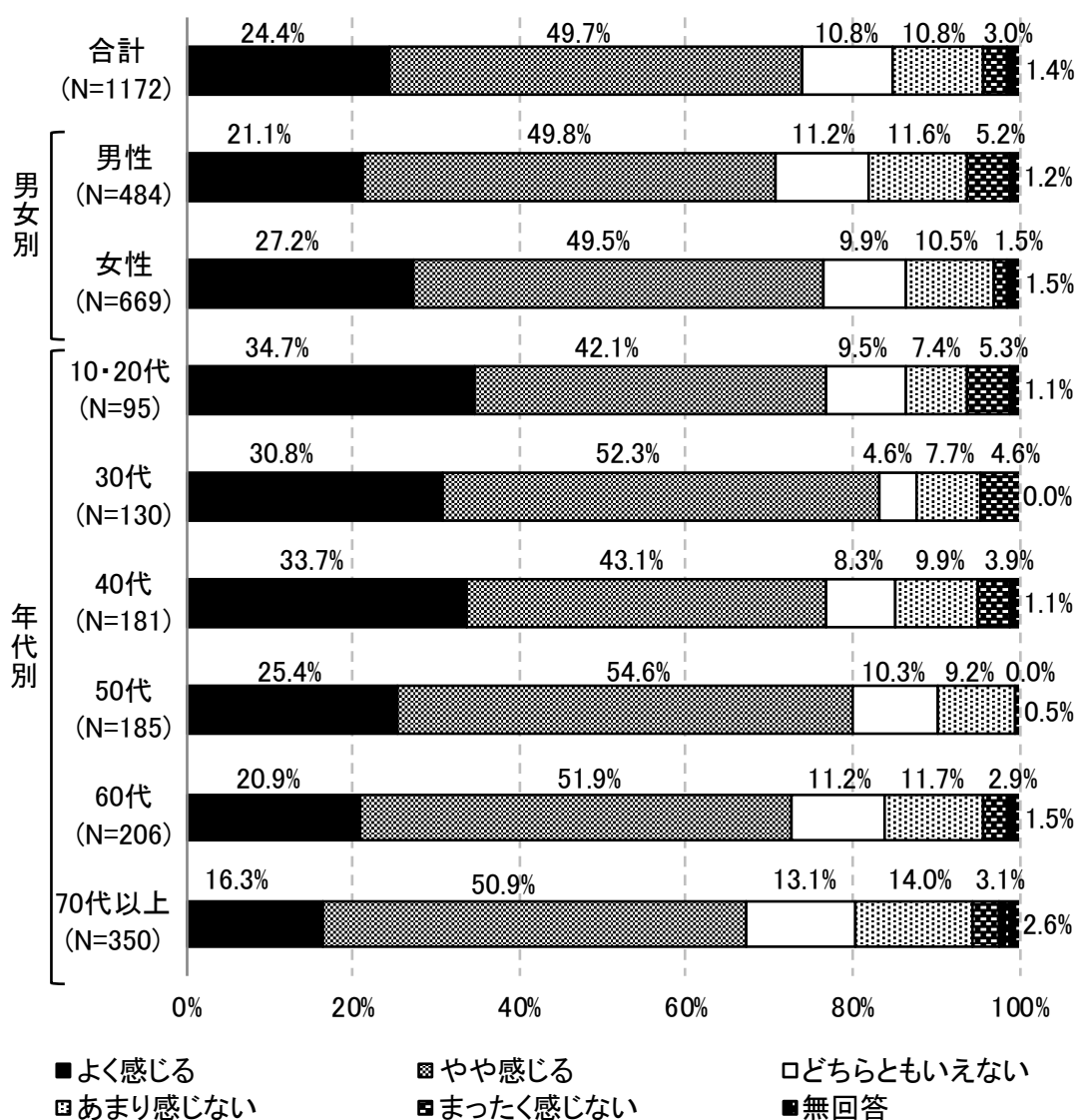


図 86 Q24D どのくらい感じるか：運動不足

Q24E の肥満をどのくらい感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合が 4 割以上である。年代別で見ると「よく感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 50 代が 54.6%と最も高い。反対に、70 代以上で 40.9%と最も低い（図 87）。

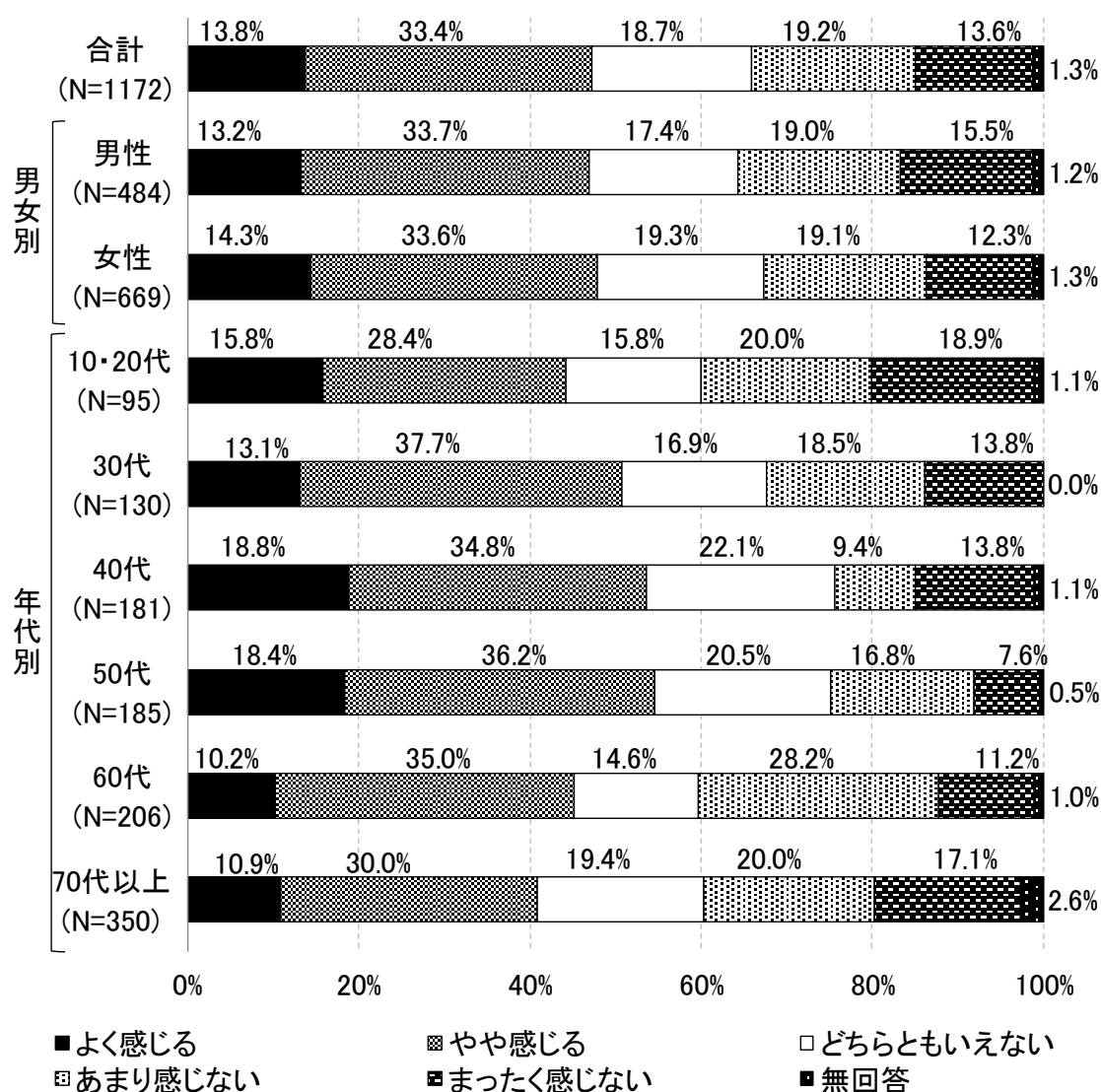


図 87 Q24E どのくらい感じるか：肥満

Q25 の一日の平均歩行時間に関して、男女別で見ると、「30 分未満」（「10 分未満」または「10 分以上 20 分未満」または「20 分以上 30 分未満」）と回答した人の割合は、男性では 36.8%、女性では 47.7%である。年代別で見ると、「30 分未満」と回答した人の割合は 30 代が 51.5%と最も高い。反対に 50 代が 38.3%と最も低い（図 88）。

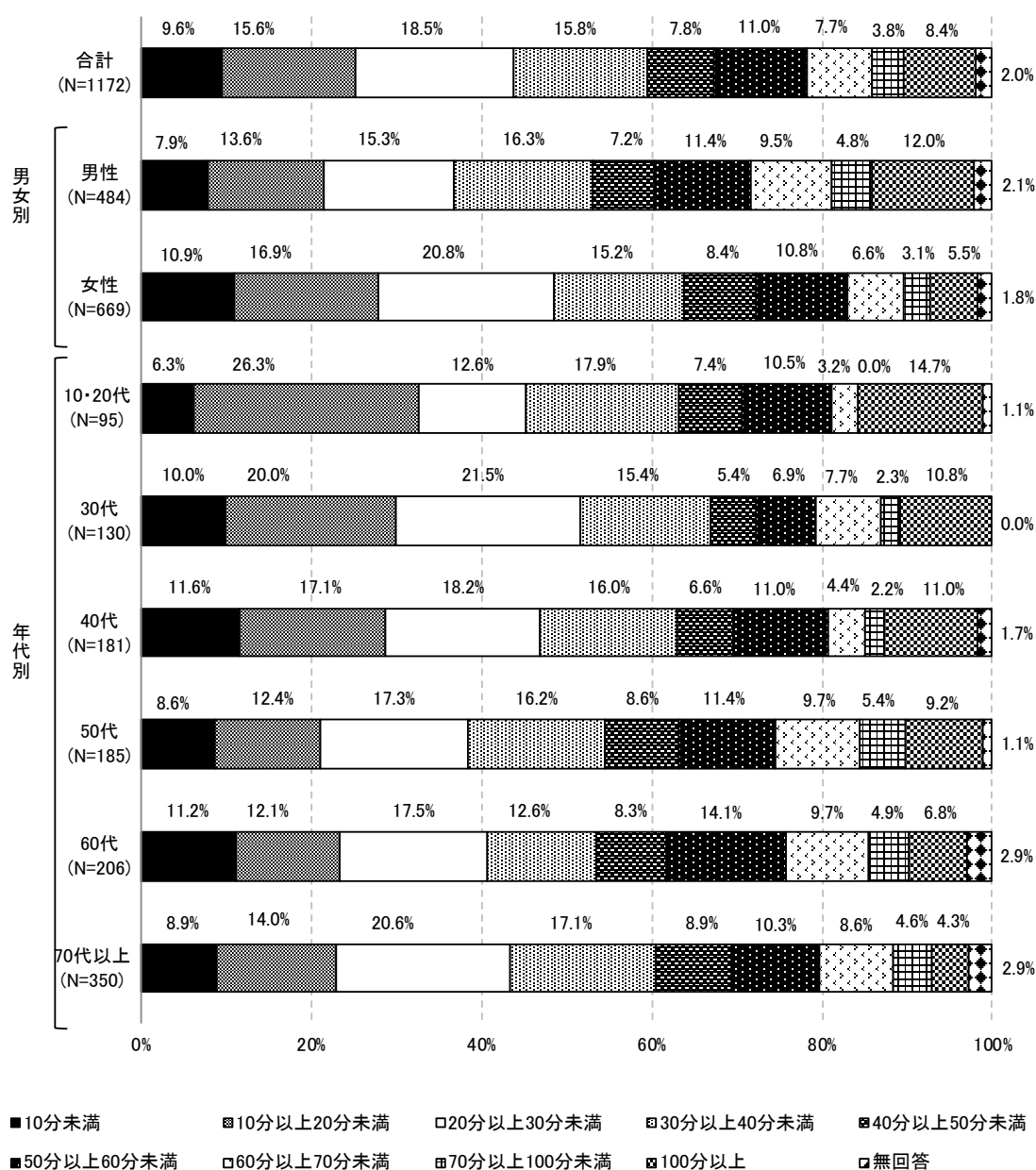


図 88 Q25 一日の平均歩行時間

Q26 のスポーツをする頻度に関して、10・20 代を除く男女別・年代別のすべての層で「していない」と回答した人の割合は 5 割以上である。年代別で見ると「していない」と回答した人の割合は 50 代が 57.3%と最も高い。反対に 10・20 代が 49.5%と最も低い（図 89）。

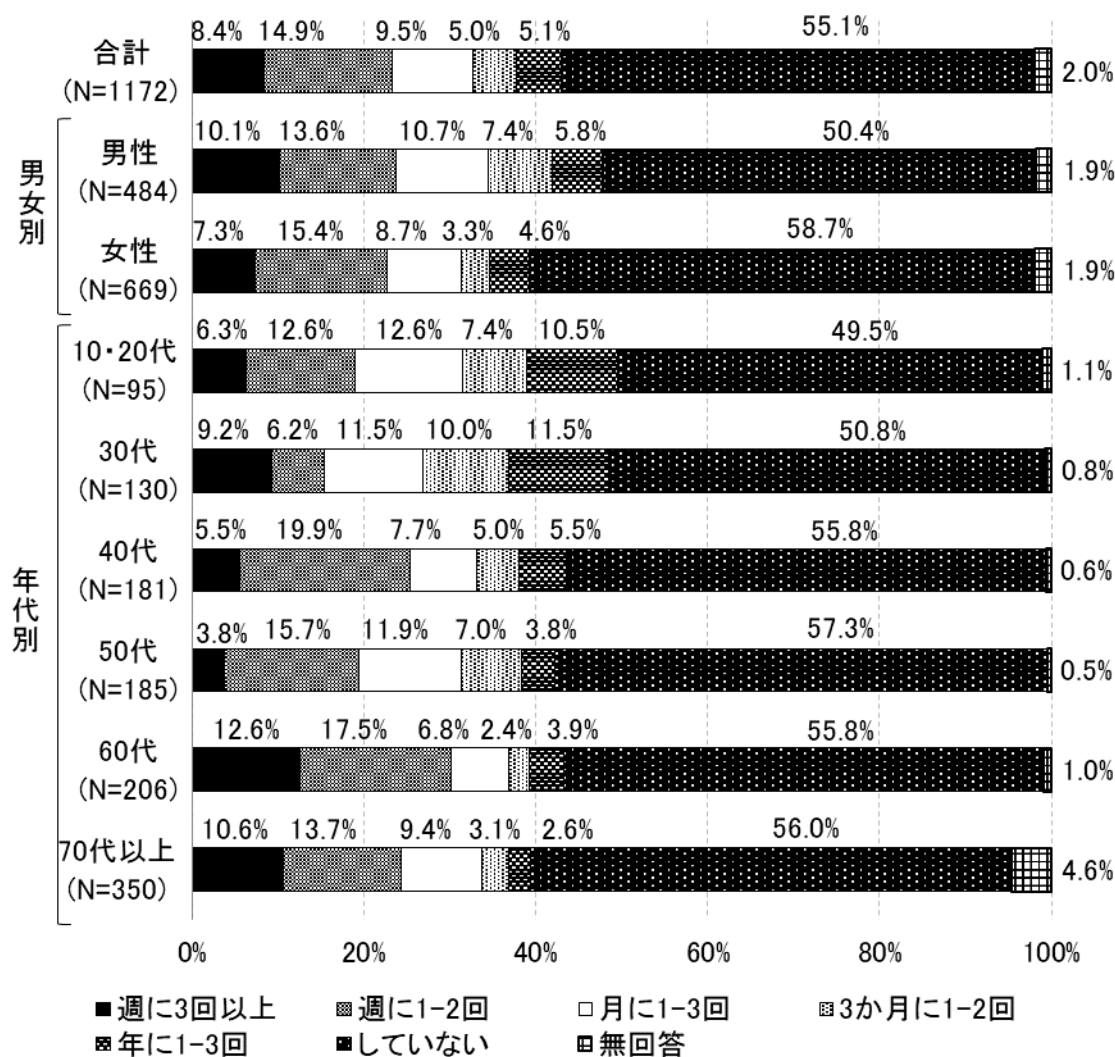


図 89 Q26 スポーツをする頻度

Q27 スポーツを定期的に行わない理由に関して、「時間がない」、「機会がない」と回答した人の割合が最も高く 4 割以上である（図 90）。

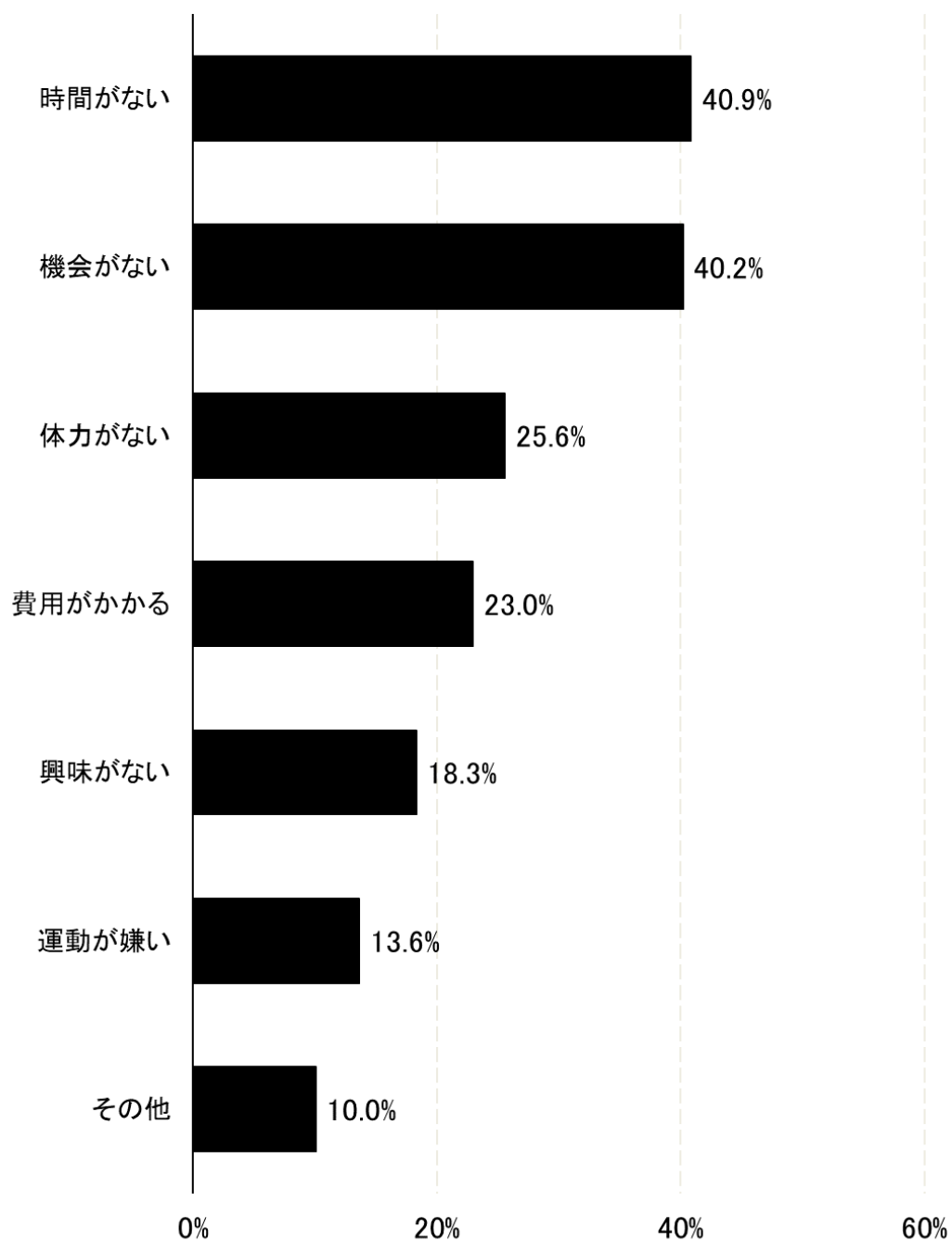


図 90 Q27 スポーツを定期的に行わない理由（複数回答・全体 N=726）

Q27 のスポーツを定期的に行わない理由を男女別で見ると、「時間がない」、「機会がない」が男女で差があり、前者は男性よりも女性の方が、後者は女性よりも男性の方がそれぞれ回答した人の割合が高い（図 91）。

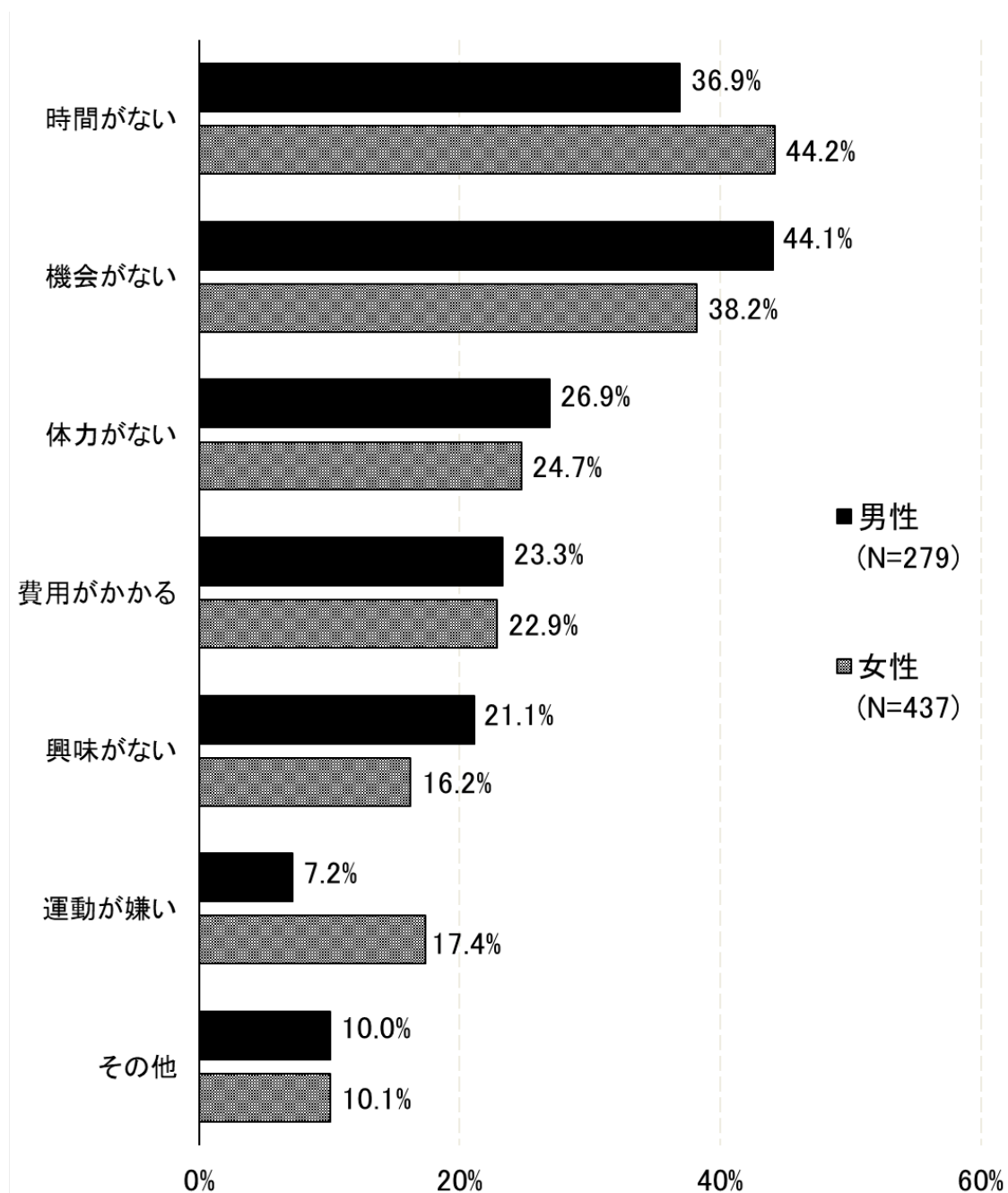


図 91 Q27 スポーツを定期的に行わない理由（複数回答・男女別）

Q27 のスポーツを定期的に行わない理由を年代別で見ると、「時間がない」に関しては、10・20 代が 68.4%と最も高い。反対に、70 代以上が 13.2%と最も低い。また「興味がない」、「運動が嫌い」に関しては、10・20 代が約 3 割であり、他の年代と比較して高い（図 92）。

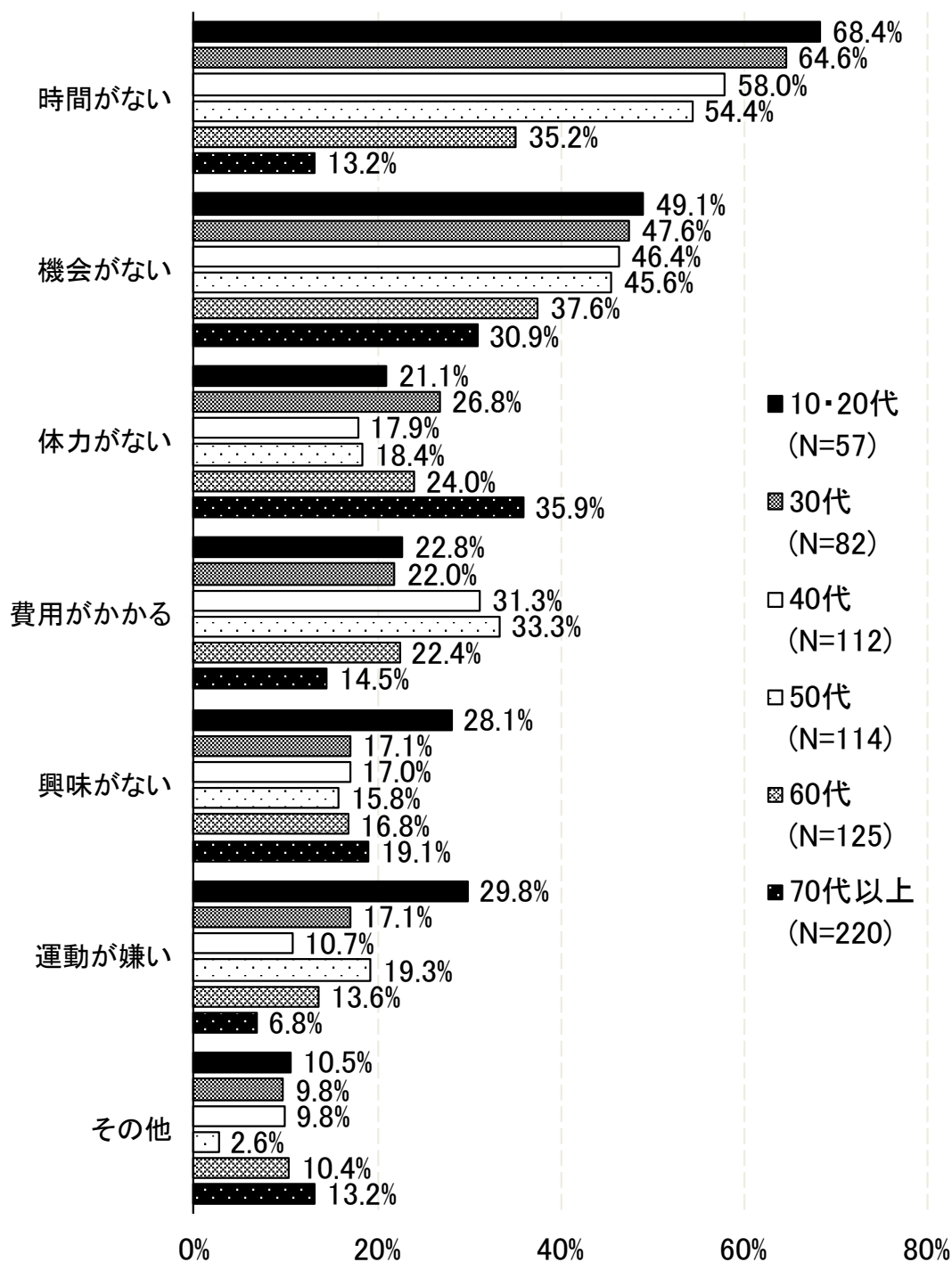


図 92 Q27 スポーツを定期的に行わない理由（複数回答・年代別）

Q28 の今後したいスポーツがあるかに関して、男女別で見ると、「したいスポーツがある」と回答した割合は男女に差があり、男性の 24.9%に対し女性は 40.4%である。年代別で見ると、「したいスポーツがある」と回答した人の割合は 10・20 代が 37.8%と最も高い。反対に 70 代以上で 8.6%と最も低い（図 93）。

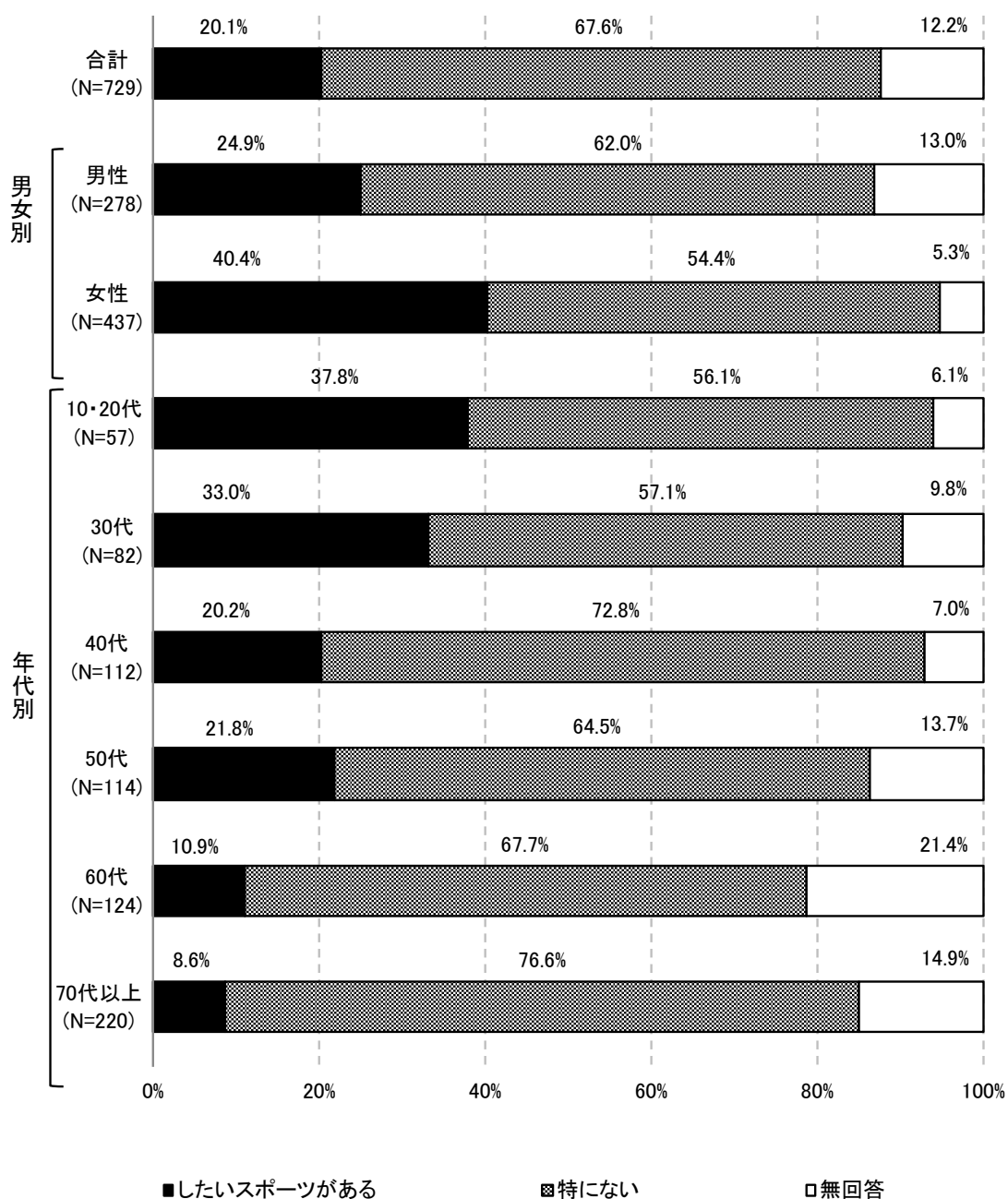


図 93 Q28 今後したいスポーツがあるか

Q29 のスポーツ施設の運営に関する要望に関して、「特に要望はない」を除き、「利用手続き等の簡素化」が 30.0%と最も高く、駐車（輪）場の確保」、「利用時間の拡大」がともに 23.3%と続く（図 94）。

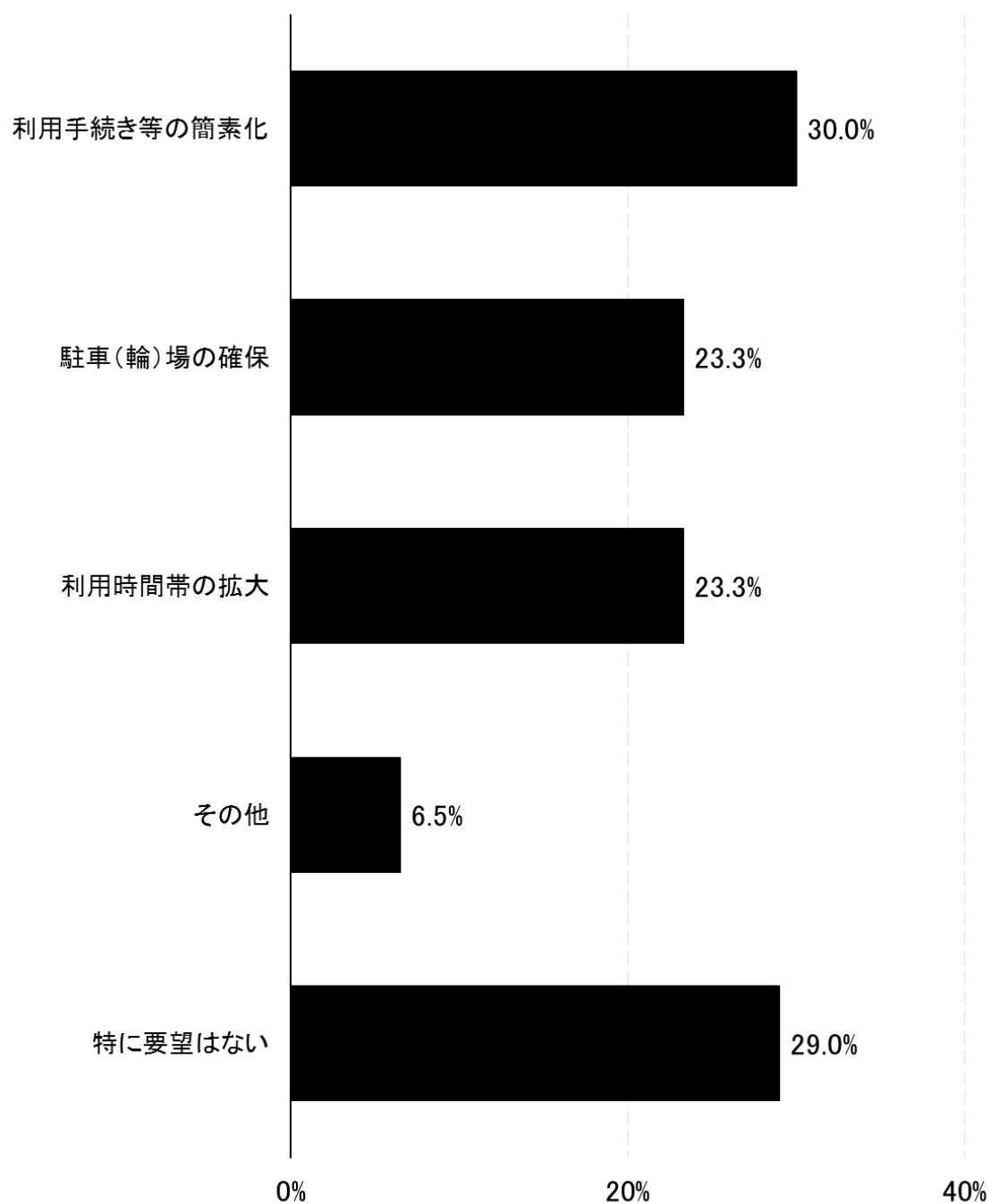


図 94 Q29 スポーツ施設の運営に関する要望（複数回答・全体 N=1172）

Q29 のスポーツ施設の運営に関する要望を男女別で見ると、「駐車(輪)場の確保」は男女で差があり、女性の方が男性よりも 7.8 ポイント高い (図 95)。

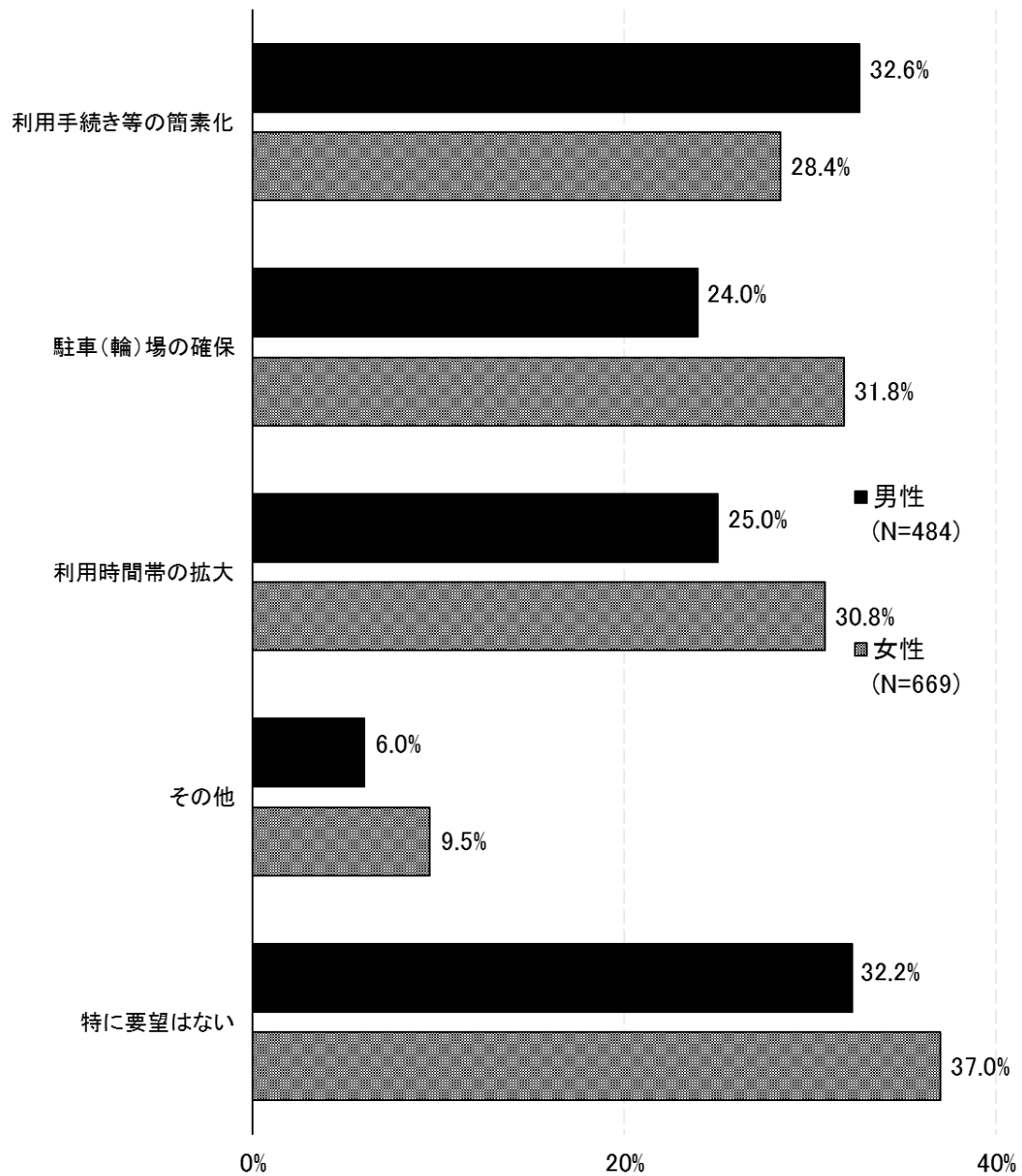


図 95 Q29 スポーツ施設の運営に関する要望 (複数回答・男女別)

Q29 のスポーツ施設の運営に関する要望を年代別で見ると、「利用手続きの簡素化」は 10・20 代が 41.1%と最も高い。反対に 70 代以上は 24.9%と最も低い（図 96）。

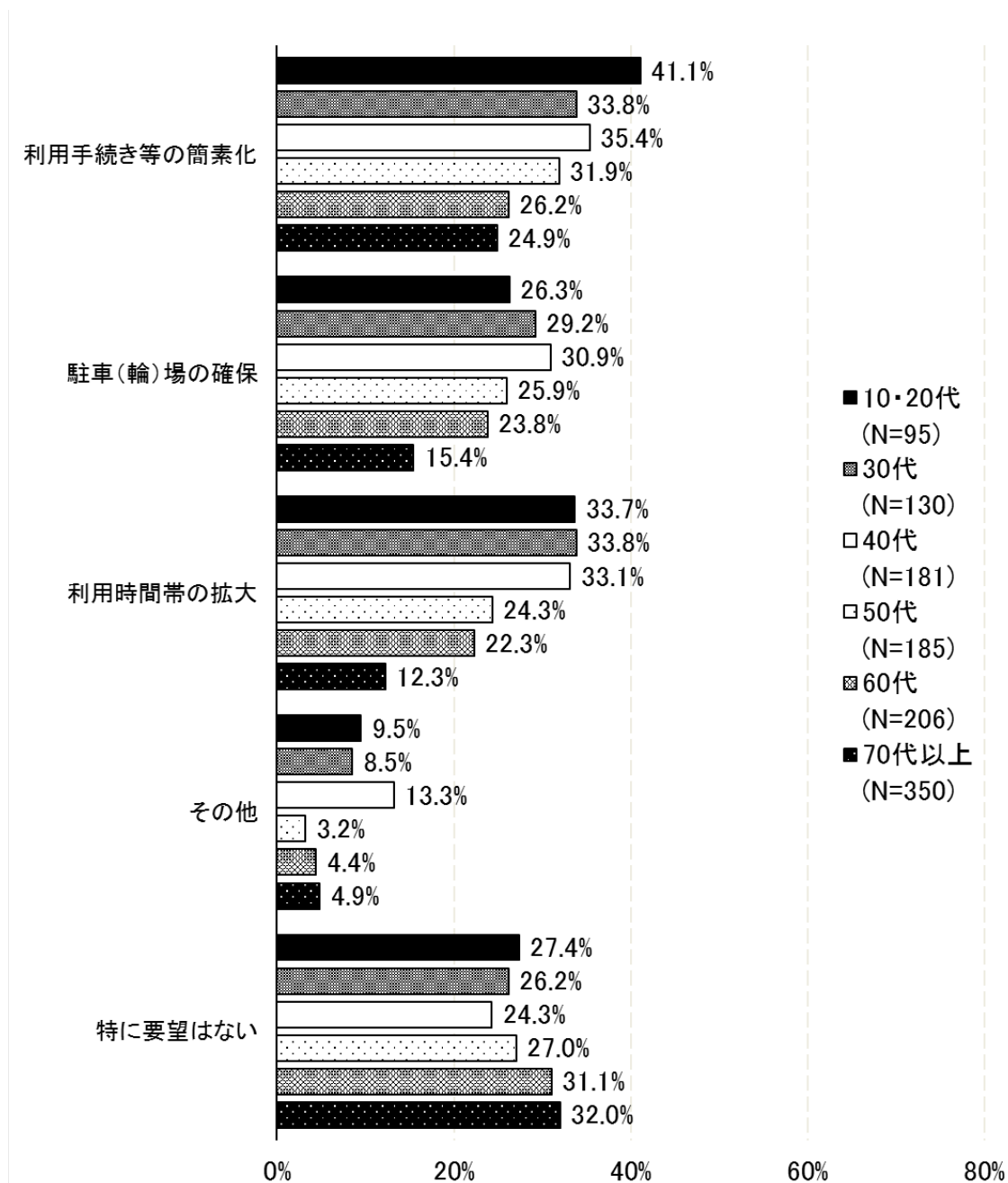


図 96 Q29 スポーツ施設の運営に関する要望（複数回答・年代別）

Q30の「総合型地域スポーツクラブ」を知っているかに関して、男女別・年代別のすべての層で「詳しく知っている」または「名前だけ知っている」と回答した人の割合は2割以上である。年代別で見ると、「詳しく知っている」または「名前だけで知っている」と回答した人の割合は70代以上で42.5%と最も高い。反対に、40代が22.1%と最も低い(図97)。

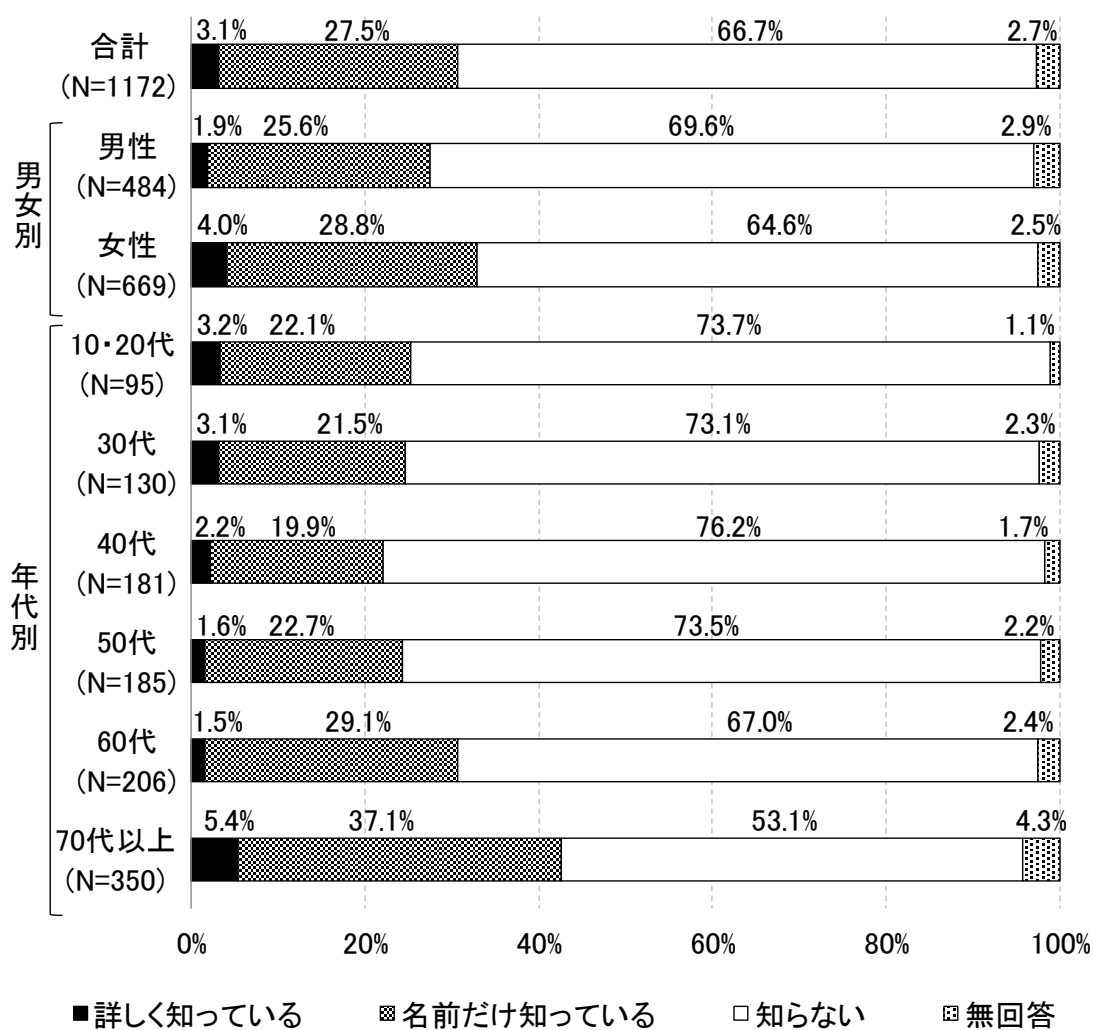


図 97 Q30 「総合型地域スポーツクラブ」を知っているか

Q31 の「スポーツ推進委員」を知っているかに関して、男女別・年代別のすべての層で「知らない」と回答した人の割合が最も高く、次いで「名前だけ知っている」と回答した人の割合が高い。年代別で見ると、「名前だけ知っている」と回答した人の割合は 70 代以上で 22.9%と最も高い。反対に、50 代が 11.9%と最も低い（図 98）。

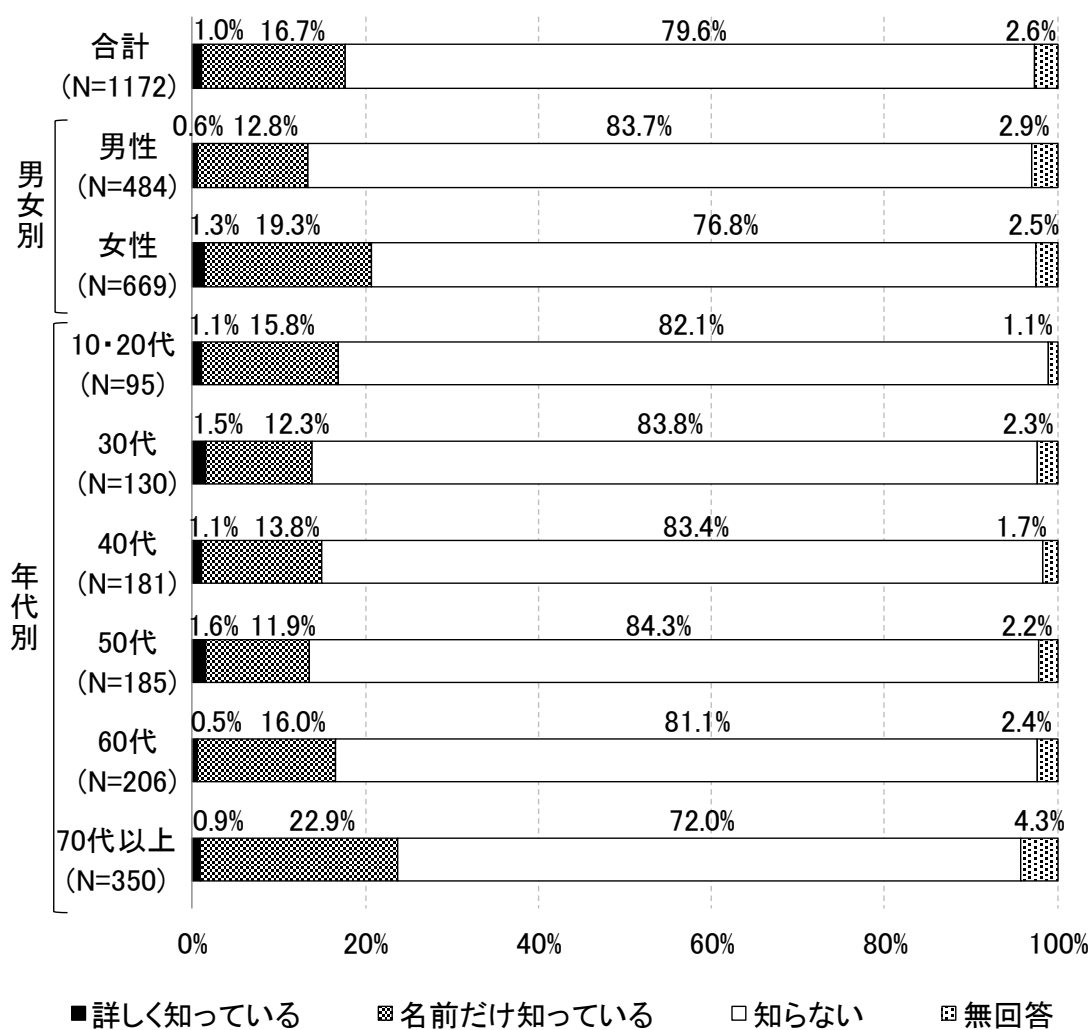


図 98 Q31 「スポーツ推進委員」を知っているか

Q32 のスポーツボランティアとしての活動経験に関して、「いずれの活動経験もない」が 84.8%と最も高く、「地域スポーツ行事などの運営や世話」が 6.4%と続く（図 99）。

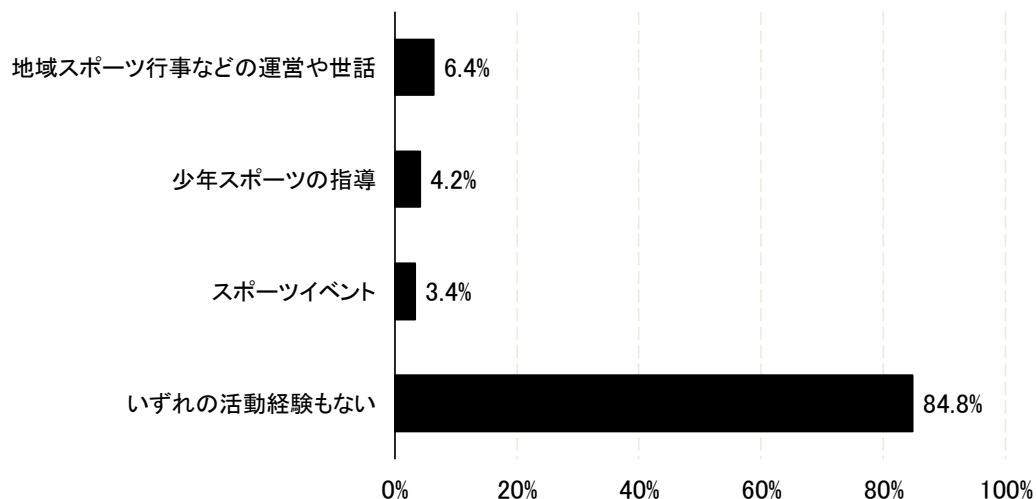


図 99 Q32 スポーツボランティアとしての活動経験（複数回答・全体 N=1172）

Q32 のスポーツボランティアとしての活動経験を男女別で見ると、「地域スポーツ行事などの運営や世話」と「少年スポーツ指導」は男女で差があり、前者は女性の方が 3.6 ポイント高く、後者は男性の方が 4.4 ポイント高い（図 100）。

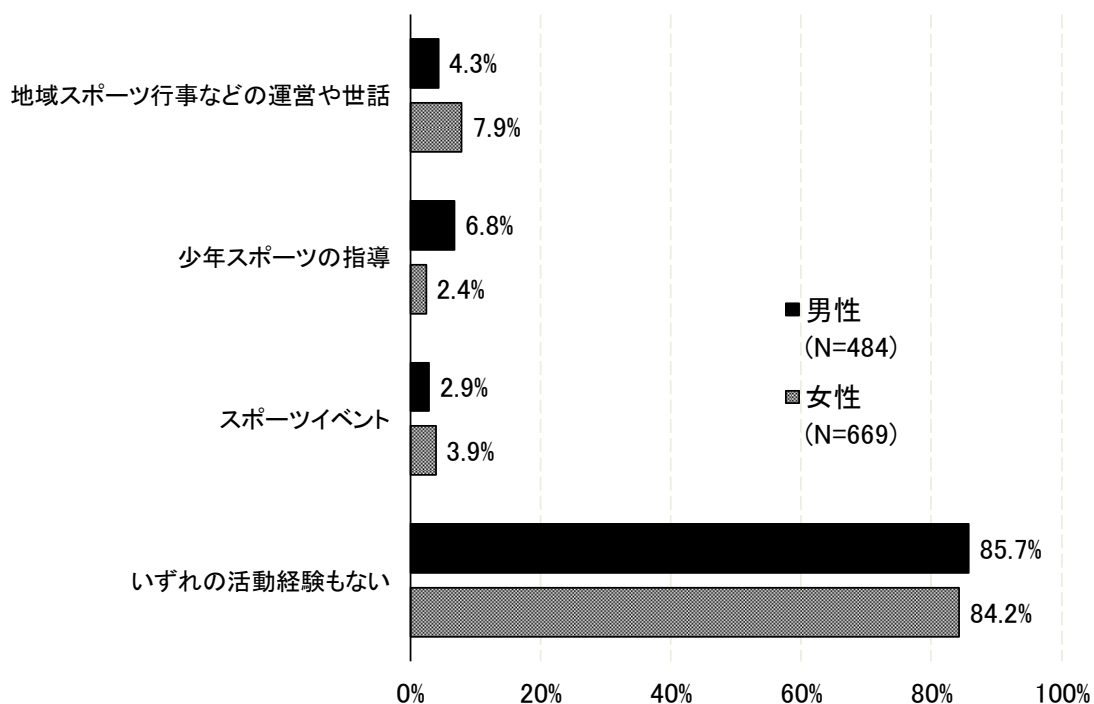


図 100 Q32 スポーツボランティアとしての活動経験（複数回答・男女別）

Q32 のスポーツボランティアとしての活動経験を年代別で見ると、「少年スポーツの指導」は10・20代が7.4%と最も高い。反対に30代は1.5%と最も低い（図 101）。

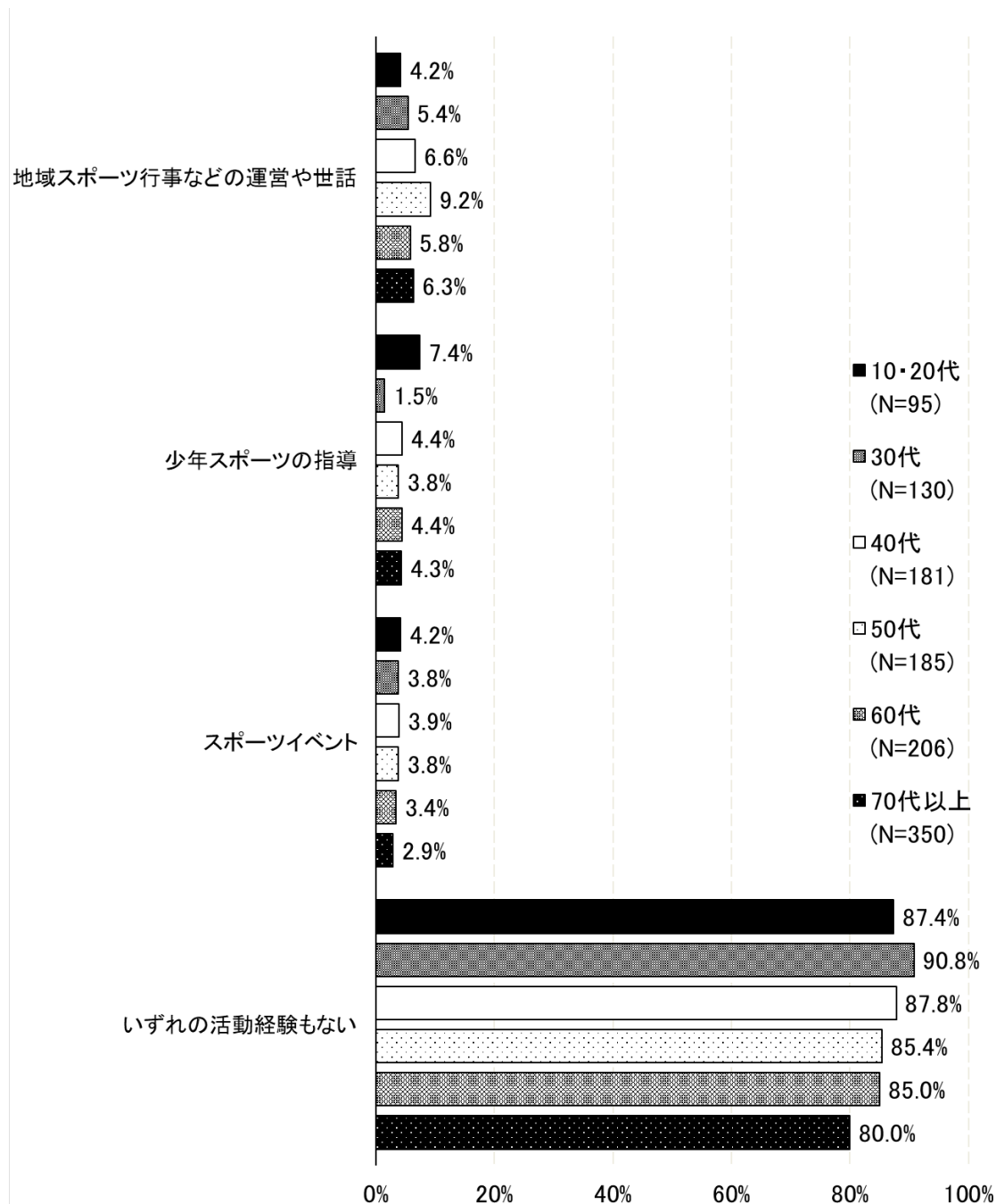


図 101 Q32 スポーツボランティアとしての活動経験（複数回答・年代別）

Q33 の小学生以下の子どもの運動の促進に何が必要かに関して、「安全に遊ぶことができる場」が 73.4%と最も高く、「体を動かしたくなる場」が 58.4%と続く（図 102）。

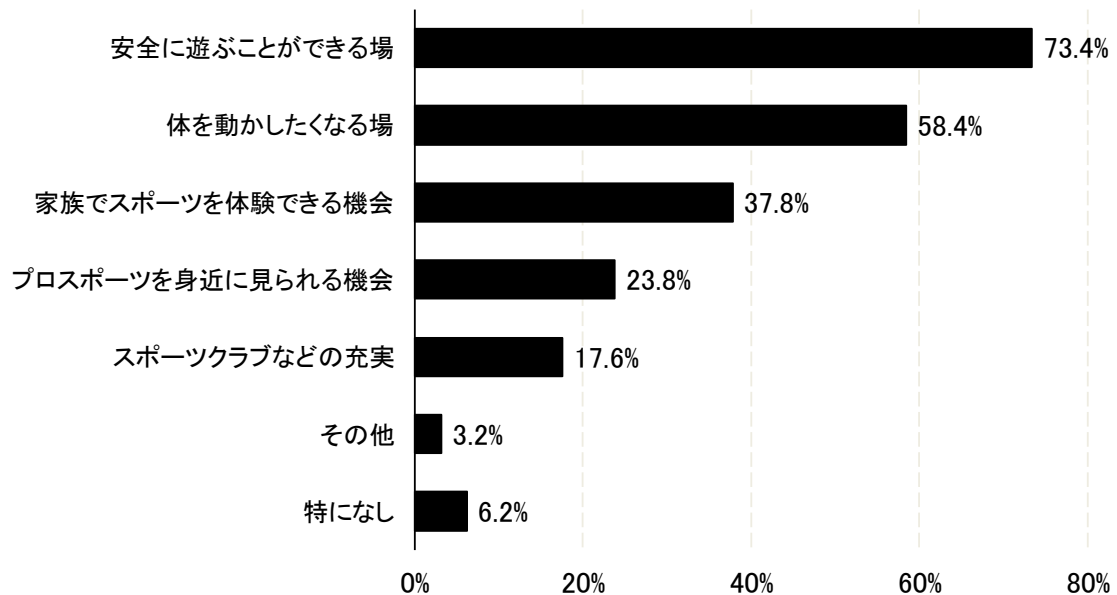


図 102 Q33 小学生以下の子どもの運動の促進に何が必要か（複数回答・全体 N=1172）

Q33 の小学生以下の子供の運動の促進に何が必要かを男女別で見ると、男女に大きな差は見られないが、「特になし」を除けば「プロスポーツを身近に感じられる機会」は男女で差があり、女性よりも男性の方が値が高い（図 103）。

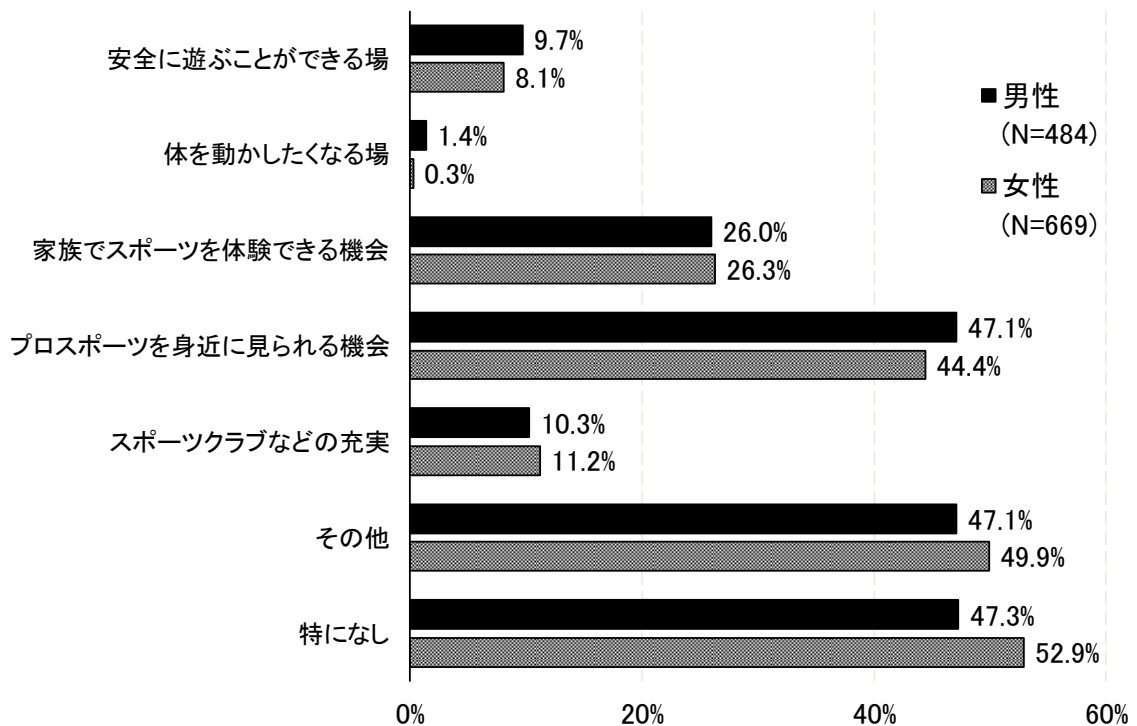


図 103 Q33 小学生以下の子どもの運動の促進に何が必要か（複数回答・男女別）

Q33 の小学生以下の子どもの運動の促進に何が必要かを年代別で見ると、「体を動かしたくなる場」は 10・20 代が 70.5%と最も高い。反対に 70 代以上が 51.1%と最も低い（図 104）。

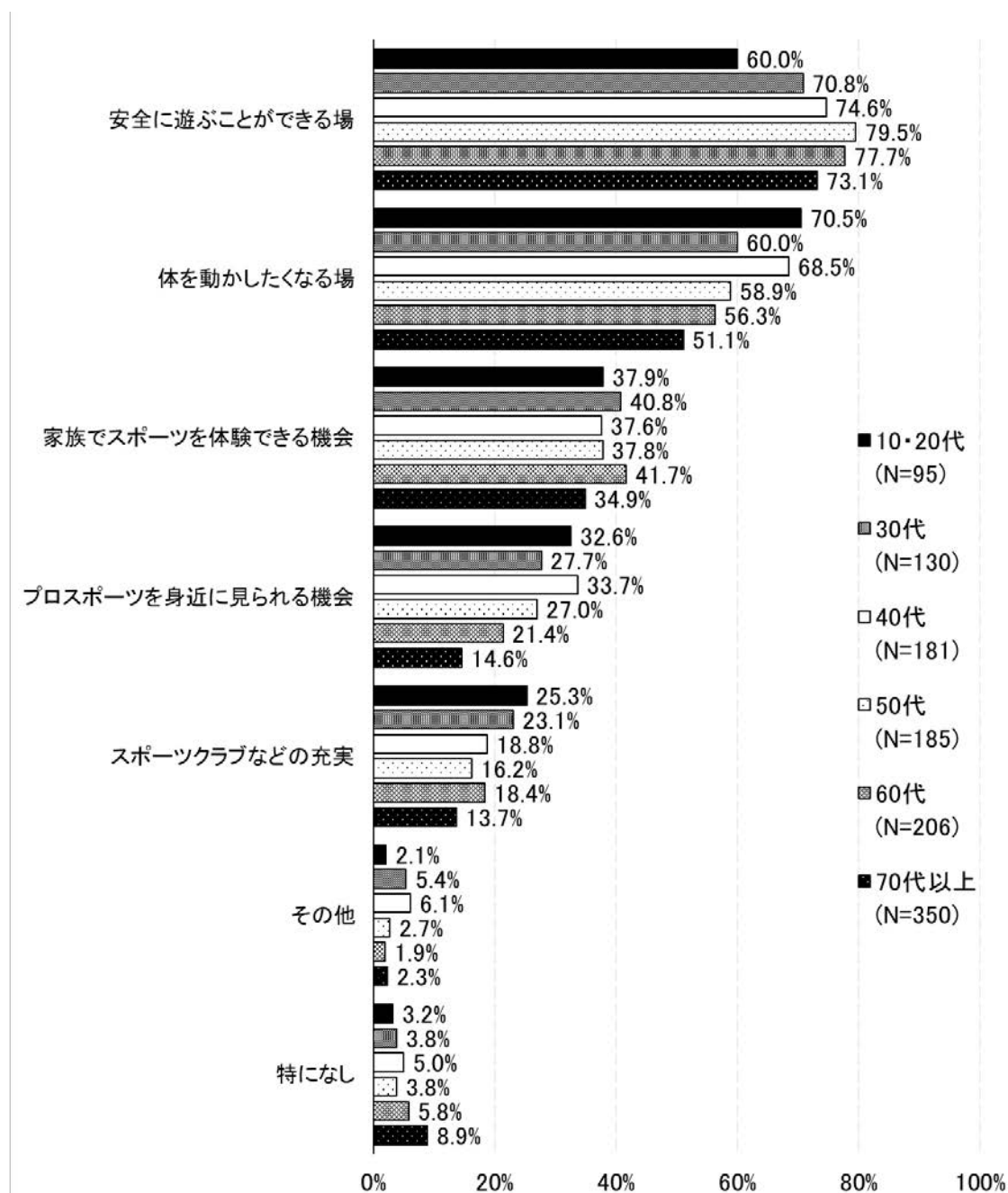


図 104 Q33 小学生以下の子どもの運動の促進に何が必要か（複数回答・年代別）

Q34 のスポーツ振興のために力を入れるべき施策に関して、「特になし」を除き、「スポーツ施設等の整備や開放の促進」が 57.6%と最も高く、「スポーツ行事や教室の開催」が 42.8%と続く（図 105）。

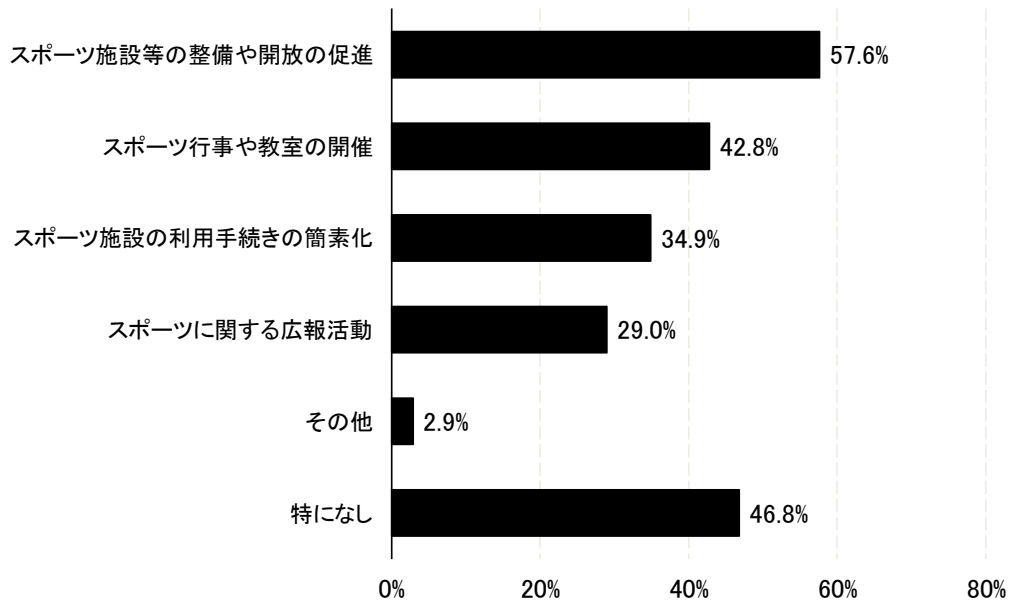


図 105 Q34 スポーツ振興のために力を入れるべき施策（複数回答・全体 N=1172）

Q34 のスポーツ振興のために力を入れるべき施策を男女別で見ると、「スポーツ施設等の整備や開放の促進」は男女で差があり、女性よりも男性の方が 7.1 ポイント高い（図 106）。

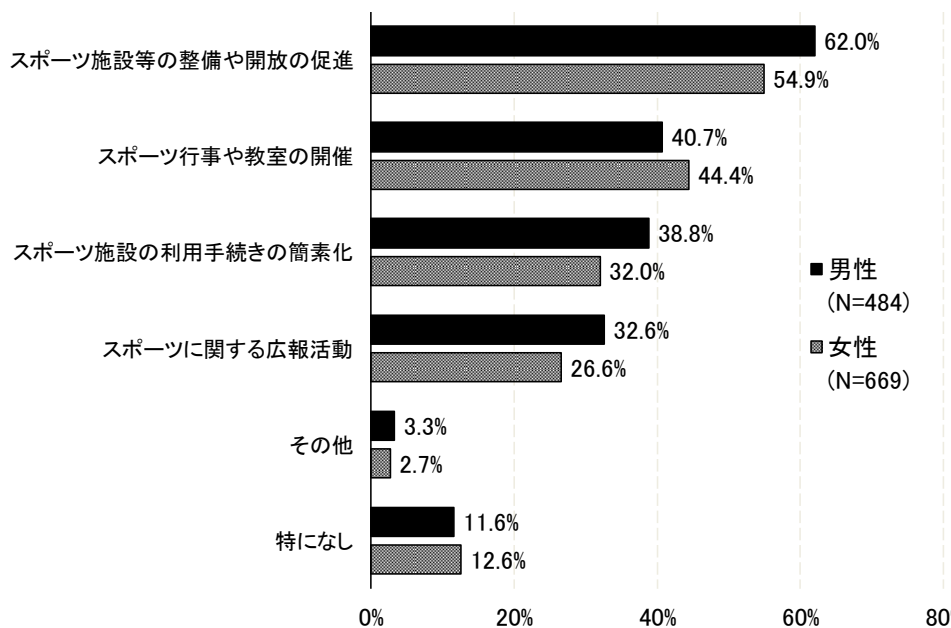


図 106 Q34 スポーツ振興のために力を入れるべき施策（複数回答・男女別）

Q34 のスポーツ振興のために力を入れるべき施策を年代別で見ると、「スポーツ施設等の整備や開放の促進」は 10 代から 60 代が 60.0%から 65.0%に収まっているのに対し、唯一 70 代以上は 46.9%である（図 107）。

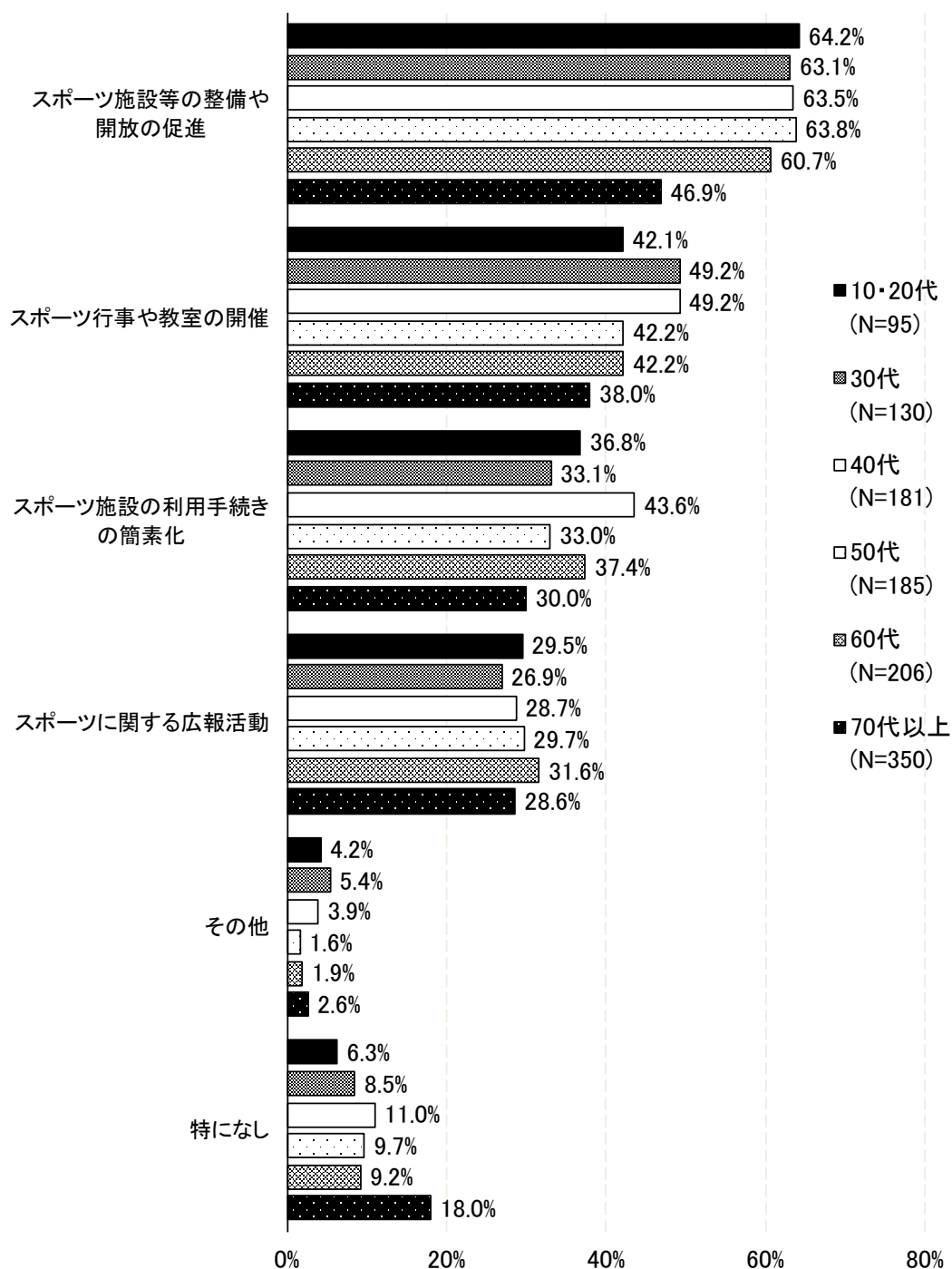


図 107 Q34 スポーツ振興のために力を入れるべき施策（複数回答・年代別）

Q35 の高槻市のスポーツに関する情報の入手方法に関して、「特になし」を除き、「高槻市広報誌(たかつき DAYS)」が 66.3%と最も高く、「友人」が 15.8%と続く (図 108)。

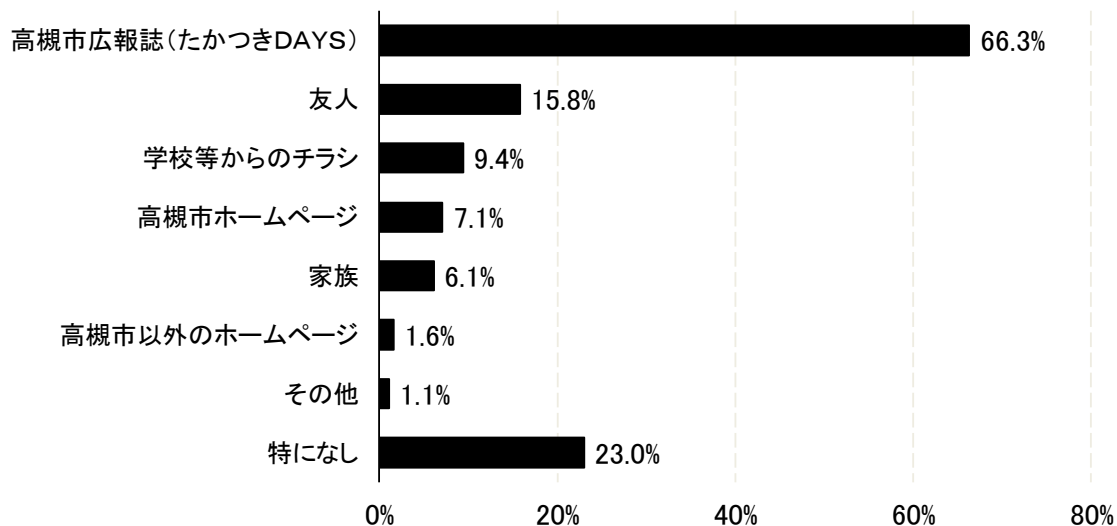


図 108 Q35 高槻市のスポーツに関する情報の入手方法 (複数回答・全体 N=1172)

Q35 の高槻市のスポーツに関する情報の入手方法を男女別で見ると、「高槻市広報誌(たかつき DAYS)」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 10.9 ポイント高い (図 109)。

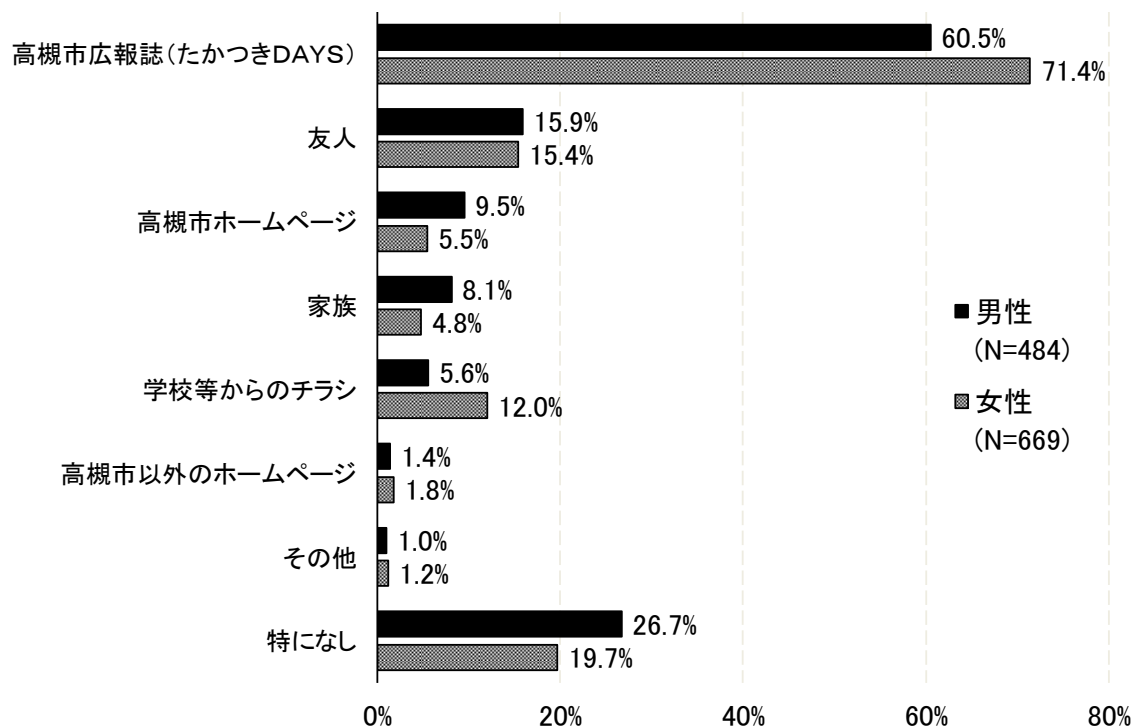


図 109 Q35 高槻市のスポーツに関する情報の入手方法 (複数回答・男女別)

Q35 の高槻市のスポーツに関する情報の入手方法を年代別で見ると、「高槻市広報誌(たかつき DAYS)」は年代ごとに差があり、60 代が 76.7%と最も高い。反対に 10・20 代で 35.8%と最も低い(図 110)。

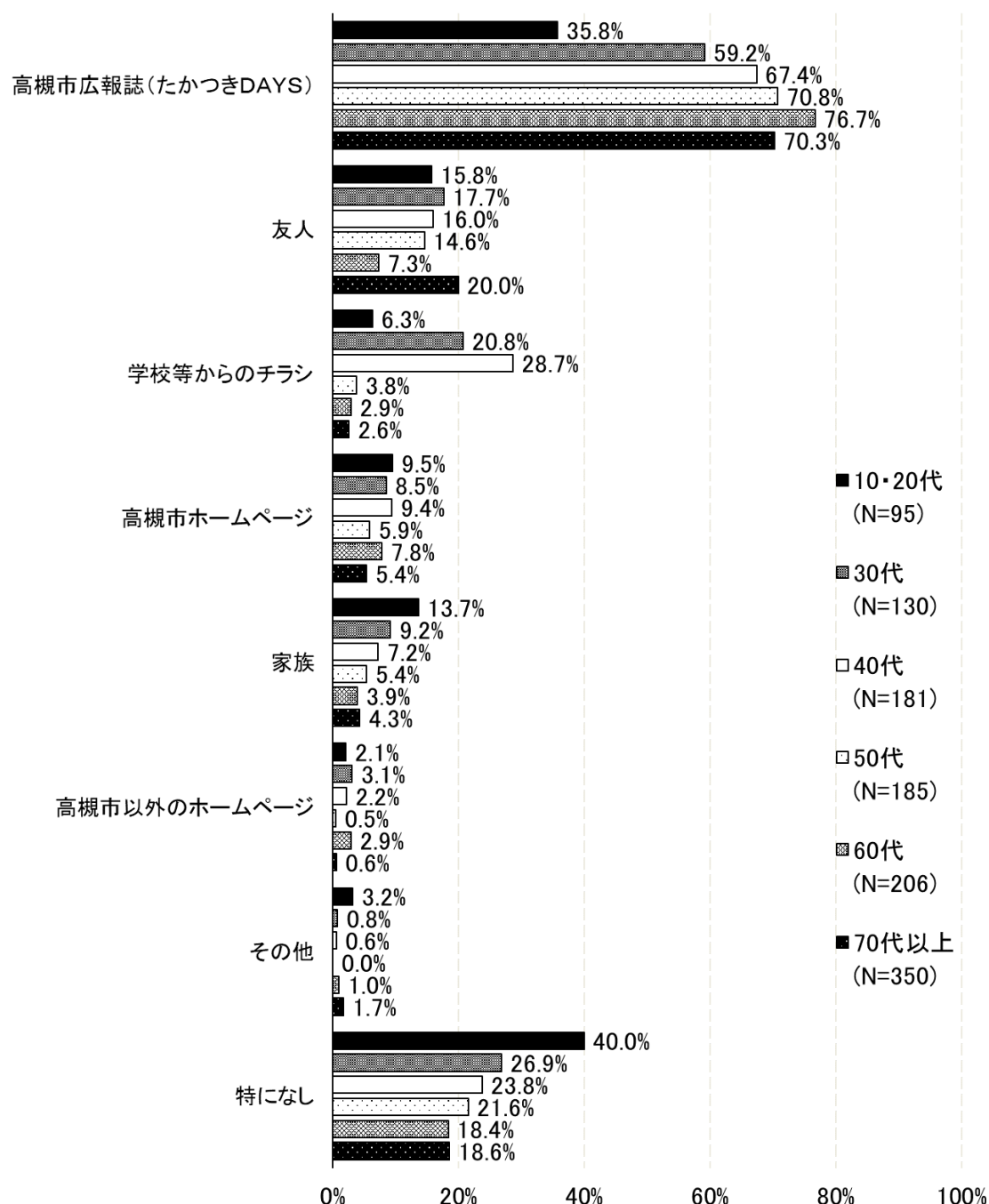


図 110 Q35 高槻市のスポーツに関する情報の入手方法(複数回答・年代別)

Q36 の『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知に関して、年代別で見ると、「知らない」と回答した人の割合は 50 代が 95.7%と最も高い。反対に、70 代以上が 79.1%と最も低い（図 111）。

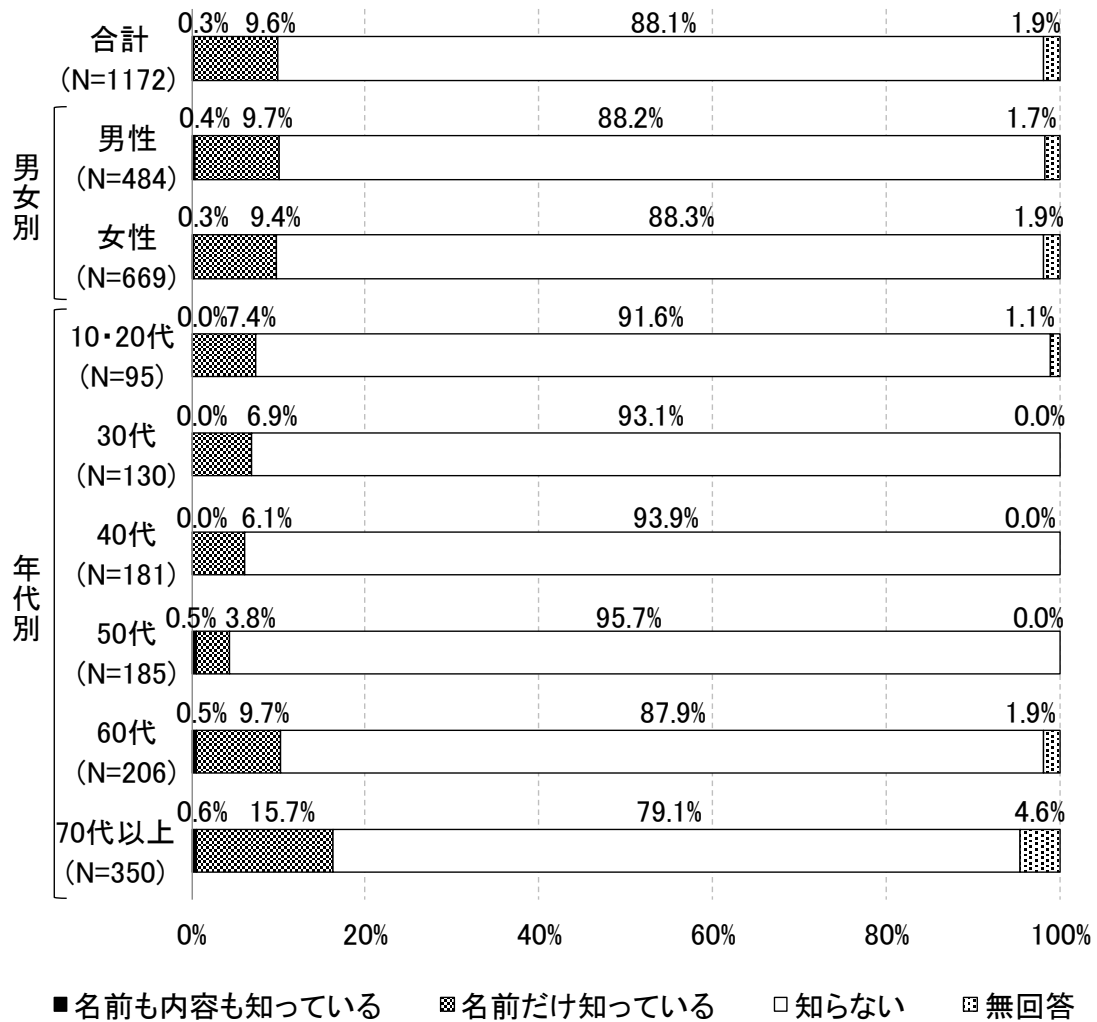


図 111 Q36 「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知

Q37 の高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行政改革に取り組むべきかに関して、男女別・年代別のすべての層で、7 割以上の人が「感じる」または「やや感じる」と回答している。年代別で見ると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 50 代が 85.4% ともっとも高い。反対に、70 代以上が 72.3% と最も低い（図 112）。

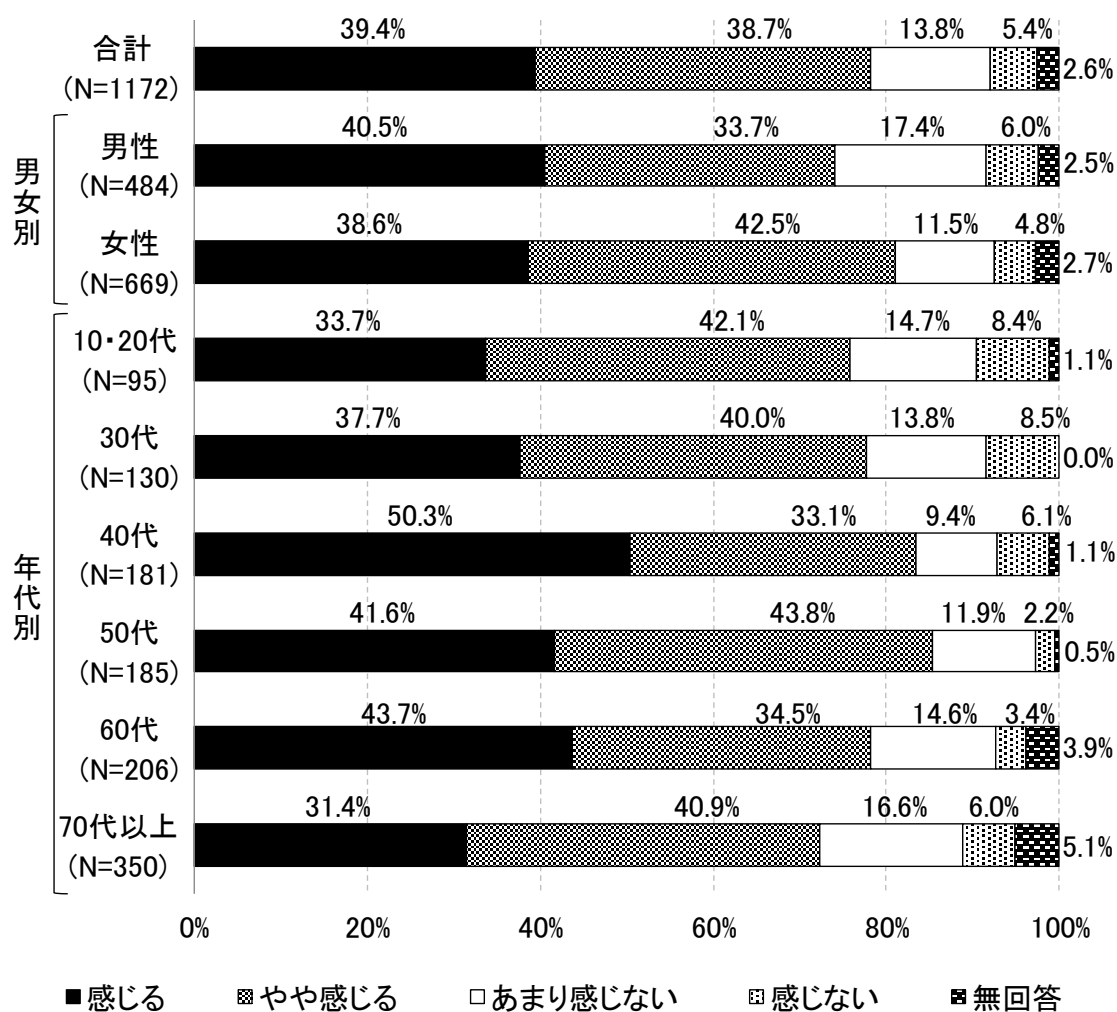


図 112 Q37 高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行政改革に取り組むべきか

Q38①の市の仕事のうち最近良くなってきたものに関して、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」が25.0%と最も高く、「図書館、博物館などの文化施設の整備」が23.5%と続く（図 113）。

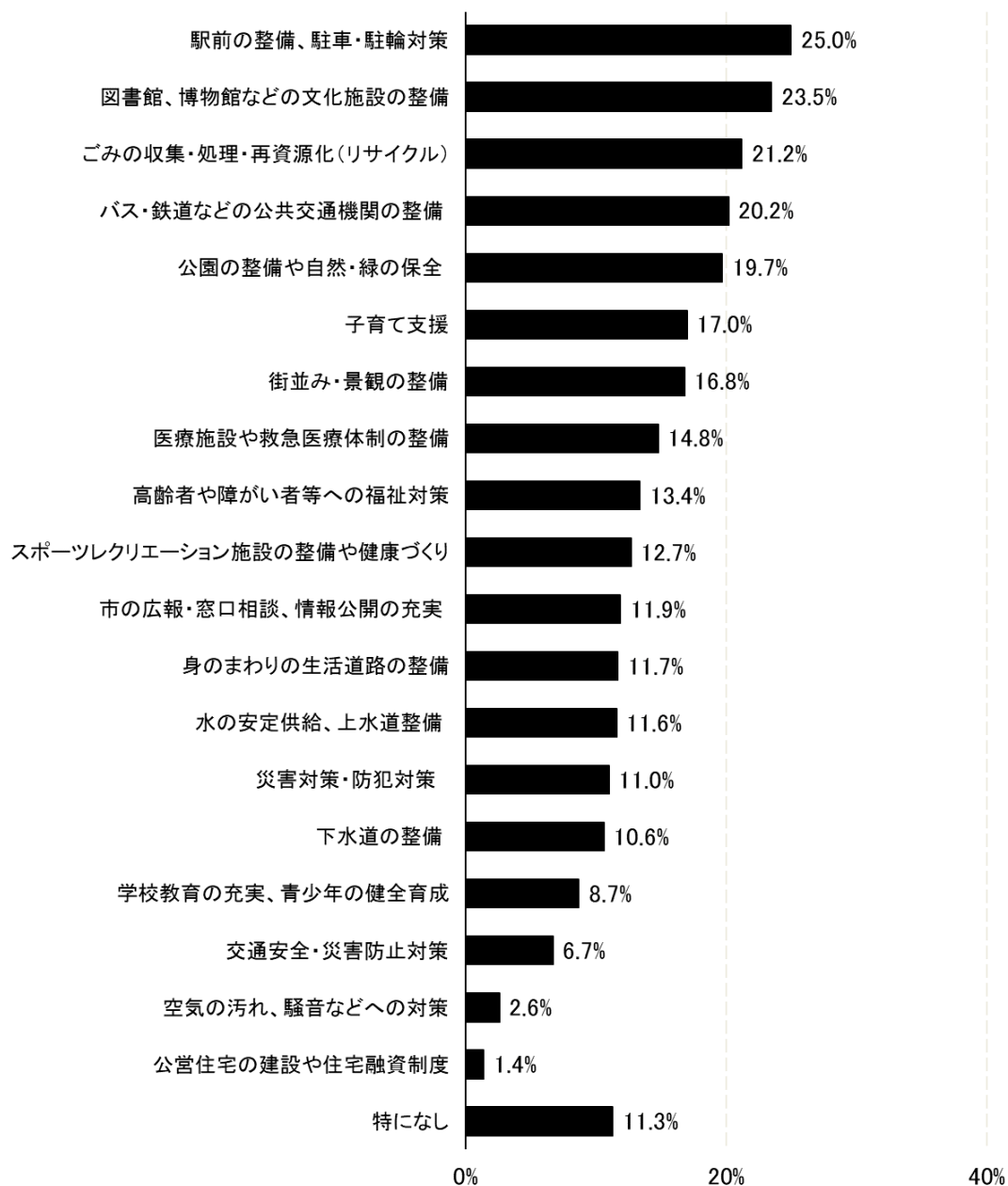


図 113 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・全体 N=1172）

Q38①の市の仕事のうち最近良くなってきたものを男女別で見ると、「子育て支援」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 8.3 ポイント高い。また「医療施設や救急医療体制の整備」も男女で差があり、女性よりも男性の方が 5.8 ポイント高い（図 114）。

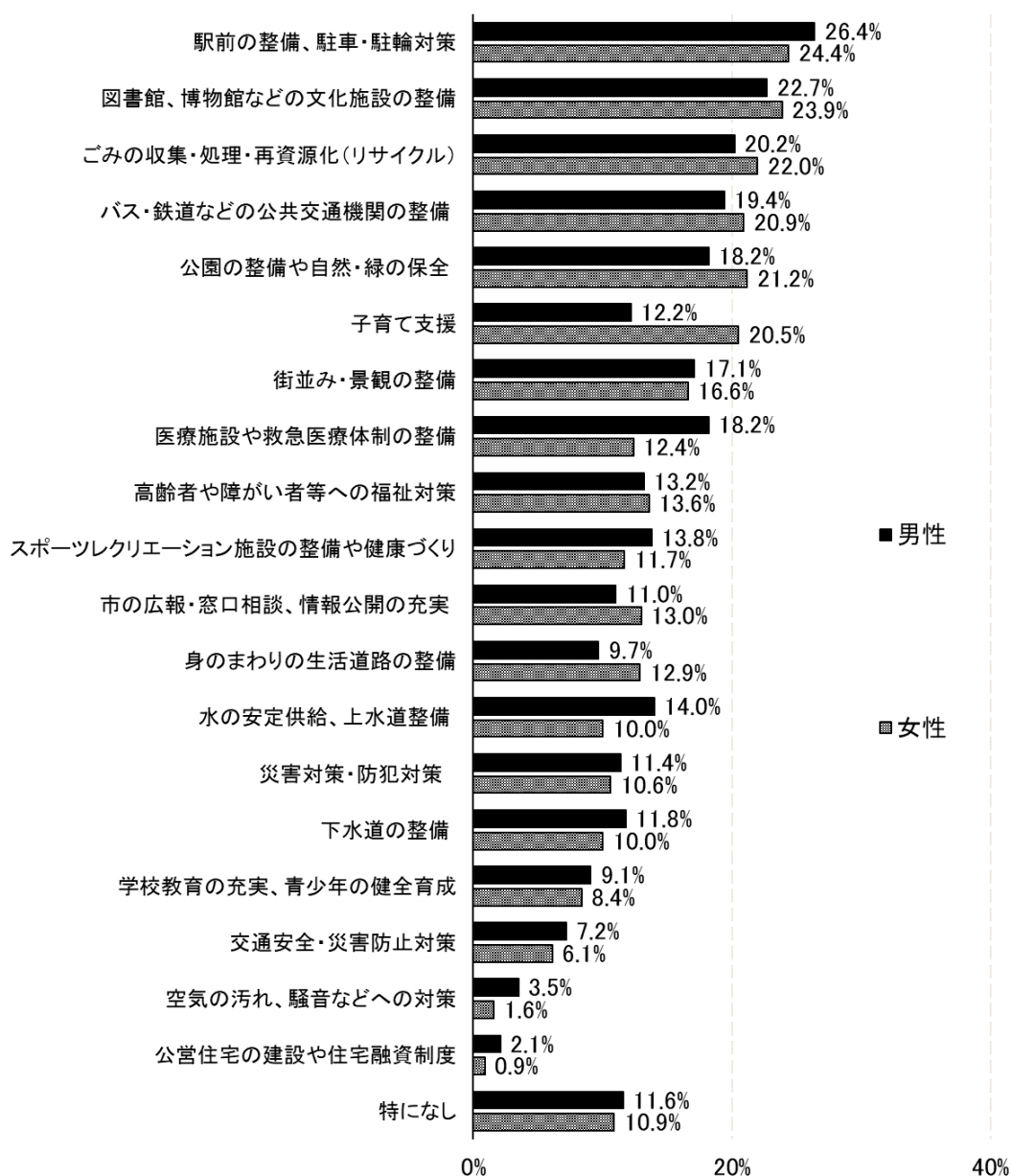


図 114 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・男女別）

Q38①の市の仕事のうち最近良くなってきたものを年代別で見ると、「ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)」は、年齢が高くなればなるほど回答割合が高くなっており、70代以上では32.3%と最も高い。反対に10・20代では8.4%と最も低い(表5、図115)。

表5 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの(複数回答・年代別)

	(%)						
	駅前の整備、駐 車・駐輪対策	図書館、博物館 などの文化施 設の整備	ごみの収集・処 理・再資源化(リ サイクル)	バス・鉄道など の公共交通機 関の整備	公園の整備や 自然・緑の保全	子育て支援	街並み・景観の 整備
10・20代 (N=95)	21.1	36.8	8.4	22.1	31.6	17.9	22.1
30代 (N=130)	23.1	25.7	9.2	26.9	17.1	25.4	18.5
40代 (N=181)	21.0	24.4	13.3	15.5	21.0	22.1	17.7
50代 (N=185)	23.2	22.8	17.3	15.7	16.1	17.3	17.3
60代 (N=206)	29.1	22.2	27.2	23.3	17.0	16.5	15.0
70代以上 (N=350)	28.6	31.1	32.3	20.9	20.1	11.4	14.9

	(%)						
	医療施設や救 急医療体制の 整備	高齢者や障が い者等への福 祉対策	スポーツ・レクリ エーション施設 の整備や健康 づくり	市の広報・窓口 相談、情報公開 の充実	身のまわりの生 活道路の整備	水の安定供給、 上水道整備	災害対策・防犯 対策
10・20代 (N=95)	10.5	26.3	26.3	4.2	16.8	7.4	11.6
30代 (N=130)	18.4	9.9	11.2	8.5	0.0	6.9	8.5
40代 (N=181)	12.7	7.8	17.6	10.5	11.0	5.5	9.9
50代 (N=185)	17.2	12.8	16.7	9.2	14.1	7.0	10.3
60代 (N=206)	21.7	12.7	16.0	12.1	8.7	12.1	12.1
70代以上 (N=350)	23.3	25.9	17.8	18.0	13.1	20.0	12.0

	(%)						
	下水道の整備	学校教育の充 実、青少年の健 全育成	交通安全・災害 防止対策	空気の汚れ、騒 音などへの対 策	公営住宅の建 設や住宅融資 制度	特になし	
10・20代 (N=95)	5.3	15.8	5.3	0.0	1.1	13.7	
30代 (N=130)	3.8	11.8	3.8	2.6	0.8	11.5	
40代 (N=181)	5.0	15.6	5.5	4.4	0.0	15.5	
50代 (N=185)	9.7	9.4	4.9	0.6	1.1	15.1	
60代 (N=206)	11.7	9.9	6.3	1.9	3.9	8.7	
70代以上 (N=350)	18.0	9.7	9.7	2.9	1.1	7.1	

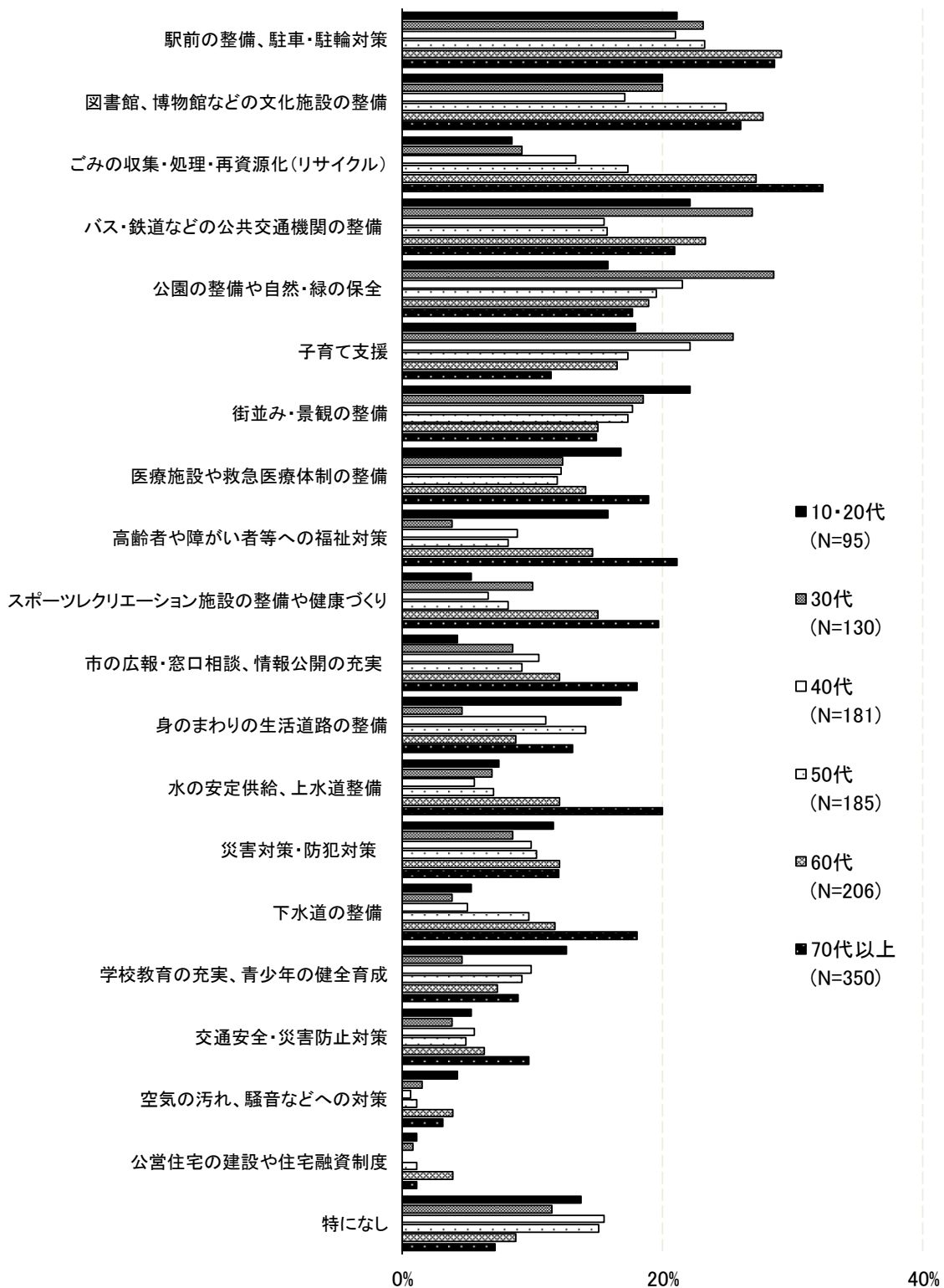


図 115 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・年代別）

Q38①の市の仕事のうち最近良くなってきたものを居住地域別で見ると、「図書館、博物館などの文化施設の整備」について、高槻北地区では、31.1%と最も高くなっており、高槻南地区では、14.1%と最も低くなっている（表 6、図 116）。

表 6 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

	(%)						
	駅前の整備、駐 車・駐輪対策	図書館、博物館 などの文化施 設の整備	ごみの収集・処 理・再資源化(リ サイクル)	バス・鉄道など の公共交通機 関の整備	公園の整備や 自然・緑の保全	子育て支援	街並み・景観の 整備
高槻北地区 (N=334)	29.0	31.1	22.2	22.5	21.3	18.9	22.2
高槻南地区 (N=280)	26.9	14.1	15.9	20.8	20.5	18.0	13.1
五領地区 (N=43)	23.3	20.9	23.3	25.6	27.9	11.6	16.3
高槻西地区 (N=209)	22.6	30.1	26.3	19.4	13.4	16.1	16.7
如是・富田地 区(N=237)	25.1	22.9	23.8	18.4	21.5	18.4	14.8
三箇牧地区 (N=36)	13.9	16.7	16.7	22.2	11.1	11.1	11.1

	(%)						
	医療施設や救 急医療体制の 整備	高齢者や障が い者等への福 祉対策	スポーツ・レクリ エーション施設 の整備や健康 づくり	市の広報・窓口 相談、情報公開 の充実	身のまわりの生 活道路の整備	水の安定供給、 上水道整備	災害対策・防犯 対策
高槻北地区 (N=334)	21.3	15.3	15.3	12.0	13.2	10.8	13.5
高槻南地区 (N=280)	12.4	12.4	10.6	13.4	8.5	9.2	11.7
五領地区 (N=43)	11.6	14.0	4.7	4.7	20.9	11.6	7.0
高槻西地区 (N=209)	14.0	10.2	14.0	13.4	13.4	10.2	9.1
如是・富田地 区(N=237)	13.0	15.7	12.6	12.1	12.1	16.6	9.4
三箇牧地区 (N=36)	2.8	22.2	11.1	5.6	2.8	19.4	8.3

	(%)					
	下水道の整備	学校教育の充 実、青少年の健 全育成	交通安全・災害 防止対策	空気の汚れ、騒 音などへの対 策	公営住宅の建 設や住宅融資 制度	特になし
高槻北地区 (N=334)	9.3	9.6	7.2	2.7	1.5	7.8
高槻南地区 (N=280)	10.2	7.8	6.4	3.2	1.4	13.8
五領地区 (N=43)	14.0	0.0	7.0	4.7	0.0	4.7
高槻西地区 (N=209)	10.8	9.1	5.4	2.2	0.0	12.4
如是・富田地 区(N=237)	13.9	9.4	7.2	1.3	2.2	13.0
三箇牧地区 (N=36)	13.9	8.3	8.3	2.8	5.6	8.3

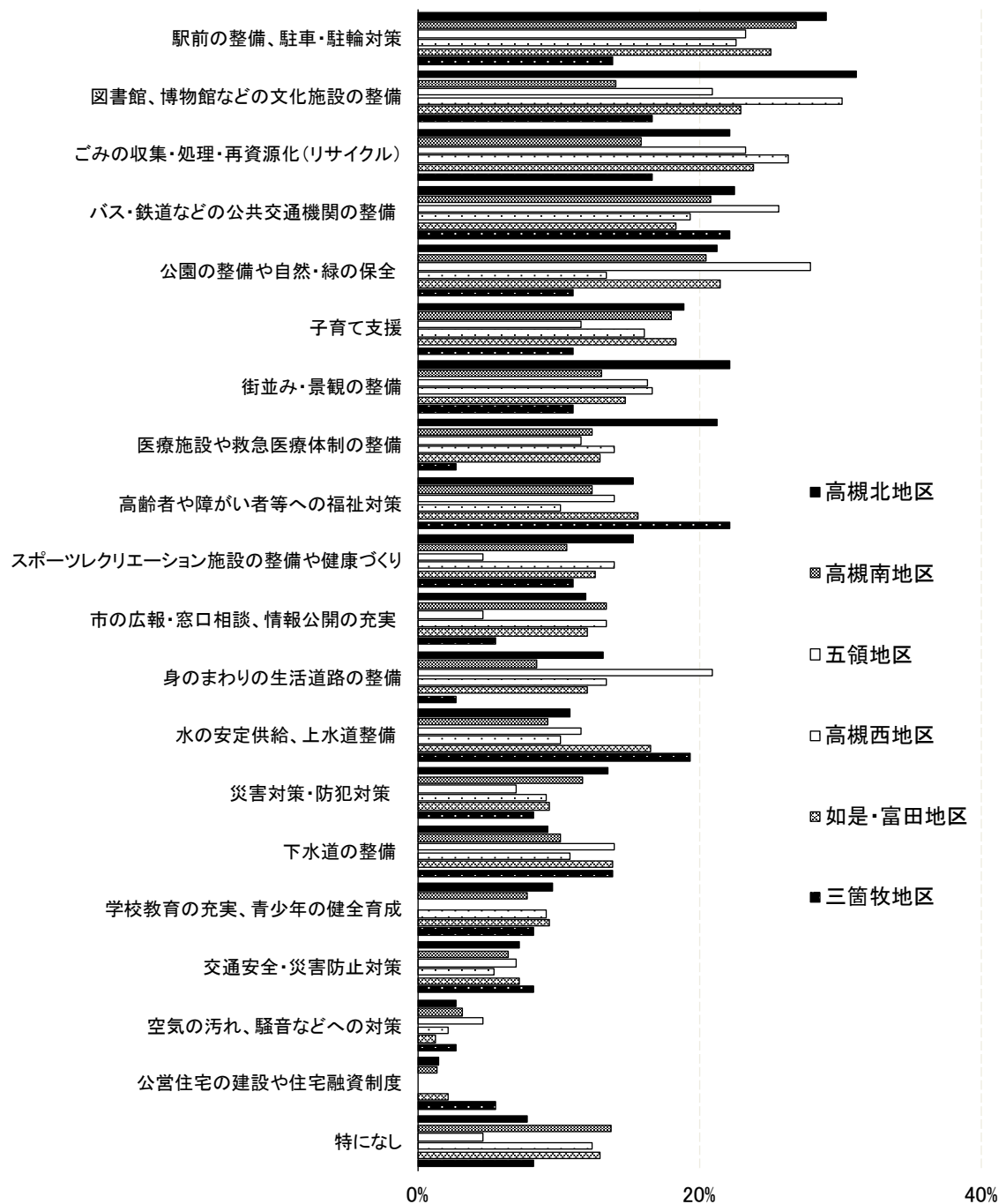


図 116 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

Q38①の市の仕事のうち最近良くなってきたものを居住年数別で見ると、「図書館、博物館などの文化施設の整備」と回答している人の割合は、居住年数が40年以上50年未満の場合では、3割以上となっている一方、1年未満では1割に満たない（表7、図117）。

表7 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住年数別）

	(%)						
	駅前の整備、駐 車・駐輪対策	図書館、博物館な どの文化施設の 整備	ごみの収集・処理・ 再資源化(リサイク ル)	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	公園の整備や自 然・緑の保全	子育て支援	街並み・景観の整 備
1年未満 (N=14)	0.0	7.1	7.1	7.1	14.3	28.6	7.1
1年以上3年未満 (N=47)	10.6	10.6	10.6	12.8	19.1	8.5	21.3
3年以上5年未満 (N=31)	29.0	25.8	3.2	12.9	19.4	19.4	12.9
5年以上10年未満 (N=57)	22.8	14.0	21.1	15.8	31.6	21.1	22.8
10年以上20年未満 (N=165)	24.8	20.0	13.9	24.8	25.5	23.6	17.6
20年以上30年未満 (N=188)	22.9	21.8	16.5	16.0	19.7	18.1	14.4
30年以上40年未満 (N=218)	25.7	21.1	19.7	20.6	18.3	12.4	17.4
40年以上50年未満 (N=266)	28.9	32.0	31.2	22.2	15.8	15.0	15.0
50年以上 (N=160)	28.7	28.1	28.7	22.5	18.8	18.1	18.8

	(%)						
	医療施設や救急 医療体制の整備	高齢者や障がい 者等への福祉対 策	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	市の広報・窓口相 談、情報公開の充 実	身のまわりの生活 道路の整備	水の安定供給、上 水道整備	災害対策・防犯対 策
1年未満 (N=14)	0.0	0.0	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0
1年以上3年未満 (N=47)	8.5	2.1	4.3	4.3	8.5	2.1	4.3
3年以上5年未満 (N=31)	9.7	6.5	3.2	0.0	9.7	6.5	3.2
5年以上10年未満 (N=57)	15.8	5.3	12.3	19.3	8.8	7.0	10.5
10年以上20年未満 (N=165)	13.3	10.3	10.3	10.3	17.0	7.3	11.5
20年以上30年未満 (N=188)	14.9	16.0	11.7	12.8	10.6	9.6	10.6
30年以上40年未満 (N=218)	13.8	11.0	8.7	10.6	8.7	10.1	10.1
40年以上50年未満 (N=266)	16.9	15.0	19.2	14.7	13.9	15.0	12.8
50年以上 (N=160)	17.5	23.1	16.3	15.0	10.0	21.3	12.5

	(%)					
	下水道の整備	学校教育の充実、 青少年の健全育 成	交通安全・災害防 止対策	空気の汚れ、騒音 などへの対策	公営住宅の建設 や住宅融資制度	特になし
1年未満 (N=14)	0.0	0.0	7.1	7.1	0.0	28.6
1年以上3年未満 (N=47)	0.0	6.4	0.0	0.0	0.0	19.1
3年以上5年未満 (N=31)	3.2	3.2	0.0	0.0	0.0	25.8
5年以上10年未満 (N=57)	7.0	7.0	1.8	1.8	1.8	15.8
10年以上20年未満 (N=165)	4.8	10.3	9.7	0.0	0.6	12.7
20年以上30年未満 (N=188)	7.4	9.6	5.9	3.2	1.6	10.6
30年以上40年未満 (N=218)	9.2	6.0	5.5	3.2	0.9	11.0
40年以上50年未満 (N=266)	17.3	7.9	7.5	2.6	0.8	7.9
50年以上 (N=160)	19.4	13.1	9.4	3.8	4.4	7.5

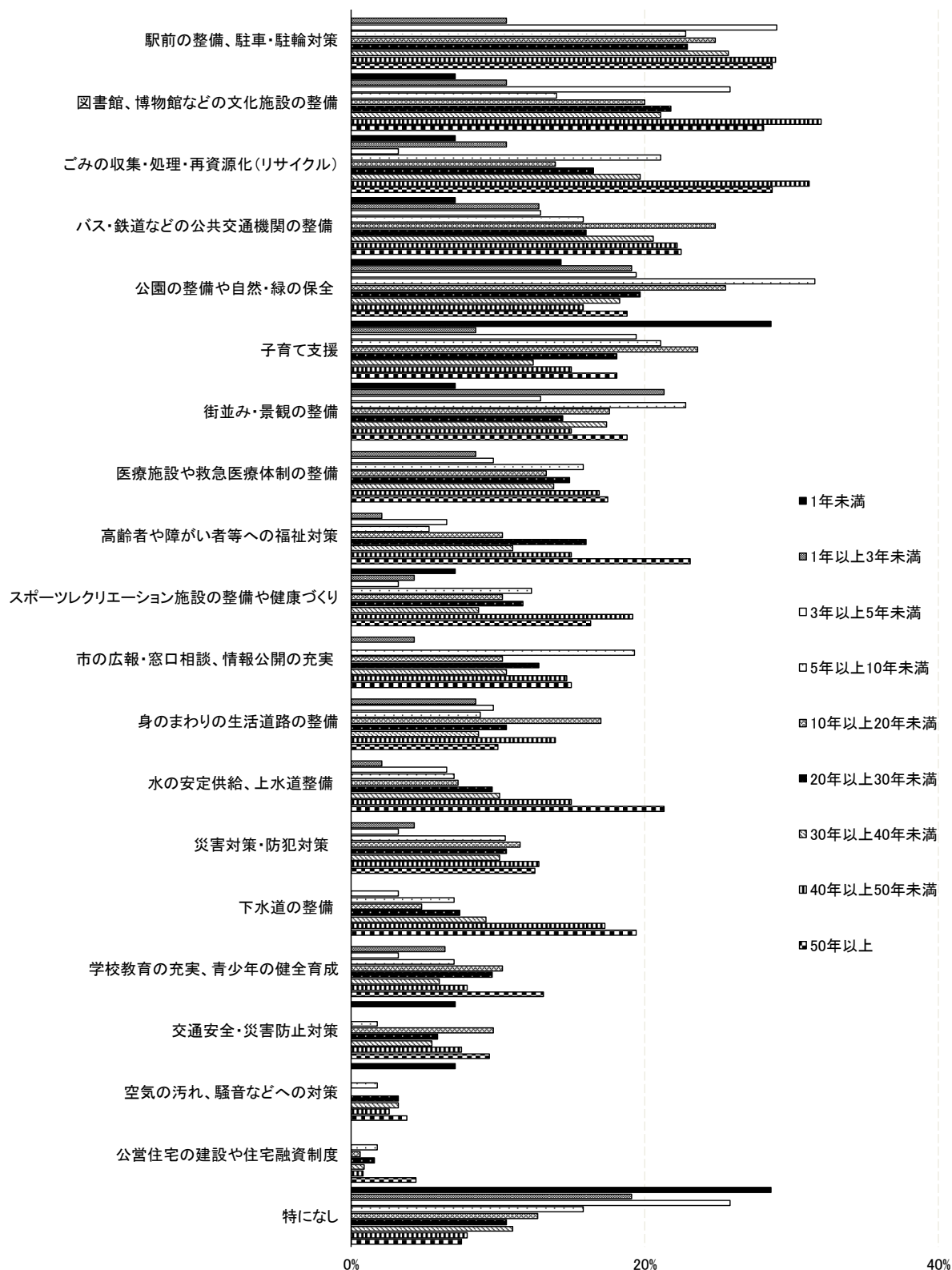


図 117 Q38① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住年数別）

Q38②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、「高齢者や障がい者等への福祉対策」が30.4%と最も高く、「医療施設や救急医療体制の整備」が28.5%と続く(図 118)。

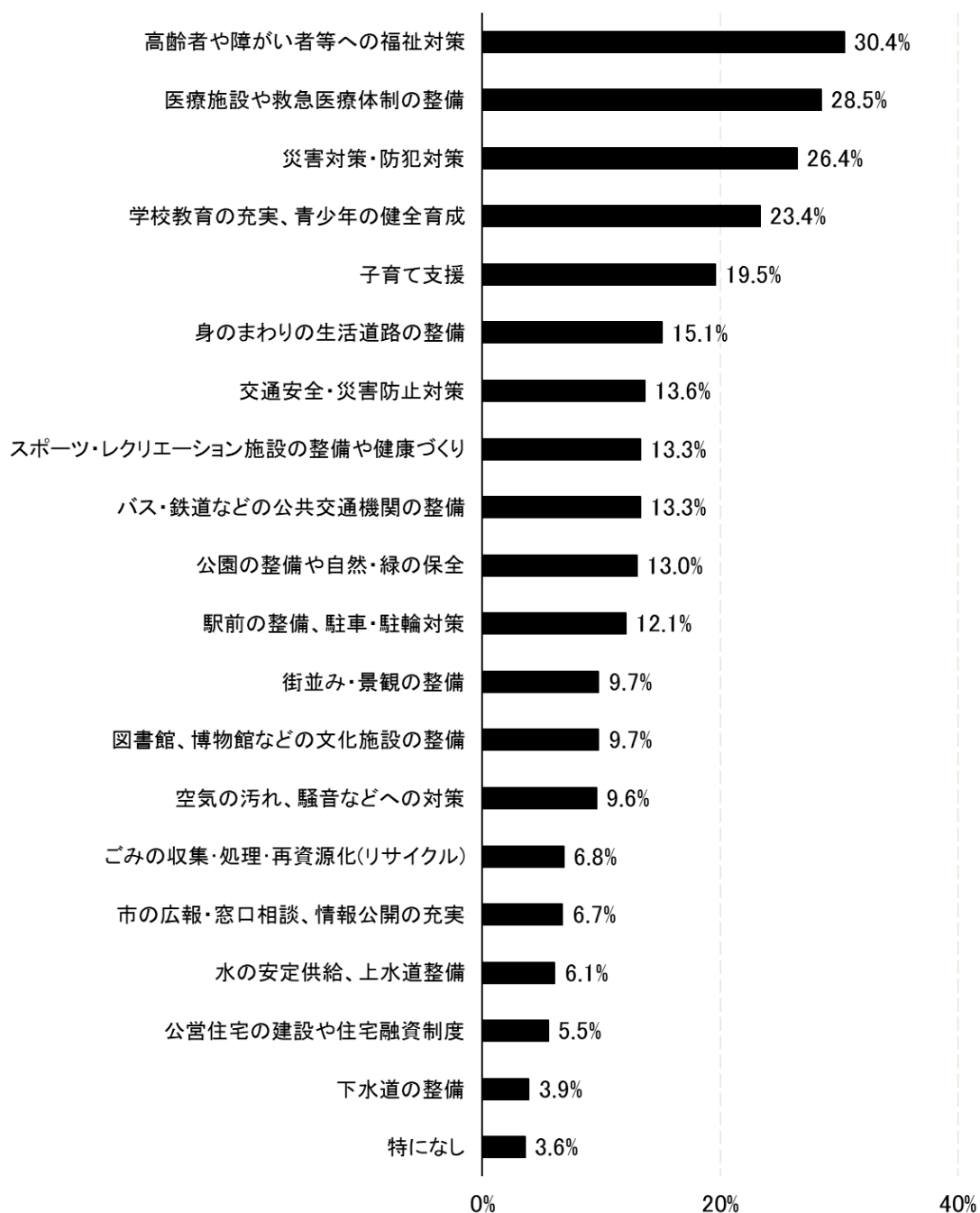


図 118 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・全体 N=1172）

Q38②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを男女別で見ると、「医療施設や救急医療制度の整備」について、男女に差があり、男性よりも女性の方が 8.2 ポイント高くなっている。また「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」および「水の安定供給、上水道整備」についても、男女に差があり、前者は女性よりも男性の方が 3.5 ポイント高く、後者は男性よりも女性の方が 3.5 ポイント高くなっている（図 119）。

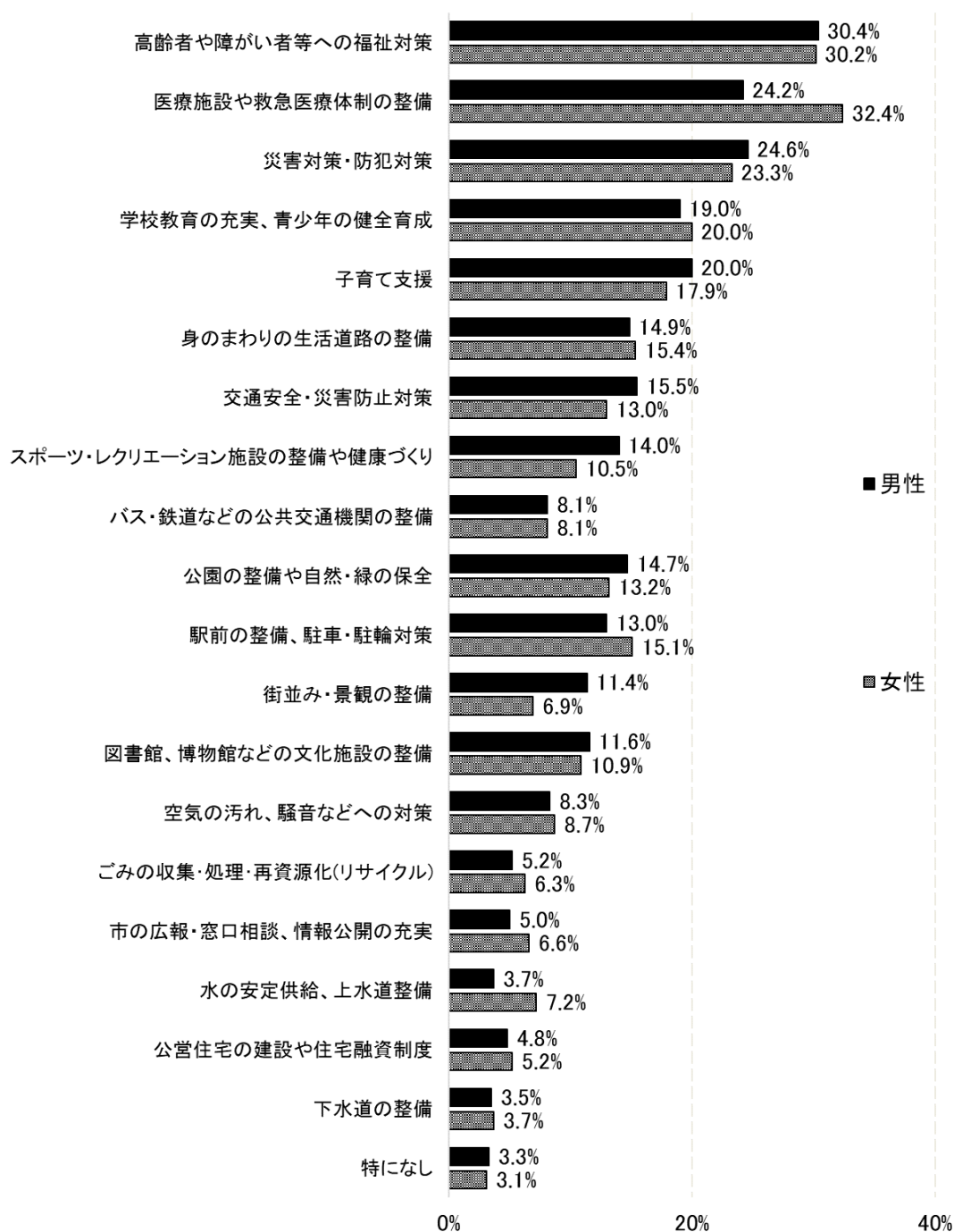


図 119 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・男女別）

Q38②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを年代別で見ると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」について、70代以上では42.0%と最も高くなっている。反対に30代では13.8%と最も低い（表8、図120）。

表8 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

	(%)						
	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	災害対策・防犯対策	学校教育の充実、青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策
10・20代 (N=95)	14.7	13.7	25.3	16.8	29.5	18.9	18.9
30代 (N=130)	13.8	17.7	22.3	26.9	41.5	20.0	15.4
40代 (N=181)	17.7	23.8	27.6	30.9	26.5	24.3	11.6
50代 (N=185)	31.4	35.1	27.6	16.2	14.6	17.8	21.1
60代 (N=206)	38.3	37.9	23.3	17.0	13.1	18.4	10.7
70代以上 (N=350)	42.0	31.4	20.3	15.4	9.4	16.6	12.0

	(%)						
	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	街並み・景観の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策
10・20代 (N=95)	11.6	11.6	11.6	10.5	8.4	12.6	18.9
30代 (N=130)	17.7	6.2	20.8	16.2	6.9	11.5	7.7
40代 (N=181)	16.0	9.4	14.9	19.3	9.9	16.0	10.5
50代 (N=185)	11.9	11.9	11.4	17.8	11.4	11.4	10.3
60代 (N=206)	11.7	5.8	11.2	14.6	8.7	10.2	4.9
70代以上 (N=350)	8.6	6.3	14.6	10.3	7.7	8.9	6.3

	(%)					
	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	水の安定供給、上水道整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	下水道の整備	特になし
10・20代 (N=95)	5.3	5.3	5.3	6.3	5.3	3.2
30代 (N=130)	3.1	3.1	4.6	5.4	3.1	1.5
40代 (N=181)	5.0	4.4	6.1	5.0	0.6	2.2
50代 (N=185)	6.5	5.9	5.4	5.4	5.9	4.3
60代 (N=206)	6.3	8.3	4.9	4.4	2.9	3.9
70代以上 (N=350)	6.6	6.3	6.6	4.6	4.3	3.1

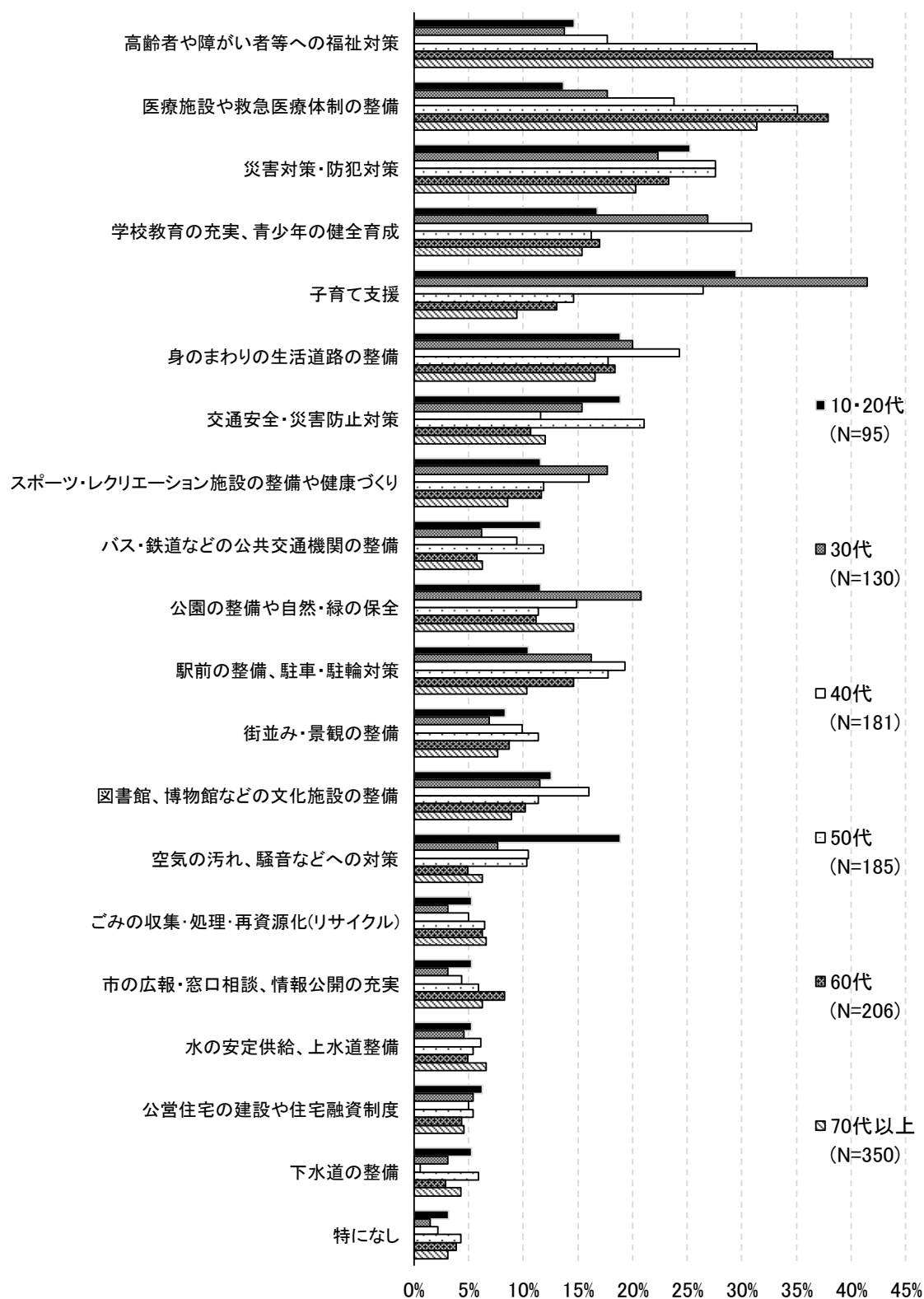


図 120 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

Q38②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを居住地域別で見ると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」および「医療施設や救急医療体制の整備」について、三箇牧地区ではそれぞれ 38.9%と最も高くなっている。反対に、前者は五領地区では 23.3%、後者は高槻南地区では 23.3%と最も低い（表 9、図 121）。

表 9 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

	(%)						
	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	災害対策・防犯対策	学校教育の充実、青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	交通安全・災害防止対策
高槻北地区 (N=334)	28.7	26.6	21.6	21.0	19.2	23.1	15.9
高槻南地区 (N=283)	27.6	23.3	24.4	20.1	20.1	14.5	12.7
五領地区 (N=43)	23.3	37.2	25.6	9.3	18.6	4.7	16.3
高槻西地区 (N=186)	33.9	34.9	21.0	22.6	21.0	19.4	14.0
如是・富田地区 (N=223)	33.2	29.6	27.4	19.3	17.5	22.0	13.9
三箇牧地区 (N=36)	38.9	38.9	16.7	16.7	11.1	16.7	8.3

	(%)						
	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	街並み・景観の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策
高槻北地区 (N=334)	15.3	9.9	15.6	16.5	9.6	12.0	9.0
高槻南地区 (N=283)	13.4	4.2	12.4	14.1	9.5	12.7	11.0
五領地区 (N=43)	11.6	14.0	9.3	7.0	2.3	20.9	4.7
高槻西地区 (N=186)	12.4	9.1	18.3	12.9	6.5	11.3	9.1
如是・富田地区 (N=223)	7.2	8.1	12.1	13.5	9.4	9.4	6.3
三箇牧地区 (N=36)	2.8	16.7	2.8	5.6	2.8	2.8	0.0

	(%)					
	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	水の安定供給、上水道整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	下水道の整備	特になし
高槻北地区 (N=334)	5.1	5.4	6.3	2.4	3.0	1.5
高槻南地区 (N=283)	4.6	4.6	4.9	4.6	4.2	4.9
五領地区 (N=43)	11.6	9.3	2.3	2.3	0.0	4.7
高槻西地区 (N=186)	5.4	5.4	7.5	4.8	3.2	3.8
如是・富田地区 (N=223)	6.7	9.4	5.4	9.9	4.0	1.8
三箇牧地区 (N=36)	5.6	5.6	0.0	8.3	2.8	8.3

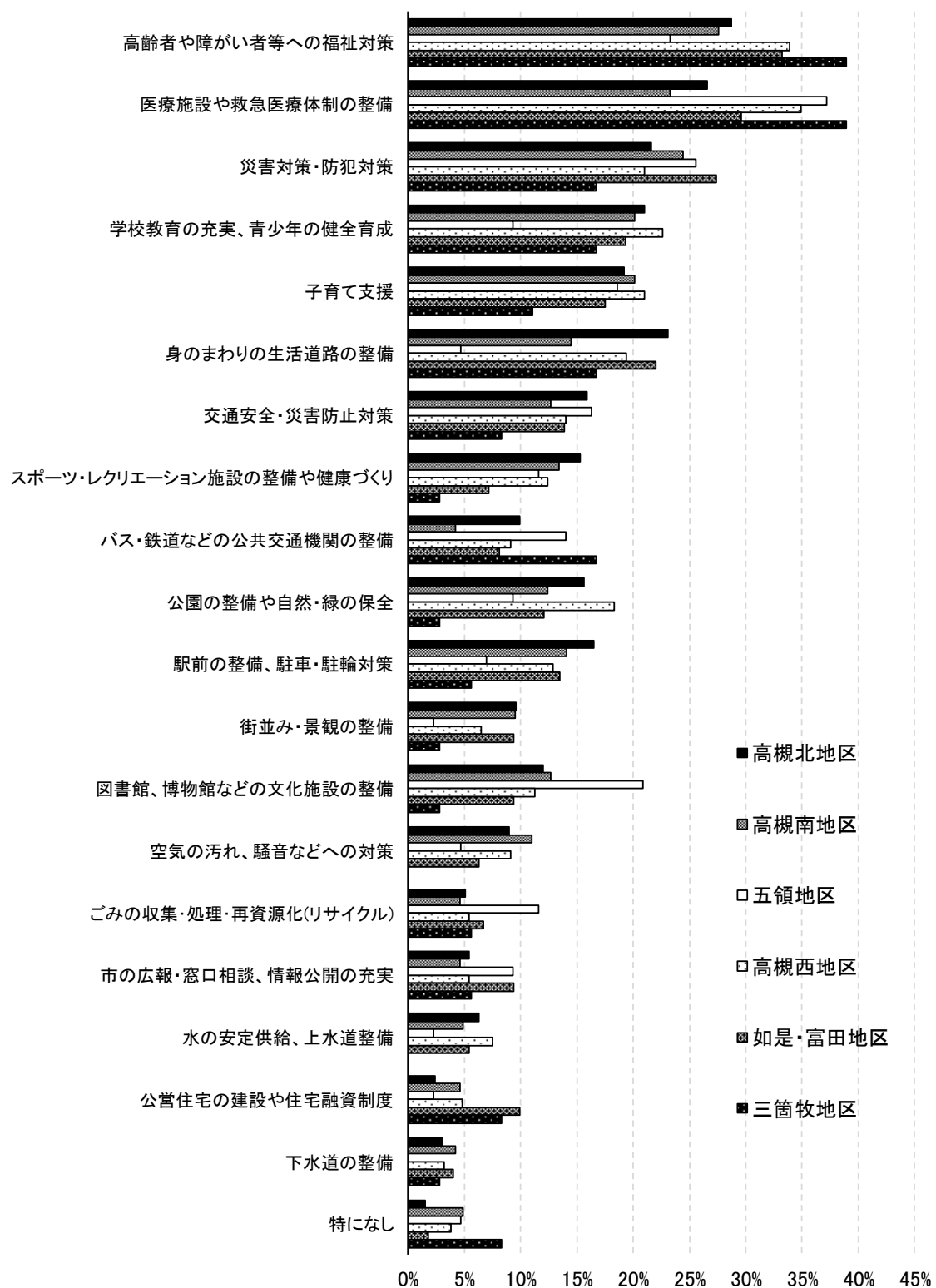


図 121 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

Q38②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを居住年数別で見ると、「医療体制や救急医療制度の整備」について、50年以上では37.5%と最も高くなっている。反対に1年未満では7.1%と最も低い（表 10、図 122）。

表 10 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

	(%)						
	高齢者や障がい者 等への福祉対策	医療施設や救急 医療体制の整備	災害対策・防犯 対策	学校教育の充実、 青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活 道路の整備	交通安全・災害防 止対策
1年未満 (N=14)	14.3	7.1	14.3	21.4	50.0	14.3	0.0
1年以上3年未満 (N=47)	12.8	10.6	19.1	10.6	29.8	27.7	6.4
3年以上5年未満 (N=31)	19.4	16.1	16.1	22.6	38.7	29.0	16.1
5年以上10年未満 (N=57)	19.3	36.8	8.8	38.6	36.8	17.5	14.0
10年以上20年未満 (N=165)	22.4	25.5	21.2	26.1	20.0	22.4	13.3
20年以上30年未満 (N=188)	23.9	30.3	29.8	15.4	17.6	16.0	19.1
30年以上40年未満 (N=218)	28.4	27.5	22.0	16.1	18.3	17.0	11.5
40年以上50年未満 (N=266)	42.9	30.8	23.7	20.3	12.0	22.2	12.4
50年以上 (N=160)	41.3	37.5	27.5	16.9	15.0	13.1	15.6

	(%)						
	スポーツ・レクリ エーション施設の 整備や健康づくり	バス・鉄道などの 公共交通機関の 整備	公園の整備や自 然・緑の保全	駅前の整備、駐 車・駐輪対策	街並み・景観の整 備	図書館、博物館な どの文化施設の整 備	空気の汚れ、騒音 などへの対策
1年未満 (N=14)	21.4	7.1	28.6	14.3	7.1	7.1	0.0
1年以上3年未満 (N=47)	19.1	6.4	12.8	21.3	8.5	14.9	14.9
3年以上5年未満 (N=31)	9.7	9.7	12.9	16.1	9.7	9.7	12.9
5年以上10年未満 (N=57)	12.3	7.0	10.5	12.3	3.5	10.5	5.3
10年以上20年未満 (N=165)	15.8	10.9	9.7	18.2	10.3	18.2	10.3
20年以上30年未満 (N=188)	11.7	11.2	13.8	11.2	11.7	11.7	12.8
30年以上40年未満 (N=218)	14.2	6.0	13.8	16.1	10.1	8.7	5.5
40年以上50年未満 (N=266)	9.0	4.9	17.3	13.9	6.8	10.9	7.5
50年以上 (N=160)	7.5	10.0	13.8	11.3	6.9	6.9	5.6

	(%)					
	ごみの収集・処理・ 再資源化(リサイク ル)	市の広報・窓口相 談、情報公開の充 実	水の安定供給、 上水道整備	公営住宅の建設や 住宅融資制度	下水道の整備	特になし
1年未満 (N=14)	0.0	0.0	14.3	7.1	7.1	7.1
1年以上3年未満 (N=47)	4.3	6.4	6.4	12.8	2.1	2.1
3年以上5年未満 (N=31)	6.5	9.7	3.2	6.5	3.2	6.5
5年以上10年未満 (N=57)	3.5	1.8	3.5	7.0	1.8	5.3
10年以上20年未満 (N=165)	4.2	4.8	7.3	3.0	2.4	1.8
20年以上30年未満 (N=188)	4.8	6.4	4.3	5.9	4.3	3.7
30年以上40年未満 (N=218)	5.0	4.6	4.1	4.1	3.7	3.7
40年以上50年未満 (N=266)	7.9	7.1	7.5	4.1	3.4	3.0
50年以上 (N=160)	8.1	7.5	4.4	5.6	5.6	2.5

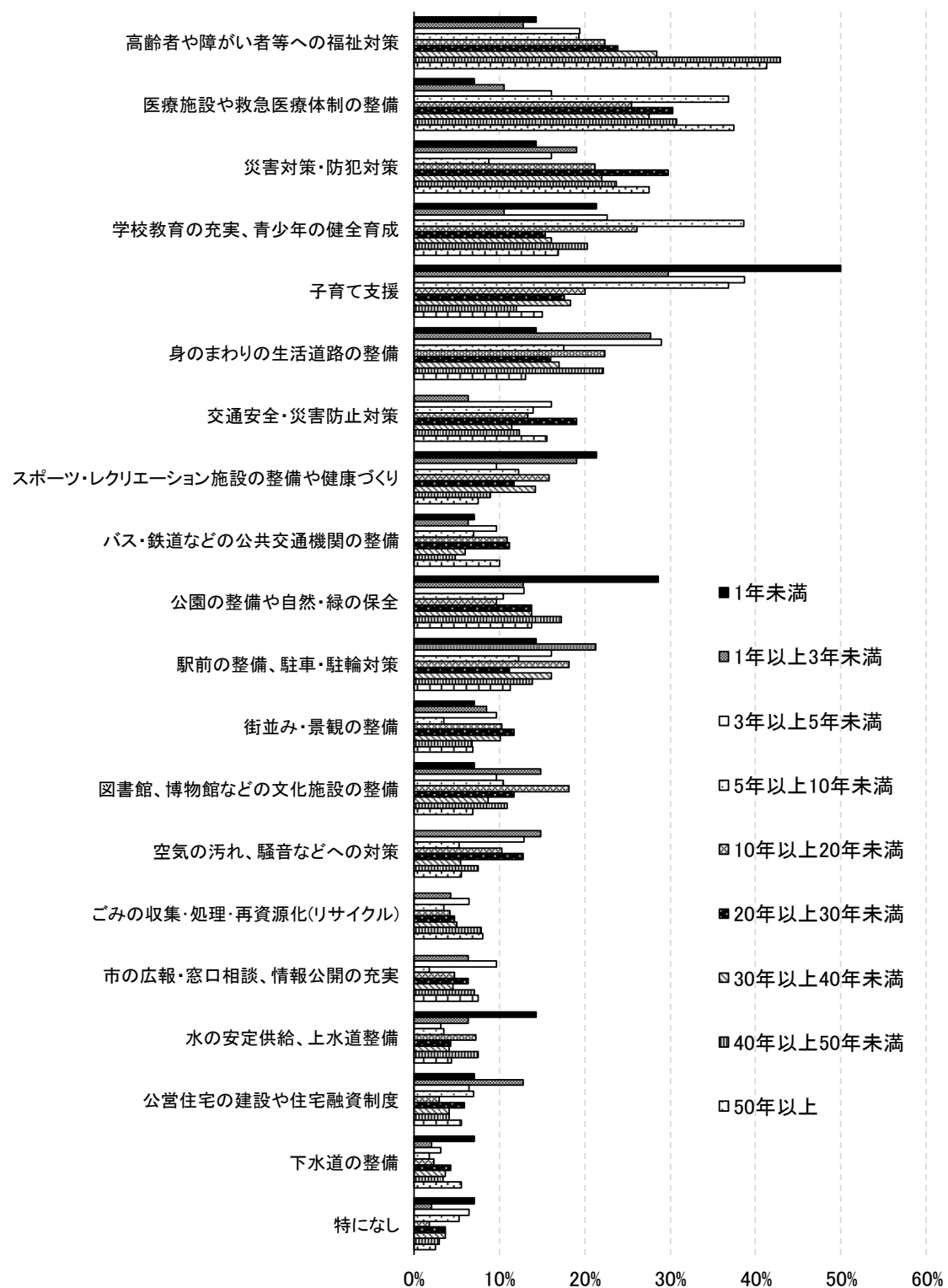


図 122 Q38② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

Q39 の参議院議員選挙で投票に行ったかに関して、10・20 代を除く年代別・男女別のすべての層で、「投票に行った」と回答した人の割合は 6 割以上である。年代別で見ると「投票に行った」と回答した人の割合は、60 代で 81.1%と最も高い。反対に 10・20 代が 49.5%と最も低い（図 123）。

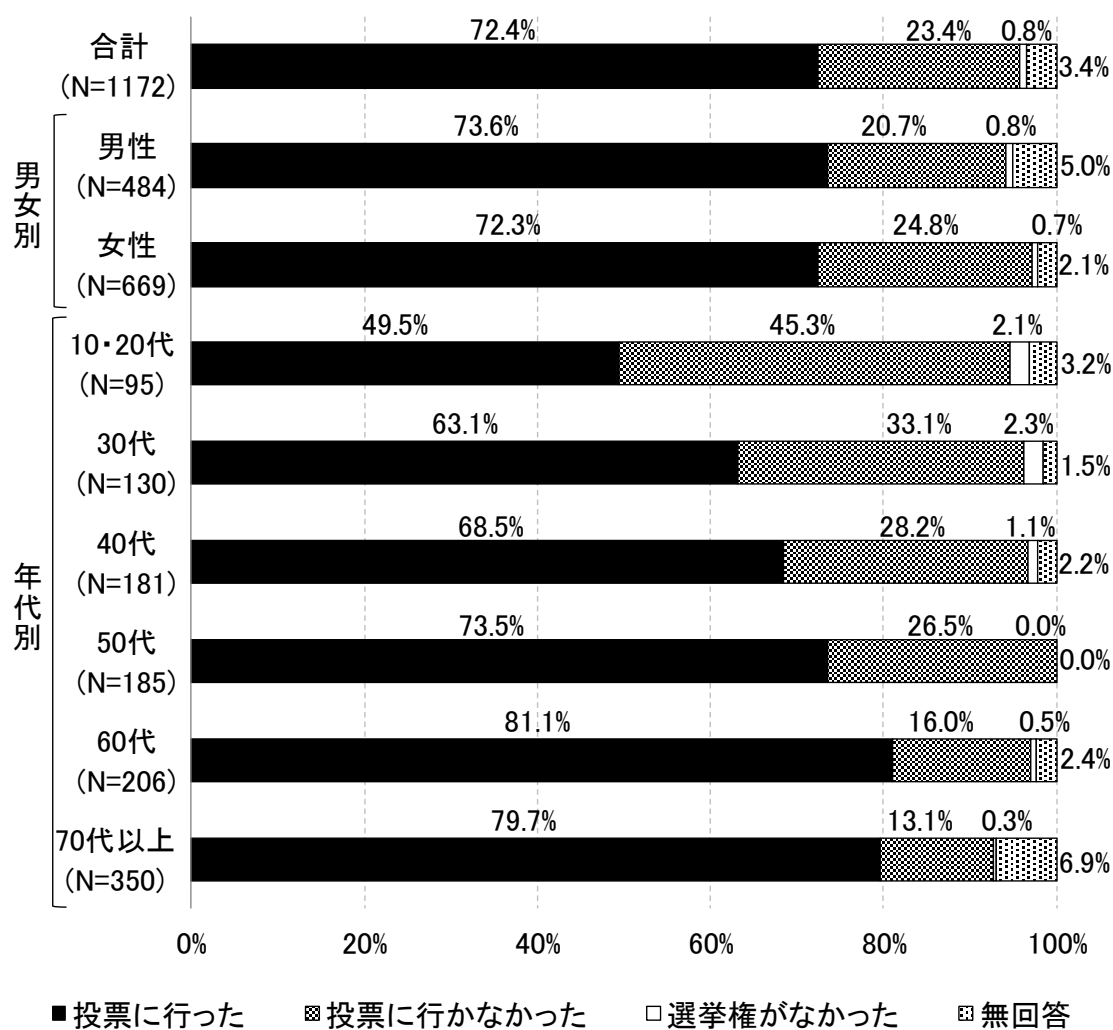


図 123 Q39 参議院議員選挙で投票に行ったか

Q40 の参議院議員選挙で選挙カーによる名前の連呼を耳にしたかに関して、男女別・年代別のすべての層で、「よく耳にした」または「少し耳にした」と回答した人の割合は6割以上である。年代別で見ると「よく耳にした」または「少し耳にした」と回答した人の割合は、30代が80.0%と最も高い。反対に70代以上が64.6%と最も低い（図 124）。

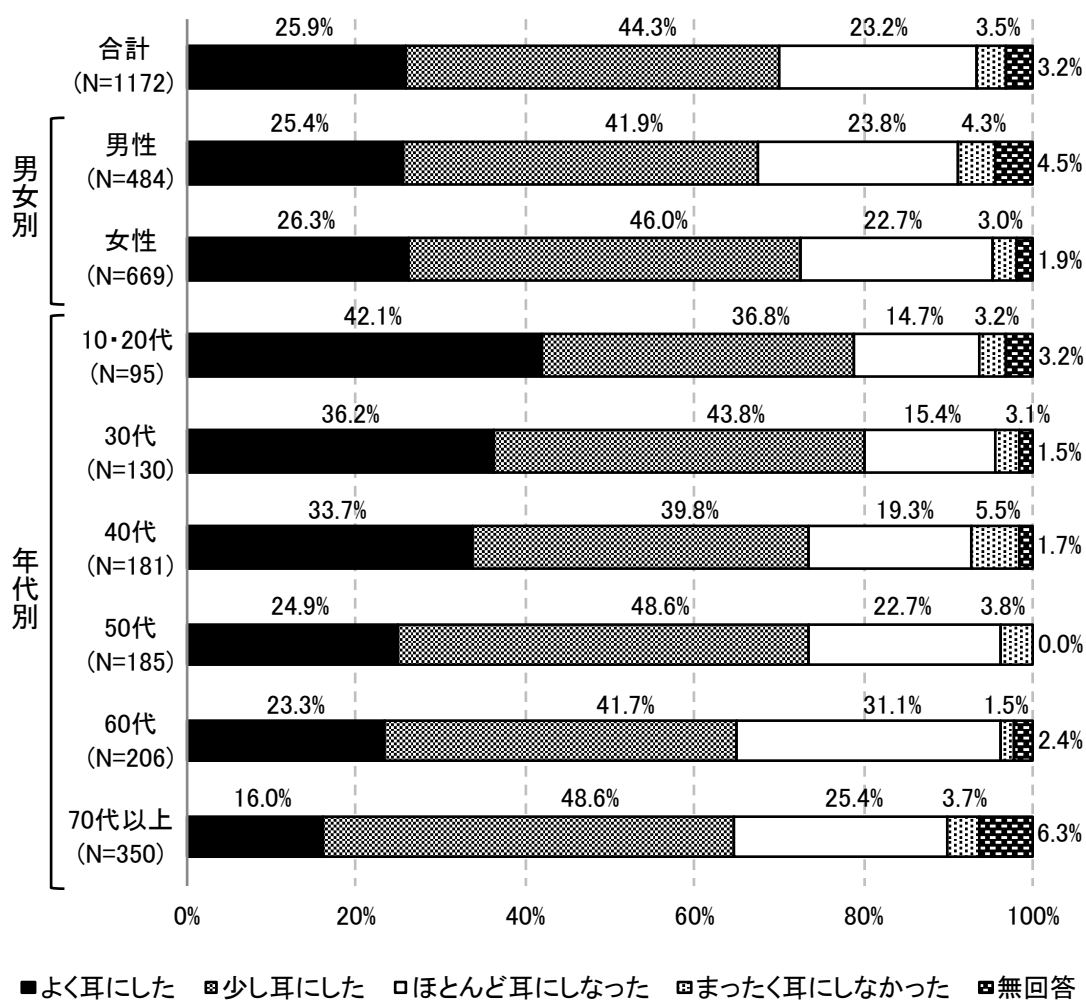


図 124 Q40 参議院議員選挙で選挙カーによる名前の連呼を耳にしたか

Q41 のどのようなときに運転免許を返納しようと思うかに関して、「身体能力の低下などを感じたとき」が 59.8%と最も高く、「運転をやめるよう勧められたとき」が 25.9%と続く(図 125)。

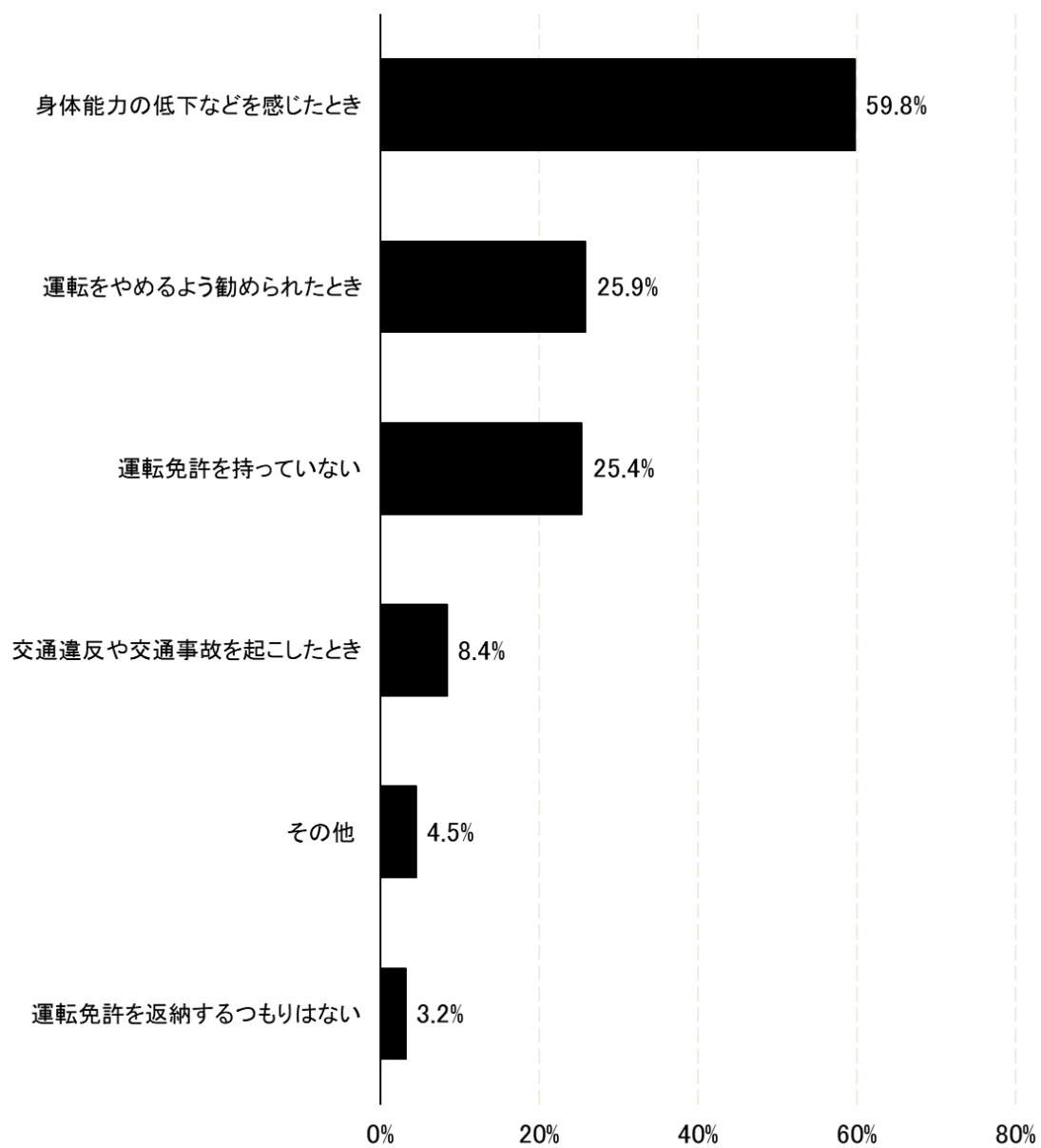


図 125 Q41 どのようなときに運転免許を返納しようと思うか(複数回答・全体 N=1172)

Q41 のどのようなときに運転免許を返納しようと思うかを男女別で見ると、「身体能力の低下などを感じたとき」は男女で差があり、女性よりも男性の方が 15.2 ポイント高い（図 126）。

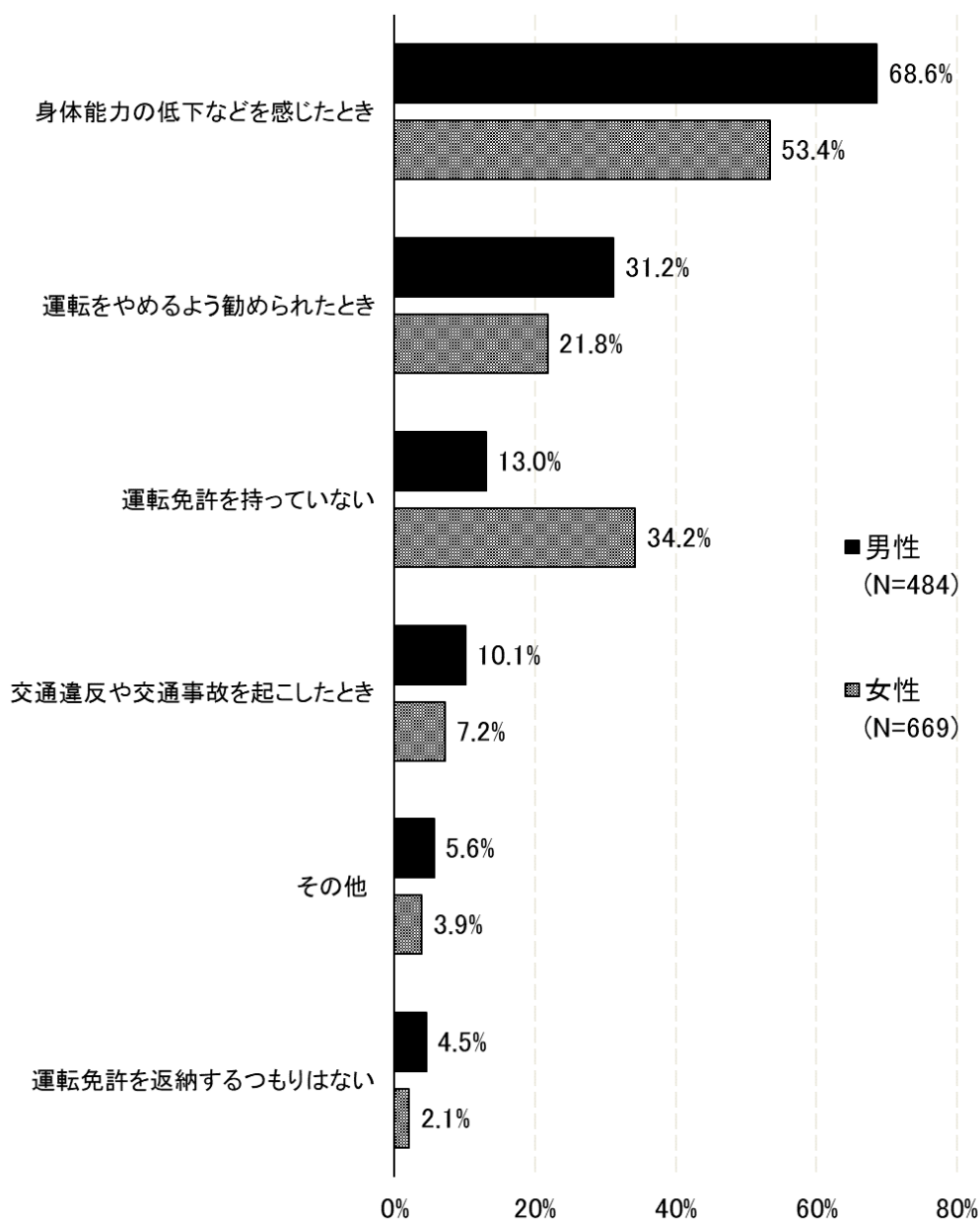


図 126 Q41 どのようなときに運転免許を返納しようと思うか（複数回答・男女別）

Q41 のどのようなときに運転免許を返納しようと思うかを年代別で見ると、「身体能力の低下などを感じたとき」は年代で差があり、50代が78.4%と最も高く、30代が65.4%と続く。反対に70代以上が45.1%と最も低い（図 127）。

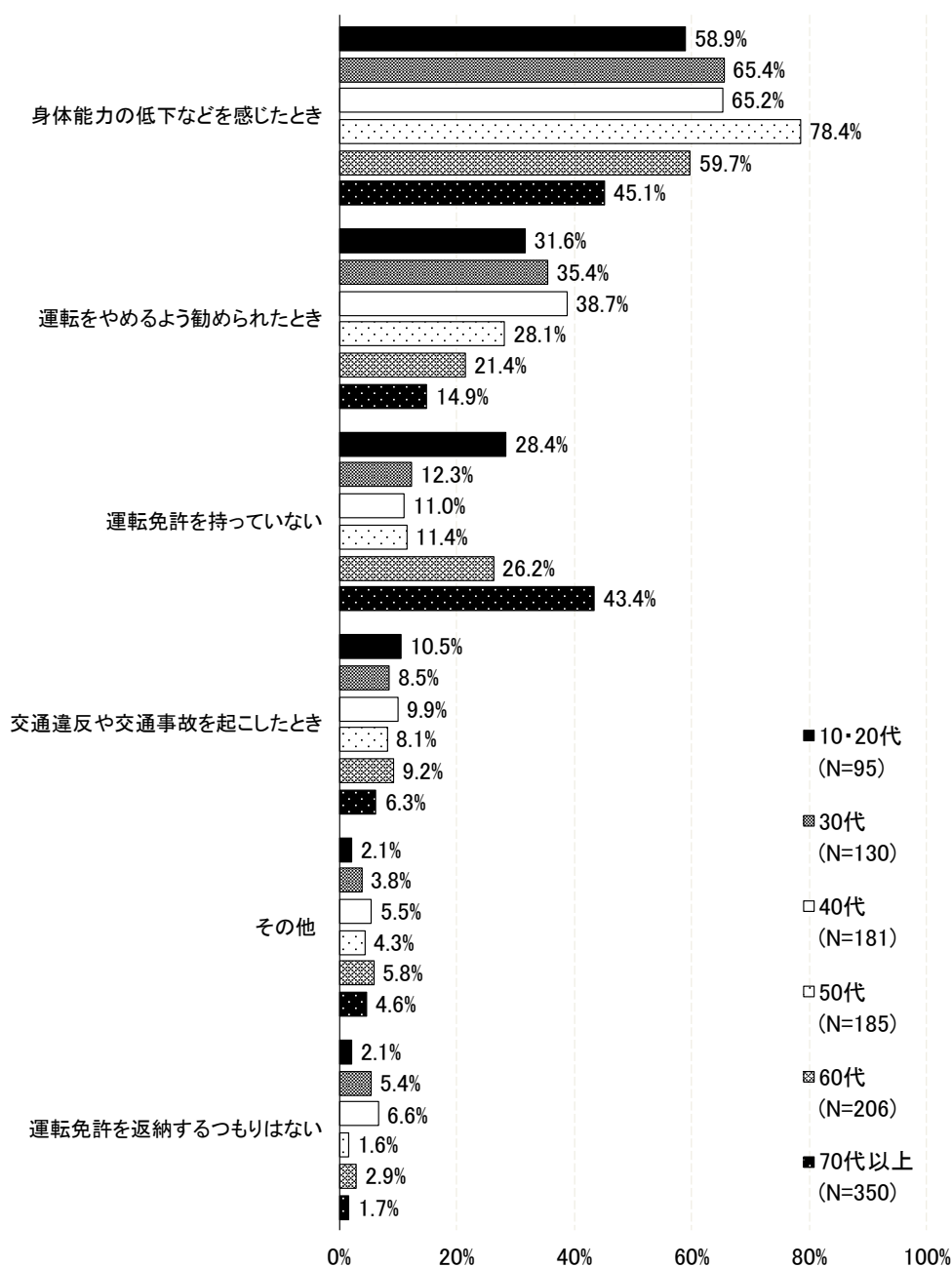


図 127 Q41 どのようなときに運転免許を返納しようと思うか（複数回答・年代別）

Q42 の死刑制度に賛成かに関して、男女別・年代別のすべての層で、「賛成」または「やや賛成」と回答した人の割合は、7 割以上である。年代別で見ると、「賛成」または「やや賛成」と回答し人の割合は 40 代が 87.8%と最も高い。反対に 10・20 代が 78.9%と最も低い（図 128）。

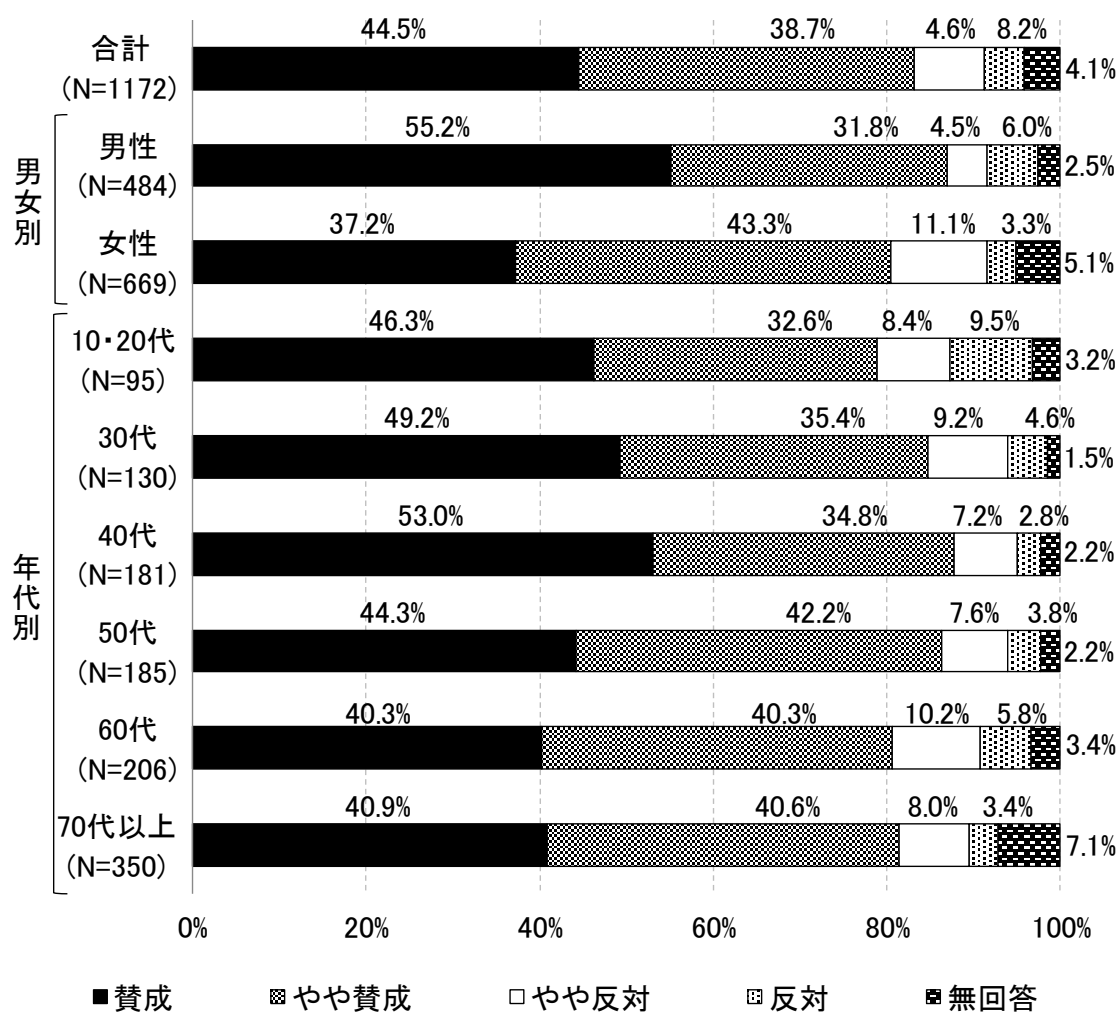


図 128 Q42 死刑制度に賛成か

Q43 の集団行動が好きかに関して、男女別・年代別のすべての層で、「嫌い」または「やや嫌い」と回答した人の割合は、5割以上である。年代別で見ると「嫌い」または「やや嫌い」と回答した人の割合は、50代が69.2%と最も高い。反対に70代以上は51.5%と最も低い（図 129）。

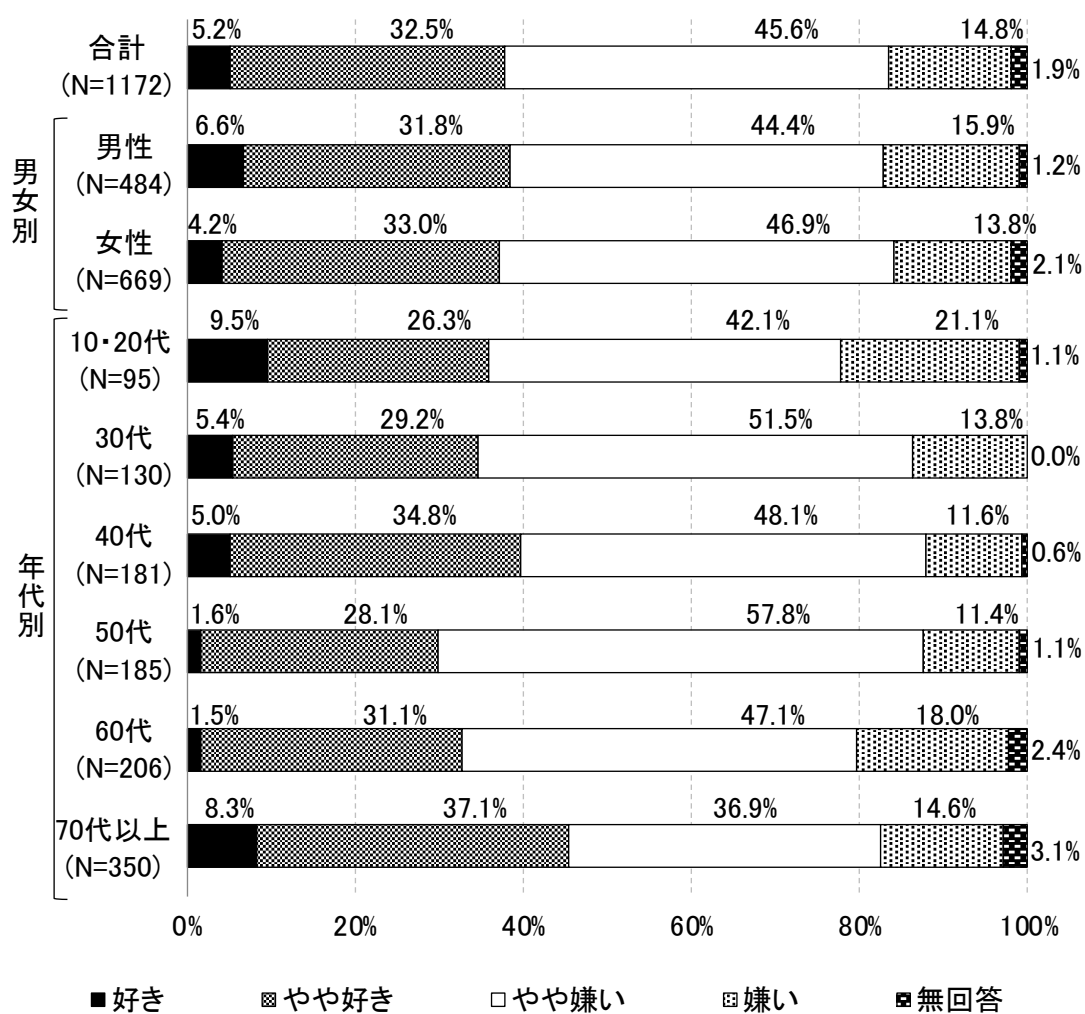


図 129 Q43 集団行動が好きか

Q44 の高齢者も働けるうちは働くべきかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 7 割以上である。年代別で見ると「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 70 代以上で 85.8%と最も高い。反対に、10・20 代が 71.6%と最も低い（図 130）。

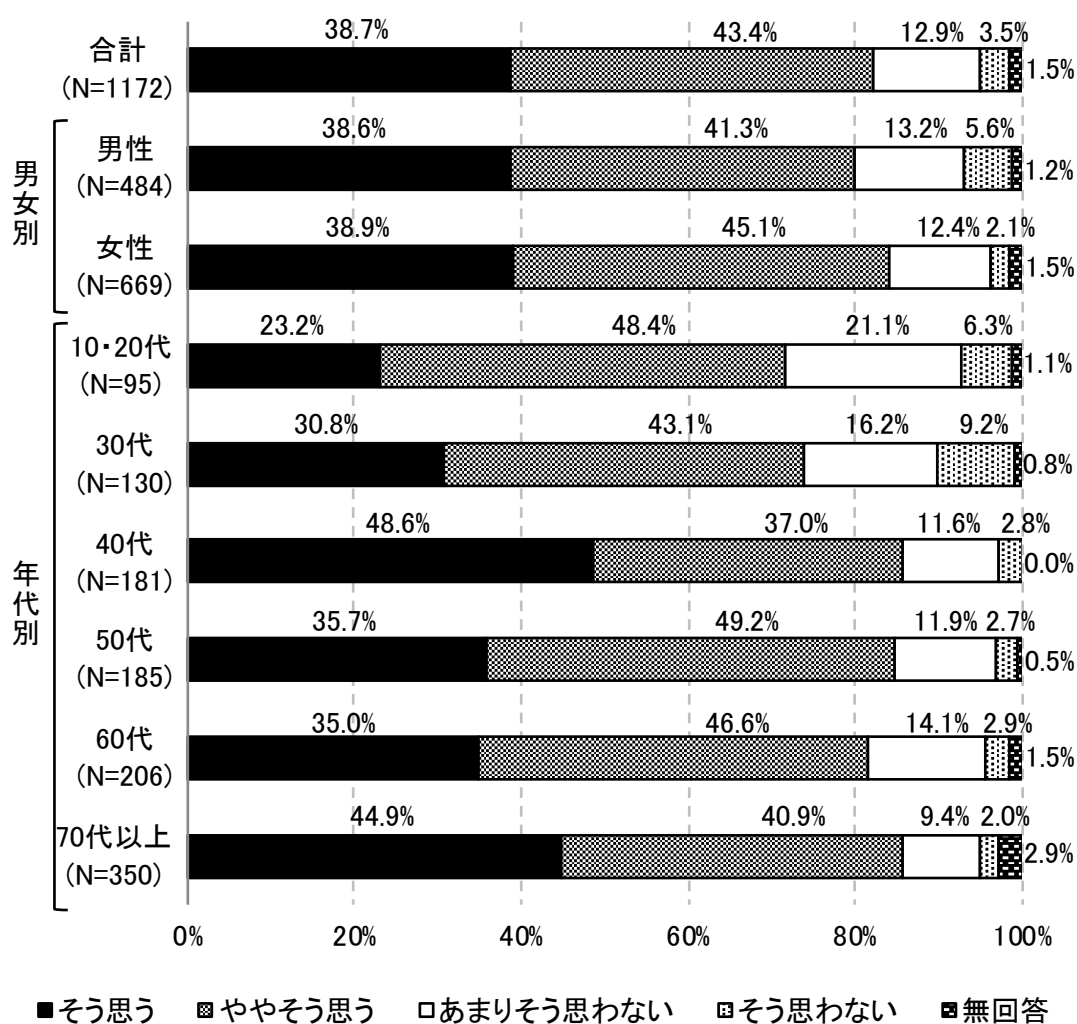


図 130 Q44 高齢者も働けるうちは働くべきか

Q45 の結婚すると社会的信用が高まるかに関して、10・20代を除く男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は4割以上である。年代別で見ると「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は70代以上で59.7%と最も高い。反対に、10・20代が38.9%と最も低い（図 131）。

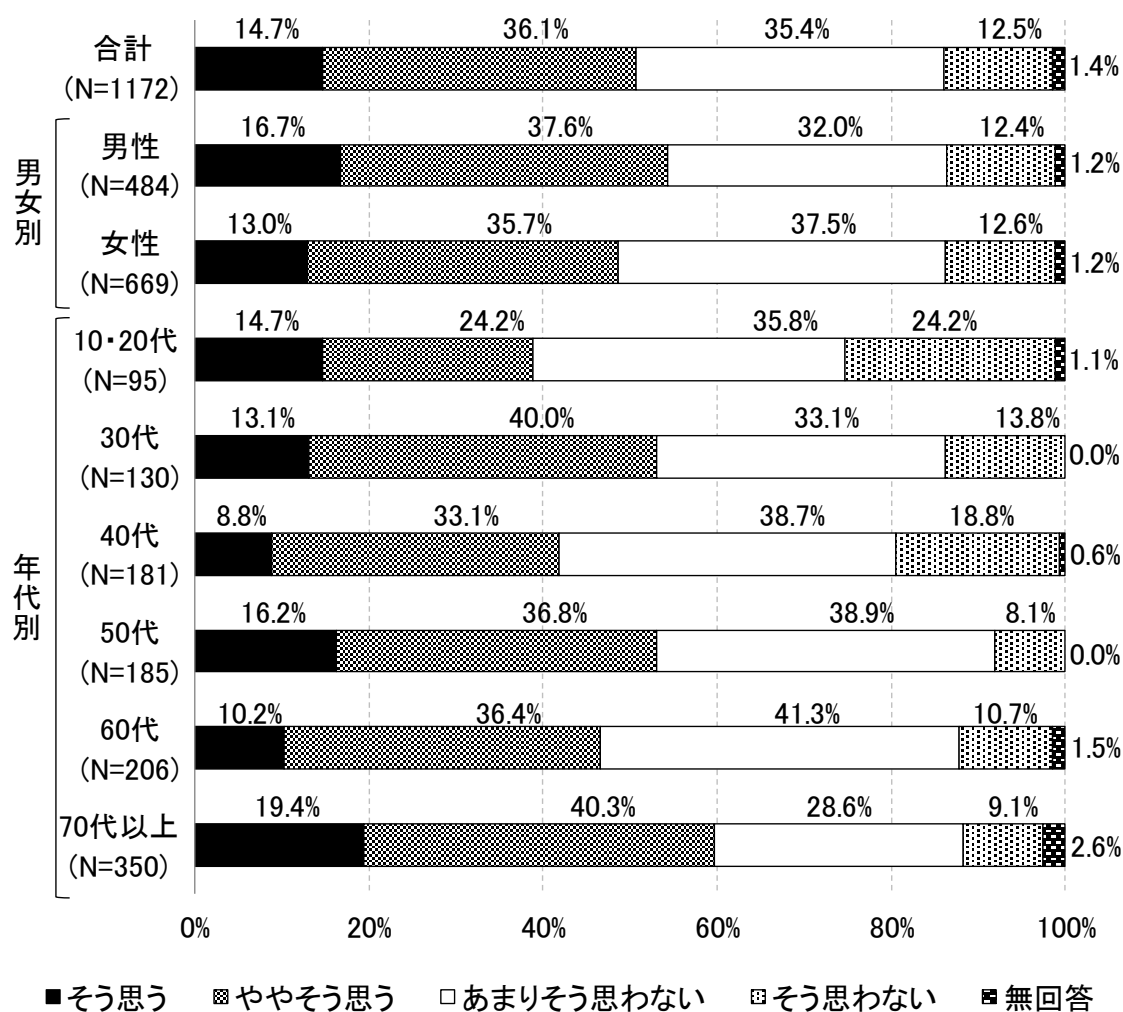


図 131 Q45 結婚すると社会的信用が高まるか

Q46 の独身の方が金銭的に裕福でいられるかに関して、70 代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 4 割以上である。年代別で見ると「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 30 代が 64.6%と最も高い。反対に 70 代以上で 36.8%と最も低い（図 132）。

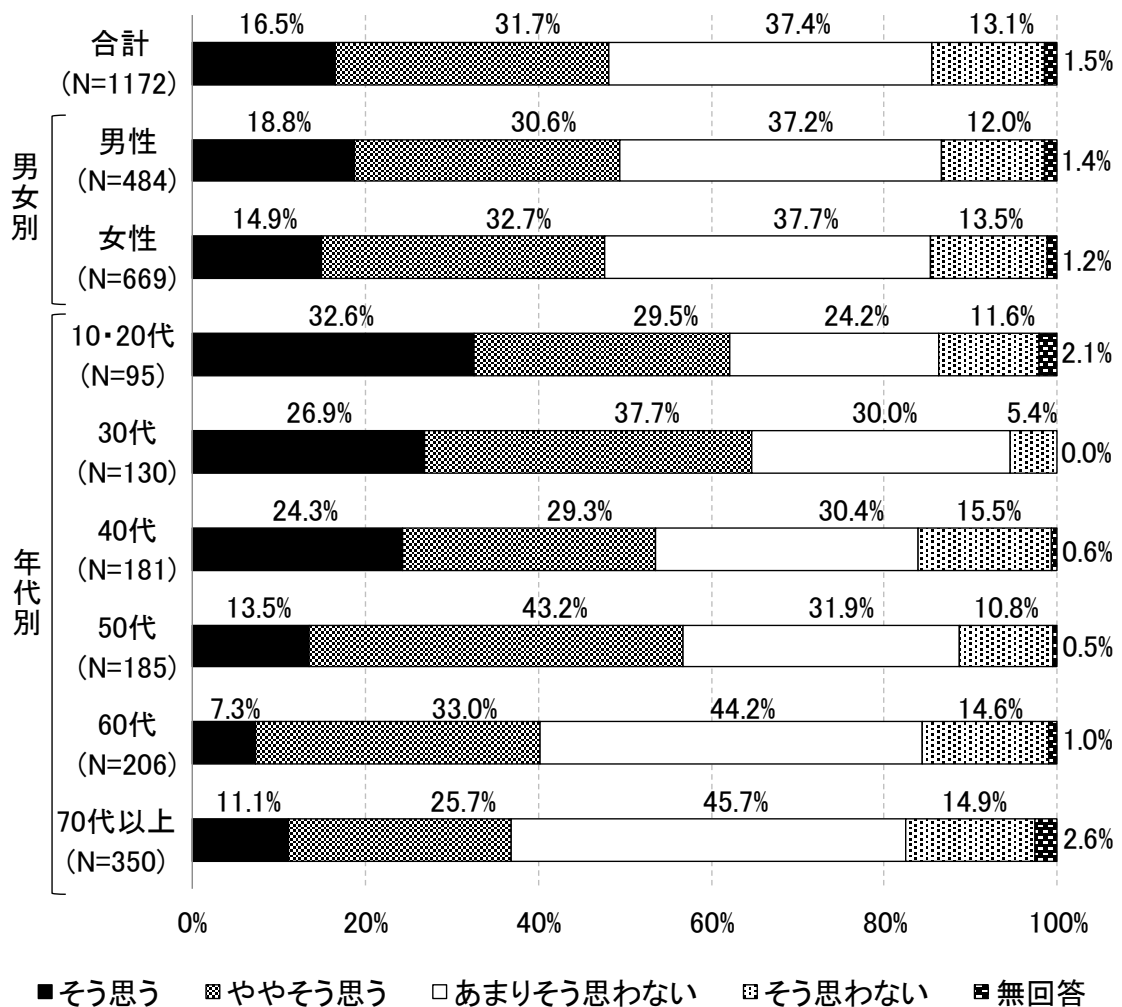


図 132 Q46 独身の方が金銭的に裕福でいられるか

Q47 の夫は外で働き、妻は家庭を守るべきかに関して、年代別で見ると、70 代以上を除く年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 2 割以下である。「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 70 代が 33.4%と最も高い。反対に 10・20 代が 12.6%と最も低い（図 133）。

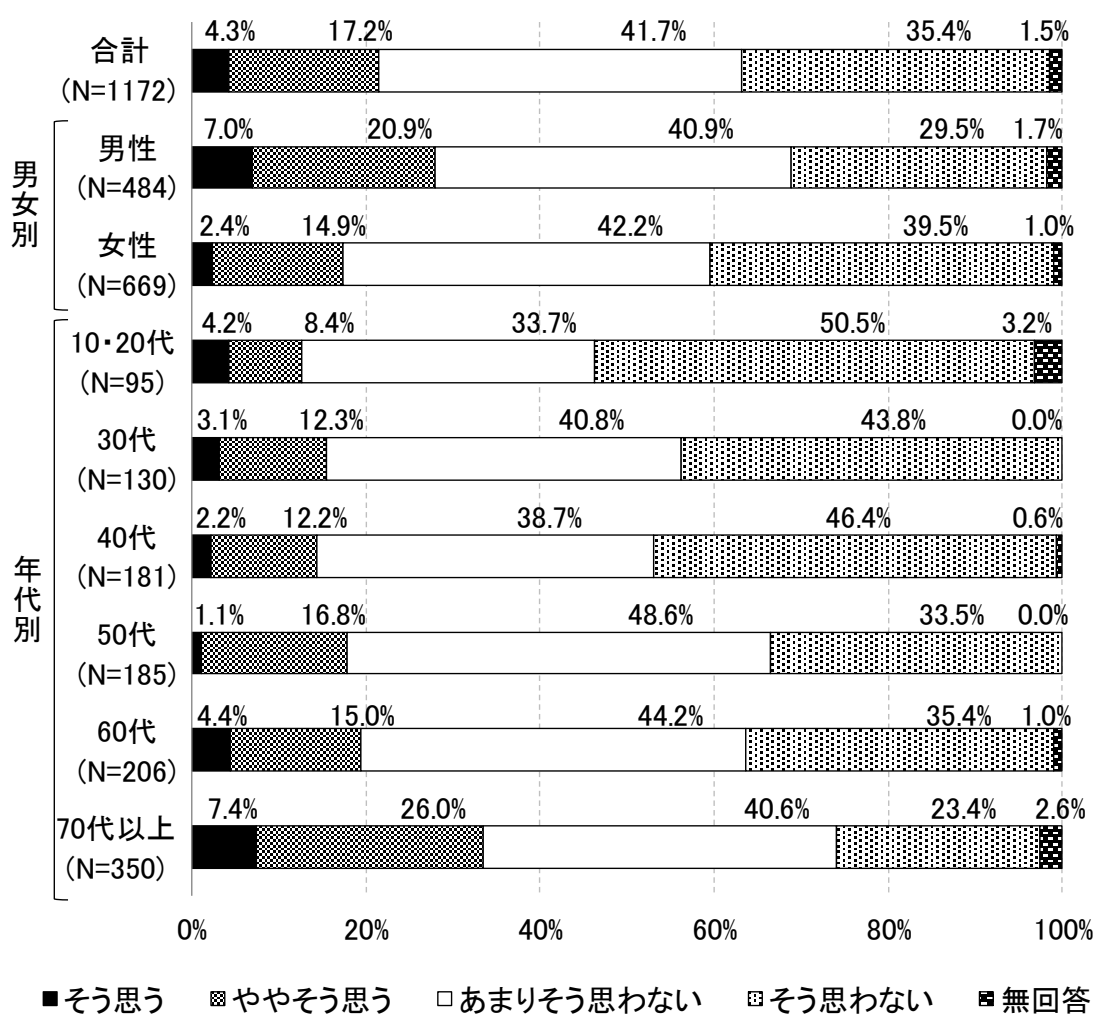


図 133 Q47 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきか

Q48 の少子化によって働き手が減少すると、日本の経済は悪くなるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 7 割以上である。年代別で見ると「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人 30 代で 84.7% と最も高い。反対に 10・20 代が 75.7% と最も低い（図 134）。

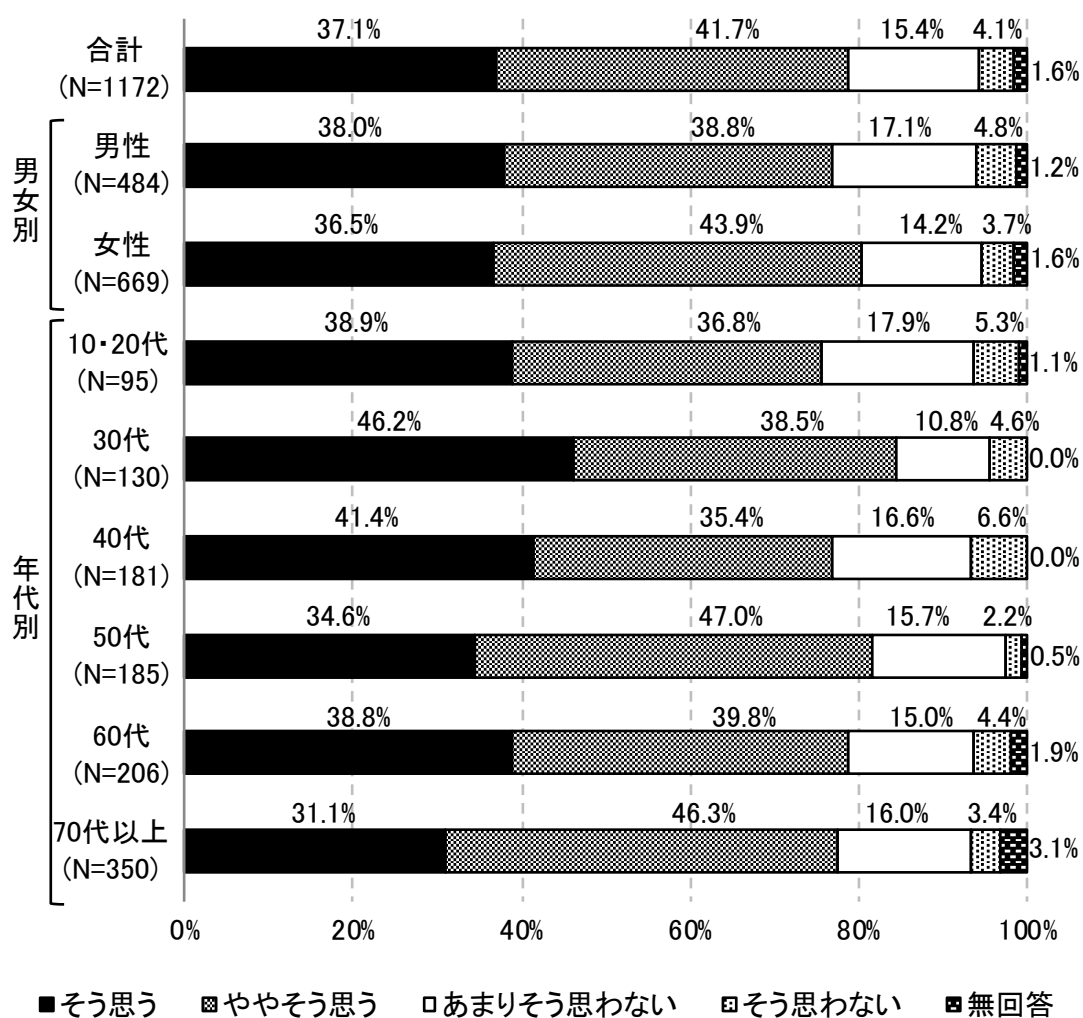


図 134 Q48 少子化によって働き手が減少すると、日本の経済は悪くなるか

Q49 のキャッシュレス決済はセキュリティが不安かについて、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は6割以上である。年代別で見ると「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は60代が86.9%と最も高い。反対に、10・20代は65.3%と最も低い（図 135）。

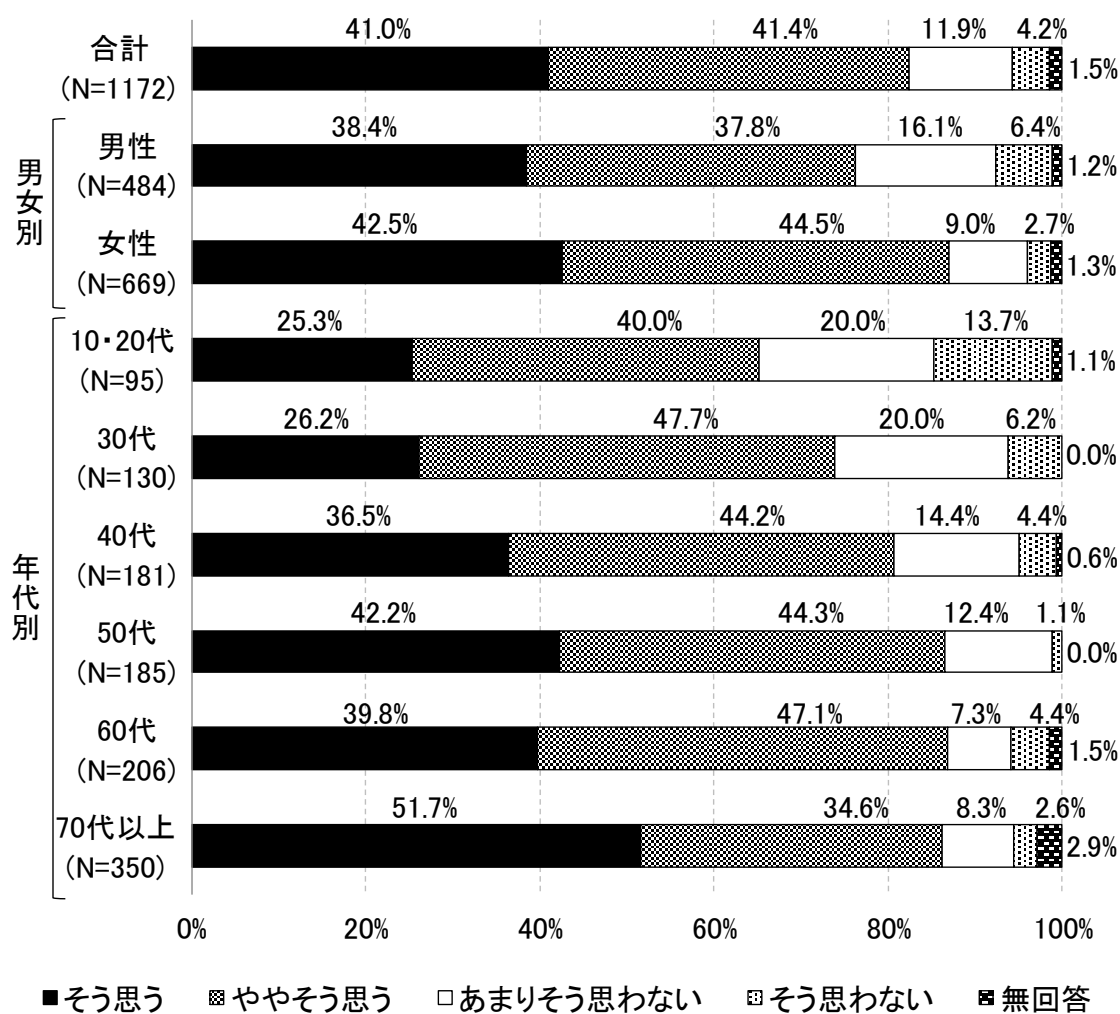


図 135 Q49 キャッシュレス決済はセキュリティが不安か

Q50 のキャッシュレス決済を利用しているかについて、70 代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「よく利用する」または「ときどき利用する」と回答した人の割合は 5 割以上である。年代別で見ると「よく利用する」または「ときどき利用する」と回答した人の割合は 30 代が 80.8%と最も高い。反対に、70 代以上で 35.5%と最も低い（図 136）。

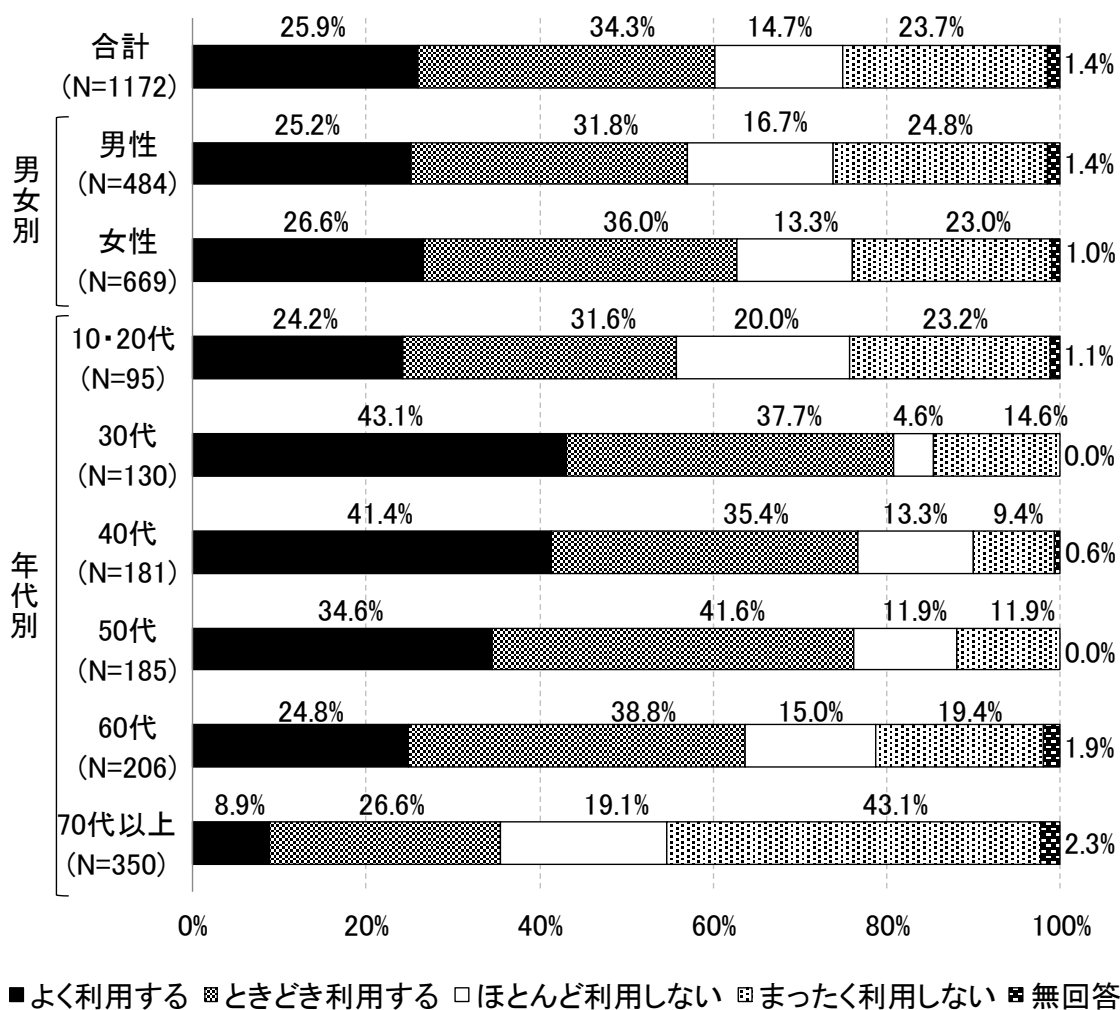


図 136 Q50 キャッシュレス決済を利用しているか

Q51A の映画鑑賞をどのくらい行うかに関して、70 代以上を除く男女別・年代別のすべての層で「よくする」または「ときどきする」と回答した人の割合は 6 割以上である。年代別で見ると「よくする」または「ときどきする」と回答した人の割合は 10・20 代が 84.2%と最も高い。反対に、70 代以上で 50.9%と最も低い（図 137）。

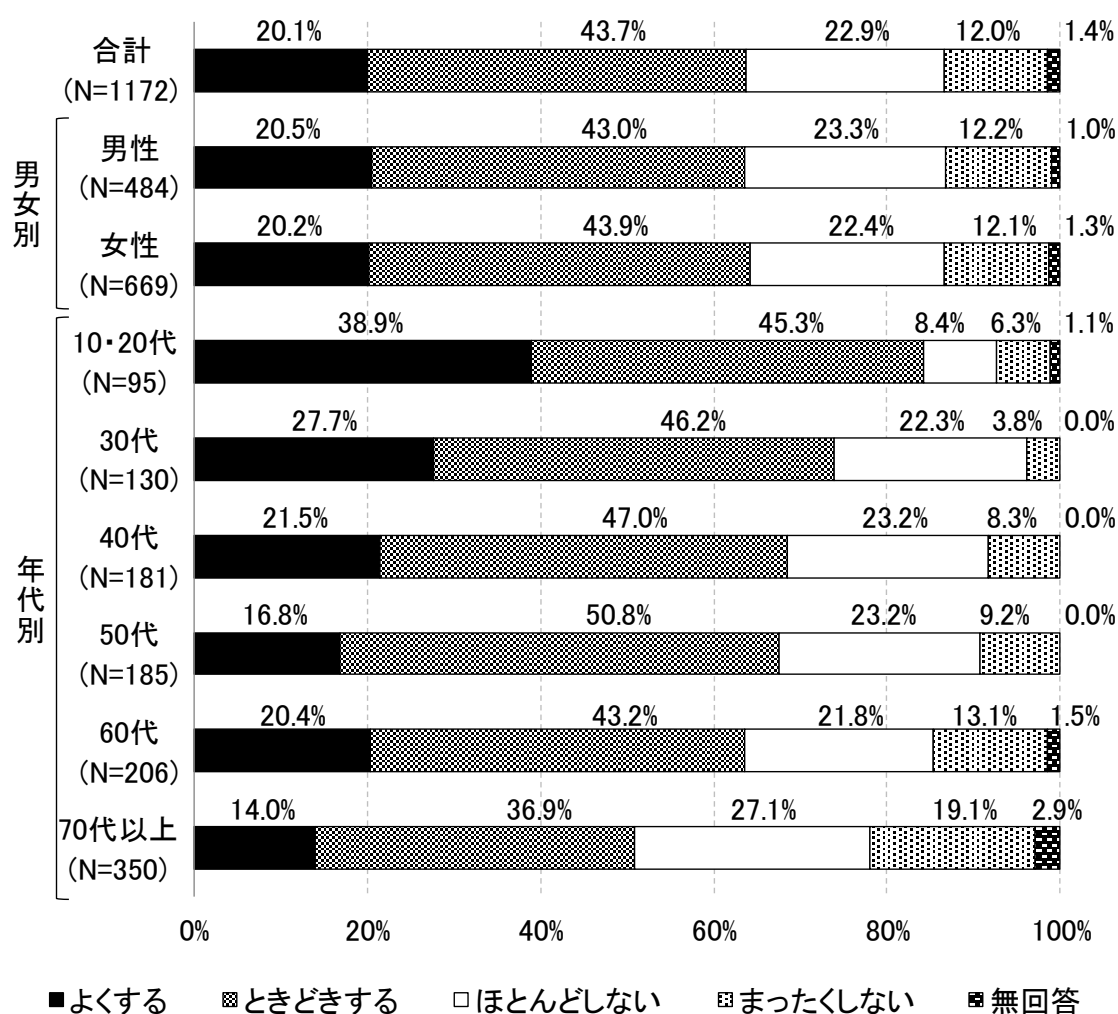


図 137 Q51A 娯楽をどのくらい行うか：映画鑑賞

Q51B の読書をどのくらい行うかに関して、10・20 代を除く男女別・年代別のすべての層で「よくする」または「ときどきする」と回答した人の割合は 5 割以上である。年代別で見ると「よくする」または「ときどきする」と回答した人の割合は 50 代が 62.7%と最も高い。反対に、10・20 代が 47.4%と最も低い（図 138）。

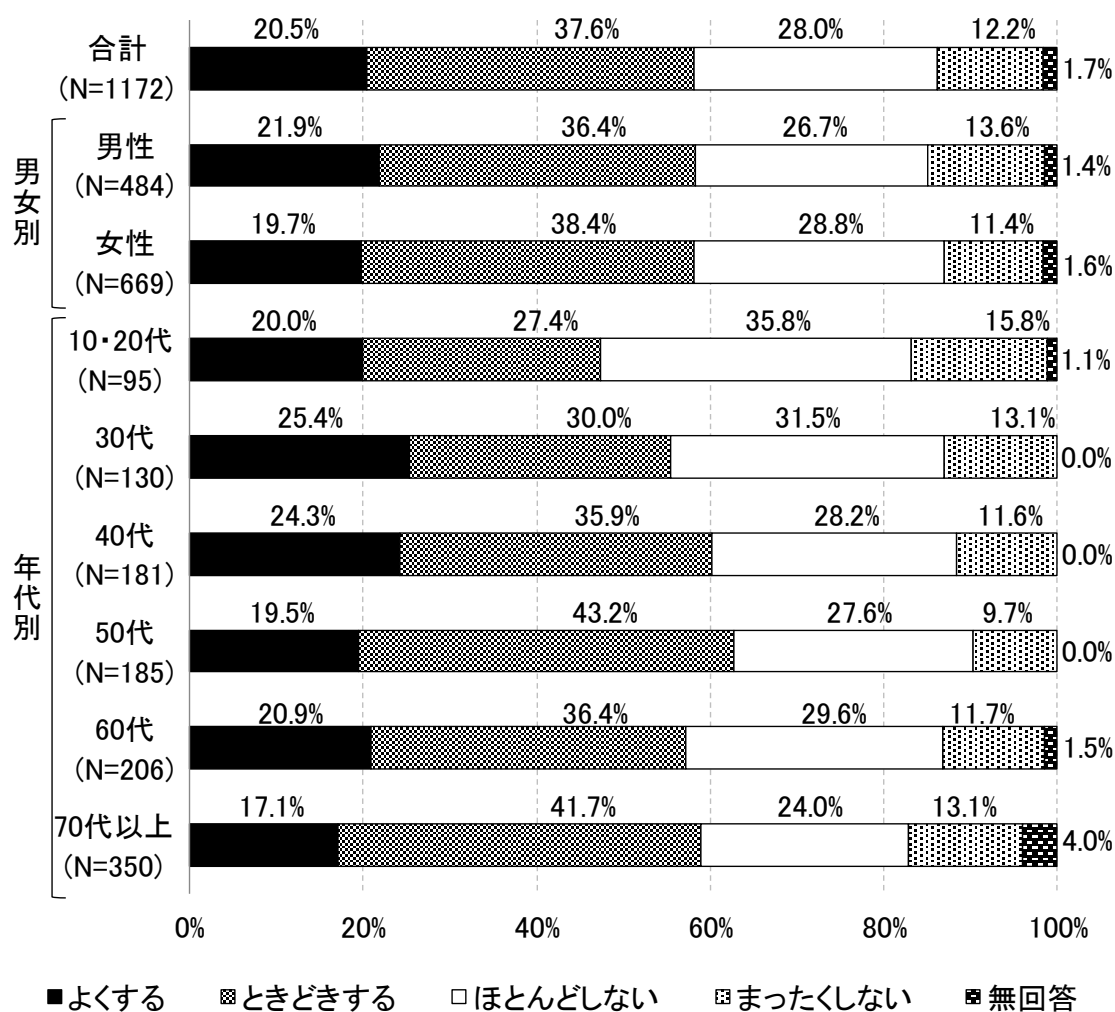


図 138 Q51B 娯楽をどのくらい行うか：読書

Q52 の父親は家事をよく行う人だったかに関して、10・20 代を除く男女別・年代別のすべての層で「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 6 割以上である。年代別で見ると「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 60 代が 70.4%と最も高い。反対に、10・20 代が 53.7%と最も低い（図 139）。

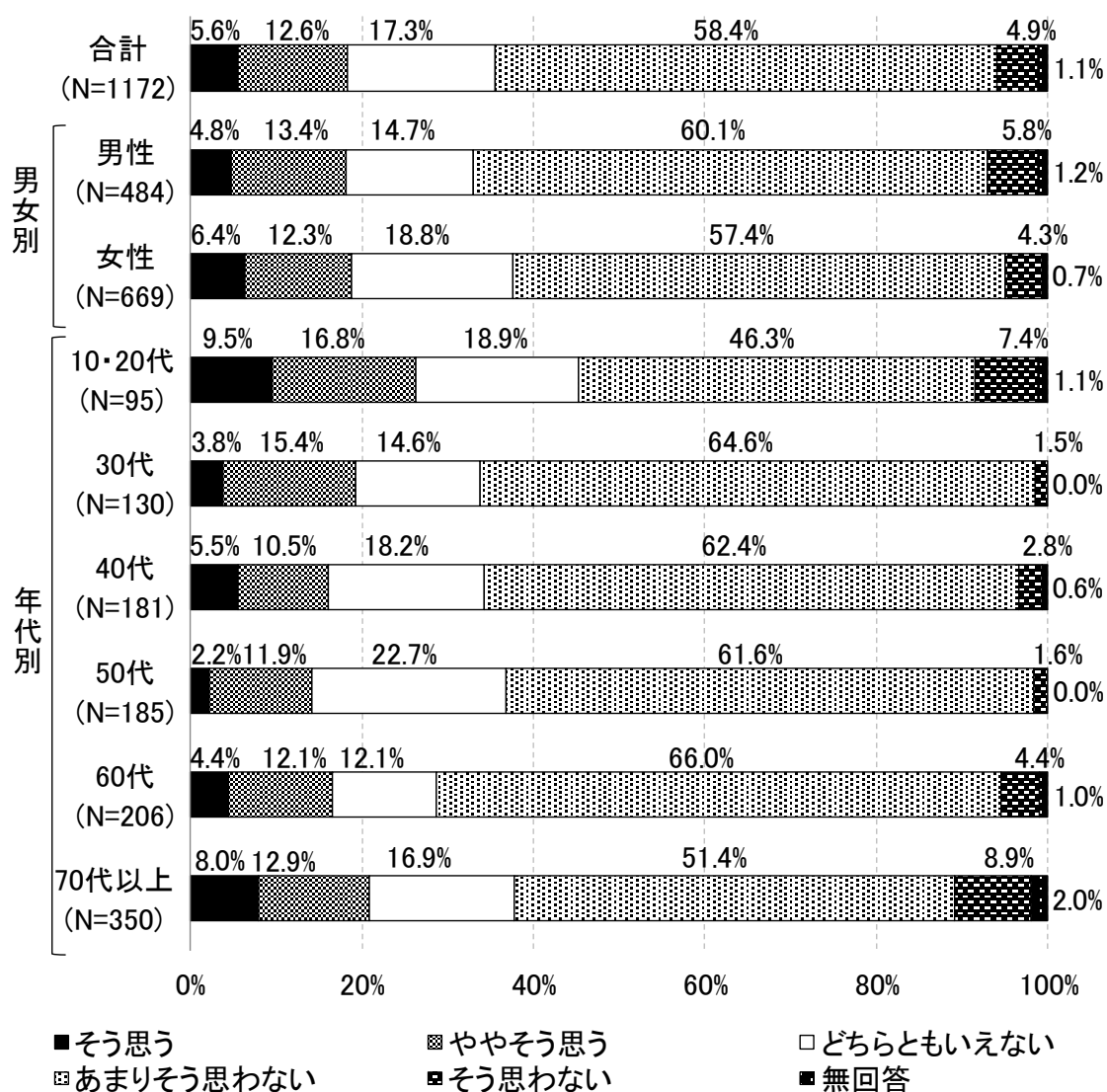


図 139 Q52 父親は家事をよく行う人だったか

Q53 の投票に行く親に付いて行ったことがあるかに関して、合計で見ると、「よくあった」または「ときどきあった」と回答した人の割合は 2 割程度である。年代別で見ると「よくあった」または「ときどきあった」と回答した人の割合は 10・20 代が 50.5%と最も高い。年齢が上がるにつれ、「よくあった」または「時々あった」と回答した人の割合は低くなり、70 代以上で 10.8%と最も低い（図 140）。

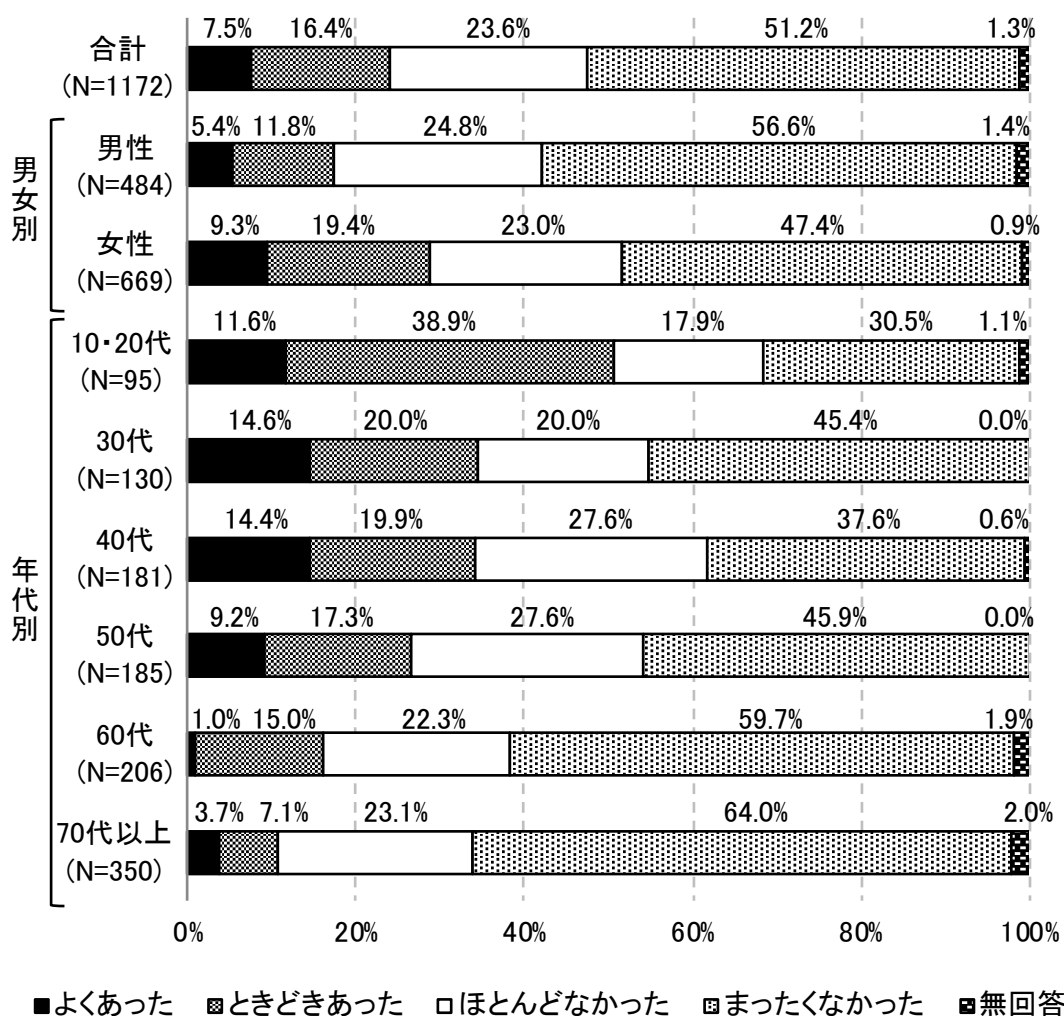


図 140 Q53 投票に行く親に付いて行ったことがあるか

Q54A の過去一年間における高齢運転者による交通事故に関して、男女別・年代別のすべての層で「多かった」または「やや多かった」と回答した人の割合は 9 割以上である。年代別で見ると「多かった」または「やや多かった」と回答した人の割合は 30 代が 98.5%と最も高い。反対に、70 代以上が 91.2%と最も低い（図 141）。

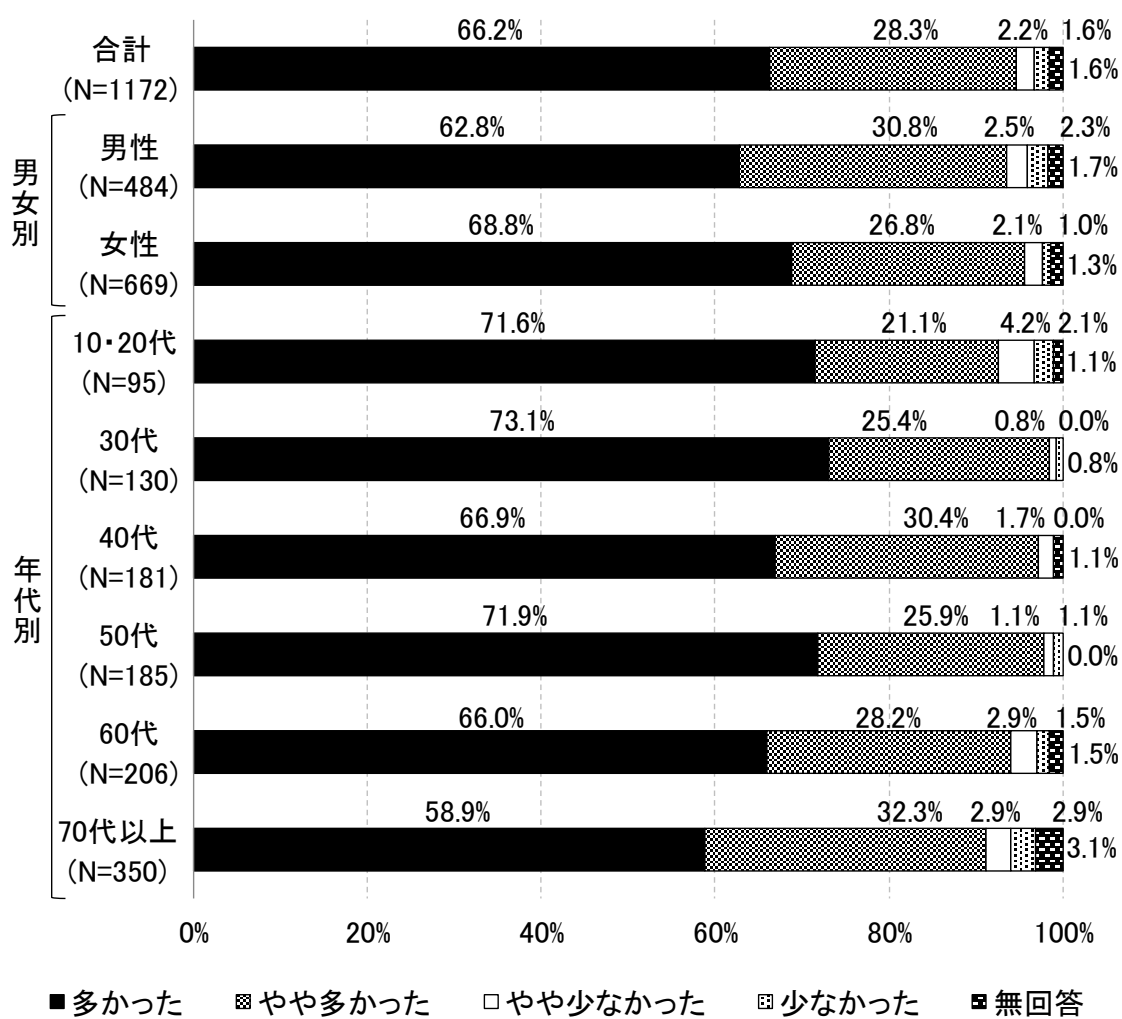


図 141 Q54A 過去一年間、事件が多かったか：高齢運転者による交通事故

Q54B の過去一年間における殺人事件に関して、男女別・年代別のすべての層で「多かった」または「やや多かった」と回答した人の割合は 7 割以上である。年代別で見ると「多かった」または「やや多かった」と回答した人の割合は 50 代が 89.2%と最も高い。反対に 10・20 代が 75.8%と最も低い（図 142）。

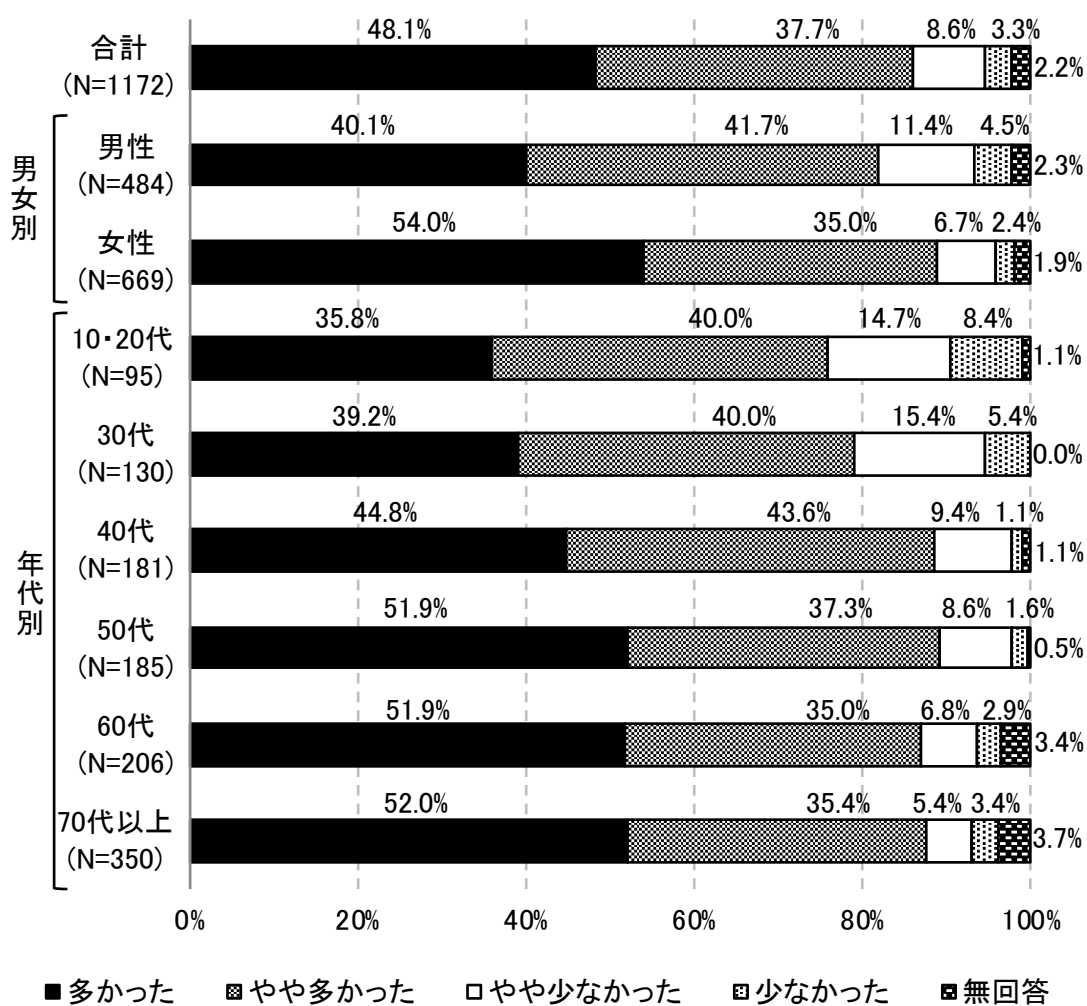


図 142 Q54B 過去一年間、事件が多かったか：殺人事件

最後に、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧を以下に示す。

No.	質問項目	高槻市	関西大学	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q1	生活満足度		○	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1		
Q2	経済面での満足度		○									家族生活についてのアンケート問17カ
Q3	余暇面での満足度		○									
Q4	居住地域は暮らしやすいか		○	Q2	Q2	*Q2	*Q2	*Q3	*Q2	*Q2		
Q5	地域に住み続けたいか		○				*Q3	*Q4	*Q3	*Q3		
Q6	地域の役に立ちたいか		○	Q4	Q4			Q5	Q4			
Q7	地域に愛着を感じるか		○	Q3	Q3	Q6	Q8	*Q19				
Q8A	交通手段満足度 徒歩：歩道の整備の状況	○				Q8A						
Q8B	交通手段満足度 徒歩：バリアフリー化	○				Q8B						
Q8C	交通手段満足度 自転車：通行するために必要なスペース	○				Q8C						
Q8D	交通手段満足度 自転車：駐輪場	○				Q8D						
Q8E	交通手段満足度 自転車：乗っている人目のマナー	○				Q8E						
Q8F	交通手段満足度 バイク：通行するために必要なスペース	○				Q8F						
Q8G	交通手段満足度 バイク：駐輪場	○				Q8G						
Q8H	交通手段満足度 バイク：乗っている人目のマナー	○				Q8H						
Q8L	交通手段満足度 バス：乗り方の分かりやすさ	○				Q8L						
Q8M	交通手段満足度 電車：駅の使いやすさ	○				Q8M	***Q9	***Q12A	***Q9A	***Q4B		
Q8N	交通手段満足度 電車：列車ダイヤ	○				Q8N	***Q10	***Q12B	***Q9B	***Q4A		
Q8O	交通手段満足度 自動車：道路の整備の状況	○				Q8O						
Q8P	交通手段満足度 自動車：駐車場	○				Q8P						
Q8Q	交通手段満足度 タクシー：利用しやすさ	○				Q8Q						
Q8R	交通手段満足度 その他：駅前広場	○										
Q9	高槻市に地域ブランドがあると思うか	○					Q23					
Q10	中心市街地に行く頻度が5年前と比べて増加したか	○					Q16					
Q11A	中心市街地の向上：防災面での安全性や快適性	○		Q10A			Q17A					
Q11B	中心市街地の向上：防犯面での安全性や快適性	○		Q10B			Q17B					
Q11C	中心市街地の向上：居住環境	○		Q10C			Q17C					
Q11D	中心市街地の向上：公共交通機関の利便性	○		Q10D			Q17D					
Q11E	中心市街地の向上：歩行者にとっての歩きやすさ	○		Q10E			Q17E					
Q11F	中心市街地の向上：風紀や治安	○		Q10F			Q17F					

No.	質問項目	高槻市	関西大学	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q12A	中心市街地で3年前と比べて増加したか 文化活動	○					Q18A					
Q12B	中心市街地で3年前と比べて増加したか コミュニティ活動	○					Q18B					
Q12C	中心市街地で3年前と比べて増加したか 商店街の魅力	○					Q18C					
Q12D	中心市街地で3年前と比べて増加したか 百貨店などの大型店の魅力	○					Q18D					
Q12E	中心市街地で3年前と比べて増加したか 買い物やイベントでのにぎわい	○					Q18E					
Q12F	中心市街地で3年前と比べて増加したか 魅力的な飲食店	○					Q18F					
Q12G	中心市街地で3年前と比べて増加したか オフィスなど業務施設	○					Q18G					
Q12H	中心市街地で3年前と比べて増加したか 病院などの医療機関	○					Q18H					
Q12I	中心市街地で3年前と比べて増加したか 道路の渋滞	○					Q18I					
Q12J	中心市街地で3年前と比べて増加したか 駐輪場	○					Q18J					
Q12K	中心市街地で3年前と比べて増加したか 街なかの緑や潤い	○					Q18K					
Q13	中心市街地を済みやすい街にするための取り組み	○					Q19					
Q14	環境に関する問題への関心度	○		Q12	Q33		**Q26					
Q15A	補助制度の対象機器の認知度	○		Q13A	**Q32A		**Q32A					
Q15B	補助制度の対象機器の導入希望状況	○		Q13B	**Q32B		**Q32B					
Q16	園芸活動の頻度	○		Q14	Q31B							
Q17A	行事・活動参加：緑化または自然保護に関するイベント	○		Q15A	Q31C		***Q27①A-C					
Q17B	行事・活動参加：自治会などで行う清掃活動	○		Q15B			***Q27①D					
Q17C	行事・活動参加：市内一斉清掃	○		Q15C			***Q27①E					
Q17D	行事・活動参加：リサイクル品の集団回収	○		Q15D			***Q27①C					
Q18A	高槻市の環境：身近な自然環境とのふれあいがあるか	○		Q11A	Q30A		**Q5	**Q7				
Q18B	高槻市の環境：不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか	○		Q11B	Q30B							
Q18C	高槻市の環境：良好な環境づくりを目指す活動が豊富か	○		Q11C	Q30C							
Q18D	高槻市の環境：環境活動に関する情報や呼びかけが十分か	○		Q11D	Q30D							
Q18E	高槻市の環境：身近な生活環境に水やみどりの潤いがあるか	○		Q11E	*Q31A			***Q7				
Q19	身の回りの方のゴミの削減・分別・リサイクルに対する取り組み		○									

No.	質問項目	高槻市	関西大学	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q20	親しい近所付き合いの数		○									JGSS2012 留置調査票B票 Q59
Q21	地域のお祭りへの参加頻度		○									
Q22	大阪北部地震の被害の大きさ		○									新潟県中越沖地震に関するアンケート調査 問26
Q23	災害の蓄え		○									新潟県中越沖地震に関するアンケート調査 問32
Q24A	どのくらい感じるか 肉体的疲労	○				Q41A					***Q52	
Q24B	どのくらい感じるか 精神的なストレス	○				Q41B						
Q24C	どのくらい感じるか 体力の衰え	○				Q41C						
Q24D	どのくらい感じるか 運動不足	○				Q41D						
Q24E	どのくらい感じるか 肥満	○				Q41E						
Q25	一日の平均歩数	○				**Q11						
Q26	スポーツをする頻度	○				Q42		**Q57				
Q27	スポーツを定期的に行ない理由	○				**Q43						
Q28	今後したいスポーツがあるか	○				Q44						
Q29	スポーツ施設の運営に対する要望	○				Q45						
Q30	総合型地域スポーツクラブを知っているか	○				Q46						
Q31	スポーツ推進委員を知っているか	○				Q47						
Q32	スポーツボランティアとしての活動経験	○				Q48						
Q33	小学生以下の子どもたちの運動・スポーツの促進に何か必要か	○				Q49						
Q34	スポーツ振興のために力を入れるべき施策	○				Q50						
Q35	高槻市のスポーツに関する情報の入手方法	○										
Q36	「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知	○		Q30								
Q37	高槻市の20年後・30年後を見据えて行政改革に取り組むべきか	○										
Q38①	最近良くなってきたと思うもの	○		Q32①			Q40①	**Q49①	**Q36①	**Q28①		
Q38②	今後力を入れてほしいもの	○		Q32②			Q40②	**Q49②	**Q36②	**Q28②		
Q39	参議院議員選挙で投票に行ったか		○									地方選挙における有権者の政治行動に関連する近接性の効果 問11
Q40	参議院議員選挙の期間中に選挙カーによる名前の連呼をどの程度、耳にしたか		○									運転免許証の自主返納制度等に関する世論調査 Q2
Q41	運転免許をどのようなときに返納しようと思うか		○	***Q39 ***Q40								刑罰とりわけ死刑に関する全国意識調査基本報告書 問34
Q42	死刑制度に賛成か		○									
Q43	集団行動が好きなか		○									
Q44	高齢者も働けるうちは働くべきか		○									出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)(2015) Q7
Q45	結婚することの利点		○									出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)(2015) Q8
Q46	独身でいることの利点		○									

No.	質問項目	高槻市	関西大学	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q47	「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えについて		○						*Q48			JGSS-2018G 留置調査票 Q9A
Q48	少子化による働き手が減少すると、日本の経済は悪くなるか		○									
Q49	キャッシュレス決済はセキュリティが不安か		○									「キャッシュレス決済」アンケートの調査 Q10
Q50	少子化による働き手が減少すると、日本の経済は悪くなるか		○									「キャッシュレス決済」アンケートの調査 Q8
Q51A	キャッシュレス決済を利用しているか		○									第9回生活と意識についての国際比較調査 Q8
Q51B	娯楽をどのくらい行うか 映画鑑賞		○									第9回生活と意識についての国際比較調査 Q8
Q52	娯楽をどのくらい行うか 読書		○									
Q53	12歳の頃、父親は家事をよく行っていたか		○									18歳選挙権に関する意識調査 Q2
Q54A	子供の頃、父親は家事をよく行っていたか		○									
Q54B	過去一年間、事件が多かったか 高齢者運転による交通事故		○									1990 国分 住みよい町づくりアンケート 問20ア
Q55	過去一年間、事件が多かったか 殺人事件		○									
Q56	性別	○	○	Q53	Q64	Q58	Q53	Q72	Q64	Q61	**Q64	
Q57	年齢	○	○	Q50	Q65	Q59	Q54	Q73	Q65	Q62	Q65	
Q58	職業	○	○	Q55	Q66	Q60	Q55	Q74	Q66	Q63	Q66	
Q59	最終学歴	○	○	Q56	Q67	Q62	Q57	Q76	Q69	Q65	Q67	
Q60	居住地域	○	○	Q57	Q68	Q63	Q58	Q77	Q70	Q66	Q69	
Q61	市内居住年数	○	○	Q58	Q69	Q64	Q59	Q78	Q71	Q67	Q68	
Q62	住居		○	Q59	Q70	Q65	Q60	Q79	Q72	Q68	Q70	
Q63	居住形態		○	Q60	Q71	Q66	Q61	Q80	Q73	Q69	Q71	
Q64	婚姻状況		○	Q61	Q72	Q51	Q51	Q67	Q53	Q52	Q59	
Q65	子どもの有無		○	Q62	Q73	Q54	Q52	Q71	Q58	Q56	Q73	
Q66	世帯人数		○	Q63	Q74	Q67	Q62	Q81	Q63	Q70	Q72	
	世帯年収		○	Q64	Q75	Q68	Q63	Q82	Q74	Q71	Q74	

注) *印は、質問文の表現・形式が異なるため、比較する際に注意が必要である。変更の程度は、*の数に応じて、下記の通りである。

* : 分析にそのまま使用できる（「てにをは」、濁点の位置、末尾などの変更）

** : 分析には注意が必要である（選択肢の数が異なるなどの変更）

*** : 同一の変数として分析に使用するの難しい（概念範囲が異なる）

第3章 地域の祭りへの参加の要因

中島 由乃

1. はじめに

近年、様々な地域でお祭りが減少傾向にある。佐々木（2007）は、2000年には86,420件あったお祭りが2005年には65,155件にまで減少していることを明らかにしており、このようなお祭りの減少の要因として、地域の過疎化や少子高齢化による担い手の減少、娯楽の多様化などを挙げている。また、お祭りは地域コミュニティと直結しているためお祭りやお祭り参加者の減少に伴い、地域コミュニティの希薄化も進んでいる。このような地域コミュニティの希薄化は、地域の教育力の低下、地域経済への影響、地域インフラの老朽化を招く（内閣府 2008）。こうした背景において、人々の地域のお祭りへの参加を促進するためには、参加要因を明らかにすることが重要だと考えられる。そこで、本調査ではどのような人達が地域のお祭りに参加しているのかを明らかにし、お祭りに参加している人たちの共通点を探ることで、お祭りの参加者を増加させることを目指す。

2. 仮説

2.1. 先行研究

先行研究では、地域のイベントへの参加頻度について、家族構成・家族内参加者・集団同一視など、多様な観点から研究が行われている。中根（2015）では、子供がいる家庭は縁日などのあるイベントへの参加頻度が高くなるということが明らかにされている。加えて、秋野（2016）では、祭りに参加する頻度が多い人ほど家族ぐるみで行う傾向があり、さらに参加回数が多い人ほど、地域への集団意識が高いという。また、樋野他（2012）では、地域の安全環境が子供の地域への愛着を育み、地域参加を促進させることの可能性が示唆されている。

2.2. 仮説

上記の秋野（2016）から、お祭りへの参加頻度と地域への集団意識には関係があることがわかっている。そこで地域に限らない、普段の集団主義の程度によっても、地域のお祭りへの参加頻度が変化するのではないかと考えた。なぜなら、本来のお祭りは「神仏・祖先をまつこと。また、その儀式」¹を指すものであり、その運営は地域の住民達によってなされてきたものである。そのため、集団主義の程度は地域の住民達と関わらなければならないお祭りへの参加頻度と関係があるのではないかと考えられる。つまり、地域コミュニティに

¹ goo 辞書「祭（まつり）の意味」<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E7%A5%AD/#jn-208964>（2020年1月20日閲覧）。

あまり属さない、集団に同調しない人ほど個人主義であり、集団での活動に興味を持ちにくく、地域のお祭りにもあまり参加しないと考えられる。本研究では地元のお祭りに焦点をあて、集団主義の程度という独立変数を与え、お祭りへの参加頻度との関係を分析する。

仮説 1 集団行動が好きな人ほど、地域のお祭りへの参加頻度が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q21: あなたは地域のお祭りにどの程度参加しますか。(地域のお祭りへの参加頻度(反転))

1.よく参加する 2.ときどき参加する 3.ほとんど参加しない 4.まったく参加しない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、参加頻度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q43: あなたは、集団行動が好きですか。嫌いですか。(集団主義の程度(反転))

1.好き 2.やや好き 3.やや嫌い 4.嫌い

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、集団主義の程度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q55: あなたの性別はどちらですか。(男性ダミー)

1.男性 2.女性

上記の選択肢に対して、男性を 1、女性を 0 とする男性ダミーを作成した。

Q56: あなたの年齢をお答えください。(年齢)

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

Q60: 高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。(市内居住年数)

1.1 年未満 2.1 年以上 3 年未満 3.3 年以上 5 年未満 4.5 年以上 10 年未満 5.10 年以上 20 年未満 6.20 年以上 30 年未満 7.30 年以上 40 年未満 8.40 年以上 50 年未満 9.50 年以上

4. 分析

はじめに、集団主義の程度と地域のお祭りへの参加頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表1は集団主義の程度と、地域のお祭りへの参加頻度との2変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、集団行動が「好き」と答えた人のうち、祭りに「よく参加する・ときどき参加する」と答えた人は66%であり、肯定的な評価が過半数をしめている。また、集団行動が「嫌い」と答えた人のうち、祭りに「ほとんど参加しない・まったく参加しない」と答えたのは77%と、否定的な評価が多数を占めている。このことから、集団行動が好きな人ほど祭りに参加すること多く、集団行動の嫌いな人ほど祭りには参加しない事が多いと言えるだろう。

表1のカイ2乗検定の結果を見ると、カイ2乗値が112.910で、有意確率5%水準で有意である。また、Cramerの連関係数は0.182と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、上記の集団行動の好悪と地域のお祭りへの参加頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説を支持する結果である。

ただし、集団主義の程度や地域のお祭りへの参加頻度は、年齢・性別・市内居住年数など、回答者の社会的属性によって異なるだろうから、そのような他の変数の影響を考慮した上で、集団主義の程度が地域のお祭りへの参加頻度に与える影響を確認する必要がある。

表1 集団主義の程度と地域のお祭りへの参加頻度のクロス表

		Q21地域のお祭りへの参加頻度				合計
		よく参加する	ときどき参加する	ほとんど参加しない	まったく参加しない	
Q43 集団主義 の程度	好き	N 14	25	12	8	59
		% 24%	42%	20%	14%	100%
	やや好き	N 44	139	137	59	379
		% 12%	37%	36%	16%	100%
	やや嫌い	N 31	183	204	110	528
		% 6%	35%	39%	21%	100%
	嫌い	N 9	30	49	84	172
		% 5%	17%	28%	49%	100%
	合計	N 98	377	402	261	1138
		% 9%	33%	35%	23%	100%

$\chi^2(df=9, N=1138)=112.910***$, Cramer V=.182***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

表2は、地域のお祭りへの参加頻度（反転）を従属変数、集団主義の程度（反転）、男性ダミー、年齢、市内居住年数を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものであ

る。回帰式の調整済み R² 乗値は 0.076 であり、投入した独立変数によって従属変数である地域のお祭りへの参加頻度の分散の 7.6%が説明されている。

標準化係数 (β) の値は、集団主義の程度 ($\beta = 0.257$)、市内居住年数 ($\beta = 0.067$) が正、男性ダミー ($\beta = -0.055$)、年齢 ($\beta = -0.127$) が負で、集団主義の程度、市内居住年数の係数が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、集団行動が好きで、市内居住年数の長い人ほど、統計的に有意に地域のお祭りへの参加頻度が高いことがわかる。標準化係数の絶対値を比較すると、集団主義の程度が地域のお祭りへの参加頻度に最も強い影響を及ぼしており、性別・年齢・市内居住年数などの社会的属性と比べても、地域のお祭りへの参加に対する強力な規定要因になっていると言える。上記の結果は仮説を支持する結果である。

表 2 Q21 地域のお祭りへの参加頻度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	1.783	0.126		***
Q43集団主義の程度（反転）	0.302	0.034	0.257	***
Q55男性ダミー	-0.101	0.054	-0.055	†
Q56年齢	-0.069	0.018	-0.127	***
Q60市内居住年数	0.032	0.016	0.067	*
調整済みR ²	0.076			
N	1102			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究では高槻市民の集団主義の程度と地域のお祭りへの参加頻度の関係性を明らかにすることを目的として調査分析を行った。具体的には、集団行動を好む人ほど、地域のお祭りへの参加頻度が高くなるという仮説を立て、集団主義の程度や地域のお祭りへの参加頻度などの質問項目を使い分析を行った。分析の結果から、「集団行動を好む人ほど、地域のお祭りへの参加頻度が高くなる」という仮説は支持された。

現在、地域のお祭りの担い手が減少している一方で、祭りの担い手を募集・派遣するという活動も行われている。一般財団法人 地域伝統芸能活用センターでは、地域のお祭りの参加プログラムの掲載と参加者募集及び申し込みの手段を提供するためのウェブサイト「まつりーと」を提供している。しかし、2020 年現在でこのサイトに祭り情報を登録している祭りは 245 件であり、2005 年には 65,155 あった祭りの中で、このサイトを活用している祭りがわずか 0.4%にも満たないというのは、あまりにもこのサイトを知っている人が少ないということを示している。祭りの減少している現在において、このようなサイトの知名度

を上げていくことが重要になるだろう。また、集団行動をあまり好まない人や仕事の関係で当日や準備に参加出来ない人達のために、個人で出来る作業や比較的すぐに出来る作業を割り振るなど、深く関わらなくても出来る役割を考えてみるのも良いのではないだろうか。そのようにして少しでも地域に関わり、地域の人達と交流をしていくということは、地域コミュニティの希薄化の進む現代で、とても大切なことなのではないかと思う。

6. 文献

- [1]…佐々木健 (2007)「長く続くお祭りの条件―園祭を例に」『早稲田大学商学部卒業論文』.
- [2]…内閣府 (2008)『平成 20 年版 青少年白書』.
- [3]…中根梨恵 (2016)「地域イベントへの参加頻度客層」『平成 27 年度社会調査実習報告書―高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査』: pp.177-183.
- [4]…秋野和真 (2016)『郷土の活性化を図る地域の祭り参加者の実態調査』.
- [5]…樋野公宏・白石靖幸・星旦二・伊香賀俊治 (2012)「子どもの地域活動の参加要因と健康関連要因の構造分析―保護者の意識・行動および地域の安全環境に着目して―」『日本建築学会計画系論文集』 77(679): pp.2119-2125.

第4章 ご近所づきあいの程度と定住意識の関連

中尾 幸平

1. はじめに

日本では戦後からの三大都市圏を始めとする都市部への大きな人口流入により、都市部への人口集中が進展している。平成26年度版国土交通白書によると、三大都市圏以外の都市圏においても、周辺地方が転出超過傾向にある一方で、中心都市では転入超過傾向となっており、都市部への人口集中の状況が確認できる。今後もこうした都市部への人口集中は続き、国土構造の都市化は引き続き進んでいくと考えられる。また、人口集中によって起こる社会問題として、富士通総研(2019)によると、都市部では人口過密による待機児童問題や混雑の発生が、過疎地域では経済・社会の持続性の低下や、移住・交流の停滞、魅力ある雇用先の減少などが挙げられ、双方に共通の問題として、医療従事者や教員の人手不足、公共施設の過不足が指摘されている。このように、人口集中によって様々な問題が現在も引き起こされており、これを解消するためには人々が住んでいる地域に愛着を感じ、住み続けたいと思えるような施策が必要であると考えられる。

本調査では、人々の定住意識には居住地域内の住民どうしの交流の深浅が影響を与えていると考えて分析を行い、地域の小さなコミュニティでの交流の深さが愛着を形成し、どの程度定住意識に影響を及ぼすのかを明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

大森(1994)によると、中山間地域における若年層を対象に定住意思(将来の居住希望の有無)を規定する属性要因として、年間家計所得、年齢、同居家族数、農家・非農家の別、農業従事状況が統計的に有意であることが明らかになっている。特に、所得獲得の場の形成が重要であることを示し、同時に定住促進の困難さを定量的に示した。

室崎・重村・山崎(2008)によると、一人暮らしの高齢者について、居住継続意向にかかる近隣住民や環境との関わりの重要性が増していることを明らかにした。また、定住を維持するための高齢者の生活支援には、近隣社会環境と両立するあり方が求められるとともに、近隣社会環境のうち、近所づきあいや外出行動(店・公園・住宅・自然等との関係)といった要素を含む「地縁ネットワーク」の重要性を認識した地域計画が同時に求められるとしている。

梅本・糸井川・小嶋(2012)は、液状化被災地において住民の居住継続意向の要因を分析した結果、自宅の被害の程度はほとんど影響しない一方で、自宅の総合的満足度や従前の生活環境の総合的な評価、各種地域行事への総合的な参加度などと強い関連性があることを

明らかにしている。液状化被災地という特殊な環境での調査ではあるが、定住の意向に地域コミュニティの充実度との関連性があることが示唆される。

先行研究では、山間部地域や被災地といった特殊な条件下での定住意識を聞いたものが多く、高槻市のように大都市への交通が便利で、かつ都市部の賑わいと自然の豊かさを兼ね備えた地域において調査を行うことは、様々な条件下での住民の定住意識を把握することが可能であり新規性があるといえる。

2.2. 仮説

本研究では居住地域内の住民どうしの交流の深浅が、人々のその地域への定住意思に影響を与えているという仮説を立てた。主要仮説として、親しいご近所づきあいをしている人が多くいる人ほど、居住地域への愛着が高まり、住み続けたいと感じるのではないかと考えた（仮説 1）。これらの関連性については室崎・重村・山崎（2008）が高齢者層においては地縁ネットワークの重要性として指摘しているところではあるが、今回の調査ではあらゆる世帯構成において近隣住民との関係の深さが定住に対する評価に影響を及ぼすことを確かめたい。仮説 2 は、日常生活の中で経済的なゆとりに満足している人ほど、都市部へ移住することの一つのメリットである収入の安定の必要性を感じないため、現在住んでいる地域に住み続けたいと感じているのではないかと推測した。仮説 3 では年齢が低い人ほど、仕事の都合で移住したり、より良い雇用条件、より利便性のある安定した生活を求めるために、定住に対して否定的であるのではないかと考えた。

仮説 1 親しいご近所づきあいをしている人が多くいる人ほど、居住地域に対する定住意欲が高い。

仮説 2 日常生活の中で経済的なゆとりに満足している人ほど、居住地域に対する定住意欲が高い。

仮説 3 年齢が低い人ほど、定住地域に対する定住意欲が低い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q2：現在の生活のうち、経済的な面ではどのくらい満足していますか。（経済的ゆとり（反

転))

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q5：あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。(定住意欲 (反転))

1.ずっと住み続けたい 2.住み続けたい 3.まあ住み続けたい 4.どちらともいえない
5.機会があれば引っ越したい

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、定住意欲が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q20：あなたは、親しい付き合いをしているご近所の方が多いですか。少ないですか。(親しいご近所づきあいの数 (反転))

1.多い 2.やや多い 3.やや少ない 4.少ない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、親しいご近所づきあいの数が多くなるように、尺度の反転を行った。

Q56：あなたの年齢をお答えください。(年齢)

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

4. 分析

はじめに、居住地域での交流の深浅と定住意識の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は親しいご近所づきあいをしている人の数と定住意欲の二変数についてクロス集計表を作成したものである。現在住んでいる地域に「ずっと住み続けたい」と答えた人の割合は、親しい近所付き合いの数が「多い」と回答した人では 53.7%であったのに対して、「少ない」と回答した人では 19.3%にとどまった。一方で、現在住んでいる地域を「機会があれば引っ越したい」と答えた人の割合は、親しい近所付き合いの数が「多い」と回答した人では 1.2%であったのに対して、「少ない」と回答した人では 14.0%と大きくなっており、親しい近所付き合いをしている人の数が多い人ほど、現在お住まいの地域にずっと住み続けたいと思っている。

表 1 のカイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は 102.880 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.173 であり、一定の強さの関連があるといえる。以上のことから、上記の親しいご近所づきあいをしている人の数と定住意欲の二変数間の関連は、統計的に有意であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

ただし、ご近所づきあいの程度や定住意欲は、年齢などの回答者の社会的属性の違いに影響を受けていることが予想できるので、そのような他の変数の影響を考慮した上で、親しいご近所づきあいをしている人の数が定住意欲に与える影響を確認する必要がある。

表 1 Q7 親しいご近所づきあいの数（反転）と Q5 定住意欲（反転）のクロス表

		Q5定住意欲（反転）					合計
		ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい	
Q20親しいご近所づきあいの数（反転）	多い	N 44	21	7	9	1	82
		% 54%	26%	9%	11%	1%	100%
	やや多い	N 79	94	60	15	11	259
		% 31%	36%	23%	6%	4%	100%
	やや少ない	N 108	151	127	42	17	445
		% 24%	34%	29%	9%	4%	100%
	少ない	N 70	89	104	49	51	363
		% 19%	25%	29%	13%	14%	100%
合計		N 301	355	298	115	80	1149
		% 26%	31%	26%	10%	7%	100%

χ^2 (df= 12, N= 1149)= 102.880***, Cram er V= .173***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 2 は、定住意欲（反転）を従属変数、経済的ゆとり（反転）、親しいご近所づきあいの数（反転）、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R2 値は 0.147 であり、投入した独立変数によって従属変数である定住意欲の分散の 14.7%が説明されている。

標準化係数 (β) の値は、経済的ゆとり ($\beta=0.291$)、親しいご近所づきあいの数 ($\beta=0.198$)、年齢 ($\beta=0.072$) の 3 項目すべてが正であり、かつ、5%水準で統計的に有意であった。つまり、経済的ゆとりがある、親しいご近所づきあいをしている人の数が多い人ほど、統計的に有意に定住意欲が高く、年齢が低い人ほど、統計的に有意に定住意欲が低い。この結果はすべての仮説に整合的な結果である。標準化係数の絶対値を比較すると、経済的ゆとりが定住意欲に最も強い影響を及ぼしており、その次に親しいご近所づきあいの数、年齢という順になっている。

表2 定住意欲（反転）の重回帰分析の結果

	B	SE	β	
(定数)	1.900	0.139		***
Q2経済的ゆとり（反転）	0.295	0.028	0.291	***
Q20親しいご近所づきあいの数（反転）	0.256	0.036	0.198	***
Q56年齢	0.051	0.020	0.072	**
調整済みR ²	0.147			
N	1122			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本調査では高槻市民の居住地域内の住民どうしの交流の深浅（ご近所づきあいの程度）と定住意識の関連性を調査するために分析を行った。親しいご近所づきあいをしている人の数が多い人ほど定住の意思が強いという仮説を立て、定住意欲に影響を与えうる他の要素を考慮し、経済的なゆとりや年齢などの質問項目を使って重回帰分析を行った。

回帰分析の結果から、親しいご近所づきあいをしている人の数が多いほど、定住意欲が高いことが明らかになった。よって、仮説1「親しいご近所づきあいをしている人が多くいる人ほど、居住地域に対する定住意欲が高い」は支持された。また、重回帰分析の結果から、仮説2「日常生活の中で経済的なゆとりに満足している人ほど、居住地域に対する定住意欲が高い」と仮説3「年齢が低い人ほど定住地域に対する定住意欲が低い」についても支持された。それに加えて、経済的な満足度が定住意欲に与える影響のほうが、ご近所づきあいの程度が定住意欲に与える影響よりも強いことが示された。このことから、人々の定住意識には経済的な満足度のような「個人」の充実度が強く影響を与えており、さらに、居住地域内の住民どうしの交流の深さといった、「コミュニティ」の充実度も影響を与えていることがわかる。

平成29年度版厚生労働白書によると、隣近所との望ましい付き合い方について深い交流を選ぶ人が昔に比べて大きく減少しており、地域での支え合い意識の希薄化が進んでいると述べられている。こうした地域コミュニティの衰退による、その地域への愛着の劣化を防ぐことが人々の定住を促進させると考えられる。

6. 文献

- [1]…大森賢一(1994)「中山間地域における若年層の定住条件」『農業計算学研究』26: pp.121-128.
- [2]…室崎千重・重村力・山崎義人(2008)「一人暮らし高齢者の居住継続を支える近隣環境

に関する研究—京都市都心部の旧富有小学校区を事例として」『日本建築学会計画系論文集』 73(631): pp.1907-1914.

[3]…梅本通孝・糸井川栄一・小嶋崇央 (2012) 「液状化被災地における転居・居住継続に関する要因分析—茨城県潮来市日の出地区を対象として」『地域安全学会論文集』 18: pp.483-493.

[4]…国土交通省 (2014) 『平成 26 年度国土交通白書』 <http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h26/hakusho/h27/pdf/np101100.pdf> (2020 年 1 月 4 日閲覧) .

[5]…国土交通省 (2017) 『平成 29 年度国土交通白書』 <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/17/dl/1-01.pdf> (2020 年 1 月 12 日閲覧) .

[6]…富士通総研 (2019) 「地域・地方の現状と課題」 https://www.soumu.go.jp/main_content/000629037.pdf (2020 年 1 月 4 日閲覧) .

第5章 リサイクルと周囲の人の環境行動の関連性

森井 健斗

1. はじめに

本章では、周囲の人の環境行動が本人の環境行動に影響するのかどうかについて分析する。近年、地球温暖化のような気候変動を筆頭に世界規模で様々な環境問題が取り上げられている。政府報告書（2018）によると、日本では気温の上昇や大雨の頻度の増加等により、農作物の品質低下、動植物の分布域の変化等、気候変動の影響がすでに顕在化しているとされ、海外と同様、日本でも様々な問題が起きている。また、本研究のテーマでもあるごみ問題についても大量のごみの排出に処理が追いつかず行き場のないごみの処理も大きな社会問題となっている。

そこで、本研究ではごみ問題の解決策の一つと考えられているリサイクル行為についてその要因を明らかにすることを目的に、市民のリサイクル行動と周囲の環境の関係性について分析を行う。

2. 仮説

2.1. 先行研究

杉浦・大沼・野波・広瀬（1998）は、地域の環境ボランティアがその地域に住む住民のリサイクル活動を促進させることを明らかにしている。また、小林（2008）は社会的規範が人々に対して内面化することによって人々の選好を変え新しい選好を受容させていると述べている。そして、高橋・伊藤・東條（2013）によるとゴミ収集所の設備タイプや収集所までの所要時間によってごみの分別率に違いが出ることが明らかになっている。

本調査では、周りの人々の環境行動に対する認識を確認することによって、周りの人々の環境行動がその人自身のリサイクル活動に影響するのかという心理的・社会的要因について明らかにしたい。

2.2. 仮説

本調査では、環境に配慮するという一種の社会的規範がリサイクルするという選好に影響を与えると考えた。そして、特に社会的規範の形成には、対人関係からの影響が大きいものと考えて、身の回りに環境に配慮した行動を取る人がいる人ほど環境に配慮した行動と考える（仮説 1）。次に職業について、専業主婦の人は家事をする時間が長くごみの処理（リサイクル）も行うと考える（仮説 2）。次に性別について、女性の人ほど近隣関係を多く結び交流関係が広いので周囲の人の影響を受けやすいのではないか（仮説 3）。また、一戸建てに住んでいる人ほど家族などと同居しているのでより身の回りの人の影響を受け

と考える（仮説 4）。

仮説 1 身の回りに環境に配慮した人がいる人ほど、リサイクル活動に参加する。

仮説 2 職業が専業主婦の人ほど、リサイクル活動に参加する。

仮説 3 性別が女性の人ほど、リサイクル活動に参加する。

仮説 4 一戸建てに住んでいる人ほど、リサイクル活動に参加する。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q17_D：あなたは 1 年以内にリサイクル品の集団回収に参加しましたか。（リサイクルの集団回収ダミー）

1.はい 2.いいえ

上記の選択肢に対して、はいを 1、いいえを 0 とするリサイクルの集団回収ダミーを作成した。

Q19：あなたは、ご家族やご友人がゴミの削減や分別、リサイクルなどの活動をどのくらい取り組んでいると思いますか。（身の回り人の環境配慮行動（反転））

1.よく取り組んでいる 2.少しは取り組んでいる 3.あまり取り組んでいない 4.まったく取り組んでいない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、よく取り組んでいるとなるように、尺度の反転を行った。

Q55：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性 2.女性

上記の選択肢に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q57：あなたの職業はどれですか。（専業主婦ダミー）

上記の設問に対して、専業主婦を 1、それ以外を 0 とする専業主婦ダミーを作成した。

Q61：あなたの住居形態はどれですか。（一戸建てダミー）

上記の設問に対して、一戸建てを 1、それ以外を 0 とする一戸建てダミーを作成した。

4. 分析

まず、クロス表を用いて Q19 身の回りの人の環境配慮行動（反転）と Q17_D：リサイクル品の集団回収ダミーの変数を用いてクロス表を作成した（表 1）。

表 1 Q19 身の回り人の環境行動（反転）と Q17_D：リサイクルの集団回収ダミーの
クロス集計表

			Q17_D行事・活動参加：リサイクル品の集団回収		
			はい	いいえ	合計
Q19 身の回りの人の 環境配慮行動	そう思う	N	218	144	362
		%	60%	40%	100%
	ややそう思う	N	277	296	573
		%	48%	52%	100%
	あまり そう思わない	N	56	114	170
		%	33%	67%	100%
	そう思わない	N	5	11	16
		%	31%	69%	100%
	合計	N	556	565	1121
		%	50%	50%	100%

χ^2 (df=3, N=1121)=37.725***, Cramer V=.183***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

検定の結果カイ 2 乗の値が 37.725 で、有意確率が 5%水準で有意ある。また、Cramer の連関係数は 0.183 で、この 2 変数には一定の強さの関連性があるといえる。「あなたは、ご家族やご友人がゴミの削減や分別、リサイクルなどの活動をどのくらい取り組んでいると思いますか」という問いで「そう思う」と答えている人で集団回収に参加したことがある人は 60%で、集団回収に参加したことがない人は 40%である。以上のことから身の回りの人が環境配慮行動をしている人ほどがリサイクル品の集団回収に参加しているといえるだろう。

次にリサイクル活動に関わる要因を検証したい。リサイクルの集団回収ダミーを従属変数とし、独立変数は身の回りの人の環境配慮行動（反転）、女性ダミー、専業主婦ダミー、一戸建てダミーの 4 変数を用いて重回帰分析を行った（表 2）。

表2 Q17_D：リサイクルの集団回収ダミーの重回帰分析の結果（4変数）

	B	SE	β	
(定数)	-0.123	0.069		†
Q19 身の回りの人の環境配慮行動	0.108	0.020	0.154	***
Q55 女性ダミー	0.176	0.031	0.174	***
Q57 専業主婦ダミー	0.107	0.045	0.073	*
Q61 一戸建てダミー	0.241	0.030	0.229	***
調整済みR ²	0.123			
N	1121			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

回帰式の調整済み決定係数は 0.123 であり、従属変数であるリサイクルの集団回収ダミーの分散の 12.3%が投入した独立変数によって説明されている。標準化係数（ β ）の値は、身の回りの人の環境配慮行動（反転）（ $\beta=0.154$ ）、女性ダミー（ $\beta=0.174$ ）、専業主婦ダミー（ $\beta=0.073$ ）、一戸建てダミー（ $\beta=0.229$ ）と、それぞれ正の値をとり係数は 5%水準で統計的に有意であった。つまり一戸建てに住んでいて、女性で、身の回りの人が環境配慮行動をとっていて、専業主婦の人ほど、リサイクル品の集団回収に参加していることが分かる。標準化係数の絶対値を比較すると、一戸建てダミー、女性ダミー、身の回りの人の環境配慮行動、専業主婦ダミーの順で強い影響を及ぼしている。

5. 考察

本調査では、高槻市民のリサイクル活動と身の回りの人の環境配慮行動との関連性を調査するために身の回りに環境に配慮した人がいる人ほど、リサイクル活動に参加するという仮説を立てて分析を行った。

分析結果から、身の回りの人が環境配慮行動をとっている人ほどリサイクル品の集団回収に「はい」と答えている割合が大きかった。このことより、上記の仮説は支持されたが、重回帰分析の結果より、一戸建て住宅とリサイクル品の集団回収の方がより強い関連があった。理由としては、一戸建て住宅に住んでいる人は複数人で済んでいる場合が多いと考えられるので他の同居人と一緒に出す場合や、集合住宅より集団回収の場にリサイクル品を持っていくことが容易であることが要因だと推測する。

本研究では、身の回りの人の環境配慮行動から本人のリサイクル行動に影響するという仮説は支持されるという結果になった。これより、周囲の人の環境配慮行動が本人のリサイクル行動に影響を与えることは明らかにできた。これからとしては、リサイクル活動の促進のため身の回りの環境配慮行動が本人に対して影響を与える要因についての考察の必要性が考えられる。

6. 文献

- [1]…小林 盾（2002）「社会規範の数理社会学にむけて」『理論と方法』17(2): pp.183-194.
- [2]…杉浦 淳吉・大沼 進・野波 寛・広瀬 幸雄（1998）「環境ボランティアの活動が地域住民のリサイクルに関する認知・行動に及ぼす効果」『社会心理学研究』13(2): pp.143.
- [3]…高橋若菜・伊藤俊介・東條なお子（2013）「スウェーデンの家庭におけるごみ分別・リサイクルの 実態把握調査」36: pp.1-16.
- [4]…篠木幹子（2002）「リサイクル行動と正当化のメカニズム」『社会学評論』53(1): pp.85-100.
- [5]…演田勝宏（1990）「核家族の内部過程と子どもの社会化」『文化女子大学研究紀要編集委員会』21: pp.317-328.

第6章 災害に対する備えを行う要因

下道 未羽

1. はじめに

本章では、2018年6月に発生した大阪府北部地震を事例として、地震被害の主観的な大きさと、防災の備えとの関連について分析を行う。マクロミル（2018）が行ったアンケート調査では、「地震」、「豪雨、洪水」、「大規模な火事、爆発」、「暴風、竜巻」、「中長期の天候による災害」、「土砂災害」の6項目において、日本を7つのエリアにわけ、恐れている災害について調査を行った。その調査によると、どのエリアにおいても、地震を恐れている人の割合は90%を超えており、その他の項目が全て70%以下であることからして、国民が最も恐れている災害とされている。それにもかかわらず、「DIMSORIVE」が実施した「防災対策」に関するアンケート調査では、2年前の2016年は、実際に地震に対して備蓄をしている人の割合が45%であったのに対して、2018年の備蓄をしている人の割合は47.6%とほとんど変わっていない。そのため、地震を経験し恐れているのに、なぜ備えを行わないのか、要因を明らかにすることで、災害被害減少・防止の一助とする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

神谷・中林・高野（1996）は、首都圏での大地震発生を現実的に考える人が阪神淡路大震災後に増加し、市民の防災意識の向上を明らかにしている。また、この研究では、増加した要因の一つにテレビを中心としたマスコミが大きく取り上げたことに強く影響されていると述べられている。また、松本・矢田部（2008）は、地域防災活動継続規定因を満たす住民の属性を検討している。この研究では、人とのつながりを求めている人たちが、地域の防災活動を継続したいと考えていることが明らかにされている。また、特に60歳以上の住民が、人々が助け合う全面的なつながりの時代を経験してきた人たちで、この研究の結果を顕著に反映していると述べている。さらに、内閣府（1999）は、大地震が起こった場合に備えて、対策をとっていると答えた者1,389人に、対策をとるために参考になったことを調査すると、過半数の人が「テレビ・ラジオ・新聞等のマスコミ報道」と回答している結果が得られた。しかしこれらの調査は、実際に経験した被害を明らかにせず、回答者の被害状況と備えに関連があるかどうかを調査できていない。そのうえで本研究は、被害状況を調査したうえでの備えの有無を尋ねることで、災害への備えを行う要因を調査していく。

2.2. 仮説

本研究では、2018年6月に発生した大阪府北部地震の被害が大きかったと感じた人ほど、

現在、地震に対して備えをしているという仮説を立てる。つまり、地震被害の大きさが大きかったという回答をした人ほど、各備えを行っているかを尋ねる選択肢に「当てはまる」と回答する割合が高くなるということである。この仮説は、先行研究であげた、神谷・中林・高野（1996）の結果から、関西で起きた阪神淡路大震災にもかかわらず、首都圏居住者の防災意識が向上していることから、より身近に地震を経験した高槻市民も先行研究同様、またはそれ以上に防災意識が向上すると考えたからである。また今回、この仮説を立てるとともに、高槻市での居住年数を考慮する必要があると考える。これは、昨年の地震被害を受けていない可能性がある人を考慮するためである。また、阪神淡路大震災が発生したときには、高槻市は震度 5 弱の揺れが襲った。この地震を経験した人は、そのときの被害と比べて、今回の大阪府北部地震を判断するのではないだろうかと考えた。

仮説 1 大阪府北部地震による被害が大きかったと感じる人ほど、災害の備えをしている。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q22：あなたのお住まいの地域では、2018 年 6 月に発生した大阪府北部地震による被害は大きかったですか。それとも小さかったですか。（地震被害の大きさ（反転））

- 1.大きかった 2.やや大きかった 3.やや小さかった 4.小さかった

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、被害が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q23：現在、あなたのお住まいで、災害の備えとして行っているものはありますか。以下のうち、あてはまるものすべてにマルをつけてください。（災害の備えダミー）

1. 風呂にいつも水を入れている 2.家具が倒れないように固定している
3. ブロック塀の点検や転倒防止を施している 4. 非常持出品を用意している
5. その他 6. 何もしていない

上記の選択肢に対して、当てはまるを 1、当てはまらないを 0 とする災害の備えダミーを作成した。

Q60：高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。（居住年数）

1.1 年未満 2.1 年以上 3 年未満 3.3 年以上 5 年未満 4.5 年以上 10 年未満
5.10 年以上 20 年未満 6.20 年以上 30 年未満 7.30 年以上 40 年未満
8.40 年以上 50 年未満 9.50 年以上

4. 分析

はじめに、大阪府北部地震の被害の大きさと現在の地震に対しての備えの単純な二変数間の関連について、備えごとにクロス集計表を用いて検討する。

表 1 から表 5 は、大阪府北部地震の被害の大きさと、現在の備えの二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「2018 年 6 月に発生した大阪府北部地震による被害は大きかったですか。それとも小さかったですか」との設問に「大きかった」と回答した人では、「風呂にいつも水を入れている」と回答した人が 31.4%、「家具が倒れないように固定している」と回答した人が 45.5%、「ブロック塀の点検や転倒防止を施している」と回答した人が 19.0%、「非常持出品を用意している」と回答した人が 45.5%、「何もしていない」と回答した人が 14.0%と、全体的に備えをしている人の割合が高くなっている。特に、ブロック塀の備えに関して、やや大きかったから小さかったと答えた人に比べ、10%以上の数値差が出ている。また、地震の被害の大きさについて「やや大きかった」と回答した人では、「風呂にいつも水を入れている」と回答した人が 26.9%、「家具が倒れないように固定している」と回答した人が 40.7%、「ブロック塀の点検や転倒防止を施している」と回答した人が 9.0%、「非常持出品を用意している」と回答した人が 49.7%、「何もしていない」と回答した人が 18.8%と、大きかったと回答した人に比べ、割合は低くなっている。しかし、非常持出品に関しては大きかったと回答した人よりも 4%高い割合となっている。一方、地震の被害の大きさについて「やや小さかった」、「小さかった」と、否定的な回答をした人では、それぞれの備えについて「風呂にいつも水を入れている」と回答した人が 19.0%、17.6%、「家具が倒れないように固定している」と回答した人が 40.6%、34.5%、「ブロック塀の点検や転倒防止を施している」と回答した人が 6.7%、5.5%、「非常持出品を用意している」と回答した人が 48.8%、43.4%、「何もしていない」と回答した人が 23.1%、26.2%と全体的に備えをしている人の割合が低い。しかし、非常持出品を用意している人の割合は、地震被害が大きかったと感じた人と比べてもあまり数値の差は見られない。

表 1 から表 5 のカイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は順に 16.190、5.266、22.000、3.160、9.981 であり、5%水準で表 1、表 3、表 5 は統計的に有意である。また、その 3 つの Cramer の連関係数は 0.119、0.138、0.093 と表 1 の風呂に水を入れているのと、表 3 のブロック塀の点検や転倒防止の 2 項目において一定の強さの関連が見られる。以上のことから、上記の大阪府北部地震の被害の大きさと現在の備えである、風呂に水を入れていることと、ブロック塀の点検や転倒防止の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

ただし、地震の被害の大きさや現在の備えは、高槻市にどのくらい在住しているかによって異なるだろうから、そのような他の変数の影響を考慮したうえで、地震の被害の大きさが現在の備えに与える影響を確認する必要がある。

表 1 大阪府北部地震の被害の大きさと風呂に水を入れているかのクロス表

		Q23_1風呂に水を入れている			
		当てはまらない	当てはまる	合計	
Q22大阪 北部地震 の被害の 大きさ	大きかった	N	83	38	121
		%	68.6%	31.4%	100.0%
	やや大きかった	N	291	107	398
		%	73.1%	26.9%	100.0%
	やや小さかった	N	277	65	342
		%	81.0%	19.0%	100.0%
	小さかった	N	239	51	290
		%	82.4%	17.6%	100.0%
合計	N	890	261	1151	
	%	77.3%	22.7%	100.0%	

χ^2 (df= 3, N= 1151)= 16.190**, Cram er V=.119**

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 2 大阪府北部地震の被害の大きさと家具の固定のクロス表

		Q23_ 2 家具の固定			
		当てはまらない	当てはまる	合計	
Q22大阪 北部地震 の被害の 大きさ	大きかった	N	66	55	121
		%	54.5%	45.5%	100.0%
	やや大きかった	N	236	162	398
		%	59.3%	40.7%	100.0%
	やや小さかった	N	203	139	342
		%	59.4%	40.6%	100.0%
	小さかった	N	190	100	290
		%	65.5%	34.5%	100.0%
	合計	N	695	456	1151
		%	60.4%	39.6%	100.0%

χ^2 (df= 3, N= 1151)= 5.266, Cram er V=.068

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 3 大阪府北部地震の被害の大きさとブロック塀の点検や転倒防止のクロス表

		Q23_ 3 ブロック塀の点検や転倒防止		
		当てはまらない	当てはまる	合計
Q22大阪 北部地震 の被害の 大きさ	大きかった	N	98	121
		%	81.0%	100.0%
	やや大きかった	N	362	398
		%	91.0%	100.0%
	やや小さかった	N	319	342
		%	93.3%	100.0%
	小さかった	N	274	290
		%	94.5%	100.0%
	合計	N	1053	1151
		%	91.5%	100.0%

χ^2 (df= 3, N= 1151)= 22.000***, Cram er V= .138***

***p< .001, **p< .01, *p< .05, † p< .10

表 4 大阪府北部地震の被害の大きさと非常持出品の用意のクロス表

		Q23_ 4 非常持出品の用意		
		当てはまらない	当てはまる	合計
Q22大阪 北部地震 の被害の 大きさ	大きかった	N	66	121
		%	54.5%	100.0%
	やや大きかった	N	200	398
		%	50.3%	100.0%
	やや小さかった	N	175	342
		%	51.2%	100.0%
	小さかった	N	164	290
		%	56.6%	100.0%
	合計	N	605	1151
		%	52.6%	100.0%

χ^2 (df= 3, N= 1151)= 3.160, Cram er V= .052

***p< .001, **p< .01, *p< .05, † p< .10

表 5 大阪府北部地震の被害の大きさと何もしていないクロス表

		Q23_6 何もしていない		合計
		当てはまらない	当てはまる	
Q22大阪 北部地震 の被害の 大きさ	大きかった	N	104	17
		%	86.0%	14.0%
	やや大きかった	N	323	75
		%	81.2%	18.8%
	やや小さかった	N	263	79
		%	76.9%	23.1%
	小さかった	N	214	76
		%	73.8%	26.2%
	合計	N	904	247
		%	78.5%	21.5%

χ^2 (df= 13, N= 1151)=9.981*, Cramer V=.093*

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 6 から表 10 は、現在の備えを従属変数、地震の被害の大きさ（反転）、市内居住年数、男性ダミー、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。表 6 の回帰式の調整済み R2 値は 0.064 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 6.4%が説明されている。同様に表 7 から表 10 の回帰式の調整済み R2 値は 0.002、0.032、0.012、0.016 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 0.2%、3.2%、1.2%、1.6%が説明されている。

表 6 の標準化係数（ β ）の値は、地震被害の大きさ評価（ $\beta=0.091$ ）、居住年数（ $\beta=0.108$ ）、年齢（ $\beta=0.128$ ）が正、男性ダミー（ $\beta=-0.125$ ）が負で、どの変数の係数も 5%水準で統計的に有意であった。つまり、地震被害を大きかったと感じ、市内居住年数が長い、高齢の女性ほど、災害の備えとして風呂に水を入れていることがわかる。また、表 7 の標準化係数（ β ）の値は、地震被害の大きさ評価（ $\beta=0.061$ ）、年齢（ $\beta=0.041$ ）、男性ダミー（ $\beta=0.013$ ）が正、居住年数（ $\beta=-0.008$ ）が負で、地震被害の大きさ評価の係数が 5%水準で統計的に有意であった。表 8 の標準化係数（ β ）の値は、地震被害の大きさ評価（ $\beta=0.104$ ）、居住年数（ $\beta=0.120$ ）、年齢（ $\beta=0.040$ ）、男性ダミー（ $\beta=0.016$ ）が正で、地震被害の大きさ評価と、市内居住年数の係数が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、地震被害を大きかったと感じ、高槻市に長く居住している人ほど、ブロック塀の点検や転倒防止を行っていることがわかる。表 9 の標準化係数（ β ）の値は、地震被害の大きさ評価（ $\beta=0.028$ ）が正、居住年数（ $\beta=-0.019$ ）、年齢（ $\beta=-0.058$ ）、男性ダミー（ $\beta=-0.096$ ）が負で、男性ダミーの係数が 5%水準で統計的に有意性が見られた。表 10 の標準化係数（ β ）の値は、男性ダミー（ $\beta=0.108$ ）が正で、地震被害の大きさ評価（ $\beta=-0.081$ ）、居住年数（ $\beta=-0.005$ ）、年齢（ $\beta=-0.031$ ）が負で、地震被害の大きさ評価、男性ダミーの係数が 5%となり、統計的に有意であった。

表 6 風呂に水を入れているかの重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	-0.140	0.055		*
Q22大阪府北部地震の被害の大きさ	0.040	0.013	0.091	**
Q55男性ダミー	-0.106	0.025	-0.125	***
Q56年齢	0.032	0.009	0.128	***
Q60市内居住年数	0.024	0.008	0.108	**
調整済みR ²	0.064			
N	1111			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 7 家具の固定の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	0.277	0.066		***
Q22大阪府北部地震の被害の大きさ	0.031	0.015	0.061	*
Q55男性ダミー	0.013	0.030	0.013	
Q56年齢	0.012	0.010	0.041	
Q60市内居住年数	-0.002	0.009	-0.008	
調整済みR ²	0.002			
N	1111			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 8 ブロック塀の点検や転倒防止の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	-0.138	0.037		***
Q22大阪府北部地震の被害の大きさ	0.030	0.009	0.104	***
Q55男性ダミー	0.009	0.017	0.016	
Q56年齢	0.007	0.006	0.040	
Q60市内居住年数	0.018	0.005	0.120	**
調整済みR ²	0.032			
N	1111			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 9 非常持出品の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	0.603	0.067		***
Q22大阪府北部地震の被害の大きさ	0.015	0.016	0.028	
Q55男性ダミー	-0.097	0.030	-0.096	**
Q56年齢	-0.017	0.010	-0.058	†
Q60市内居住年数	-0.005	0.009	-0.019	
調整済みR ²	0.012			
N	1111			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 10 何もしていないの重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	0.293	0.054		***
Q22大阪府北部地震の被害の大きさ	-0.034	0.013	-0.081	**
Q55男性ダミー	0.089	0.024	0.108	***
Q56年齢	-0.007	0.008	-0.031	
Q60市内居住年数	-0.001	0.008	-0.005	
調整済みR ²	0.016			
N	1111			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究は、災害被害の減少・防止の一助とするために、2018年6月に発生した大阪府北部地震の被害の大きさをもとに、高槻市民の現在の災害の備えの状況を明らかにすることを試みた。分析の結果、地震の被害が大きかったと感じた人ほど現在、地震に対する備えをしていることがわかった。この結果は、仮説の予想通りであった。また、ブロック塀の点検や転倒防止に対する備えは特に、地震被害の程度によって結果に差が見られた。これは、大阪府北部地震が発生した際に、高槻市でブロック塀転倒の事故が起き、小学生の女の子が被害にあったことと関係していると考えられる。この結果から、地震を身近に感じるほど、不安を覚え、備えをするようになると考えられる。この理由として、先行研究であげたようにブロック塀の事故に関して多く報道されていたことが関係していると考えられる。この分析結果から、災害の備えをしてもらうためには、災害の備えや災害防止に役立った事例などについて報道することが大切であるといえる。また、今回の分析で高槻市の居住年数を重回帰分

析に用いたが、居住年数の長さは、大阪府北部地震の被害の大きさと現在行っている備えに影響を及ぼさなかった。今回の研究では、備えをしているかどうかだけを調査し、備えをしていない人に対して、なぜ備えをしていないのかを調査していないので今後調査をする必要がある。

6. 文献

- [1]…神谷秀美・中村一樹・高野公男（1996）「阪神淡路大震災の前後における首都圏居住者の地震防災意識と対策の変化」『地域安全学会論文報告書』 6: pp.129-136.
- [2]…松本美紀・矢田部龍一（2008）「実被害者地域住民における地域防災活動継続意図の規定因」『自然災害科学』 27(3): pp.319-330.
- [3]…内閣府(1999)『防災と情報に関する世論調査』 <https://survey.gov-online.go.jp/h11/bousai/H11-06-11-01.html#2>（2019 年 12 月 31 日閲覧）.

第7章 結婚観と未婚率の関連

関根 夏月

1. はじめに

本章では、一般市民の結婚観が未婚率に与える影響について分析を行う。近年、日本では少子高齢化による人口減少が問題となっている。日本の将来推計人口によると、2015年の日本の総人口が1億2709万人であったのに対し、2040年には1億1092万人、2053年には9924万人、2065年には8808万人になると推計している（国立社会保障・人口問題研究所2017）。医療の発達による死亡率の減少を上回る出生率の減少が大きな要因である。

また、少子化社会対策白書によると、1974年に15.0を超えていた婚姻率（人口千人当たりの婚姻件数）が、2017年には10.0を下回っている（内閣府2019）。人口減少と未婚率の増大により出生数が減少し、より深刻な少子高齢化が進行することが考えられる。

本研究では、一般市民の結婚観を調査することで、未婚率の増大を促す要因について分析することとしたい。

2. 仮説

2.1. 先行研究

先行研究では、女性の社会進出、未婚率の上昇、そのような社会変化に対する子育て支援策などの観点から、出生率の低下の要因が議論されている。たとえば、津田（1999）は、第10回出生動向基本調査（国立社会保障・人口問題研究所1992）を解析した結果、母親の社会進出に伴う就業率の増加と子育て支援政策の不足が出生率に影響する可能性を示した。一方、阿藤（1997）は、出生率の低下の要因が20代から30代の有配偶率の低下、すなわち未婚率の上昇に由来するものであるという。また、中谷（2018）は、大阪府および福井県を対象にインターネットによるアンケート調査を実施した結果、学歴と就労状況が結婚意欲に影響を及ぼすことを明らかにした。本調査では、一般市民の結婚観を新たに調査することで、婚姻率を上昇させようとする要因が何であるかを分析したい。

2.2. 仮説

第15回出生動向基本調査（国立社会保障・人口問題研究所2017）によると、18歳から34歳の未婚者を対象とした調査において、結婚の利点として「社会的信用や対等な関係が得られる」と回答している割合が第9回出生動向基本調査（国立社会保障・人口問題研究所1987）から減少傾向にある。そのため、上記の調査対象外の年齢まで分析を拡大したときに、年齢が低くなるほど、結婚すると社会的信用が高まると考える人の割合が減少する、という予想が成り立つものと考えられる。また、第15回出生動向基本調査（国立社会保障・

人口問題研究所 2017) によると、18 歳から 34 歳の未婚者を対象とした調査において、独身生活の利点として「金銭的に裕福」と回答している割合が第 9 回出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所 1987) から増加傾向にある。そのため、上記の調査対象外の年齢まで分析を拡大したときに、年齢が低くなるほど、独身であるほうが結婚するよりも金銭的に裕福でいられると思う人の割合が増加する、という予想が成り立つものと考えられる。

仮説 1 年齢が低い人ほど、結婚すると社会的信用が高まると考えにくい。

仮説 2 年齢が低い人ほど、独身の方が金銭的に裕福でいられると考えやすい。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q45：あなたは、「独身の人が結婚すると、社会的信用が高まる」と思いますか。(社会的信用が高まると思う(反転))

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、賛成の回答になるように、尺度の反転を行った。

Q46：あなたは、「結婚した人よりも独身の人の方が、金銭的に裕福でいられる」と思いますか。(裕福でいられると思う(反転))

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、賛成の回答になるように、尺度の反転を行った。

Q55：あなたの性別はどちらですか。(男性ダミー)

1.男性 2.女性

上記の選択肢に対して、男性を 1、女性を 0 とする男性ダミーを作成した。

Q56：あなたの年齢をお答えください。(年齢)

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

Q58：あなたの最終学歴を教えてください。（在学中の方は、いま通っている学校を選んでください）（最終学歴）

1. 中学校（旧制小学校など） 2. 高校（または旧制中学など） 3. 専門学校 4. 短大・高専（5年制） 5. 大学（旧高専）・大学院 6. わからない
6. わからないは欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに、年齢と結婚すると社会的信用が高まると思うかどうかの単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 Q56 年齢と Q45 結婚すると社会的信用が高まるかのクロス表

		Q45結婚すると社会的信用が高まるか					
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思 わない	そう思わない	合計	
Q56年齢	18歳、19歳	N	0	6	5	3	14
		%	0%	43%	36%	21%	100%
	20代	N	14	17	29	20	80
		%	18%	21%	36%	25%	100%
	30代	N	17	52	43	18	130
		%	13%	40%	33%	14%	100%
	40代	N	16	60	70	34	180
		%	9%	33%	39%	19%	100%
	50代	N	30	68	72	15	185
		%	16%	37%	39%	8%	100%
	60代	N	21	75	85	22	203
		%	10%	37%	42%	11%	100%
	70代以上	N	68	141	100	32	341
		%	20%	41%	29%	9%	100%
合計	N	166	419	404	144	1133	
	%	15%	37%	36%	13%	100%	

$\chi^2(df=18, N=1133)=54.256^{***}$, Cramer V=.126^{***}

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表 1 は、年齢と、結婚すると社会的信用が高まるかの二変数についてクロス集計表を作成したものである。「あなたは、「独身の人が結婚すると、社会的信用が高まる」と思いますか」との設問に対し、若い世代である「18 歳、19 歳」は「そう思わない」と回答した割合が「そう思う」と回答した割合より大きく、反対に「70 代以上」では「そう思う」と回答した割合が「そう思わない」と回答した割合より小さい。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 54.256 であり、5%水準で統計的に

有意である。また、Cramer の連関係数は 0.126 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、上記の年齢と結婚すると社会的信用が高まると思うかどうかの二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 2 Q45 結婚すると社会的信用が高まると思うか（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.123	0.133	***
Q55男性ダミー	0.086	0.054	0.048
Q56年齢	0.072	0.017	0.135 ***
Q58最終学歴	0.007	0.020	0.011
調整済みR ²	0.017		
N	1103		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表 2 は、結婚すると社会的信用が高まると思う（反転）を従属変数、年齢、男性ダミー、学歴を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.017 であり、投入した独立変数によって従属変数である社会的信用が高まると思うかどうかの分散の 1.7%が説明されている。

標準化係数 (β) の値は、男性ダミー ($\beta=0.048$)、年齢 ($\beta=0.135$)、学歴 ($\beta=0.011$) が正で、年齢の係数が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、年齢が低い人ほど、統計的に有意に結婚すると社会的信用が高まると考えていないことが分かる。他方で、性別、学歴は他の変数を考慮すると、統計的に有意な影響が認められない。標準化係数の絶対値を比較すると、年齢が結婚すると社会的信用が高まると思うかどうかに最も強い影響を及ぼしており、すなわち、結婚すると社会的信用が高まると思うかどうかは世代による違いが主要な要因の一つになっていることがうかがわれる。上記の結果は、「年齢が低い人ほど、結婚すると社会的信用が高まると思えにくい」という仮説 1 を支持する結果である。

同様に、年齢と独身の方が金銭的に裕福でいられると思うかどうかの単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、年齢と、独身の方が金銭的に裕福でいられるかの二変数についてクロス集計表を作成したものである。「あなたは、「結婚した人よりも独身のの方が、金銭的に裕福でいられる」と思いますか」との設問に対し、若い世代である「18 歳、19 歳」「20 代」は「そう思う」と回答した割合が「そう思わない」と回答した割合より大きく、反対に「60 代」「70 代以上」では「そう思う」と回答した割合が「そう思わない」と回答した割合より小さい。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 94.077 であり、5%水準で統計的に

有意である。また、Cramer の連関係数は 0.166 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、上記の年齢と独身の方が金銭的に裕福でいられると思うかどうかの二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 3 Q56 年齢と Q46 独身の方が金銭的に裕福でいられるかのクロス表

		Q46独身の方が金銭的に裕福でいられるか				合計
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思 わない	そう思わない	
Q56年齢	18歳、19歳	N 3	6	5	0	14
		% 21%	43%	36%	0%	100%
	20代	N 28	22	18	11	79
		% 35%	28%	23%	14%	100%
	30代	N 35	49	39	7	130
		% 27%	38%	30%	5%	100%
	40代	N 44	53	55	28	180
		% 24%	29%	31%	16%	100%
	50代	N 25	80	59	20	184
		% 14%	44%	32%	11%	100%
	60代	N 15	68	91	30	204
		% 7%	33%	45%	15%	100%
	70代以上	N 39	90	160	52	341
		% 11%	26%	47%	15%	100%
合計		N 189	368	427	148	1132
		% 17%	33%	38%	13%	100%

$\chi^2(df=18, N=1132)=94.077^{***}$, Cramer V=.166***

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表 4 は、独身の方が金銭的に裕福でいられるか（反転）を従属変数、年齢、男性ダミー、学歴を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.046 であり、投入した独立変数によって従属変数である金銭的に裕福でいられるかどうかの分散の 4.6%が説明されている。

標準化係数（ β ）の値は、学歴（ $\beta=0.046$ ）が正、年齢（ $\beta=-0.222$ ）、男性ダミー（ $\beta=-0.012$ ）が負で、年齢の係数が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、年齢が低い人ほど、統計的に有意に独身の方が金銭的に裕福でいられると考えていることが分かる。他方で、性別、学歴は他の変数を考慮すると、統計的に有意な影響が認められない。標準化係数の絶対値を比較すると、年齢が独身の方が金銭的に裕福でいられると考えるかどうかに最も強い影響を及ぼしており、すなわち、独身の方が金銭的に裕福でいられると考えるかどうかは世代による違いが主要な要因の一つになっていることがうかがわれる。上記の結果は、仮説 2 を支持する結果である。

表 4 Q46 独身の方が金銭的に裕福でいられるか（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	3.137	0.134		***
Q55男性ダミー	0.085	0.055	0.046	
Q56年齢	-0.121	0.017	-0.222	***
Q58最終学歴	-0.008	0.021	-0.012	
調整済みR ²	0.046			
N	1102			

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

5. 考察

本調査では高槻市市民の結婚観と未婚率の関係性を調査するために分析を行った。年齢が低い人ほど、「独身の人が結婚すると、社会的信用が高まる」と思わないという仮説 1、及び、年齢が低い人ほど、「結婚した人よりも独身の人のほうが、金銭的に裕福でいられる」という仮説 2 を立て、年齢、性別、学歴などの質問項目を使い分析を行った。

分析の結果から、年齢が低い人ほど、結婚すると社会的信用が高まるとは考えておらず、また、独身でいるほうが金銭的に裕福でいられると考えていることが示された。重回帰分析の結果からも、年齢が強い影響を持っていることがわかった。

現在、少子化問題に対して、各地方自治体では積極的に少子化対策の取り組みが進められているにもかかわらず、若い世代になるほど婚姻率が低い。本調査では、若い世代ほど結婚に対して社会的信用の面でメリットを感じておらず、経済的なデメリットを強く感じていることが明らかになった。この結果から、一般市民への子育て支援政策の充実・工夫などといった経済的な面での対応によって結婚への敷居を下げ、そのうえで結婚の良い点を周知する政策が必要であると言える。

6. 文献

- [1]…津谷典子（1999）「出生率低下と子育て支援政策」『季刊社会保障研究』34(4): pp.348-360.
- [2]…阿藤誠（1997）「「少子化」に関するわが国の研究動向と政策的研究課題」『人口問題研究』53(4): pp.1-14.
- [3]…中谷奈津子（2018）「未婚男女における結婚意欲の関連要因」『日本家政学会誌』69(2): pp.105-114.
- [4]…国立社会保障・人口問題研究所（2017）『第 15 回出生動向基本調査報告書』
http://www.ipss.go.jp/site-ad/index_Japanese/shussho-index.html (2019 年 8 月 25 日閲覧) .

第8章 娯楽を行う頻度と精神的ストレスの関係性

藤川 皓一郎

1. はじめに

精神的ストレスを低減させることは重要である。堀井（2016）では、過剰なあるいは慢性的なストレスへの対応障害として不安障害や抑うつなどの精神疾患が引き起こされることが主張されているなど、精神的ストレスを低減することは、健康管理において大きな課題となりうる。この点、畑中・宮腰（2003）は、カラオケを用いることにより、不安を和ませることがストレス緩和に繋がっている可能性を示唆している。よって、こうした娯楽がどのように精神的ストレスを低減させるかを検討することは重要となる。そこで本調査では娯楽を行う頻度が精神的ストレスに与える影響を明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

畑中・宮腰（2003）は、カラオケ中または前後で心理学的指標、生化学的指標、生理学的指標の三点に有意な差がみられたことから、カラオケを用いることにより、不安を和らさせる結果、ストレス緩和に繋がっている可能性を示唆した。嵐田他（2007）は、園芸作業の前後で生理的指標である唾液中コルチゾールの濃度が低下したことから、園芸作業がストレスの緩和に繋がっていることを明らかにした。甲斐他（2009）は、余暇における身体活動の実施は、職業性ストレス下にある勤労者のうつ対策において意義がある可能性を示唆した。これらのストレス緩和の要因は、全て娯楽に関係しているものである。しかし、娯楽そのものではなく他の要因が関係することも考えられる。

そこで、本論文では娯楽を行う頻度が精神的ストレスに与える影響を明らかにすることとする。

2.2. 仮説

娯楽を行う頻度が多い人ほど、自分の好きなことのために時間を費やす機会が増えることになるので、精神的ストレスは低くなると推測される。また、自分の行う娯楽の数が多いほど精神的ストレスは低くなると考えられる。さらに、自分の持つ余暇時間に満足している人ほど、娯楽を行う頻度が増え、それに伴い精神的ストレスが低くなると考えられる。

仮説1 娯楽を行う頻度が多い人ほど、精神的ストレスが低い。

仮説2 自分の持つ余暇時間に満足している人ほど、精神的ストレスが低い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q3：現在の生活のうち、余暇の面ではどのくらい満足していますか。（余暇満足度（反転））

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q24：あなたは、ご自身の健康や体力に関する以下の問題について、それぞれどのくらい感じますか。

B：精神的なストレス。（精神的なストレス（反転））

1.感じる 2.やや感じる 3.どちらともいえない 4.やや感じない 5.感じない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、精神的なストレスが大きくなるように、尺度の反転を行った。

Q51：あなたは、以下の娯楽をどのくらい行いますか。（娯楽をする頻度（反転））

A. 映画鑑賞（ビデオ・DVD・オンラインなどを含む）

1.よくする 2.ときどきする 3.ほとんどしない 4.まったくしない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、娯楽を行う頻度が多くなるように、尺度の反転を行った。

B. 読書（漫画・雑誌を除く）

1.よくする 2.ときどきする 3.ほとんどしない 4.まったくしない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、娯楽を行う頻度が多くなるように、尺度の反転を行った。

4. 分析

まず、クロス表を用いて精神的ストレスと娯楽を行う頻度の関連性を検討する。精神的ストレス（反転）と娯楽を行う頻度：映画鑑賞（反転）の変数を用いてクロス表を作成した（表 1）。精神的ストレス（反転）と娯楽を行う頻度：読書（反転）の変数を用いてクロス表を作

成した（表2）。

表1 精神的ストレス（反転）と娯楽を行う頻度：映画鑑賞（反転）のクロス集計表

		Q24_Bどのくらい感じるか：精神的ストレス					合計
		よく感じる	やや感じる	どちらとも いえない	あまり感じない	まったく感じない	
Q51_A娯 楽をどの くらい行 うか：映 画鑑賞	よくする	N 39	100	51	35	8	233
		% 17%	43%	22%	15%	3%	100%
	ときどきする	N 83	238	98	87	5	511
		% 16%	47%	19%	17%	1%	100%
	ほとんどしない	N 45	115	49	53	4	266
		% 17%	43%	18%	20%	2%	100%
	まったくしない	N 27	61	21	26	4	139
		% 19%	44%	15%	19%	3%	100%
合計		N 194	514	219	201	21	1149
		% 17%	45%	19%	17%	2%	100%

χ^2 (df=12, N=1149)=11.740, Cramer V=.058

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表2 精神的ストレス（反転）と娯楽を行う頻度：読書（反転）のクロス集計表

		Q24_Bどのくらい感じるか：精神的ストレス					合計
		よく感じる	やや感じる	どちらとも いえない	あまり感じない	まったく感じない	
Q51_B娯 楽をどの くらい行 うか：読 書	よくする	N 43	97	44	52	3	239
		% 18%	41%	18%	22%	1%	100%
	ときどきする	N 62	211	84	73	8	438
		% 14%	48%	19%	17%	2%	100%
	ほとんどしない	N 61	146	62	54	4	327
		% 19%	45%	19%	17%	1%	100%
	まったくしない	N 28	58	28	22	5	141
		% 20%	41%	20%	16%	4%	100%
合計		N 194	512	218	201	20	1145
		% 17%	45%	19%	17%	2%	100%

χ^2 (df=12, N=1145)=12.611, Cramer V=.061

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表1は、精神的ストレスを感じる度合いと映画鑑賞という娯楽をどのくらい行うかの単純な二変数間の関連についてクロス集計表を作成したものである。まず、娯楽を行う頻度：映画鑑賞を「よくする」と回答した人では、「精神的ストレス」の設問を「よく感じる」と回答した人が18%、「やや感じる」と回答した人が41%、「どちらともいえない」と回答した人が18%、「あまり感じない」と回答した人が22%、「全く感じない」と回答した人が1%であった。また、娯楽を行う頻度：映画鑑賞を「ときどきする」、「ほとんどしない」、「まったくしない」とそれぞれの項目に回答した人の「精神的ストレス」の回答の値には大きな差がなかった。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 11.740 であり、5%水準で統計的に有意ではない。また、Cramer の連関係数は 0.058 と関連は強くないことが認められる。

表 2 は、精神的ストレスを感じる度合いと読書という娯楽をどのくらい行うかの単純な二変数間の関連についてクロス集計表を作成したものである。表 1 と同じく娯楽をする頻度：読書の回答結果によって「精神的ストレス」の回答結果に大きな関連はみられなかった。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 12.611 であり、5%水準で統計的に有意ではない。また、Cramer の連関係数は 0.061 と関連は強くないことが認められる。

ただし、表 1、表 2 ともに関連はみられなかったが娯楽を行う頻度は、自分の持つ余暇時間によって変化すると考えられるから、そのような他の変数の影響を考慮した上で、娯楽を行う頻度が精神的ストレスに与える影響を確認する必要がある。

表 3 精神的ストレス（反転）の重回帰分析（映画鑑賞の影響）

	B	SE	β	
(定数)	4.554	0.120		***
Q51_A娯楽をどのくらい行うか：映画鑑賞	0.033	0.031	0.029	
Q3余暇面での満足度	-0.325	0.027	-0.341	***
調整済みR ²	0.114			
N	1146			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 4 精神的ストレス（反転）の重回帰分析（読書の影響）

	B	SE	β	
(定数)	4.669	0.120		***
Q51_B娯楽をどのくらい行うか：読書	-0.015	0.030	-0.014	
Q3余暇面での満足度	-0.320	0.027	-0.337	***
調整済みR ²	0.113			
N	1142			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 3 は、精神的ストレスを感じる度合い（反転）を従属変数、映画鑑賞という娯楽を行う頻度（反転）、余暇面での満足度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.114 であり、投入した独立変数によって従属変数である精神的ストレスを感じる度合いの分散の 11.4%が説明されている。

標準化係数（ β ）の値は、映画鑑賞という娯楽を行う頻度（ $\beta=0.029$ ）が正、余暇面での

満足度 ($\beta = -0.341$) が負であり、余暇面での満足度の係数が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、余暇面での満足度が高い人ほど、統計的に有意に精神的ストレスを感じる度合いが低くなることがわかる。他方で、娯楽を行う頻度は統計的に有意な影響が認められなかった。

表 4 は、精神的ストレスを感じる度合い（反転）を従属変数、読書という娯楽を行う頻度（反転）、余暇面での満足度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.113 であり、投入した独立変数によって従属変数である精神的ストレスを感じる度合いの分散の 11.3%が説明されている。

標準化係数 (β) の値は、読書という娯楽を行う頻度 ($\beta = -0.014$)、余暇面での満足度 ($\beta = -0.337$) が負で、余暇面での満足度の係数が 5%水準で統計的に有意であった。

つまり、余暇面での満足度が高い人ほど、統計的に有意に精神的ストレスを感じる度合いが低くなることがわかる。他方で、娯楽を行う頻度は統計的に有意な影響が認められなかった。

結果として、娯楽の頻度や種類でなく余暇面での満足度が精神的ストレスに強い影響を及ぼしていた。

5. 考察

本研究では高槻市市民の娯楽を行う頻度と精神的ストレスの関係性を調査するために分析を行った。娯楽を行う頻度が多いほど、精神的ストレスを感じる度合いが低くなるという仮説を立て、それぞれの娯楽を行う頻度や精神的ストレスをどのくらい感じるかなどの質問項目を使い分析を行った。

分析の結果から、娯楽を行う頻度と精神的ストレスを感じる度合いには関係性がなく、仮説 1 と異なる結果となった。

また、表 3、表 4 の重回帰分析の結果から、余暇面での満足度が高い人ほど精神的ストレスを感じる度合いが低いといえるため、「自分の持つ余暇時間に満足している人ほど、精神的ストレスが低い」という仮説 2 は支持された。

調査の結果、仮説 1 は異なる結果となり、仮説 2 は推測通りの結果となった。仮説 1 が異なる結果となった理由として、今回の調査で取り扱った二つの娯楽そのものが精神的ストレスに与える影響がない、個人が感じる精神的ストレスに個人差がある場合が考えられる。今後の調査では、精神的ストレスに影響を与えるものを調べたうえで、同じ職業や環境にいる人を対象者として調査する必要があると考える。

6. 文献

- [1]…堀井新 (2016) 「1. めまいとストレス」『Equilibrium Res』 75: pp.33-40.
- [2]…畑中裕子・宮腰由紀子 (2003) 「カラオケとストレス反応」『Shidax Research』 3: pp.14-110.

- [3]…甲斐裕子・永松俊哉・志和忠志・杉本正子・小松優紀・須山靖男（2009）「職業性ストレスに着目した余暇身体活動と抑うつに関連性についての検討」『体力研究（Bulletin of the Physical Fitness Research Institute）』 107: pp.1-10.
- [4]…嵐田絵美・塚越寛・野田勝二・喜多敏明・大釜敏正・小宮山政敏・池上文雄（2007）「心理的ならびに生理的指標による主としてハーブを用いた園芸作業の療法的効果の検証」『園学研. (Hort. Res. (Japan)) 』 6(3): pp.491-496.

第9章 キャッシュレス決済の利用率

世古 麻鈴

1. はじめに

本章では、日常的な買い物でどのくらいキャッシュレス決済を利用しているのかを調査し、人々のキャッシュレス決済に対する関心を明らかにする。また、日本で、現金支払いが多いことについては、人々のキャッシュレスへの不信感を調査することで明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

経済産業省（2018）調査では、消費者のキャッシュレス決済に対する不安感として、システムダウンや個人情報の流出などセキュリティ面の不安が多く指摘されていた。中田（2018）は、日本では治安や地理的条件に恵まれてはいるが、キャッシュレス決済の安全性を高める制度や、利便性を高めるテクノロジーの導入が諸外国に比べ劣っていることを指摘している。渡邊他（2019）は日本が諸外国と比べ、キャッシュレス決済比率が低く、その理由として、現金に対する信頼性がキャッシュレス決済よりも圧倒的に高いことによるものではないかと推測されている。

本研究では、先行研究で言及されていた、キャッシュレス決済の不信感がどの程度消費者に影響を与えているのかを明らかにする。

2.2. 仮説

2018年大手マーケティングリサーチ会社マクロミルが実施したアンケート調査（マクロミル2018）によると、キャッシュレス決済の利用者は88%（現金との併用は84.4%）と高い数値を出している。ただし普段の支払い方法についての支払い方法（複数回答可）については「現金」が96%と最多であった。そして、現金を利用する人はキャッシュレス化への不安点として“お金を使いすぎてしまいそう”、“個人情報の流失が怖い”といった漠然とした不安やセキュリティ面での不安があげられていた。このことから、以下の仮説を立てた。

仮説1 キャッシュレス決済への不信感が高い人ほど、キャッシュレス決済の利用頻度が低い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は

高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q49：あなたは、「キャッシュレス決済（クレジットカード・電子マネーなど）はセキュリティが不安だ」と思いますか（キャッシュレス決済への不信感（反転））。

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、不信感が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q50：あなたは、日常的な買い物でキャッシュレス決済（クレジットカード・電子マネーなど）を利用していますか（キャッシュレス決済の利用頻度（反転））。

1.よく利用する 2.ときどき利用する 3.ほとんど利用しない 4.まったく利用しない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、利用率が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q55：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性 2.女性

上記の選択肢に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q56：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

4. 分析

はじめに、キャッシュレス決済への不信感と、利用頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、キャッシュレス決済への不信感と、利用頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「あなたは、キャッシュレス決済（クレジットカード・電子マネーなど）はセキュリティが不安だと思いませんか」との設問に「そう思う」と回答した人では、利用頻度について「まったく利用しない」と回答した人が 35.3%、「ほとんど利用しない」と回答した人が 16.1%と、否定的な評価が過半数を占めている。また、不信感について「ややそう思う」と回答した人では、利用頻度について「まったく利用しない」が 17.6%、「ほとんど利用する」が 16.5%と、「よく利用する」とする回答は大きく減少するが、それでも否定的意見は多い。一方、不信感について「あまりそう思わない」、「そう思わない」と、

否定的な回答をした人では、利用頻度について、「まったく利用しない」と回答した人が、それぞれ 7.9%、20.9%、「ほとんど利用しない」と回答した人が 10.0%、2.0%と、否定的な意見が減少している。すなわち、キャッシュレス決済への不信感が高い人ほど、利用頻度が低いことがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 128.507 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.193 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、上記のキャッシュレス決済への不信感と利用頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

ただし、不信感や利用頻度は、年齢・性別など、回答者の社会的属性によって異なるだろうから、そのような他の変数の影響を考慮した上で、不信感が利用頻度に与える影響を確認する必要がある。

表 1 Q49 キャッシュレス決済への不信感と Q50 キャッシュレス決済の利用頻度のクロス集計表

			Q50キャッシュレス決済を利用しているか				
			よく 利用する	ときどき 利用する	ほとんど 利用しない	まったく 利用しない	合計
Q 49 キャッシュレ ス決済は セキュリティ が不安か	そう思う	N	69	164	77	169	479
		%	14.4%	34.2%	16.1%	35.3%	100.0%
	ややそう思う	N	140	179	80	85	484
		%	28.9%	37.0%	16.5%	17.6%	100.0%
	あまり そう思わない	N	70	45	14	11	140
		%	50.0%	32.1%	10.0%	7.9%	100.0%
	そう思わない	N	25	13	1	10	49
		%	51.0%	26.5%	2.0%	20.4%	100.0%
合計		N	304	401	172	275	1152
		%	26.4%	34.8%	14.9%	23.9%	100.0%

$\chi^2 (df=9, N=1152) = 128.507^{***}, Cramer V = .193^{***}$

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表 2 は、キャッシュレス決済の利用頻度（反転）を従属変数、キャッシュレス決済への不信感（反転）、女性ダミー、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.134 であり、投入した独立変数によって従属変数である不信感の分散の 13.4%が説明されている。

標準化係数（ β ）の値は、不信感（ $\beta = -0.248$ ）、年齢（ $\beta = -0.218$ ）が負、性別（ $\beta = 0.061$ ）が正、不信感、年齢の係数が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、キャッシュレス決

済への不信感が低い、年齢が低い人ほど統計的に有意に利用頻度が高いことがわかる。他方で、性別は、他の変数を考慮すると、統計的に有意な影響が認められない。標準化係数の絶対値を比較すると、不信感が利用頻度に最も強い影響を及ぼしており、年齢・性別などの社会的属性と比べても、キャッシュレス決済の利用頻度に対する規定要因になっていると言える。上記の結果は、仮説 1 を支持する結果である。

表 2 Q50 キャッシュレス決済の利用頻度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.169	0.135		***
Q49キャッシュレス決済 への不信感（反転）	-0.338	0.039	-0.248	***
Q55女性ダミー	0.138	0.063	0.061	
Q56年齢	-0.144	0.019	-0.218	***
調整済みR2	0.134			
N	1152			

5. 考察

本研究では、キャッシュレス決済への不信感と利用頻度の関係性を調査するために分析を行った。その結果「キャッシュレス決済への不信感が高い人ほど、キャッシュレス決済の利用頻度が低い」という仮説は支持された。重回帰分析の結果よりキャッシュレス決済への不信感が増加すると利用度が減少することが確認された。今後は、年代別にキャッシュレス決済への不信感がどの程度、利用頻度に影響を及ぼしているのか明らかにしたい。

6. 文献

- [1]…経済産業省 商務・サービスグループ 消費・生活グループ課（2018）「キャッシュレスビジョン」 3: pp.22-52.
- [2]…中田真佐男（2018）「我が国における非現金リテール決済手段 の浸透に向けた課題」 5: pp.83-87.
- [3]…渡邊大河・森本千佳子（2019）「消費のサービス化とクレジットカードの普及」『経営情報学会 2019 年秋季全国研究発表大会』 1: pp.1-12.
- [4]…渡邊翔太（2018）『キャッシュレス決済のアンケート調査結果』<https://www.nira.or.jp/pdf/cashless.pdf>（2020 年 1 月 4 日閲覧）.
- [5]…マクロミル（2018）『キャッシュレス決済に関する調査結果』<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000467.000000624.html>（2020 年 1 月 4 日閲覧）.

第 10 章 高齢者雇用に関する意識

三浦 千聖

1. はじめに

本章では、働き方改革による高齢者雇用についての意識について分析を行う。近年、高齢者人口は増えており、内閣府の「平成 30 年版高齢社会白書」によると、総人口に占める高齢者人口の割合は 27.7% となり、90 歳以上は 200 万人を超える過去最高を記録している。一方、高齢者人口の増加と並行して、日本全体の人口減少、労働力人口の不足が問題となっており、外国人労働者を受け入れるための制度や、そもそも外国人労働者を受け入れるのかどうかということが問題として取り上げられている。労働力人口の不足は、日本の経済基盤を危うくし、労働時間の超過、サービス残業、休日出勤といった現状の労働環境をさらに悪化させかねない。本章では、少子高齢化と労働力人口の減少という事象の関連性に着目し、高齢者雇用に対する意識はどういったものか、高槻市民郵送調査を用い明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

福島（2007）では、高齢者の就労に対する意識について「早期引退、ハッピーリタイアメント」志向が強い欧米と比較すると、高齢になっても働き続けることへの抵抗感が少なく、個人の就業意欲は高いといわれている。就業意欲を測る数値としての労働力率では、2004 年の 60～64 歳男性層で、日本 70.7%、アメリカ 57.0%、ドイツ 37.7%、フランス 19.0% と諸外国と比べてもかなり高い水準にある。このように先行研究では高齢者の就労意欲がとも高いことが明らかになっている。

また、中田（2008）では、調査時における高い健康が、長く就労を続けることに影響を持っており、また、就労し続けることは、急激な主観的健康の悪化を押さえることに対しても効果を持つ。これらのように、横断的調査では明らかにできない主観的健康および退職のプロセスと教育の関係の一端が明らかにされている。

加えて、藤原（2016）によると、高齢者の社会参加とは社会の一員としての様々な役割が期待されると同時に、社会参加を通じて高齢者自身の健康増進や介護予防に資するように論じられることが多い。高齢者の社会参加とはライフコースに沿って幾重にも推移していくものであり、求められる生活機能や社会的責任の程度により高い層から低い層へと階層構造をなすと指摘している。

先行研究の段階で高齢者自身は就労に対する意欲が高いが、社会全体の制度が整っていないことがわかった。一方、先行研究では、高齢者自身は雇用に対する意欲が高いことがわかったものの、高齢者の雇用に対する各世代の賛否は先行研究では明らかになっていない。

本研究においてそれを明らかにする。

2.2. 仮説

本章では、少子高齢化によって労働力人口が減少していると理解している人ほど、高齢者の雇用に対して賛成する人が多いことを主要仮説とする。

少子高齢化や労働力人口の不足というのは、近年テレビでよく取り上げられている。インターネットからの情報や身の回りの実体験などから情報を得て、自分なりの考えを持つ。労働力人口の減少によって経済成長が鈍化するという事実認識を持つようになると、高齢者雇用に賛成する、あるいは、それを仕方ないものとして受容するようになるのではないかと考えた。

仮説 1 少子高齢化によって労働力人口が不足していると理解している人ほど、高齢者の雇用に対して賛成する人が多い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q44：あなたは、一般に「高齢者も働けるうちは働くのが望ましい」と思いますか。（高齢者に対する雇用意識（反転））

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、質問に同意するように、尺度の反転を行った。

Q48：あなたは、「今後、少子化によって働き手が減少すると、日本の経済はどんどん悪くなる」と思いますか。（日本経済の現状認識（反転））

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、質問に同意するように、尺度の反転を行った。

Q55：あなたの性別はどちらですか。（男性ダミー）

1.男性 2.女性

上記の選択肢に対して、男性を 1、女性を 0 とする男性ダミーを作成した。

Q56：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

4. 分析

はじめに、日本経済の現状認識と高齢者に対する雇用意識の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 Q48 日本経済の現状認識と Q44 高齢者に対する雇用意識のクロス表

		Q44 高齢者に対する雇用意識				合計
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
Q48 日本 経済の現 状認識	そう思う	N 3	4	10	31	48
		% 6%	8%	21%	65%	100%
	ややそう思う	N 3	21	95	62	181
		% 2%	12%	53%	34%	100%
	あまり	N 10	69	263	142	484
	そう思わない	% 2%	14%	54%	29%	100%
	そう思わない	N 25	54	139	217	435
		% 6%	12%	32%	50%	100%
	合計	N 41	148	507	452	1148
		% 4%	13%	44%	39%	100%

χ^2 (df=9, N=1148)=81.763***, Cramer V=.154***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

表 1 は高齢者に対する雇用意識と、日本経済の現状認識の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「今後、少子化によって働き手が減少すると、日本の経済はどんどん悪くなると思うか」との設問に「そう思う」と回答した人では、「高齢者も働けるうちは働くのが望ましいか」について「そう思う」と回答した人が 6%、「ややそう思う」と回答した人が 8%と肯定的な評価が少数である。また、日本経済の現状認識について「ややそう思う」と回答した人では、高齢者に対する雇用意識について「そう思う」が 2%、「ややそう思う」が 12%と、「そう思う」とする回答はさらに減少し、肯定的意見は少数派である。一方、日本経済の現状認識について「あまりそう思わない」、「そう思わない」と否定的な回答をした人では、高齢者に対する雇用意識について、「そう思う」と回答した人が、それぞれ 2%、6%、「ややそう思う」と回答した人が 14%、12%と肯定的な意見が少数派であることは変わらない。すなわち、今後、少子化によって働き手が減少すると、日本の経済はどん

どん悪くなると思う人ほど、必ずしも高齢者も働けるうちは働くのが望ましいとは考えないということがわかる。そもそも、少子化によって労働力人口が減少すると日本経済が悪くなると考える人はあまりいないようである。

表 2 Q44 高齢者に対する雇用意識（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.850	0.120		***
Q48日本経済の現状認識（反転）	0.014	0.028	0.014	
Q55男性ダミー	-0.096	0.047	-0.060	*
Q56年齢	0.067	0.014	0.142	***
調整済みR ²	0.021			
N	1123			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 2 は、高齢者に対する雇用意識を従属変数、日本経済の現状認識、男性ダミー、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.021 であり、投入した独立変数によって従属変数である高齢者に対する雇用意識の分散の 2.1%が説明されている。

標準化係数（ β ）の値は、日本経済の現状認識（ $\beta=0.014$ ）、年齢（ $\beta=0.142$ ）が正で、男性ダミー（ $\beta=-0.060$ ）が負、男性ダミー、年齢の係数が 5%水準で統計的に有意だった。つまり、日本経済の現状認識は高齢者に対する雇用意識と統計的に有意には関連していなかった。

5. 考察

本研究では少子化による労働力人口の不足と運転免許の高齢者の雇用に対する賛否を調査するために分析を行った。少子化によって労働力人口が不足していると理解している人ほど、高齢者の雇用に対して賛成するという仮説を立て、日本経済の現状認識、高齢者に対する雇用意識、性別などの質問項目を使い分析を行った。

分析の結果から、少子化による労働力人口の不足を理解している人ほど、高齢者の雇用に対して賛成するといえるが、一方で少子化による労働力人口の不足を理解してる人は高齢者が働けるうちは働き続けることに対してそう思わない意見も多数であった。それらのことから「少子化による労働力人口の不足を理解している人ほど高齢者の雇用に対して賛成する」という仮説は一部分に支持される結果となった。

6. 文献

- [1]…藤原佳典 (2016)「高齢者の就労の現状と課題 : 高齢求職者と就労支援の視点から」
『老年社会科学』 38(1): pp.94-101
- [2]…福島さやか (2007)「高齢者の就労に対する意欲分析」『日本労働研究雑誌』49(1): pp.19-31.
- [3]…中田知生 (2008)「高齢期における主観的健康悪化と退職の過程」『理論と方法』 23(1): pp.57-72.
- [4]…内閣府 (2018)『平成 30 年版高齢社会白書』https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/gaiyou/s1_1.html (2020 年 1 月 12 日閲覧) .

第 11 章 職業別による生活満足度の違いについて

松本 集

1. はじめに

本章では、職業の違いが金銭面や余暇などに関する生活満足度に与える影響について分析を行う。近年、労働環境は激しく変化している。かつての日本は「滅私奉公」という言葉に代表されるように己の身を顧みず職に専念することが良いとされ、己より職を優先することが社会的に求められた。しかし、高度成長期やバブル期に差し掛かると職業に没頭した結果、健康を害したり、過労によって死亡する人が目立つようになった。私生活の多くを犠牲にする仕事・労働は悲劇につながるとして社会問題となっている。こうしたことから、内閣府は平成 20 年に「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」を策定する一方で、厚生労働省では 30 年に「働き方改革関連法」を制定し、仕事と私生活のバランスを重要視している。本研究の目的は、職種別の生活満足度を調査することで、各職種や職業のワークライフバランスにおいて欠けている要素を明らかにすることで、仕事と私生活のバランスを保つための手がかりとなるのではないかな。

2. 仮説

2.1. 先行研究

先行研究では、正社員と非正社員の職種、労働時間など仕事の働き方の観点から生活満足度を調査した研究が行われている。久米・鶴・戸田（2017）は、仕事場での充実が生活満足度にどの程度関与しているかを金銭的価値に置き換えた上で、職場での不満が仕事満足度とともに生活満足度の低下にもつながっていることを明らかにした。仕事と私生活の関係について、木暮・金子・星野（2015）は、社会人のワーカホリック状態（仕事から離れることに不安を感じ、私生活を犠牲にして仕事に打ち込んでしまう状態）に対して、「生きがい」をもつことが、ワークライフバランスを保つことにつながると述べている。また、原田他（2011）は、高齢期においても生きがい作りの努力に努めることで「いかに長く生きる」ではなく、「いかにうまく生きる」を実現することができると述べている。仕事の満足度と私生活とのバランスが生活満足度に関係することが先行研究ではあげられているが、職業別の生活満足度を検討した研究は、管見の限り確認できず、新規性が高い。

2.2. 仮説

私生活の満足度を、時間面と金銭面の満足度に分けて理解した上で、職業ごとに得られる満足度に違いがあるのかを検証したい。

例えば、学生であれば、時間的余裕があっても金銭的に余裕がないため趣味の満足度は低

く、正規雇用の勤め人だと、時間的余裕が少ないことから趣味満足度が低くなる。職業ごとに時間的制約の大きい職業は時間的なゆとりを持ちにくいですが金銭的に余裕を持ちやすい。一方で、時間的制約の小さい職業は、金銭的なゆとりは持ちにくいですが時間的に余裕も持ちやすい。

仮説 1 時間的にゆとりのない職業に就いている人は、金銭面に余裕があり生活満足度が高い。

仮説 2 金銭面にゆとりのない職業に就いている人は、時間に余裕があり生活満足度が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q2: 現在の生活のうち、経済的な面ではどのくらい満足していますか。(経済満足度(反転))

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q3: 現在の生活のうち、余暇の面ではどのくらい満足していますか。(余暇満足度(反転))

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q57: あなたの現在の職業はどれにあたりますか。(複数の職業に就かれている場合は、主なものの 1 つにマル)

1.常時雇用の勤め人 2.臨時雇用、パート、アルバイト 3.自営業主 4.自営業の家族従業者 5.経営者、役員 6.家事専業 7.学生 8.無職 9.その他 ()

4. 分析

はじめに、経済的な満足度評価と職業の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、経済的な満足度評価と、職業の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「現在の生活のうち、経済的な面ではどのくらい満足していますか」との設問に「満足・やや満足」と回答した職業で最も割合の高いのは、81.3%で経営者・役員、次に52.3%で家事専業、51.4%で学生となっている。「満足・やや満足」の回答は9種の職業の中で8種が40%を超えているが、臨時雇用・パート・アルバイトだけは28.1%と低いことがわかる。表 2 は、余暇の面での満足度評価と、職業の二変数についてクロス集計表を作成したものである。「現在の生活のうち、余暇の面ではどのくらい満足していますか。」との設問に「満足・やや満足」と回答した割合の高い職業は経営者・役員が75.0%で、次に学生が64.9%、家事専業が53.9%となっている。経営者・役員、家事専業、学生は時間面でも金銭面でも満足度が高い結果となっている。これらの職業に共通していえることは、自由な時間を自ら作れる職業だということである。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は98.476であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は0.147と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、上記の経済的な満足度と職業の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は54.321であり、5%水準で統計的に有意である。ただし、Cramer の連関係数は0.109と必ずしも強くない。以上のことから、上記の余暇の面での満足度と職業の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。

表 1 Q2 経済面での生活満足度と Q57 職業のクロス表

Q57職業 と Q2経済面での満足度 のクロス表					
		Q2経済面での満足度			合計
		満足・やや満足	どちらともいえない	やや不満・不満	
Q57職業	常時雇用の勤め人	N 135	86	96	317
		% 42.6%	27.1%	30.3%	100.0%
	臨時雇用、パート、アルバイト	N 55	56	85	196
		% 28.1%	28.6%	43.4%	100.0%
	自営業主	N 21	6	16	43
		% 48.8%	14.0%	37.2%	100.0%
	自営業の家族従事者	N 7	2	6	15
		% 46.7%	13.3%	40.0%	100.0%
	経営者、役員	N 26	2	4	32
		% 81.3%	6.3%	12.5%	100.0%
	家事専業	N 80	34	39	153
		% 52.3%	22.2%	25.5%	100.0%
	学生	N 19	10	8	37
		% 51.4%	27.0%	21.6%	100.0%
	無職	N 136	78	102	316
		% 43.0%	24.7%	32.3%	100.0%
	その他	N 12	4	8	24
		% 50.0%	16.7%	33.3%	100.0%
合計		N 491	278	364	1,133
		% 43.3%	24.5%	32.1%	100.0%
$\chi^2(df=32, N=1133)=98.476^{***}$, Cramer's ϕ					
***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10 %					

表 2 Q3 余暇面での生活満足度と Q57 職業のクロス表

		Q57職業 と Q3余暇面での満足度 のクロス表			
		Q3余暇面での満足度			合計
		満足・やや満足	どちらともいえない	やや不満・不満	
Q57職業	常時雇用の勤め人	N 136	89	92	317
		% 42.9%	28.1%	29.0%	100.0%
	臨時雇用、パート、アルバイト	N 82	65	48	195
		% 42.1%	33.3%	24.6%	100.0%
	自営業主	N 19	8	16	43
		% 44.2%	18.6%	37.2%	100.0%
	自営業の家族従事者	N 5	6	4	15
		% 33.3%	40.0%	26.7%	100.0%
	経営者、役員	N 24	5	3	32
		% 75.0%	15.6%	9.4%	100.0%
	家事専業	N 83	40	31	154
		% 53.9%	26.0%	20.1%	100.0%
	学生	N 24	6	7	37
		% 64.9%	16.2%	18.9%	100.0%
	無職	N 145	104	67	316
		% 45.9%	32.9%	21.2%	100.0%
	その他	N 9	12	3	24
		% 37.5%	50.0%	12.5%	100.0%
合計		N 527	335	271	1,133
		% 46.5%	29.6%	23.9%	100.0%

χ^2 (df=32, N=1133)=54.321**, Gramer V:%

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究の目的として、職業の違いによる生活満足度の調査を行ったが、常時雇用の勤め人と無職の人は、経済的な面でも余暇の面でも満足度の数値はばらける結果となった。家事専業に関しては、「現在の生活のうち、経済的な面ではどのくらい満足していますか。」との設問に「満足」「やや満足」と回答した人の数は 80 名で、「やや不満」「不満」と回答した人の数は 39 名であった。さらに、「現在の生活のうち、余暇の面ではどのくらい満足していますか。」との設問に「満足」「やや満足」と回答した人の数は 83 名で、「やや不満」「不満」と回答した人の数は 31 名であった。家事を専業としている人は、経済面も余暇の面でも満足度が高いことから仮説を支持する結果となった。金銭面と余暇の面の満足度を職業別で調査したが、常時雇用の勤め人、自営業主、自営業の家族従事者、無職は経済面でも余暇の面でも「満足・やや満足」の回答が「やや不満・不満」より少し多い結果となっている。臨時雇用・パート・アルバイトは、余暇の面での「やや不満・不満」より「満足・やや満足」の回答の方が多いものの、経済面では「やや不満・不満」と回答した数の方が多く結果となっている。働き方を考えると、固定された給与額ではないためではないかと考えられる。経営者・役員、家事専業、学生も「満足・やや満足」の回答が「やや不満・不満」が多く、「満足・やや満足」が 50%を超えている。この三つの職業の共通点として、働き方などから自由な時間を自ら作れることにあると感じた。余暇の時間を作り出せることによって、経済面の調整にも余裕がでてくるのではないかと考えられる。経済面でも余暇の面でも圧倒的に

満足度の低い職業というものはなかったものの、自由な時間を作り出せる職業は満足度が高いという結果となった。

6. 文献

- [1]…原田隆・加藤恵子・小田良子・内田初代・大野知子（2011）「高齢者の生活習慣に関する調査（2）—余暇活動と生きがい感について」『名古屋文理大学紀要』11: pp.27-33.
- [2]…木暮勇人・金子賢司・星野准一（2015）「個人の趣味と正確要素に基づいたワークライフバランス支援システム」『情報処理学研究報告』162(16): pp.1-8.
- [3]…久米功一・鶴光太郎・戸田淳仁（2017）「多様な正社員のスキルと生活満足度に関する実証分析」『生活経済学研究』45: pp.25-38.
- [4]…内閣府（2008）『「仕事と生活の調和」推進サイト』www.cao.go.jp/wlb/government/20barrier_html/20html/charter.html（2020年1月2日閲覧）.
- [5]…厚生労働省（2018）『「働き方改革」の実現に向けて』<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000148322.html>（2020年1月2日閲覧）.

第 12 章 幼少期の父親の家事参加と性別役割分業意識の 関連

三山 勲央

1. はじめに

日本では、内閣府が男女共同参画社会を目指すことを目標に、男女共同参画社会基本法を平成 11 年に制定し、様々な取り組みをしてきた。しかし、平成 28 年社会生活基本調査の中の男性家事時間では、男性の一日の家事時間は 34 分で、先進国の中でも最低水準である（内閣府）。このように、女性の家事負担が多いという現状があり、男女の家事分担家事分担をいかに進めていくのかという社会的な議論が求められるところである。本研究では、男性が家事への肯定的考えを持つプロセスを明らかにすることを通じて、男女の役割分業意識について考察を行う。

2. 仮説

2.1. 先行研究

松田（2001）は、育児と家事では、家事遂行よりも柔軟に夫が参加しており、育児は夫に時間的余裕があれば手伝うということが明らかにされている。

また、松田（2006）は、男性の家事遂行について、男性の雇用不安や賃金低下の観点から研究を行っており、共働きの家庭と男性だけが働いている家庭とでは、特に前者の家庭で女性の労働時間が長く、かつ収入割合が高い場合に男性はより育児・家事参加をするようになっているということが明らかにされている。

また、松田、鈴木（2006）は、夫と妻の家事時間の関係には、トレードオフ関係はなく、妻の家事負担が大きい場合のみ、夫の家事参加度が高まるということが明らかにされている。

2.2. 仮説

本章では、両親の影響という観点から男性の家事に対する肯定的態度の形成プロセスを明らかにする。親は子供にとって身近な手本であり、親の振るまいが子供の考え方に影響する。そこで、幼少期に父親が家事をよく行っていた家庭ほど、その子供の性別役割分業意識が低くなるのではないかと考えた。そこで、以下の仮説を立てた。

仮説 1 父親が家事を積極的にしていた家庭で育った人ほど、性別役割分業意識を持ちにくい。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q47：あなたは、社会について「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」と思いますか。（性別役割分業意識（反転））

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、賛成の回答になるように、尺度の反転を行った。

Q52：あなたが 12 歳の頃、あなたの父親は家事をよく行う人だったと思いますか。（幼少期の父親の家事参加度（反転））

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない 5.父親がいなかった

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、賛成の回答になるように、尺度の反転を行った。また、父親がいなかったは欠損値として処理した。

Q55：あなたの性別はどちらですか。（男性ダミー）

1.男性 2.女性

上記の選択肢に対して、男性を 1、女性を 0 とする男性ダミーを作成した。

Q56：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1.18 歳,19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

Q63：あなたは現在、結婚していらっしゃいますか。（既婚ダミー）

1.既婚（配偶者あり） 2.既婚（死別・離別） 3.未婚

上記の選択肢に対して、未婚を 0、1.既婚（配偶者あり）と 2.既婚（死別・離別）を 1 として既婚ダミーを作成した。

Q64：同居していない場合も含めて、現在、お子様がおられますか。（子供ダミー）

1.いる 2.いない

上記の選択肢に対して、いるを1、いないを0とする子どもダミーを作成した。

4. 分析

はじめに、幼少期の父親の家事参加度と家事分担への理解の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表1 Q52 幼少期の父親の家事参加度と Q47 性別役割分業意識のクロス集計表

		Q47夫は外で働き、妻は家庭を守るべきか				合計
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
Q52父親は家事をよく行う人だったか	そう思う	N	6	11	20	64
		%	9%	17%	31%	100%
	ややそう思う	N	2	32	76	147
		%	1%	22%	52%	100%
	あまりそう思わない	N	7	33	100	203
		%	3%	16%	49%	100%
	そう思わない	N	28	119	267	682
		%	4%	17%	39%	100%
	父親がいなかった	N	6	6	26	58
		%	10%	10%	45%	100%
	合計	N	49	201	489	1154
		%	4%	17%	42%	100%

$\chi^2(df=12, N=1154)=33.567^{***}$, Cramer V=.098***

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

表1は、幼少期の父親の家事参加度と、性別役割分業意識の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「父親は家事をよく行う人だったか」との設問に「そう思わない」と回答した人では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきか」について「そう思う」と回答した人が4%、「ややそう思う」が17%となっている。また、「父親は家事をよく行う人だったか」との設問に「そう思う」と回答した人では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきか」について「そう思う」と回答した人が9%、「ややそう思う」が17%となっており、父親が家事を行っていた家庭の方が統計的には、性別役割分業意識を持ちやすいことがわかる。

表1のカイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は33.567であり、5%水準で統計的に

有意である。また、Cramer の連関係数は 0.098 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、上記の幼少期の父親の家事参加度と家事分担理解の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。

ただし、幼少期の父親の家事参加度や家事分担理解は、年齢・性別・学歴など、回答者の社会的属性によって異なるだろうから、そのような他の変数の影響を考慮した上で、幼少期の父親の家事参加度が家事分担理解に与える影響を確認する必要がある。

表 2 Q47 家事分担理解（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	1.276	0.202		***
Q52 幼少期の父親の家事参加度	0.046	0.027	0.052	*
Q53 男性ダミー	0.245	0.051	0.146	***
Q56 年齢	0.082	0.017	0.164	***
Q63 既婚ダミー	-0.022	0.100	-0.010	
Q64 子供ダミー	0.072	0.081	0.038	
調整済み R ²	0.060			
N	1051			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 2 は、家事分担への理解（反転）を従属変数、幼少時の父親の家事参加度（反転）、年齢、男性ダミー、婚姻歴、子供の有無を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。

回帰式の調整済み R² 値は 0.060 であり、投入した独立変数によって従属変数である分散 6.0%が説明されている。標準化係数（ β ）の値は、幼少期の父親の家事参加度（ $\beta=0.052$ ）、男性ダミー（ $\beta=0.146$ ）、年齢（ $\beta=0.164$ ）、子供ダミー（ $\beta=0.038$ ）が正、既婚ダミー（ $\beta=-0.010$ ）が負で、幼少期の父親の家事分担、性別、年齢が 5%水準で統計的に有意であった。子供ダミー（ $\beta=0.038$ ）は、5%水準で統計的に有意ではない。つまり、幼少期に父親が家事分担をしていた家庭ほど、男性の方が、年齢が高いほど、性別役割分業意識が高くなる。

他方で、既婚かどうかは、他の変数を考慮すると、統計的に有意な影響が認められない。標準化係数の絶対値を比較すると、年齢が家事分担理解に影響があり、幼少期の父親の家事分担割合や年齢などの要因に比べても、性別役割分業意識が高くなる。

5. 考察

本研究では幼少期の父親の家事参加度と家事分担理解の関係性を調査するために分析を

行った。父親が家事を積極的にしていた家庭の男性ほど、家事分担に対して理解があるという仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、「父親が家事を積極的にしていた家庭の男性ほど、家事分担に対して理解がある」という仮説は支持されなかった。むしろ、統計的には、幼少期に父親が家事をしていた家庭で育った人の方が、性別役割分業意識を持ちやすかった。この分析結果の理由としては、幼少期に父親がどのくらいの割合で家事参加していたのかということよりも、その父親の家事参加が家庭内でどのような役割を果たしているかが家事分担理解に影響するのではないかと考えた。例えば、父親が家事参加をよく行っていたとしても、父親の家事能力が母親の家事能力より劣っている場合や父親の家事能力が低い場合、社会的にはよいとされる男女の家事分担でも自身の経験から否定的な目線を持ってしまうといったことである。

このことは、表1の結果から推測した。表1を見ると、幼少期の父親の家事参加度の質問でよく行っていた家庭とよく行っていない家庭では性別役割分業に関して強い肯定または強い否定に意見をもちやすく、やや行っていた家庭とやや行っていない家庭では性別役割分業に関して弱い肯定または弱い否定をもちやすくなるという結果になった。これは、幼少期の父親の参加頻度よりその参加からの印象が家事分担理解に関わっていることを意味すると考えた。幼少期の父親の家事参加度が家事分担理解に直接関係するというより、その父親の家事参加の過程でその参加が家庭においてどのような役割を果たし、それをそのとき子供がどのように感じたかがその後の家事分担理解に関係するのではないかと考える。

また、今回の調査では、標準化係数の絶対値から高齢者や男性の方が性別役割分業意識に対して肯定的意見を持っていることが明らかになったため、男性や高齢者の性別役割分業に対するイメージを改善する必要があると言える。

6. 文献

- [1]…松田茂樹（2006）「近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化」『季刊家計経済研究』71(2): pp.45-54.
- [2]…松田茂樹（2001）「夫婦の家事・育児分担の規定要因. 現代日本の夫婦関係」『文部科学研究費基盤研究（A）家族についての全国調査報告書』pp.2-3.
- [3]…松田茂樹・鈴木征男（2001）「夫婦の労働時間と家事時間の関係」『家族社会学研究』13(2): pp.73-84.
- [4]…総務省・統計局（2017）『平成28年社会生活基本調査』<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf>（2020年1月4日閲覧）.
- [5]…内閣府・男女共同参画局「男性にとっての仕事と家事・育児参加」http://www.gender.go.jp/policy/men_danjo/kiso_chishiki2.html（2020年1月4日閲覧）.

第 13 章 幼少期の選挙の記憶と投票参加の関連性

田所 紋佳

1. はじめに

選挙に行くということは社会に参加し、自分たちの代表を投票で選ぶということである。それはすなわち日本の未来、自分たちの将来を決めることに繋がっていく。将来住みにくい世の中にしないためにも、選挙に行き自分たちの意見を投票という形で発信していかなければならない。しかし、近年投票率が低下してきている。令和元年 7 月に行われた参議院議員通常選挙では、投票率が 48.80%と歴代で 2 番目に低い数値となっており、国民の選挙参画が大きな課題となっている（総務省 2019）。本章では、幼少期の選挙についての記憶は投票参加を促す要因となるかを明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

皆吉・柴田（2006）によれば、大妻女子大学の大学生に対してアンケート調査を行った結果、族間や友人間で選挙やそれに準ずる会話をするなどして、日々政治や社会の話題に触れていることが投票参加に繋がるという。また、岡田（2008）によると、過去の選挙の投票に参加した記憶が繰り返されることで投票に対する義務感が生まれ、選挙参画と繋がるという。加えて、岡田（2002）によると、投票参加と自分の周囲の環境とが密接に関係しており、社会的ネットワークは有権者の政治や選挙への関心に繋がる、ことが明らかにされている。

先行研究では、子どもの頃の親の影響を利用し、18 歳から 20 歳までの人々を対象に行われた研究はあるが、全年齢を対象とした調査報告がなく、その点において新規性がある。

2.2. 仮説

本章では、投票参加と幼少期に親の選挙に付いて行った記憶との関連性を明らかにする。先行研究から、自分の投票参加の記憶や周囲との関係が選挙投票への参加に影響があることが明らかになっている。ならば、それらの組み合わせである自分の過去の周囲の人々との関わりと、現在の投票行動に何らかの関係があるに違いない、と考え以下の仮説を立てた。

仮説 1 子どもの頃に、家族に連れられて選挙に行ったことがある人ほど、現在も選挙に行く可能性が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q39：あなたは、今年の 7 月行われた参議院議員選挙で、投票に行きましたか。（期日前投票や不在者投票を含む）（参議院議員選挙で投票に行ったか（投票参加ダミー））

1.投票に行った 2.投票に行かなかった 3.選挙権がなかった

上記の選択肢に対して、投票に行ったを 1、投票に行かなかったを 0 とする選挙参加ダミーを作成し、選挙権がなかったを欠損値として処理した。

Q53：あなたは子どもの頃、投票に行く親に付いて行ったことがありましたか。（投票に行く親に付いて行ったことがあるか（反転））

1.よくあった 2.ときどきあった 3.ほとんどなかった 4.まったくなかった

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q56：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

4. 分析

まず、クロス表を用いて選挙投票参加の有無と子どもの頃に親に連れられて選挙に行ったことがあるかどうかの関連性を確認する。投票参加ダミーと投票に行く親に付いて行ったことがあるかの二変数を用いてクロス表を作成した。

表 1 から、子どもの頃に親に連れられて選挙に行ったことがよくある人の投票率は 78.8%、その記憶が全くない人の投票率は 76.8%となっている。つまり、子どもの頃親に連れられて選挙に行った記憶がある人もない人も、選挙の投票率に違いが見られないことが分かる。

表 1 のカイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は 6.122 であり、5%水準で統計的に有意ではない。よって、二変数間には統計的に有意な関連は認められない。

表 1 Q39 参議院議員選挙で投票に行ったかと Q53 投票に行く親に付いて行ったことがあるかのクロス表

		Q39投票参加ダミー		
		棄権	投票	合計
Q53投票	まったくなかった	N	135	447
		%	23.2%	76.8%
に行く親	ほとんどなかった	N	63	206
		%	23.4%	76.6%
行ったこ	ときどきあった	N	58	126
		%	31.5%	68.5%
とがある	よくあった	N	18	67
		%	21.2%	78.8%
合計		N	274	846
		%	24.5%	75.5%

χ^2 (df= 3, N= 1120)= 6.122 †, Cram er V= .074 †

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, † p<.10

表 2 から、選挙の投票参加を従属変数、投票に行く親に付いて行ったことがあるか、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調節済み R^2 値は 0.054 であり、投入した独立変数によって従属変数である選挙の投票参加の分散の 5.4% が説明されている。

標準化係数 (β) の値は、投票に行く親に付いて行ったことがあるか ($\beta = 0.037$)、年齢 ($\beta = 0.244$) が正で、年齢の係数が 1%水準で統計的に有意であった。つまり、年齢が高い人ほど選挙に参加している、ということが分かる。他方で、投票に行く親に付いて行ったことがあるかは他の変数を考慮すると、統計的に有意な影響が認められない。標準化回数の絶対値を比較すると、年齢が投票参加に最も強い影響を及ぼしていたといえる。

表 2 Q39 参議院議員選挙で投票に行ったかとの重回帰分析の結果

	B	SE	β
(定数)	0.408	0.054	***
Q53投票に行く親に付いて行ったことがあるか	0.016	0.013	0.037
Q56年齢	0.063	0.008	0.244 ***
調整済み R^2	0.054		
N	1096		

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

5. 考察

本調査では投票参加の要因を調べるために分析を行った。子どもの頃に、家族に連れられて選挙に行ったことがある人ほど、選挙に投票に行く可能性が高いという仮説を立て、有権者の子ども頃の記憶、投票参加の有無、年齢といった質問項目を使い分析した。

分析の結果から子どもの頃の選挙の記憶と現在の投票率には慣例性が見られなかったため、子どもの頃に、家族に連れられて選挙に行ったことがある人ほど、現在も選挙に行く可能性が高いという仮説は実証されなかった。

その一つの要因として、子どもの頃の記憶はあまり印象に残らないということが考えられる。大人になってから過去を振り返ったときに鮮明に思い出すことは、衝撃を受けたことや、自分で行動したことであるように思う。親に付いて選挙に行ったこと、というのは、ほとんどの場合そのどちらでもないだろう。つまり、覚えているが、自分の行動に影響を与えるような記憶ではない、ということだ。今後調査するときには、学校で模擬票をしたことがある、などの自分で行った記憶を踏まえて調査をする必要があるのではないだろうか。

6. 文献

- [1]…岡田浩 (2002)「投票参加と社会的ネットワーク」『東北福祉大学研究紀要』26: pp.258-274.
- [2]…岡田陽介 (2008)「投票参加のエピソード記憶が後の投票参加に与える影響」『政治学論研究』21: pp.1-23.
- [3]…皆吉淳平・柴田邦臣 (2008)「若年女性の投票行動と新しいメディアー第44回衆議院議員選挙のアンケート調査から」『大妻女子大学 社会情報学研究』15: pp.95-117.
- [4]…総務省 (2016)『18歳選挙権に関する意識調査 報告書 https://www.soumu.go.jp/main_content/000457171.pdf (2019年11月4日閲覧) .
- [5]…公益財団法人 明るい選挙推進協会『参議院議員選挙』<http://www.akaruisenkkyo.or.jp/070various/072sangi/686/> (2020年1月6日閲覧) .

第 14 章 選挙カーとの接触頻度が有権者の投票意識に

与える影響について

谷 千尋

1. はじめに

選挙期間中の選挙カーによる広報活動について、それを問題視する議論が散見される。特にインターネット上では、選挙カーによる名前の連呼に対する苦情を訴えるとともに、その候補者への投票を取りやめたという声も挙がっている。その一方で、高齢者を中心として選挙カーを肯定する意見もある（キャリコネニュース 2015）。そもそも選挙カーには、資金力に劣る候補者でも、等しく選挙活動ができるようにするための手段として導入されたという経緯がある（産経ニュース 2019）。そこで本章では選挙カーの必要性を問うために、選挙カーを用いた選挙活動への接触頻度と第 25 回参議院選挙への投票の有無から、選挙カーが有権者の投票意欲へ与える影響について分析を行う。

2. 仮説

2.1. 先行研究

有永・永幡（2008）らは、子育てを行う母親 100 人への聞き取り調査から、選挙カーによる広報活動が、睡眠妨害などの悪影響を育児に対して与えていることを明らかにした。さらに、「街宣車放送は投票を促すのではなく、投票を止めさせてしまうという効果もあると言えよう」と、選挙カーが投票行動に対して負の影響を持っていることも示している。また、有永・永幡・鹿俣（2007）らは、福島市内で街宣車放送による選挙活動を行ったと考えられる立候補者 48 名にアンケート調査を行った。その結果として、選挙カーが立候補者にとって必ずしも有効に働くことはない、と結論付けている。また論文中では、立候補者が選挙カーに期待している効果が得られているとは言えない一方で、立候補者全員が選挙カーを用いた選挙運動を行うという意向が示されている。しかし、選挙カーに代わる認知度向上のための手段があるならば、必ずしも選挙カーに頼るつもりはないとしており、選挙カー以外の選挙活動の可能性を示唆している。

また、嶋・秋山（2011）は、慶應義塾大学の学生 140 名に対するアンケート調査において、選挙に対する関心の有無と政治参加との関係について、「接触あるいは活用した媒体として…（中略）…関心あり・棄権群では選挙カーからの連呼やラジオのスポット CM…（中略）…との接触が目立っていた」と、学生については、選挙カーが投票行動に負の影響をもたらしたことを明らかにしている。以上の研究では、選挙カーによる選挙活動は、子育て中の母親や学生に対しては投票先を変更させたり、投票へ行くことを阻害するような働きが

あることが示している。しかし、これらは限定された年齢層での話であることから、本研究では、若年者層から高齢者層までを含め、選挙カーの投票意欲への影響について調査をする。

2.2. 仮説

本研究では調査対象者の選挙カーとの接触頻度が、選挙における投票意欲へ影響するという仮説を立てた。主要仮説として、選挙期間中に選挙カーによる候補者名の連呼を耳にした機会の多かった人ほど、その騒音に対し不快感を抱いて投票への意欲が低下し、選挙への参加率が低下すると考えた（仮説 1）。仮説 2 は、総務省の統計から、若年者層ほど選挙への参加率が低いことから立てた仮説である。

仮説 1 選挙カーを認知した頻度が高くなるほど、投票への参加率が低下する。

仮説 2 年齢が低い人ほど、投票への参加率が低下する。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q39：あなたは、今年の 7 月に行われた参議院議員選挙で、投票に行きましたか。（期日前投票や不在者投票を含む）（投票ダミー）

1.投票に行った 2.投票に行かなかった 3.投票権がなかった。

上記の選択肢に対して、3.投票権がなかったを欠損値として処理した上で、「投票に行った」を 1、「投票に行かなかった」を 0 とする投票ダミーを作成した。

Q40：あなたは、今年の 7 月に行われた参議院議員選挙の選挙期間中に、選挙カーによる名前の連呼をどの程度、耳にしましたか。（名前の連呼を耳にした頻度（反転））

1.よく耳にした 2.少し耳にした 3.ほとんど耳にしなかった 4.まったく耳にしなかった

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、頻度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q56：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

4. 分析

まず、クロス表を用いて、選挙カーによる選挙運動を耳にした頻度と、投票へ行ったかどうかの関連性を検討する。Q39 非投票ダミーと Q40 名前の連呼を耳にした頻度（反転）を用いてクロス集計表を作成した（表 1）。

表 1 Q39 投票ダミーと Q40 名前の連呼を耳にした頻度（反転）のクロス集計表

		Q39投票ダミー		合計
		投票に行かなかった	投票に行った	
	まったく耳にしなかった	N 12	26	38
	%	31.6%	68.4%	100.0%
Q40名前 の連呼を	ほとんど耳にしなかった	N 69	200	269
	%	25.7%	74.3%	100.0%
耳にした 頻度（反 転）	少し耳にした	N 124	392	516
	%	24.0%	76.0%	100.0%
	よく耳にした	N 69	231	300
	%	23.0%	77.0%	100.0%
合計	N	274	849	1123
	%	24.4%	75.6%	100.0%

χ^2 (df= 3, N= 1123)= 1.647, Cramer V= .038

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

検定の結果カイ 2 乗の値が 1.647 で、有意確率 10%以上となり有意ではない。Cramer の連関係数の値も 0.038 であるため、この二変数には関連性がなかった。名前の連呼をよく耳にした人のうち、「投票に行った」を選択している人のほうが 77.0%で多い。名前の連呼を耳にする頻度が下がるにつれて各頻度において投票へ行った人が占める割合も下がっているが、投票へ行った人と投票へ行かなかった人の割合の大小関係は変わらない。また、投票へ行かなかった人については、名前の連呼を耳にしなかったという人が最も多く、頻度が高まるにつれて、投票へ行かなかった人の割合が下がっていることがわかる。よって、これは仮説を支持する結果ではない。一方で、その他の要因の影響を統制しないと、選挙カーの名前の連呼が投票参加に与える影響を厳密に評価できない。

次に、有権者の投票に関わる要因について検証したい。Q39 投票ダミーを従属変数とし、独立変数は Q40 名前の連呼を耳にした頻度（反転）、Q56 年齢の 2 変変数を用いて重回帰

分析を行った（表 2）。

表 2 Q39 投票ダミーの重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	0.316	0.067		***
Q40名前の連呼を耳にした頻度（反転）	0.040	0.016	0.075	*
Q56年齢	0.063	0.008	0.247	***
調整済みR ²	0.059			
N	1099			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

分析結果は調整済み R² 乗値が 0.059 であり、従属変数である投票の有無への分散の 5.9% が投入された独立変数によって説明されている。標準化係数（ β ）の値は、名前の連呼を耳にした頻度（反転）（ $\beta=0.075$ ）、年齢（ $\beta=0.247$ ）と、いずれも正となった。また、年齢と連呼を耳にした頻度の係数は 5%水準で有意となった。つまり、名前の連呼を耳にした頻度と年齢が高い人ほど、投票へ行ったということがわかる。上記の結果は、仮説 2 のみを支持する結果である。

5. 考察

本調査では高槻市民の選挙カーとの接触頻度と投票へのつながりとの関連性を調査するために分析を行った。選挙カーによる名前の連呼を耳にする頻度が高いほど投票へ行く割合が下がるという仮説を立て、年齢、子供の頃の政治経験などの質問項目を使い分析を行った。

分析の結果から、選挙カーによる名前の連呼を耳にする頻度と年齢が低いほど、投票へ行く割合も低くなることが明らかになった。「選挙カーを認知した頻度が高くなるほど、投票への参加率が低下する」という仮説とは、むしろ逆の結果になった。このことから、選挙カーによる選挙運動には、選挙期間であることを有権者に認識させ、投票参加へ促す効果があり、民主主義にとってはプラスの影響をもっているということがいえる。この調査では、仮説 2「年齢が低い人ほど投票への参加率が低下する。」のみが支持された。

今回の調査では、選挙カーによる名前の連呼を認知した頻度のみについて回答してもらったため、無意識のうちに名前の連呼を耳にしていた量や、その他の選挙活動の影響との関連までは明らかにできなかった。今後の調査では、実際に調査対象者が選挙カーによる名前の連呼を聞いた時間や、その他の選挙活動との接触時間を考慮した調査を行う必要が求められる。

6. 文献

- [1]…キャリアコネニュース (2015) 『「選挙カー」はネットで圧倒的な不人気高齢者は「よう
仕事しとる」と好評価』 <https://news.careerconnection.jp/?p=10705> (2020 年 1 月 4 日
閲覧) .
- [2]…産経ニュース (2019) 『【参院選 2 0 1 9】選挙カーから連呼…やむを得ぬ事情って?』
<https://www.sankei.com/life/news/190717/lif1907170019-n2.html> (2020 年 1 月 10 日
閲覧) .
- [3]…有永由子・永幡幸司 (2008) 『育児中の母親は選挙時の街宣車放送をどのように聞い
ているか』 日本音響学会騒音・振動研究会資料 N-2008-20.
- [4]…有永由子・永幡幸司・鹿俣美穂 (2007) 「公職選挙立候補者の考える街宣車放送の効用
について」 日本音響学会騒音・振動研究会資料 N-2007-14.
- [5]…総務省 (2016) 『国政選挙の年代別投票率の推移について』 [https://www.soumu.go.jp
/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu/index.html](https://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu/index.html) (2020 年 1 月閲覧) .
- [6]…嶋香織・秋山美紀 (2011) 『若年層の投票率向上と政治関心向上のための情報提供』
[http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-
0652](http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0652).

第 15 章 運転免許返納に対する意見はメディアの発信に影響されるのか

成田 慎吾

1. はじめに

本章では、運転免許返納の意見はメディアの発信に影響されるのかについて分析を行う。

現在、日本では高齢者の免許返納問題が話題になっている。最近、高齢者による交通事故が多発しており、2019 年 4 月 19 日には東京都豊島区東池袋で、87 歳の運転していた乗用車が暴走をし、10 人が暴走、母子 2 人が死亡という事件があった。このほかにも、高齢者ドライバーによる交通事故は後を絶たない。このような社会的背景の下、警察庁では高齢者の免許返納を推進している。しかし、免許の返納は必ずしも多くの高齢者に受け入れられているわけではない。最近、このような事故がメディアでよく取り上げられている、そのような事故のニュースを通じて、免許返納について関心が広まることが考えられる。積極的にメディアで免許返納について取り上げることで、実際に免許返納について自身が考えたり、周囲の人がよく考えるきっかけになるのではないかと。本章では、高齢運転者の死亡事故の認知が免許返納に対する肯定感どのような影響を与えるのかを明らかにしていく。

2. 仮説

2.1. 先行研究

先行研究では、元田・宇佐美・堀（2017）が盛岡免許センターに免許更新に来た 70 歳以上の 155 人にアンケートを行った結果、免許返納について考えているかという質問に対し、免許返納について考えている、少し考えている人が 45%となっており、これは全体の半数以下である。元田・宇佐美・堀（2017）は、運転能力の低下した高齢者の免許返納は考えなければいけないが、返納による生活の利便性の低下などを明らかにしている。

本調査では、免許返納に対する意識は、メディアの発信によって推進されるのかを明らかにする。ニュースなどで発信される高齢者などの運転事故の記事を見て、免許返納に対する意識が高くなるのかどうか、メディアの影響とともに、運転免許返納の意識について調査することができる。このような、免許返納とメディアの影響についての研究は管見に限りは確認できず、新規性が高い。

2.2. 仮説

本調査では、メディアで交通事故のニュースをよく見ている人ほど、運転免許の賛否がはっきりするのではないかと考えた。理由として、交通運転者の交通事故の認知が高まると、

そのような社会問題に対する危機認識を持つことで、免許返納に賛成しやすくなるのではないかと考えた。

仮説 1 メディアで交通事故のニュースをよく見ている人ほど、免許返納に賛成しやすい。

3. データと変数

3.1. データ

データは平成 30 年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,233、回収率は 61.7%である

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q41：あなたは、将来どのようなときに運転免許を返納しようと思いますか。（運転免許返納への意識）

0.運転免許を持っていない 1.自分の身体能力の低下などを感じたとき 2.家族や友人、医者などから運転をやめるよう勧められたと 3.交通違反や交通事故を起こしたとき 4.その他 5.運転免許を返納するつもりはない

上記の選択肢のうち、1 から 3 の選択肢について、その選択肢に当てはまる場合を 1、当てはまらない場合を 0 とするダミー変数をそれぞれ用意した。

Q54：あなたは過去一年に、以下のような事件が多かったと思いますか。少なかったと思いますか。（過去一年の事件への意識（反転））

A：高齢運転者による交通事故

1.少なかった 2.やや少なかった 3.やや多かった 4.多かった

Q56：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

4. 分析

はじめに、過去一年間高齢者による交通事故が多かったかと、交通違反や交通事故を起こしたときに免許を返納しようと思うかについての二変数間の関係についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、過去一年間高齢者による交通事故が多かったかと、交通違反や交通事故を起こしたときに免許を返納しようと思うかについてクロス集計表を作成したものである。まず、

「高齢者による交通事故の事件が過去一年間多かったか」との設問に「多かった」と回答した人では、どんな時に運転免許を返納しようと思うか：交通違反や交通事故を起こしたときに「当てはまらない」と回答した人が 90%、「当てはまる」と回答した人が 10%と、このことがきっかけとして免許を返納しようと思う人が少ないことが分かった。「やや多かった」、「やや少なかった」、「少なかった」を見てみても 7%、4%、11%とあまり変わらないことがわかり、交通事故のニュースが過去一年多かったかどうかで、交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納するかどうかはあまり差がないことが分かった。

表 1 のカイニ乗検定の結果を見るとカイニ乗値は 2.607 であり、5%水準で統計的に有意である。しかし、Cramer の関連係数は 0.048 と関連は強くない。以上のことから上記の交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納するかどうかと過去一年間高齢者による交通事故が多かったかどうかについての二変数間の関連は統計的に有意であるが、仮説 1 を支持するような関連の仕方ではなかった。

表 1 Q41_3 交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納しようと思うかと
Q54_A 過去一年間、高齢運転者による交通事故が多かったかのクロス表

		Q41_3 どのようなときに運転免許を返納しようと思うか：交通違反や交通事故を起こしたとき			合計
		当てはまらない	当てはまる		
Q54_A 過去一年間、 事件が多かったか： 高齢運転者による 交通事故	多かった	N	688	73	761
		%	90%	10%	100%
	やや多かった	N	301	23	324
		%	93%	7%	100%
	やや少なかった	N	24	1	25
		%	96%	4%	100%
	少なかった	N	16	2	18
		%	89%	11%	100%
	合計	N	1029	99	1128
		%	91%	9%	100%

χ^2 (df=3, N=1128)=2.607*, Cramer V=.048*

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 2 は「身体能力の低下を感じたときに運転免許を返納するか」を従属変数、「過去一年間高齢者による交通事故が多かったか（反転）」、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.008 であり、投入した独立変数によって従属変数である「身体能力の低下を感じたときに運転免許を返納するか」の分散の 0.8%が説明されている。

標準化係数 (β) の値は高齢運転者による交通事故 ($\beta = -0.007$)、年齢 ($\beta = -0.100$)

と負であり、性別の係数が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、高齢者ほど、身体能力の低下を感じても、運転免許を返納しようとししない傾向である。この結果より、有意であったが、仮説 1 を支持する結果とはならなかった。高齢者ほど、身体能力の衰えが免許返納につながっていないことが分かった。

表 2 Q41_1 身体能力の低下を感じたときに運転免許を返納するかの重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	0.746	0.055		***
Q54_A高齢運転者による交通事故（反転）	0.013	0.024	-0.007	
Q56年齢	-0.029	0.009	-0.100	**
調整済みR ²	0.008			
N	1104			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 3 は「家族や友人、医者などから運転をやめるよう勧められたときに運転免許を返納するか」を従属変数、「過去一年間高齢者による交通事故が多かったか（反転）」、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.026 であり、投入した独立変数によって従属変数である「家族や友人、医者などから運転をやめるよう勧められたときに運転免許を返納するか」の分散の 2.6%が説明されている。

標準化係数 (β) の値は高齢運転者による交通事故 ($\beta = -0.017$)、年齢 ($\beta = -0.166$) と負であり、5%水準で統計的に有意ではなかった。つまり、年齢が高いほど家族や友人、医者などから運転をやめるよう勧められたときに運転免許を返納しようとししないことがわかる。この結果より、ともに統計的に有意ではなく、仮説 1 を支持しないことが分かった。

表 3 Q41_2 家族や友人、医者などから運転をやめるよう勧められたときに運転免許を返納するかの重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	0.473	0.049		***
Q54_A高齢運転者による交通事故（反転）	0.012	0.022	-0.017	
Q56年齢	-0.044	0.008	-0.166	**
調整済みR ²	0.026			
N	1104			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

表 4 は「交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納するか」を従属変数、「過去一年間高齢者による交通事故が多かったか（反転）」、年齢を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.0003 であり、投入した独立変数によって従属変数である「交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納するか」の分散の 0.03% が説明されている。

標準化係数 (β) の値は高齢運転者による交通事故 ($\beta=0.035$) が正、年齢 ($\beta=-0.027$) と負で、高齢運転者による交通事故の係数が 5% 水準で統計的に有意でなかった。この結果から、高齢者による交通事故の事件が多かったと感じている人は、交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納しないということが分かり、仮説 1 を支持しないことが分かった。

表 4 Q41_3 交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納するかの重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	0.132	0.032	
Q54_A 高齢運転者による交通事故（反転）	0.016	0.014	0.035
Q56 年齢	-0.005	0.005	-0.027
調整済み R ²	0		
N	1104		

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究では、運転免許返納の意見はメディアの発信に影響されるのかについて調査・分析を行った。メディアで交通事故のニュースをよく見ている人ほど、運転免許の賛否がはっきりするのではないかという仮説を立て、過去一年間で高齢者による運転事故の事件が多かったかどうか、運転免許の自主返納に対する意識、年齢などの質問項目を使い分析を行った。

分析の結果からメディアで交通事故のニュースをよく見ている人ほど、運転免許の賛否がはっきりするとは言えず、高齢者による交通事故の事件が多かったと感じている人は、交通違反や交通事故を起こしたときに運転免許を返納しないという、結果になり、「メディアで交通事故のニュースをよく見ている人ほど、運転免許の賛否がはっきりする」という仮説は支持されない結果となった。

運転免許の返納とメディアの影響についての関連性が強くなかった理由として、高齢者ほど、自分はまだまだ運転をすることができる、身体能力の低下などはあまり関係がないと感じる人が多いことが考えられる。今後は、どのようにメディアで発信をしていくことによって運転免許の自主返納に対する意識を高めていくことができるのか、改善策を考えてい

く必要がある。

6. 文献

- [1]…引地博之・青木俊明・大淵憲一（2009）「地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響」『土木学会論文集 D』 65(2): pp.101-110.
- [2]…元田良孝・宇佐美誠史・堀沙恵（2017）「高齢者の運転評価と運転免許返納意識に関する研究」『交通工学論文集』 3(2): pp.1-5.
- [3]…小竹元基・細川崇・宇治信孝・鎌田実（2005）「高齢運転者とその背景要因に関する研究」『日本機械学会論文集』 pp.71(709): pp.124-131.
- [4]…清水大将（2018）「平成 30 年度高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」 pp.134-142.

第 16 章 死刑制度に対する賛否の要因

久保 紗也花

1. はじめに

本章では、日本の司法で採用されている「死刑制度」という制度への賛否に影響する要因を明らかにする。

世界の中でも死刑制度を有し、2018 年に死刑を執行した国は世界 198 カ国の中で 20 カ国しかない。この点、現在アムネスティインターナショナル (2019) など国際人権 NGO など、死刑は人権をめぐる問題であり、生きる権利を奪うとして問題視している。一方で、日本の内閣府が 2014 年に行った『基本的法制度に関する世論調査』では、調査対象者のうち、「死刑は廃止すべきである」と答えた者の割合が 9.7%、「死刑もやむを得ない」と答えた者の割合が 80.3%という調査結果だった。非人道的な制度であると言われる死刑制度を、なぜ多くの日本国民が支持しているのだろうか。このような死刑制度の賛否の要因を明らかにすることで、現代の死刑に対する社会的な意識を理解することを目指したい。

2. 仮説

2.1. 先行研究

先行研究では、死刑制度への賛否の要因について研究が行われている。河合他 (2014) は、限りなく他人の善意を信じる者は死刑に反対する傾向があるといえとし、犯罪被害経験に関しては統計的有意性が認められないことを明らかにしている。

また、「あなたは、日本の刑罰は軽すぎると思いますか、それとも重すぎると思いますか」という質問において、殺人の項目では 39.5%の人が「軽すぎる」と回答し、「どちらかというと軽すぎる」と回答した人は 28.4%であった。

また、1989 年に行われた菊田 (1990) による調査では、死刑制度への賛否を職業別に分類した際に、警察官、刑務官の死刑賛成の割合は 9 割を超え、また大学教員は 6 割近くが反対していることを明らかにした。

また、山本 (2009) は、裁判員制度導入以前においては無職のものや何らかの宗教を信奉し、人間の本性が善であると信じるタイプの人々が死刑制度に反対しやすいことを明らかにしている。

以上のことから、他者に対し犯罪は起こさないという信頼がある人は死刑制度に反対することがわかっている。よって、本調査では凶悪犯罪への接触頻度から死刑制度に対する賛否の要因を明らかにする。

2.2. 仮説

本研究では、テレビや新聞などのメディア報道を通じて醸成されると考えられる凶悪犯罪の主観的な発生頻度との関連に着目する。特に、ニュース報道を通じて、殺人事件などの凶悪犯罪をより多く実感している人は、そのような犯罪を抑制するために、犯罪者の厳しい取り締まりに賛成するのではないか。なお、高齢者による交通事故は意図的な殺人などの凶悪犯罪とは区別されるため、死刑制度への賛否には影響しないとする。そこで、以下のような仮説を立てた。

仮説 1 凶悪犯罪や死亡事故をよく目にする人ほど、死刑に賛成する。

仮説 2 高齢者による交通事故は、死刑制度への賛否には影響しない。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和元年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,172、回収率は 58.6%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q42：あなたは、死刑制度に賛成ですか。反対ですか。（死刑制度への賛否（反転））

1.賛成 2.やや賛成 3.やや反対 4.反対

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、死刑制度への賛成意識が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q54：あなたは過去一年間に、以下のような事件が多かったと思いますか。少なかったと思いますか。

A：高齢運転者による交通事故（高齢者事故への接触頻度（反転））

1. 多かった 2.やや多かった 3.やや少なかった 4.少なかった

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、接触頻度が多くなるように、尺度の反転を行った。

B：殺人事件（殺人事件への接触頻度（反転））

1.多かった 2.やや多かった 3.やや少なかった 4.少なかった

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、接触頻度が多くなるように、尺度の反転を行った。

Q56：あなたの年齢をお答えください。(年齢)

1. 18 歳、19 歳 2. 20 代 3. 30 代 4. 40 代 5. 50 代 6. 60 代 7. 70 代以上

4. 分析

表 1 Q42 死刑制度への賛否と Q54_B 凶悪犯罪への接触頻度のクロス表

		Q42 死刑制度への賛否					
		賛成	やや賛成	やや反対	反対	合計	
Q 54_B 凶悪犯罪 への接触 頻度	多かった	N	298	203	34	14	549
		%	54%	37%	6%	3%	100%
	やや多かった	N	154	197	51	26	428
		%	36%	46%	12%	6%	100%
	やや少なかった	N	48	34	9	8	99
		%	49%	34%	9%	8%	100%
	少なかった	N	18	14	2	4	38
		%	47%	37%	5%	11%	100%
合計		N	518	448	96	52	1114
		%	47%	40%	9%	5%	100%

χ^2 (df=9, N=1114)=45.430***, Cramer V=1.117***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

はじめに、死刑制度への賛否と凶悪犯罪への接触頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、死刑制度への賛否と凶悪犯罪への接触頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「あなたは過去一年間に、以下のような事件が多かったと思いますか。少なかったと思いますか。(B：殺人事件)」との設問に「多かった」と回答した人では、死刑制度への賛否について「賛成」と回答した人が 54%、「やや賛成」と回答した人が 37%と、肯定的な評価が多数を占めている。一方、接触頻度について「少なかった」と回答した人では、死刑制度への賛否について「賛成」が 47%、「やや賛成」が 37%となっており、若干数の減少しか認められなかった。

すなわち、凶悪犯罪への接触頻度の高い人ほど、死刑制度へ賛成するとは必ずしも言い切れないことがわかる。

ただし、表 1 のカイ二乗検定の結果、カイ二乗の値は 45.430 で、有意確率 5%水準で有意である。また、Cramer の関連係数は 1.117 で、有意確率 5%水準で有意である。よって、この 2 変数には一定の関連性があるといえる。

次に死刑制度に賛成する要因を検証したい。Q42 死刑制度への賛否を従属変数とし、独立変数は Q54_B 殺人事件への接触頻度、Q54_A 高齢者事故への接触頻度、Q56 年齢の 3 変数を用いて重回帰分析を行った。

表 1 Q42 死刑制度への賛否（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.971	0.172		***
Q54_B殺人事件への接触頻度	0.120	0.038	0.116	**
Q54_A高齢者事故への接触頻度	-0.012	0.048	-0.009	
Q56年齢	-0.013	0.015	-0.027	
調整済みR ²	0.012			
N	1127			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.10

回帰式の調整済み決定係数は 0.012 であり、従属変数である死刑制度の賛否の分散の 1.2%が投入した独立変数によって説明されている。標準化係数（ β ）の値は、Q54B：殺人事件への接触頻度（ $\beta = 0.116$ ）が正、Q54A：高齢者事故への接触頻度（ $\beta = -0.009$ ）、Q56：年齢（ $\beta = -0.027$ ）が負であり、Q54B：殺人事件への接触頻度が 5%水準で統計的に有意であった。つまり、仮説 1 の通り殺人事件が多いと感じた人ほど統計的に有意に死刑制度に賛成することがわかる。また、仮説 2 での推測通り Q54A：高齢者事故への接触頻度は、死刑制度に対する賛否には影響しないことがわかった。

5. 考察

本研究では、死刑制度への賛成に関わる要因について調査するために分析を行った。凶悪な事件や事故をよく目にした人ほど死刑に賛成するという仮説を立て、それらへの接触頻度と死刑制度への賛否などの質問項目を使い分析を行った。

分析の結果から、凶悪な事件をよく目にした人ほど死刑に賛成するといえるため、本研究の主要仮説は支持された。

しかし、クロス集計表での結果では、予想以上に非常に多くの人々が死刑制度に賛成し、また殺人事件は多かったと回答している点には、仮説の他に何らかの要因があると考えられる。それらの関係性を明らかにすることで日本での死刑制度に対する社会的な意識を明らかにできると考えられる。

6. 文献

- [1]…山本博子（2009）「裁判員制度導入以前における日本の死刑制度の賛否に関する世論の分析——JGSS 累積データ 2000-2001 における死刑反対の根拠について」『京都社会学年報』（17）： pp.67-85.
- [2]…河合幹雄（2014）「刑罰とりわけ死刑に関する全国意識調査基本報告書」『桐蔭法学』

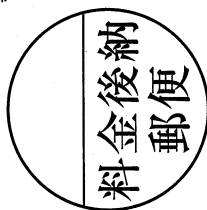
22(1): pp.1-65.

[3]…菊田幸一（1990）「死刑制度に関する意識階層の意見—本研究は辻本義男兼任講師との共同研究によるものである」『法律論叢』62(4-6): p.17-67.

[4]…アムネスティ・インターナショナル（2019）「2018年の死刑判決と死刑執行」https://www.amnesty.or.jp/library/report/pdf/statistics_DP_2019.pdf（2020年1月12日閲覧）.

資料：
予告はがき・調査票

郵便はがき



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

予告はがき

「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」 ご協力のお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活ともの見方についての調査を共同で実施することになりました。調査の対象は、無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。

近日中に調査票の入った大きな茶封筒（ボールペン入り）が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂きますようよろしくお願い申し上げます。

令和元年 8 月



関西大学



市民生活環境部 市民生活相談課
〒569-0067 高槻市桃園町2-1
TEL 072-674-7130

関西大学 総合情報学部
〒569-1095 高槻市霊仙寺町2-1-1
TEL 072-690-2151

※あて所に尋ねあたらない場合は、高槻市へ返戻して下さい。

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行っています。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活とものの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、住民基本台帳から無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。**封筒宛名のご本人様ご自身の回答を**、この調査票にご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年12月頃に速報版を、翌年3月中旬に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

*ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

*ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を1つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。

*お忙しいところ誠に恐縮ですが、**9月13日(金)**までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

*この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。)

＜調査に関するお問い合わせ＞ 高槻市 市民生活環境部 市民生活相談課
関西大学 総合情報学部

tel : 072-674-7130

tel : 072-690-2151

Q1. 現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. 現在の生活のうち、経済的な面ではどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q3. 現在の生活のうち、余暇の面ではどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q4. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思う	そう思う

Q5. あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

1	2	3	4	5
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Q6. あなたは、地域社会の一員として何か地域のために役に立ちたいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思う	そう思う

Q7. あなたは高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。

1	2	3	4	5
感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じる	感じない

Q 8. 高槻市の交通手段等におけるそれぞれの現状について、あなたはどのくらい満足していますか。

A. 【徒歩】：歩道の整備の状況

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

B. 【徒歩】：バリアフリー化

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

C. 【自転車】：通行するために必要なスペース

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

D. 【自転車】：駐輪場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

E. 【自転車】：乗っている人々のマナー

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

F. 【バイク】：通行するために必要なスペース

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

G. 【バイク】：駐車場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

H. 【バイク】：乗っている人々のマナー

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

I. 【バス】：路線・系統

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

J. 【バス】：ダイヤ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

K. 【バス】：バス停

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

L. 【バス】：乗り方の分かりやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

M. 【鉄道】：駅の使いやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

N. 【鉄道】：列車ダイヤ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

O. 【自動車】：道路の整備の状況

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

P. 【自動車】：駐車場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

Q. 【タクシー】：利用しやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

R. 【その他】：駅前広場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

Q 9. 地域ブランドと呼べるような特産品や観光地が、高槻市にはあると思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q 10. あなたは、買い物・食事・娯楽などで中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に行く頻度が、3年前と比べて増加しましたか。それとも減少しましたか。

1	2	3	4	5	6
増加した	少し増加した	変わらない	少し減少した	減少した	3年前を知らない

Q 1 1. あなたは、中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、３年前と比べて向上したと思いますか。それとも低下したと思いますか。

A. 防災面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

B. 防犯面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

C. 居住環境

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

D. 公共交通機関の利便性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

E. 歩行者にとっての歩きやすさ

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

F. 風紀や治安

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

Q 1 2. あなたは、中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、３年前と比べて増加したと思いますか。それとも減少したと思いますか。

A. 文化活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

B. コミュニティ活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

C. 商店街の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

D. 百貨店などの大型店の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

E. 買い物やイベントでのにぎわい

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

F. 魅力的な飲食店

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

G. オフィスなど業務施設

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

H. 病院などの医療機関

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

I. 道路の渋滞

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

J. 駐輪場

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

K. 街なかの緑や潤い

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

Q 1 3. 中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）を住み良い街にするために、あなたはどのような取り組みが必要だと思いますか。３つ以内にマルをつけてください。

1. 街路樹や植栽、公園の整備など、緑豊かな住居環境の向上を図る
2. 日常生活に困らないよう、スーパーマーケットや食料品店などの充実を図る
3. 休日や夜間の突然の病気やケガで困らないよう、病院など医療機能の充実を図る
4. 安心・安全に生活できるよう、治安・防犯の向上を図る
5. 高齢者等も安全・快適に生活できるよう、街のバリアフリー化を図る
6. 民間のマンションや公的住宅など、中心市街地での住宅の供給を促進する
7. その他（ ）
8. 今以上の取り組みは必要ない

Q 1 4. あなたの関心が高い、環境問題に関する話題は何ですか。3つ以内でマルをつけてください。

- | | | |
|----------------|---------------|----------------------------------|
| 1. 地球温暖化 | 7. 騒音、振動 | 1 3. 食品ロス |
| 2. ヒートアイランド現象 | 8. 生物多様性、外来生物 | 1 4. ごみの減量、リサイクル |
| 3. 異常気象 | 9. 森林荒廃 | 1 5. 不法投棄 |
| 4. 省エネルギー（節電） | 1 0. 景観保全 | 1 6. その他（ ） |
| 5. 再生可能エネルギー | 1 1. 都市緑化 | |
| 6. 大気汚染、PM2. 5 | 1 2. 食の安全性 | 1 7. いずれにも関心がない |

↓ Q 1 5へ

Q 1 5. 高槻市は、新エネルギー・省エネルギー機器の設置に対する補助制度（エコハウス補助金）を行っています。それについて、以下でお答えください。

A. 補助制度の対象であると知っている機器をいくつでもお選びください。

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 太陽光発電システム | 5. 窓の断熱 |
| 2. 太陽熱利用システム | 6. エコキュート |
| 3. ペレットストーブ | 7. エネファーム |
| 4. 雨水タンク | 8. 蓄電池 |

9. 1つもない

B. 今後、自宅へ導入したいと思う機器をいくつでもお選びください。

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 太陽光発電システム | 5. 窓の断熱 |
| 2. 太陽熱利用システム | 6. エコキュート |
| 3. ペレットストーブ | 7. エネファーム |
| 4. 雨水タンク | 8. 蓄電池 |

9. 1つもない

Q 1 6. あなたはどの程度、園芸活動（プランターでの花の栽培など）を行っていますか。

- | | | |
|---------------|--------------|--------|
| 1 | 2 | 3 |
| 日常的に
行っている | まれに
行っている | 行っていない |

Q 1 7. あなたは1年以内に以下のA～Dの行事や活動に参加しましたか。

A. 緑化または自然保護に関する活動やイベント

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

B. 自治会など地域で行う清掃活動

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

C. 市内一斉清掃

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

D. リサイクル品の集団回収

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

Q 1 8. 次に、現在の高槻市の環境に関するA～Eの項目について、あなたのお考えをおうかがいします。

A. 高槻市には身近な自然環境とのふれあいがあると思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

B. 高槻市は不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちだと思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

C. 高槻市には良好な環境づくりを目指した活動が豊富にあると思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

D. 高槻市には環境活動に関する情報や呼びかけが十分にあると思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

E. 高槻市には、身近な生活環境に水やみどりの潤いがあると思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q 1 9. あなたのご家族やご友人などの身の回りの方は、ごみの削減・分別・リサイクルなどを心掛けていますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q 2 0. あなたは、親しい付き合いをしているご近所の方が多いですか。少ないですか。

- | | | | |
|----|----------|-----------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 多い | やや
多い | やや
少ない | 少ない |

Q 2 1. あなたは地域のお祭りにどの程度参加しますか。

- | | | | |
|------|------|-------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく | ときどき | ほとんど | まったく |
| 参加する | 参加する | 参加しない | 参加しない |

Q 2 2. あなたのお住まいの地域では、2018年6月に発生した大阪府北部地震による被害は大きかったですか。それとも小さかったですか。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 大きかった | やや | やや | 小さかった |
| | 大きかった | 小さかった | |

Q 2 3. 現在、あなたのお住まいで、災害の備えとして行っているものはありますか。以下のうち、あてはまるものすべてにマルをつけてください。

1. 風呂にいつも水を入れている
2. 家具が倒れないように固定している
3. ブロック塀の点検や転倒防止を施している
4. 非常持出品を用意している
5. その他 ()
6. 何もしていない

Q 2 4. あなたは、ご自身の健康や体力に関する以下の問題について、それぞれどのくらい感じますか。

A. 肉体的疲労

- | | | | | |
|-----|-----|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく | やや | どちらとも | あまり | まったく |
| 感じる | 感じる | いえない | 感じない | 感じない |

B. 精神的なストレス

- | | | | | |
|-----|-----|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく | やや | どちらとも | あまり | まったく |
| 感じる | 感じる | いえない | 感じない | 感じない |

C. 体力の衰え

- | | | | | |
|-----|-----|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく | やや | どちらとも | あまり | まったく |
| 感じる | 感じる | いえない | 感じない | 感じない |

D. 運動不足

- | | | | | |
|-----|-----|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく | やや | どちらとも | あまり | まったく |
| 感じる | 感じる | いえない | 感じない | 感じない |

E. 肥満

- | | | | | |
|-----|-----|-------|------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| よく | やや | どちらとも | あまり | まったく |
| 感じる | 感じる | いえない | 感じない | 感じない |

Q 2 5. あなたは、1日に平均して何分くらい歩いていますか。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 10分未満 | 6. 50分以上60分未満 |
| 2. 10分以上20分未満 | 7. 60分以上70分未満 |
| 3. 20分以上30分未満 | 8. 70分以上100分未満 |
| 4. 30分以上40分未満 | 9. 100分以上 |
| 5. 40分以上50分未満 | |

Q 2 6. あなたはどのくらいの頻度でスポーツをしますか。

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 週に | 週に | 月に | 3か月に | 年に | して |
| 3回以上 | 1-2回 | 1-3回 | 1-2回 | 1-3回 | いない |

Q 2 9へ

Q 2 7へ

Q 2 6で5または6を選んだ方におたずねします。

Q 2 7. スポーツを定期的に行わない理由は何ですか。あてはまるものすべてにマルをつけてください。

1. 興味がない
2. 運動が嫌い
3. 体力がない
4. 時間がない
5. 機会がない
6. 費用がかかる
7. その他 ()

Q 2 8. 今後したいスポーツがあれば教えてください。

- | | |
|------|------------|
| 1 | 2 |
| 特にない | したいスポーツがある |
| | 具体的に：() |

Q 2 9へ

Q 2 9. スポーツ施設の運営に対する要望として、あてはまるものすべてにマルをつけてください。

1. 利用手続き等の簡素化
2. 駐車（輪）場の確保
3. 利用時間帯の拡大
4. その他 ()
5. 特に要望はない、または施設を利用していない

Q 3 0. あなたは、「総合型地域スポーツクラブ」を知っていますか。それとも知りませんか。

- | | | |
|----------|-----------|------|
| 1 | 2 | 3 |
| 詳しく知っている | 名前だけ知っている | 知らない |

Q 3 1. あなたは、「スポーツ推進委員」を知っていますか。それとも知りませんか。

- | | | |
|----------|-----------|------|
| 1 | 2 | 3 |
| 詳しく知っている | 名前だけ知っている | 知らない |

Q32. 以下のうち、スポーツボランティアとしての活動経験があるものすべてにマルをつけてください。

- 1. 地域スポーツ行事などの運営や世話
- 2. スポーツイベント
- 3. 少年スポーツの指導
- 4. いずれの活動経験もない

Q33. 小学生以下の子どもの運動・スポーツの促進には何が必要だと思いますか。あてはまるものすべてにマルをつけてください。

- 1. 体を動かしたくなる場の提供
- 2. 安全に遊ぶことができる場の提供
- 3. スポーツクラブなどの充実
- 4. 家族でスポーツを体験できる機会の充実
- 5. プロスポーツを身近に見られる機会の充実
- 6. その他 ()
- 7. 特になし

Q34. 以下のうち、スポーツ振興のために力を入れるべきだと思う施策すべてにマルをつけてください。

- 1. 各種スポーツ行事や教室の開催
- 2. スポーツに関する広報活動
- 3. スポーツ施設等の整備や開放の促進
- 4. スポーツ施設の利用手続きの簡素化
- 5. その他 ()
- 6. 特になし

Q35. あなたは、普段、高槻市のスポーツに関する情報をどこから得ていますか。以下のうち、あてはまるものすべてにマルをつけてください。

- 1. 高槻市広報誌（たかつきDAYS）
- 2. 高槻市ホームページ
- 3. 学校等からのチラシ
- 4. 家族
- 5. 友人・知人
- 6. 高槻市ホームページ以外のホームページ
- 7. その他 ()
- 8. 特になし

Q36. あなたは、『「高槻市みらいのための経営革新」に向けた改革方針』をご存知ですか。

- | | | |
|-------------|-----------|------|
| 1 | 2 | 3 |
| 名前も内容も知っている | 名前だけ知っている | 知らない |

Q37. あなたは、高槻市が20年後、30年後を見据えて行財政改革に取り組む必要性を感じますか。

- | | | | |
|-----|-------|---------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 感じる | やや感じる | あまり感じない | 感じない |

Q38. 次のa～sは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。

以下から、①あなたが、最近良くなってきたと思うもの（マルはいくつでも）、また、②あなたが、今後力を入れてほしいもの（マルは3つまで）をそれぞれ選んでください。

②力を入れてほしいもの（3つまで）		
① 良くなってきたもの（いくつでも）		↓
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	1	1
b. 図書館、博物館などの文化施設の整備	2	2
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	3	3
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	4	4
e. 医療施設や救急医療体制の整備	5	5
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	6	6
g. 公園の整備や自然・緑の保全	7	7
h. 街並み・景観の整備	8	8
i. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	9	9
j. ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	10	10
k. 下水道の整備	11	11
l. 水の安定供給、上水道整備	12	12
m. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	13	13
n. 身のまわりの生活道路の整備	14	14
o. 交通安全・災害防止対策	15	15
p. 公営住宅の建設や住宅融資制度	16	16
q. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	17	17
r. 災害対策・防犯対策	18	18
s. 子育て支援	19	19
t. 特になし	20	20

Q39. あなたは、今年の7月に行われた参議院議員選挙で、投票に行きましたか。(期日前投票や不在者投票を含む)

- | | | |
|--------|-----------|----------|
| 1 | 2 | 3 |
| 投票に行った | 投票に行かなかった | 選挙権がなかった |

Q40. あなたは、今年の7月に行われた参議院議員選挙の選挙期間中に、選挙カーによる名前の連呼をどの程度、耳にしましたか。

- | | | | |
|--------|--------|-----------------|---------------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく耳にした | 少し耳にした | ほとんど耳に
しなかった | まったく
耳に
しなかった |

Q 4 1. あなたは、将来どのようなときに運転免許を返納しようと思いますか。あてはまるものすべてにマルをつけてください。

0. 運転免許を持っていない（返納済みの場合も含む）
1. 自分の身体能力の低下などを感じたとき
2. 家族や友人、医者などから運転をやめるよう勧められたとき
3. 交通違反や交通事故を起こしたとき
4. 1～3以外で返納しようと思う状況（ ）
5. 運転免許を返納するつもりはない

Q 4 2. あなたは、死刑制度に賛成ですか。反対ですか。

- | | | | |
|----|------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 賛成 | やや賛成 | やや反対 | 反対 |

Q 4 3. あなたは、集団行動が好きですか。嫌いですか。

- | | | | |
|----|------|------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 好き | やや好き | やや嫌い | 嫌い |

Q 4 4. あなたは、一般に「高齢者も働けるうちは働くのが望ましい」と思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 4 5. あなたは、「独身の人が結婚すると、社会的信用が高まる」と思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 4 6. あなたは、「結婚した人よりも独身の人の方が、金銭的に裕福でいられる」と思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 4 7. あなたは、社会について「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」と思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 4 8. あなたは、「今後、少子化によって働き手が減少すると、日本の経済はどんどん悪くなる」と思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 4 9. あなたは、「キャッシュレス決済（クレジットカード・電子マネーなど）はセキュリティが不安だ」と思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 5 0. あなたは、日常的な買い物でキャッシュレス決済（クレジットカード・電子マネーなど）を利用していますか。

- | | | | |
|--------|----------|-----------|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく利用する | ときどき利用する | ほとんど利用しない | まったく利用しない |

Q 5 1. あなたは、以下の娯楽をどのくらい行いますか。

A. 映画鑑賞（ビデオ・DVD・オンラインなどを含む）

- | | | | |
|------|--------|---------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よくする | ときどきする | ほとんどしない | まったくしない |

B. 読書（漫画・雑誌を除く）

- | | | | |
|------|--------|---------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よくする | ときどきする | ほとんどしない | まったくしない |

Q 5 2. あなたが12歳の頃、あなたの父親は家事をよく行う人だったと思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|--------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない | 父親がいなかった |

Q 5 3. あなたは子どもの頃、投票に行く親に付いて行ったことがありましたか。

- | | | | |
|-------|---------|----------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よくあった | ときどきあった | ほとんどなかった | まったくなかった |

Q 5 4. あなたは過去一年間に、以下のような事件が多かったと思いますか。少なかったと思いますか。

A. 高齢運転者による交通事故

- | | | | |
|------|--------|---------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 多かった | やや多かった | やや少なかった | 少なかった |

B. 殺人事件

- | | | | |
|------|--------|---------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 多かった | やや多かった | やや少なかった | 少なかった |

執筆者紹介

築山 宏樹	(つきやま ひろき)	編集・はじめに・第1章	(関西大学総合情報学部准教授)
松本 渉	(まつもと わたる)	編集・第1章	(関西大学総合情報学部教授)
高橋 えり	(たかはし えり)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
山本 明	(やまもと あきら)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
中島 由乃	(なかじま ゆうの)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
中尾 幸平	(なかお こうへい)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
森井 健斗	(もりい けんと)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
下道 未羽	(しもみち みう)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
関根 夏月	(せきね かづき)	第7章	(関西大学総合情報学部生)
藤川 皓一郎	(ふじかわ こういちろう)	第8章	(関西大学総合情報学部生)
世古 麻鈴	(せこ まりん)	第9章	(関西大学総合情報学部生)
三浦 千聖	(みうら ちせい)	第10章	(関西大学総合情報学部生)
松本 集	(まつもと あつむ)	第11章	(関西大学総合情報学部生)
三山 勲央	(みやま さとみ)	第12章	(関西大学総合情報学部生)
田所 紋佳	(たどころ あやか)	第13章	(関西大学総合情報学部生)
谷 千尋	(たに ちひろ)	第14章	(関西大学総合情報学部生)
成田 慎吾	(なりた しんご)	第15章	(関西大学総合情報学部生)
久保 紗也花	(くぼ さやか)	第16章	(関西大学総合情報学部生)

2019 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 2020 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—令和元年度—』（関西大学総合情報学部[編集], 高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～16 章が省略されたものになります。